一本日左之通総督本営ヨリ御達相成候事、

陸軍中尉　八木信守

当分第二大隊長心得被　仰付候事、

同　藤崎供秀

征討別働隊第三旅団第一大隊副官被　仰付候事、

同　原　直行

同文第二大隊副官

陸軍中尉　平野正行

同文第三大隊副官

一等少警部入江惟一郎

任陸軍中尉兼一等少警部

二等少警部丸田近方

任陸軍中尉兼二等少警部

四七　志方検事外一名ヨリ中村書記官宛官軍熊本入城報知

一昨十五日南方之川尻口破レタルヲ以テ植木口モ相破レ、昨十六日諸道ヨリ進処之官軍熊城ヘ進入セリ、依テ微官等モ熊本ヘ入ルコトヲ得タリ、未タ城下県士ノ折合モ一向相分リ不申、最早県庁ヨリ漸ク人民扶助ニ着手有之、不遠中ニハ城下之人民自カラ安堵ノ域ニ至リ、県士モ亦次第ニ折合相付可申候、就而ハ先頃伺置タル通リ、稗益ト相成ルヘキ見込モ有之候ハヽ尽力可仕、何レ今少シ県下折合之様子見認メ候上ハ、早速帰任可仕候間、何分ニモ可然御取計之程、奉願置候也、

明治十年四月十七日　古荘七等判事（嘉門）

志方権少検事（之勝）

中村大書記官殿

尚ヽ賊ハ城之東方ニ在テ左翼ハ新鍋、城ヲ距ル一里余、中央ハ保田窪（里程凡ソ上ト同ン）、右翼ハ竹宮（賊城ヲ距ル一里半余）及ヒ堅志田（城ヲ距ル凡五里計リ）此之ケ所ヽヽニ胸壁ヲ築テ防戦ノ躰ナレトモ、近日ハ官軍未タ之レヲ進撃セス、

四八　籠城中形況之概略（従二月廿二日至四月十六日）

籠城中景況之概略

二月廿一日

午前第四時熊本鎮台之斥候兵川尻ニテ賊ノ先鋒ニ行逢ヒ少々戦ヲ始メ、午後第二時台兵洗馬橋畔ニテ賊徒二名ヲ

射殺セリ、

去ル十九日午前第十一時十分鎮台出火、本営不残焼失、兵糧少々、被服物品ヲ焼毀ス、右火第一大区六小区藪ノ内辺ヘ移リ、坪井・千反畑等八方ヘ蔓延、凡千戸焼失セリ、

本日新町辺ヘ火ヲ懸ケ終ニ熊本市中凡七分通追々焼失、固リ市中ノ人民ハ尽ク各村ヘ離散逃避セリ、

当日ヨリ熊本ヨリノ電信郵便一切通セス、道路梗塞ス、

二月廿二日

本日午前七時頃ヨリ賊兵城ノ八方ヨリ烈敵攻撃ス、藤崎口尤甚シ、我兵之ヲ迎ヘ大小銃ヲ以テ之ヲ拒ク、午後第四時ニ至テ止ム、此戦ニ於テ賊ノ七番小隊長宇都宮龍左衛門ヲ射殺ス、其死屍ヲ獲、且賊兵ノ士官ラシキ者ヲ射殺セリ、或ハ云、風姿別府新助（普介）賊ノ一番大隊長ニ類似シタリト、其他賊兵ヲ殺傷スル無算、我兵気愈盛ナリ、此日中佐樺山資綱（紀カ）・同與倉知實傷ヲ蒙リ、

二月廿三日

午前第三時賊兵城ヘ西南ヨリ藤崎及ヒ古城ニ向ヒ攻撃シ来リ、我兵之ヲ迎ヘ大小銃ヲ激発ス、山川為ニ震フ、賊落胆敗走ス、午前第九時賊兵花岡山ヘ大砲三門ヲ上シ、始メテ大砲ヲ用ヒ、尓後互ニ専ラ砲戦ヲ為シ、午後第五時ニ至テ止ム、昨今両日ノ戦ニテ賊ノ死傷凡ソ六百人計リト云フ、

午後第九時より賊兵上林ニ集リ頻リニ発砲シ、同第十時ヨリ内坪井及ヒ京町辺ヨリ小銃ヲ激発シ、同第十二時ニ至リ藤崎并ニ古城ノ方ヘ転シ盛ニ発砲セリ、

二月廿四日

午前第一時廿分賊兵段山より発砲シ、同第八時宮内ヨリ又発砲ス、我カ兵之ニ応ス、賊兵大砲都合六門計リ有候模様ナリ、内花岡山ニ居ヘ置キタル分一門、我兵大砲ヲ以テ撃破セリト云、午後第五時頃、城ノ東北ヲ賊兵ノ往来スルヲ見ル、当県士族ノ内ニモ賊徒ニ与スル模様ニテ米田監物元家来ノ久保田某外二名我兵捕縛シタリ、此日南関ヘ城中ノ模様ヲ通スル為メ、雇布田直記、古藤秀雄ヲ高橋ヨリ出ス、此時鎮台看囚宍戸某モ同行セリ、此夜青山八等属ヲ南ノ関ヨリ久留米ニ遣ハス、

二月廿五日

昨日合戦之後、賊兵不迫戦ナシ、唯我兵ヨリ各所焼残之土蔵又ハ土塀等ニ、五人或ハ十人潜伏スルノ賊ヲ狙撃スル耳、

二月廿六日

賊兵花岡山ヨリ時々発砲シ、其他各処潜伏之賊兵モ時々銃撃セリ、然シテ午後第六時花岡山ヨリ頻ニ発砲シ、同第七時廿分千葉城ノ麓ヨリ亦発砲ス、我兵之ニ応ス、正午第十二時ヨリ植木地方ニ当リ本城ヲ距ル二里内外ノ処ニテ、頻ニ砲声アリテ、午後第六時頃ヨリ金峰山裏面ノ海上ニ当リ数声大砲ノ響アリ、鎮台ヨリ熊本市街防禦障碍ノ場所ヘ焼キ玉ヲ打チ掛ケ、当夜ニ至ル迄凡壱万戸焼払タリ（市中凡ソ、九分通リ）、

二月廿七日

午後第三時台兵三小隊及ヒ警視局巡査一小隊ヲ以テ、賊兵ノ坪井・草葉町ニ拠ル者ヲ進撃シ、其台場ヲ奪ヒ屯営ヲ焼キ互ニ死傷アリ、第六時ニ至テ引揚タリ、此戦ニ於テ台兵ノ即死スル者五人、手負九人、警部巡査ノ内即死スル者六人、手負四人アリ、内三人ハ我カ破裂丸ニテ傷セリト、

二月二十八日

本日休戦、唯我兵ヨリ各所潜伏ノ賊兵ヲ探撃スル耳、

三月一日

賊兵花岡山ヘ出没シ人数増加ノ模様也、鎮台片岡某邸高藪ノ内ヘ台場ヲ新築セリ、此時賊兵山上ヨリ頻ニ空砲ヲ発シ、山下ヨリ実丸ヲ発テ支ヘタリ、我兵之ニ応シテ発砲セリ、其後ハ唯各所潜伏ノ賊兵ヲ探撃スルノミ、

三月二日

賊兵各所ヨリ時々発砲、我兵之ヲ狙撃ス、

三月三日

去月二十四日鎮台ヨリ百貫碇泊ノ軍艦ニ消息ヲ通シ、且外情探(密)台之為出城セシメタル看囚宍戸某本日帰営ス、其申出ニ、

一高瀬街道全ク梗塞セリ、

一百貫沿海ニ賊兵番船ヲ置ク、

一二月二十五日賊兵横島ヨリ高瀬ニ繰出ス、凡ソ七百計リ、

一二月二十六日我第十四聯隊高瀬・植木ノ間、所々ニテ戦争アリ、

一高瀬以北ハ悉ク官兵ノ占領スル処トナル、

一山鹿口ハ占テ賊ノ有トナル、

一高瀬ヨリ南関迄、山トナク川トナク官兵充満セリ、

一両旅団ノ本営ハ南関ニアル、

一南関ニ来ル電信ニ曰、二月二十二日百貫沖ニ碇泊ス

ル軍艦ノ士官一名、水夫八名上陸シテ行衛知レス、
一高瀬ノ賊兵熊本士族ヲ混合セリ、而テ此賊兵等ハ大砲所持セス、
一電信ハ南関ヨリ通セリ、
一山鹿ノ賊ハ大凡三千人トノ風評、
一賊兵大津街道ニモ出張スル由、
一当県士族ノ内、上等ノ分ハ決シテ動カズト雖モ、力士躰ノ者専ラ周旋奔走、愚民ヲ煽動シ賊ノ為メ党与ヲ募ルト、
一農民ノ内、賄焚出シ等賊ノ為メ無銭ニテナシ、或ハ金銭ヲ差出スモノアリト、
一西郷ハ夜々寝所ヲ替ヘ、坪井辺ニ潜伏スト、
一賊等愚民ヲ欺クニ、諸事旧政ノ如クナシ遣ス云々ノ言ヲ以テ、専ラ人望ヲ取ル由、
一宮軍南関往還、腹切坂ノ嶮ニ拠テ賊兵ヲ拒ケリト、
一二月二十六日賊兵高瀬町ニ放火シ過半焼失セリト、
一賊兵ノ内白鉢巻ニテ甲冑ヲ着シタル者ヲ見受タリト、

本日午前第九時三十分ヨリ、高瀬地方ニ当リ大小銃ノ声聞ヘリ、午後第一時頃賊兵花岡山ヨリ頻ニ発砲セリ、其他ハ時々銃撃、我兵之ニ応ス、

三月四日
午前第九時、賊兵花岡山麓ヨリ鎮台本営ヘ向ケ数砲発射ス、我兵之ニ応ス、賊ノ死屍本日迄追々川尻ニ葬ル者数十名アリト、

三月五日
午前第十時頃ヨリ植木地方ニ当リ頻リニ砲声聞ヘ、午後第四時ヨリ烈ク小銃ノ声アリ、賊兵花岡山より時々発砲、我兵亦之ニ応ス、

三月六日
午前第九時頃、賊花岡山ヨリ数度発砲シ、同第十時ヨリ練兵場ヨリ頻ニ銃撃セリ、我兵之ニ応ス、植木ノ左方ニ当リ、終日大小銃ノ声烈ク聞ヘリ、

三月七日
午前第八時賊兵城ノ東南ヨリ、大小銃ヲ以テ烈ク攻撃シ来レリ、我兵之ヲ拒キ戦フ、同第十一時過ニ至テ止ム、此時我兵即死二人、手負十一人アリト、正午第十二時賊兵一大隊程白川筋ヨリ北方ヘ繰出シタリ、

三月八日

午前第十時三十分ヨリ賊兵花岡山及ヒ安政橋畔ノ台場ヨリ発砲シ、同十一時過ニ至テ止ム、午後第一時四十分ヨリ、我兵花岡山屯集ノ賊兵ト烈ク大小銃ノ戦ヲナシ、同三時三十分ニシテ止ム、

三月九日

午前第十一時頃ヨリ植木地方ニ当リ大小銃ノ声聞ヘリ、午後第四時前ヨリ賊兵花岡山及ヒ安政橋辺ヨリ頻リニ発砲シ、我兵之ニ応ス、同五時三十分ニシテ止ム、

三月十日

午前第九時二十分、我兵安政橋屯集ノ賊兵ニ向テ発砲セリ、賊兵亦発砲シテ応シタリ、午後第二時頃より賊兵細工町辺ヨリ古城ニ向ヒ頻リニ発砲セリ、

三月十一日

午前第三時頃ヨリ植木地方ニ当リ頻リニ砲声聞ヘリ、午後第一時三十分ヨリ賊兵烈ク、鎮台本営ニ向フテ発砲シ、台兵亦痛ク応砲シ同第五時ニ至テ止ム、同第七時頃我兵尚数度発砲セリ、

晩来植木ノ左方ニ当リ烈ク小銃ノ声アリ、夜半ニ至テ止ム、本日午前賊兵ヨリ左文ヲ射込メリ、

矢文写

今般政府妄リニ暗殺ヲ謀リ、自ラ国憲ヲ犯スノ罪アリ、尋問ノ為メ西郷陸軍大将外二名、衆ヲ帥ヒ此ニ至ルニ、当県鎮台名義ヲ弁セス、城ヲ閉テ逆ヘ拒キ、人民ヲ妨害ス、其罪甚シ、我衆憤怒シ、将ニ日ヲ刻シ城中ヲ鏖ニセントス、然レトモ臕昧(草)脅従ノ輩其情憫ムヘキニアリ、諸口〻前非ヲ悔ヒ兵器ヲ捐テ、来服スル者ハ必シモ其罪ヲ問ハス、且山鹿、高瀬諸道ノ東軍我悉ク之ヲ撃破ス、各県義兵ノ起ル蜂窠ヲ破ルカ如シ、然ルニ公等猶孤城ヲ守リ粮竭、援絶ヘ危キコト瞬息ニアリ、公等其レ速ニ向背ヲ決セヨ、

三月　　薩摩陳(陣)中

矢筈ノ下ニ認メアリ

ヲフエンハ皆ウチヤブレリ、籠城ノ輩ラ兵キヲステ、クダルモノハイチ命ヲタスクルモノナリ、

三月十二日

午前第十時頃ヨリ双方互ニ少〻発砲セリ、

当県第六大区三小区平民内藤彌冨ナル者、右矢文ノ文意ヲ記載シタル旗ヲ持来リ、下馬橋際ニ建テ遁レ帰ラントスル際、我兵之ヲ認メ捕縛糺問セシ処、熊本段山村親属

ノ安否ヲ尋問セン為メ来リシ途中、賊ノ捕縛トナリ、種〻糺問ノ末城外迄往キ、右旗ヲ建ルニ於テハ放免スヘキ旨申含ラレ、右ノ挙動ニ及ヒタリ、而テ其糺問ノ者ハ当県士族大矢野某ナリト云フ、

三月十三日

昨十二日午後、賊兵段山ノ胸壁ニ拠リ銃撃ス、我兵片山邸内ノ胸壁ヨリ之ニ応ス、同五時頃同邸内ヨリ砲撃シ且ツ段山町ニ火ス、然ルニ賊更ニ応セス、依テ模様偵察トシテ、川路三等大警部・池端三等中警部、各巡査弐拾名ヲ率ヒ、二手ニ分レ、池端警部ハ段山ノ右翼ニ進ミ、川路警部ハ正面ニ進ミシ処、賊兵各所ノ胸壁ニ拠テ拒撃ス、依テ激発迫リ戦ヒ、十三日午前第一時頃終ニ左翼ノ胸壁ヲ乗取ル、故ニ賊兵中央ノ胸壁ニ集ル、然レトモ味方人数少キヲ以テ其胸壁ヲ守ル能ハス、少ク退テ中央ノ胸壁ト又戦フ、午前第五時ニ至テ応援トシテ台兵及ヒ巡査等来リ共〻進ミ戦フ、賊亦強拒ミ頗ル苦戦、午前第九時頃突貫ノ令ヲ下シ賊ノ胸壁ニ迫ル、此時再ヒ左翼ノ胸壁ヲ取ル、而テ激戦猶止マス、賊勢挫ケサルヲ以テ、午後第二時頃迂回兵ヲ出シ、賊ノ左翼ヲ井芹川ニ沿フテ突キ、且賊営後面ノ人家ニ火ス、此ニ於テ賊兵狼狽、胸壁ヲ捨テ走ル、我兵勝ニ乗シ追撃シ討取ル者百余名、四名ヲ生獲シ、銃器二百余、弾薬千余ヲ分捕セリ、而テ我官軍ノ死傷、台兵即死六人、手負十三人、警視局出張ノ分、即死十九人、傷六十九人ナリト、右ノ生獲云フ、西郷・桐野・篠原等川尻ニテ見受タリ、然ルニ篠原ハ高瀬ニテ戦死セリト、又云、城外四方屯集ノ人数ハ八小隊計ナリト、

金峯山ノ裏面ニ方リ、小銃ノ声終夜絶間ナク烈敷聞ヘリ、

三月十四日

午前第十時二十分ヨリ賊兵発砲ヲ始メタリ、我兵之ニ応セス、午後第五時ニ至リ賊兵頻ニ発砲、我兵之レニ応ス、夕刻ヨリ城北ニ方リ小銃ノ声烈ク聞ヘ、通宵絶間ナシ、

三月十五日

戦ヒナシ、唯互ニ時〻警備砲ヲ発セリ、

夜来城北ノ銃声、正午第十二時頃ニ至テ止ム、

三月十六日

払暁ヨリ午前第七時過迄、城北ニ当リ亦タ銃声聞ヘリ、午前第七時ヨリ賊兵発砲ヲ始メ終日時〻発射シ、我兵之ニ応ス、

三月十七日

昨夜半頃ヨリ城北ニ方リ銃声不絶聞ヘ、夕刻ニ至リ一層

烈ク、終ニ徹宵止マス、花岡山及ヒ長六橋辺屯集ノ賊兵、時々二三発宛大小銃ヲ発射シ、我兵之ヲ応撃セリ、

三月十八日

城北ノ銃声猶止マス、夜ニ至リ小萩原辺ニ当リ砲声ヲ雜ヘテ聞ヘリ、終宵絶間ナシ、

賊兵時々大小銃ヲ発射シ、我兵之ヲ応撃セリ、

三月十九日

午前第十時過迄、城北ノ銃声猶止マス、午後第三時頃ヨリ砲声最モ近ク聞ヘ、暫時ニシテ止ム、午後第三時三十分ヨリ、花岡山・長六橋屯集ノ賊兵ト砲戦アリ、暫時ニシテ止ム、

二月二十二日ヨリ本日迄、台兵及ヒ警視局警部・巡査ノ死傷左ノ如シ、

一死　百二十人

内

上士官　十人
警部　六人
下士以下　七拾二人
巡査　三拾二人

一傷　三百四拾九人（ママ）

内

士官以上　九人
警部　七人
下士以下　二百四拾七人
巡査　八拾五人

死傷総計

四百六拾九人

三月二十日

午前第七時三十分、城北ノ砲声亦聞ヘ暫時ニシテ止ム、賊時々一二度銃撃シ、我兵亦時々探撃スルノミ、晩来城北ノ銃声時々相聞ヘリ、

三月廿一日

午前第一時頃植木地方ニ当リ二ケ処盛ニ火ノ手ノ上ルヲ見ルト、

雇古城貞ヲシテ城中ノ模様ヲ通スル為メ南関ヘ遣ハス、

払暁ヨリ城北ニ当リ銃声聞ヘ、暫時ニシテ止ミ、日暮ニ至リ又聞ヘ、夜半ノ頃最モ烈シ、

戦ヒナシ、只時々互ニ警備銃ヲ発スルノミ、

三月二十二日

午前第十一時三十分ヨリ正午第十二時迄賊頻リニ発砲、

我兵応セス、午後第一時頃ヨリ我カ兵発砲、賊之ニ応ス、
黄昏ニ至リ賊各所ヨリ銃撃、我兵之ニ応ス、
午後第一時過ヨリ城北ニ当リ銃声アリ、
三月二十三日
未明ヨリ午前第十一時頃迄賊発砲、我兵応セス、未明ヨリ城北ニ当リ銃声アリ、午前第十一時頃ニ至テ止ム、
午前第九時頃向坂地方ニテ二ケ所火ノ手上ルヲ見ル、本月二十日探偵ノ為メ出城セシメタル巡査中村匡行、今朝第六時帰城ス、其探偵左ニ、
一植木口ノ官軍ハ、植木ヲ放火シテ向坂ニ押来リタル由、
一本月十九日ノ夜、高瀬口ノ官軍勝利ヲ得テ出羽迄来ル、敗賊ハ野出村ニ屯ス（熊本士族トモ、此村ニ屯ス）、
一海軍艦隊八艘、長州河内ノ海岸ニ繋船、村々砲撃シ或ハ端舟ヲ漕キ陸ニ近クト雖トモ、賊ヨリ海岸ヲ拒キ上陸シ難キ由、
一午後第二時頃城東飯田山辺ニ当リ銃声アリ、
一午後第三時頃賊頻リニ大小銃ヲ発ス、我兵之ニ応ス、
一午後第六時頃城北ニ当リ銃声アリ、
一午後第七時過城南雁回山ノ裏面ニ当リ、二ケ所盛ニ火ノ手ノ上ルヲ見ル、
三月廿四日
午前第九時ヨリ賊兵頻リニ発砲、我兵応セス、午前第十時頃ヨリ城北ニ当リ銃声アリ、終日終夜絶ヘス、其響烈ク愈近シ、午後第一時頃ヨリ鹿子木地方ニ当リ火ノ手上レリ、
午後第一時三十分我兵発砲、賊之ニ応ス、
三月廿五日
午前第七時頃賊発砲、我兵応セス、城北夜来ノ銃声午後第三時頃ニ至テ止ム、午前第八時過我兵発砲、賊之ニ応ス、午前第一時過ヨリ同第六時迄賊発砲、我兵之ニ応ス、
午後第七時三十分ヨリ城北銃声アリ、
三月二十六日
午前第八時過賊発砲、我兵之ニ応ス、午前第十時頃宇土・松橋ノ地方ニ当リ砲声アリ、而シテ賊兵一小隊程右地方ヘ向ケ出立ノ模様ヲ見ル、午後第一時我兵発砲、賊応セス、同第二時過我兵亦発砲、賊之ニ応ス、午後第七時頃我兵発砲、賊之ニ応ス、午後第七時頃ヨリ城北ニ方リ烈ク銃声アリ終宵止マス、開戦以来本日迄賊ノ銃器ヲ分捕スルコト弐百九十八挺ナリト、午後第六時城中ノ消息ヲ通スルタメ、仕丁雇坂田吉郎ヲ高瀬ヘ差遣ス、

三月廿七日

午前第五時台兵・巡査一大隊程三手ニ分レ寺原・京町・牧崎ノ賊ヲ進撃ス、賊胸壁ニ拠テ拒撃ス、我三道ノ兵大小銃ヲ以テ吶喊並進ミ、城上ヨリハ盛ニ発砲シ、山川為ニ震ヘリ（花岡山・長六橋ノ賊午前十一時迄発砲セリ）、賊等頗ル強拒スト雖トモ、我兵鋭意猛進スルニ依リ、其胸壁ヲ守ル能ハス、之ヲ棄テ次第ニ却退シ、各所叢藪ノ中等ニ拠リテ狙撃ス、我兵之ヲ追ヒ其胸壁ヲ毀チ、京町・寺町・千反畑ノ人家ニ火ス、炎焔亦天ヲ焦セリ、終ニ進テ出京町迄至リ、午後第七時始テ戦ヲ休メ、戍兵二中隊ヲ京町ニ置テ帰営セリ、此戦ヤ討取者数名、夫卒三名ヲ生獲シ、弾薬二千余ヲ分取セリ、而シテ我兵ノ死傷九十余人ナリト云フ、晩来ヨリ城北ノ銃声烈ク聞ヘ終宵止マス、警備銃常ノ如シ、

三月廿八日

午前第六時過ヨリ賊発砲、我兵応セス、城北ノ銃声夜来間断ナク聞ヘ、午前第九時過ニ至リテ止ム、

午前第一時頃、賊花岡山ヨリ発砲、我兵之ニ応ス、午後第三時花岡山及ヒ長六橋ノ賊兵ト暫時砲戦セリ、晩来城北ノ銃声亦起リ、徹宵絶ヘス、警備砲常ノ如シ、

三月廿九日

午前第八時頃ヨリ賊時々発砲、我兵応セス、城北夜来ノ銃声午前第八時過ニ至テ止ム、午後第二時我兵発砲、賊之ニ応ス、日暮少々城北ノ銃声聞ヘリ、

賊坪井并ニ井芹川ノ川下ヲ堰キ留タル模様ニテ、両三日前ヨリ水滞リテ満川張溢ス、

午後第六時頃ヨリ花岡山及ヒ長六橋ノ賊兵発砲、我兵之ニ応ス、同第八時過ニ及ンテ花岡山ヨリ発ツ処ノ破裂丸、県庁四階ノ土蔵ニ着発シ、火既ニ家根ニ燃付ントスルニ際シ、県官ハ勿論其他福原大尉所部ノ歩兵、及ヒ高山中尉所部ノ砲兵等馳集リ、消防尽力スルニ依リ、右四階ニ積置タル書類焼失スルノミニテ消滅セリ、警備銃常ノ如シ、

三月卅日

午前第九時前ヨリ第十一時頃迄、松橋地方ニ当リ大小銃ノ声アリ、午後第一時及ヒ第五時頃賊少々発砲、我兵応セス、晩来城北ノ銃声聞ヘ徹宵止マス、

警備銃常ノ如シ、而シテ賊亦時々銃撃セリ、

三月卅一日

午前第五時及ヒ同第十時頃賊少々発砲、我兵総テ応セス、城北ノ銃声未明ニ至テ止ム、午後第三時花岡山ノ賊発砲、

我兵之ニ応ス、日暮ヨリ城北ノ銃声聞ヘ通宵止マス、警備銃常ノ如シ、

四月一日

午前第九時前及第十時頃賊少〻発砲、我兵応セス、城兵ノ銃声正午十二時過ニ至テ止ム、午後第一時頃木留地方ニ当ツテ火ノ手ヲ見ル、午後第四時頃及ヒ同第六時ヨリ七時過迄賊発砲セリ、我兵総テ応セス、唯時〻各所ヲ探撃スル常ノ如シ、

四月二日

午前第五時前宇土地方ニテ砲声セリ、午前第十時及ヒ同時半、長六橋ノ賊少〻発砲、我兵応セス、晩来城北ノ銃声聞ヘ夜半後ニ至テ止ム、警備銃常ノ如シ、

四月三日

午前第九時及ヒ第十時頃長六橋ノ賊少〻発砲、我兵応セス、午前第十一時過城北ニ砲声セリ、同時賊寺原・京町ノ二ケ所ヘ火ヲ掛ケ、又数拾戸焼失ノ模様ナリ、午後第一時前賊発砲、我兵之レニ応セス、午後第三時過ヨリ四時過迄、花岡山・長六橋畔ノ賊発砲、我兵之ニ応ス、午後第六時過及ヒ同第八時過賊亦発砲、我カ兵応セス、午後第八時頃ヨリ城北ノ銃声聞ヘリ、

四月四日

午前第六時頃ヨリ午後第七時頃迄ノ間、花岡山及ヒ長六橋畔ノ賊、連〻発砲スルコト凡三四十発、内県庁内ニテ着発スル者七八発（焼玉一発県庁ニ打込マルトモ、県官速ニ撲滅セリ）、我カ兵之ニ応ス、午後第七時頃ヨリ城北ノ銃声頗ル盛ニ聞ヘリ、我カ兵胸壁ヨリ時〻銃撃、賊亦各処ヨリ時〻銃撃セリ、

米田氏ノ旧臣中村某・眞鍋某・井上某・石山某外壱名ハ賊ニ与シ、同旧臣弐三百人程ハ中立シ、八ノ久保ニ集合セル由ナリト、

城中ノ模様ヲ通スル為メ午後第六時、雇熊野五藏ヲシテ高瀬ヘ差遣ス、

四月五日

午後第十二時過マテ城北ノ銃声猶聞ヘリ、花岡山・長六橋畔ノ賊等、午前第八時頃ヨリ午後第八時過マテノ間時〻発砲スルコト凡三十発、内四五発県庁内ニテ着発、午後第八時過県庁屋根裏ヘ火移リ、已ニ燃ヘ付カントスル際、県官并台兵尽力シ遂ニ消シ留メタリ、我カ兵応撃ス、午後第七時頃ヨリ城北ノ銃声聞ヘ、夜半過ニ至テ止ム、我カ兵胸壁ヨリ時〻各所ノ賊ヲ銃撃シ、賊亦各処ヨリ銃撃セリ、

四月六日

暁来又城北ニ銃声アリ、花岡山及長六橋畔ノ賊、午前第六時頃ヨリ午後第七時過マテノ間、時々ニ発砲スルコト凡ソ三拾発余、内大半県庁内ニテ着発シ、県庁為メニ焼ケ出サントスルコト二度ニ及ヘリ、然レトモ県官及ヒ台士兵速カニ消防尽力シ皆之レヲ消シ留タリ、我カ兵応セス、我カ兵胸壁ヨリ時々各処ノ賊ヲ銃撃シ、賊亦時々銃撃セリ、

四月七日

午前第七時頃城北亦銃声アリ、午前第八時我カ兵発砲、賊之レニ応ス、同九時三十分我カ兵亦発砲、賊之ニ応シ、午後第七時頃迄之間、凡ソ二十発余時々発砲セリ、

四月八日

籠城殆ント五十日ニ及ヒ、糧食尚十余日分ヲ剰スト雖トモ、南北ノ官軍進入ノ期終ニ難計ヲ以テ、我カ第一大隊（隊長奥少佐ヲシテ）賊ノ防禦線ヲ突貫シ、南方ノ官軍ニ合セシメ、迅速進入ヲ促カサントシ、午前第四時安政橋口ニ向ヒ台兵半大隊余、巡査二小隊ヲシテ進撃ス、（林少佐・小川大尉・樂川大警部）率之、第一大隊ハ敵ノ間ヲ窺ヒ経過セントシ之レニ尾従ス、此時天未タ明ケス、衆軍枚ヲ啣ミ橋際ニ迫ル、巡査五名斥候トシテ先ツ進ム、賊橋頭ニ松明ヲ焚キ哨兵ヲ置キ、巡査ニ向ヒ来タカト云フ、依テ気遣ヒナシト答ヘ急ニ退テ之レヲ我カ軍ニ報ス、我カ軍吶喊シテ橋頭ヲ突キ賊数名ヲ斬リ、且ツ橋上橋下ノ台場ヲ一斉ニ突貫ス、賊狼狽銃器弾薬ヲ抛棄シテ走ルアリ、或ハ刀ヲ揮テ抗スル者アリ、此間一大隊ハ駈ケ足ヲ以テ橋ヲ過キ、一二ノ抗スル者アルモ皆ナ蹴テ之ヲ過キ（士官等モ手ツカラ斬テ過ルト云フ）、遂ニ一大隊総テ一人ノ死傷ナク通過スルヲ得、砂取ニ至テ相図ノ放火セリ、始メ諸台場ニ突進スルノ兵、賊ノ北クルヲ逐ヒ烈シク銃撃シ、数名ノ巡査進ンテ川ヲ渡リ、九品寺村ニ至リ土民ノ家ニ入リ、蓄粮ノ有無ヲ問フニ、九品寺村元郷藏ニ粮米数百俵アリト云、之レヲ開クニ果シテ其言ノ如シ、且九品寺村賊ノ炊事場ニモ亦白米数百俵アリ、之ヲ本営ニ報ス、本営速ニ聚糧ヲ命シ、会計部ヲ出シ、工・砲兵ノ馬数匹ヲ以テ聚糧スルコト千俵余、台兵及ヒ巡査ハ聚糧中安政橋口ヲ中央トシ、左右二翼ヲ張リ、右翼ハ高田原通丁山崎ニ進ミ、左翼ハ井川渕広丁明午橋建町ニ進ム、川向ハ正面九品寺村及ヒ新屋敷ニ進ンテ、安政橋近傍及ヒ新屋敷ニ火ス、聚糧尽ク終リ徐ニ兵ヲ退ケ、午後第四時過引上ケタリ、コノ日我カ軍城上ヨリモ烈シク発砲シ

賊亦花岡山、長六橋等ヨリ発砲シ、山川為メニ震動セリ、賊ノ死傷無算、其他得ル処小銃凡ソ百挺計、弾薬三千発計、生擒四名ナリ、我カ兵死傷凡ソ八十名、内死スル者三拾名ナリ、抑モ籠城以来進撃スルコト四度、坪井・段山・京町及ヒ本日トス、而シテ我カ軍得ル処多クシテ損スル処少ナリ、大ニ賊胆ヲ落破シ、大快戦ト称スヘキハ本日ヲ以テ第一トス、

井川渕辺ニ僭伏スル人民数名アリ、砲撃ニ驚キ散乱逃避スト雖トモ、事急ナルヲ以テ避クルヲ得サル者拾七名アリ、一旦皆ナ城中ヘ連レ帰リ、其出城ヲ希フ者ハ城外ヘ出し、其他婦女老幼等ハ県庁ニ置ケリ、

先キニ出城セシメタル仕丁坂田吉郎ハ賊ノ為メ賊営ヘ引カレ終ニ斬殺セラレ、雇熊郎五藏モ亦賊ノ縛トナリ、親類預ケニナリ、其他県官ノ内、賊ノ為メ斬殺ニ逢フ者アル由、

四月九日

午前第十時十分賊少〻発砲、我兵応セス、

四月十日

城南ノ砲声終日時〻聞ヘリ、午後第七時頃賊少〻発砲、同時頃ヨリ城北銃声アリ、午後第十二時前ヨリ最モ近ク最モ烈シク聞ヘリ、

四月十一日

城北夜来ノ銃声午前第九時頃ニ至テ止ム、正午第十二時過ヨリ午後第二時過迄賊発砲、我カ兵之ニ応ス、午後第三時三十分ヨリ同第六時過迄賊亦発砲、我カ兵応セス、午後第六時過ヨリ城北銃声アリ、同第十時頃ニ至テ止ム、谷少将藤崎ニ於テ銃丸ニ中リ、頷脇ヘ軽傷ヲ蒙レリ、

四月十二日

午前第四時過ヨリ同第八時過迄賊時〻発砲、我カ兵応セス、未明ヨリ南北トモ大小銃ノ声烈シク聞ヘリ、午前第八時過我カ兵発砲、賊之ニ応ス、而シテ午後第九時頃迄賊時〻発砲セリ、

晩来城北又少〻銃声アリ、午後第十時頃ニ至テ止ム、

四月十三日

午前第五時頃賊発砲、我カ兵応セス、午前第十時頃賊亦発砲、我カ兵之ニ応ス、午後第二時頃より同第七時頃迄賊時〻発砲、我カ兵応セス、

四月十四日

午前第六時前ヨリ城南大小銃ノ声アリ、而シテ同第九時頃ヨリ川尻辺火ノ手上リ、夫〻追〻銃声左ヘ廻リ愈近ク

愈烈シ、午前第五時前ヨリ同第十一時頃迄、賊兵凡ソ四十発余連〻発砲セリ、我カ兵少〻発砲シテ応セリ、我カ兵午前第十一時頃ヨリ頻リニ発砲、賊絶ヘテ応セス、川尻往還陸続人行ヲ見ル、

午後第四時十五分前、東京鎮台宇都宮分営ノ兵少〻着城セリ、コノ兵タル今朝隈荘ヲ発シ賊軍ヲ衝キ来ルモノニシテ、城外囲守ノ賊兵等敢テ敵スル能ハスシテ敗走セリ、依テ長六橋畔ニ据置タル大砲ヲ奪ヒ、城ノ東南道路始メテ開通セリ、

午後第四時過、台兵五百人計坪井・京町辺ヲ進撃シ、午後第九時頃引揚ケタリ、

大山綱良ハ長崎ニテ捕縛、市ケ谷ニテ入牢相成タル由ナリト、城北ノ銃声夜半頃ヨリ暁キ迄烈シク聞ヘリ、

四月十五日

午前第十時過ヨリ城南ヨリ進撃シ官軍追〻入城セリ、先キニ賊兵坪井井井芹川堰キ留メタルニ付、村落ハ総テ湖トナリ、民家軒ヲ浸スニ至ル処、今日始メテ工兵等切落セリ、

午後第三時前、城北植木辺火ノ手三ケ所ニ起ルヲ見ル、

午後第四時三十分植木口ヨリ進撃ノ師団入城セリ、是ニ於テ四方道通シ始メテ開城セリ、

四月十六日

本日ヨリ当県庁元ノ場所ヘ開ケリ、

本日調、我カ兵死傷七百七拾人、内死スル者二百六十人ナリト、

以上、

四九　八代口征討日誌摘録（従三月十四日至四月廿二日）

八代口征討日誌摘録（参軍黒田清隆）

明治十年三月十四日

（黒田）清隆長崎ニ於テ征討参軍ニ拝セラレ、賊背攻撃ノコトヲ任ス、

同十七日

是ヨリ前キ、鹿児島発遣ノ　勅使柳原前光儀衛ノ広島鎮台ノ兵本日至ルヲ以テ、別働隊第二旅団トシ賊背攻撃ノ議ヲ定ム、其略高島陸軍大佐（鞆之助）歩兵一大隊半及警視隊七百余名ヲ引率シ日奈久ヨリ上陸、八代ニ向テ進撃シ清隆歩兵一大隊半余・警視隊五百余名ヲ率ヒ宇土綱ノ浦ヨリ上陸シ、八代ニ在ル賊ヲ前後ヨリ夾撃、両軍八代ニ会シ（清隆玄武丸ニ）

乗シ高橋近傍ノ海岸ヲ測量シ、船ヲ進ムルノ便ヲ知レハナリ、日奈久ヨリスルノ兵ハ戦艦・輸送船共ニ先獅子島ニ整頓シ、天明クルヲ俟ツテ上陸シ、登時軍艦ヨリ発砲シ攻撃ノ声援ヲナサシメント決ス、

十八日

午前第四時高島大佐諸兵ヲ引テ長崎港ヲ発ス、

十九日

午前第六時黒木中佐(為禎)歩兵二中隊余及警視隊七百名ト共ニ日奈久ヨリ上陸セントス、然ルニ賊ノ拠守セルヲ軍艦ヨリ認メ、直ニ砲撃ス、賊不意ニ出テ狼狽遁逃ス、仍テ第七時上陸シ直ニ巣口(須口)村及下野村間道ヨリ進軍、午後第二時八代ニ抵ル、高島大佐ハ残ル一中隊余ヲ以テ海浜ニ沿ヒ直ニ八代ニ向テ上陸ス、是賊隈川(球磨川)ノ嶮ニ拠リ防禦スル時ハ、進入ノ難ヲ慮レハナリ、是ニ於テ略ヲ定メ兵ヲ分ツテ二隊トシ、一ハ鏡村ニ向ヒ一ハ宮ノ原ヲ衝ク、

此役ヤ清隆慮ル所アレハ、高島大佐ノ発スルニ臨ミ、伊東海軍少将(祐麿)ニ議シ軍艦数隻ヲ以テ之ニ従ヘ、河内小島沖ニ至リ大ニ声援ヲナシ、以テ虚勢ヲ張ラシメ、且巡査三十余名ヲ玄武丸ニ附載シ、島原港ヨリ小舟三十隻ヲ買ヒ、巡査ヲ該舟ニ載セ、海浜ニ沿フテ既ニ上陸ノ勢ヲ示シ、且巨砲ヲ積ミ進撃ノ状ヲナサシム、

(三月)二十日

清隆賊背攻撃ノ書ヲ呈シ、歩兵一大隊余・警視隊五百余名ヲ以テ午前第十一時長崎ヲ発ス、天草富岡沿海ヲ航スルニ当リ、扶桑丸ノ日奈久ヨリ回ルニ遇フ、信号旗ヲ以テ之ヲ止メ、富岡港ニ入リ日奈久ノ景況ヲ聞クニ、曩キニ官軍日奈久ニ進ミ直ニ八代ニ入リ、宮ノ原・鏡ノ両所ニ開戦セリト、因テ前議ヲ変シ直ニ日奈久口岸ニ向フ、是清隆深ク慮ル所アレハナリ、因テ柳ノ瀬戸ニ進ム時、既ニ午後六時、峡中狭隘航路甚険、殊ニ此夜風雨暗黒ナルヲ以テ錨ヲ投シ天明ヲ俟ツ、

本日午前第四時ヨリ宮ノ原・鏡両所及中央共、歩兵并警視隊ヲ派遣シ漸次開戦ニ及フ(此役賊宮ノ原・鏡両村ノ中間々道ヨリ我カ背後ニ出テ、官軍頗苦戦、蓋賊八代ヲ棄テ宮ノ原・鏡ノ両所ヲ守ラント欲セン、ニ、官軍速ニ両所ニ進入セン故ナルベシ)

二十一日

午前第六時抜錨、直ニ日奈久沖ニ至リ、午後第四時上陸ス、時ニ高島大佐八代ヨリ報シテ曰ク、鏡・宮ノ原ノ戦尤苦ム、速ニ援兵ヲ要スト、而シテ清隆カ前日斥候トシテ派遣セシ属官二名ノ報モ之レニ同シケレハ、急ニ兵ヲ上陸セントスルニ風波激烈、且潮涸レテ岸ニ近ツク能ハス、端舟モ亦寡シ、僅ニ得ル所ノ小舟ヲ合シ、一次凡半

分隊ヲ受クルニ過キス、順次之レヲ送リ一中隊ノ員ニ満ツレハ直ニ八代ニ進マシメ、特ニ一中隊ヲ駐メ要所ニ配布シ此地ノ警備トス（此日宮ノ原・鏡両所共休戦セス）、

廿二日

午前第五時清隆日奈久ヲ発シ午後一時八代ニ抵ル、直ニ宮ノ原ノ軍ニ往キ、親シク井上（光顕）少佐等ニ諭スニ、曩日清隆長崎ヲ発スルニ臨ミ、背後攻撃ノ策ヲ献スルノ旨ヲ以テス、此日鏡口休戦、宮ノ原口ハ南種山及早尾山ニ交戦ス、互ニ勝敗アリ、

廿三日

賊宮ノ原近傍早尾村等ノ要害ニ屯集シ、容易ニ進撃スヘカラサルヲ以テ、背後ナル南種山ヲ衝クノ策ヲ定メ、兵ヲ両隊ニ分チ、一ハ種山ノ根拠ニ向ヒ、一ハ宮ノ原前面ニ当ル、両道頗苦戦、死傷甚多シ、

此日午前六時ヨリ午後三時ニ至リ遂ニ其塁ヲ抜キ、北種山ヨリ南氷川ノ堤上ヲ限リ哨兵ヲ張ル、賊又哨兵ヲ襲フ、哨兵之レニ応シテ交戦時ヲ移シ、殆ント薄暮ニ至リ、暫時ニシテ賊遁走ス、故ニ旧ニ依テ哨兵ヲ布ク、

二十四日

戦線益広漠ニ亘リ、衆兵ヲ要スルカ故ニ、後軍ノ至ルヲ待ツ、此日宮ノ原ニ於テ戦フト雖トモ我軍敗スルナシ、

（三月）二十五日

（顕義兼司法大輔）（和良大警視）山田少将、川路少将兵ヲ率ヒ長崎ヨリ至ル、高島大佐ヲシテ戦地ニ赴カシム、大挙進撃ノ策ヲ建ンカ為メナリ、

此日旅団ノ制ヲ定ムル左ノ如シ、

第二旅団司令長官　高島大佐
第三旅団同上　山田少将
第四旅団同上　川路少将

二十六日

宮ノ原・鏡ヨリ大ニ進撃ス、右翼ハ北種山ヨリ宮ノ原ニ至リ、中央ハ宮ノ原ヨリ鏡ヲ限リ、左翼ハ鏡前面ヨリ海岸ニ及フ、此距離凡三里ニ亘ル、其略、右翼ハ第四旅団、中央ハ第三旅団、左翼ハ第二旅団ノ兵トシ、砲二門ヲ（此役未タ砲隊ノ備ラサルヲ以テ軍艦ヨリ之レヲ揚陸シ、各隊並属宮ノ砲ヲ使用スルモノヲ撰抜シ一隊ヲ作リ、折田少書記官ヲシテ之ヲ指揮セシム）中央線ノ右ニ備エ、ガツトリング砲ヲ左翼ノ中心ニ備フ、午前第七時砲三声ヲ以テ攻撃ノ号令トシ、右翼先之ニ応シテ進撃ノ虚勢ヲ張リ、左翼進ンテ賊ニ当リ、中央之ニ次カシメントス、部署ノ如ク進撃スルニ、交戦稍時ヲ移ス、左翼進入ノ機ヲ見テ、右翼中央ノ兵ヲ進マシム、賊大小砲ヲ発シ激戦スト雖トモ終ニ敗レテ走ル、総軍進ンデ小川ノ

要ヲ占拠ス、時午後三時ナリ、此ニ於テ該地ノ哨兵線ヲ定メ、第三旅団ハ宮ノ原、第二旅団ハ鏡、第四旅団ハ直ニ小川駅ニ屯シ、各兵ヲ休ス、此役ヤ官軍死傷少シトセス、

二十七日

休戦、

二十八日

午前第三時第三旅団ノ兵一大隊中村中佐（重遠）之ヲ指揮シ大斥候トシテ豊福村ニ向テ発ス、村ヲ過キ切通ニ至レハ賊忽之ヲ迎フ、戦フコト数回、官軍利アラス、先ツ小川駅口ニ退ク、此日第二旅団ノ兵一中隊ヲ以テ該地ノ応援トス、

二十九日

休戦、此日旅団ノ名称ヲ改メ、第二ヲ第一トシ、第三ヲ第二トシ、第四ヲ第三トス、是ヨリ前キ軍艦ヲシテ出水（いずみ）・水俣（みなまた）・日奈久（ひなぐ）・宇土・川尻・河内（かわち）・小島辺ノ沿海ヲ常ニ回航砲撃セシメ、玄武・橋龍ノ両船等ハ太田尻・三角（みすみ）近傍ヲ航行シ時ニ砲発セシム、

三十日

娑婆神口及松橋ヲ攻撃ス、其略、第三旅団ハ娑婆神ニ進ミ該所ノ賊ヲ攘ヒ、第二旅団ハ其機ニ乗シ豊福ヨリ松橋ニ向ヒ進撃シ、第一旅団ハ海浜ニ沿ヒ第二旅団松橋進入ノ機ニヨリ左翼ヨリ衝突、三所聯合スルノ策ニ決シ、午前第六時ヨリ娑婆神ノ賊ニ当ル、賊左右山間ノ険ニ拠リ防禦シ、或迂回シテ我カ右側ニ出テ交戦ス、官軍戦苦ム、初第二旅団ニ属スル選抜隊ヲシテ、窃カニ賊ノ右翼ナル山間ニ向ヒ当ラシメシガ、第三旅団ノ兵戦苦ムノ報アルヲ以テ、第一旅団ノ兵一中隊ヲシテ娑婆神ノ中央ニ応援セシム、此際川路少将城山ヨリ迂回シ、賊ノ背後斜面ニ突出セルヲ以テ官軍大ニ利ヲ得、同十一時ニ至リ該所ノ険ヲ占ムルヲ得タリ、第二旅団ハ其機ニ乗シ豊福切通ヲ経テ攻撃スルニ、右側山間ノ賊防戦時ヲ移ス、第一旅団ハ午前第五時鏡ヲ発シ左翼ニ向フニ、賊新田水門ノ枠ヲ破却シ海水ヲ注入セシメ、将ニ之ヲ阻テントス、官軍之レニ艱ムト雖、湖水ヲ冒シテ進入ス、時ニ左右中央ノ戦容易ニ抜ク能ハサルヲ以テ、山田少将頻ニ右翼ノ兵ヲ進ム（右翼ノ急撃ヲ要スレハ石井権中警視ヲシテ山田少将ニ伝ヘシム）、此機ニ乗シ本道ノ賊塁ニ当リ、大小砲ヲ以テ急撃セシム（安田権大書記官ニ令シ臨機之ヲ衝カシム）、因テ左右翼本道一時ニ接戦シ、遂ニ賊塁ヲ抜クコトヲ得タリ、時ニ午後第七時ナリ、此夜降雨暗黒咫尺ヲ弁セス、因テ直ニ兵ヲ其地ニ駐メ、全軍野営シテ天明ヲ俟ツ、

三十一日

午前第六時前夜止戦ノ儘左右中央同時ニ進撃ス、右翼ノ交戦時ヲ移ス、中央左翼其機ニ乗シ松橋ニ突入ス、賊兵器ヲ棄テ屍ヲ負フニ暇アラスシテ走ル、仍テ宇土・松橋ノ中央ニ哨兵ヲ布キ兵ヲ休ス、

四月一日

午前第四時賊兵凡一小隊、刀ヲ振フテ第一旅団ノ哨兵線ニ入ル、官軍苦戦ト雖、終ニ撃テ之ヲ退ク機ニ乗シ宇土市街ヲ抜キ、右翼ヲ木原山ノ険ニ拠ラシメ、緑川ニ沿フテ哨兵ヲ配布シ益守備ヲ厳ニス、第三旅団ハ娑婆神ヨリ堅志田ヲ抜ク、此役哨兵線綿亙凡四里ニ及フ、

二日

休戦、背後八代ニ賊襲来ノ報アルニヨツテ、運輸局出張ヲ松橋ニ移シ、病院ヲ松合ニ転シ、患者ヲ長崎ニ送ル、

三日

午前第五時、賊暁霧ニ乗シ堅志田ノ陣ヲ襲フ、事不意ニ出テ頻苦戦、國分少佐(友愿)等防戦シテ之レニ死ス、賊将村田正宣ヲ擒ニシ、官軍進ンテ甲佐ヲ抜ク、大ニ利アリ、

四日

背後八代ニ於ルヤ、賊漸次襲来ノ急報アルト雖、兵数寡少、兼テ駐在セシメシ一中隊ノ外防禦ニ充ツルノ員ナシ、背後襲来ノ虞ハ固ヨリ慮ル所アレハ、後備派遣ノ旨屢上申セシカ其事行ハレス、此時ニ当リ殆ント策無キニ苦ム、固ヨリ撃背ノ目的ハ連絡ヲ通スルニ在レハ、断然此地ヲ顧慮セス、兵員ヲ一ニ合シ勢力ヲ専ラニシ、直ニ一方面ヲ撃破シ熊城ニ達スルノ議ニ決セント、之ヲ各旅団長ニ謀ルニ、山田(顕義)・高島(三十九日少将昇進)ノ両少将ハ意相投セリ、独リ川路少将堅志田ノ険ヲ棄ルニ忍ヒス、依テ再ヒ厳達セリ、此際ニ当リ一ノ八代士族アルアレハ、安田(定則)権大書記官ヲシテ巡査ヲ召募シ、彼地万一ノ警備ニ当ント同地ニ派遣ス、而シテ此時賊既ニ人吉・日奈久ノ両道ヨリ襲来ノ急報ヲ得タリ、因テ臨時防禦ヲ安田権大書記官ニ委任ス、偶黒(通軌・参謀長)川大佐率ユルノ兵至ルニ会スレハ、第二旅団ノ兵ヲ分遣シ応援セシムルヲ得タリ、

(四月)五日

午後第三時隈川(球磨)筋小川・深見ノ両所ニ於テ開戦ス、賊又日奈久口ヨリ八代ニ逼ル、此日山田大尉・手島大尉各一中隊ト砲二門応援トシテ八代ニ着ス、川村(純義)参軍高瀬口ヨリ至ル、因テ陳スルニ此口殆ント熊城ヘノ連絡ヲ取ル目的アリト雖トモ、如何ンセン土地固ヨリ広漠ニシテ、哨兵凡六里ニ亘リ、加之背後応援トシテ分遣スル所アレハ、

益寡兵ニ苦ムヲ以テ、今猶三千ノ兵ヲ附セラルレハ速ニ連絡ヲ通シ、且周囲ノ賊ヲ掃攘スルコト清隆任シテ其功ヲ奏スヘキヲ以テス、参軍(川村純義)相投シ直ニ高瀬ニ野営ス、

六日

休戦、八代ニ於テハ午前第五時ヨリ進撃ヲ始ム、諸所ノ交戦互ニ勝敗アリ、賊遂ニ八代ヲ囲ム、官軍激戦シテ古麓及山間ニ走ラシム、時午後第五時ナリ、此日永田(貞伸)少佐・井上(充愛)少佐ヲシテ各一中隊ヲ以テ応援セシメ、次テ岡沢(精、参謀長)中佐ヲ同地ニ赴カシム、

七日

八代ニ於テハ午前第三時兵ヲ進メ、古麓及山間ノ賊ヲ攘フ、賊刀ヲ振フテ侵入スルコト両次、官軍頗ル苦戦スト雖、終ニ撃テ之ヲ走ラス、此日第二旅団ハ黎明狙撃隊及ヒ臼砲ヲ六彌太渡ニ出シ隄ニ沿フテ配布ス、賊亦前岸ニ出テ水ヲ隔テ開戦ス、賊又夜ニ乗シ緑川ノ上流ヲ渡リ、我カ哨兵線ノ左翼ヲ襲フノ勢アリシガ、忽然トシテ右翼ニ突出シ、木原山ノ兵ヲ侵ス、故ニ応援二中隊ヲ発シ掩撃ス、賊潰散追フコト数丁、死傷ヲ棄テ走ル、

八日

増田判事、高瀬口ノ一報ヲ得、彼口大挙進撃ノ由ナルヲ以テ、清隆窃ニ慮ル所アリ、伊東海軍少将・高島少将ト同シク木原山ニ登リ、熊本近傍ヲ臨瞰スルニ、我カ哨兵線ニ向ヒ一軍隊ノ近ツクモノアリ、乃チ斥候ヲシテ之ヲ視セシムルニ、熊本鎮台ノ一大隊奥少佐(保寧)之ヲ引率シ、囲ヲ潰シテ我営ニ至ルモノナリ、之ヲ迎フ、乃報シテ曰、初城兵ノ囲ヲ破ルヤ将ニ植木口ニ向ハントセシカ、偶砲声ノ緑川方面ニ当リ激発スルヲ以テ、賊緑川ニ拠リ官軍ニ接スルヲ慮リ、急ニ方向ヲ変シ此口ニ来レリト、又谷少将ノ言ヲ伝ヘテ曰ク、粮米猶本月廿日迄ヲ支フヘシ、武官兵卒ハ一日粟飯二次、粥一次、文官ハ粟一次、粥二次ト定ム、而シテ患フル所ハ独リ薬品ノ闕乏スルノミト、尓後海軍ヲシテクルプ砲・臼砲等ヲ以テ川尻ヲ攻撃セシム、

九日(四月)

休戦、　勅使片岡(利和)侍従下向、将校以下兵卒及負傷者ヘ物ヲ賜フコト各差アリ、

十日

休戦、川尻進撃ノ部署ヲ定ムル左ノ如シ、

一甲佐ヨリ御船及吉野ヲ抜ク事、

但第三旅団ニ第一旅団ノ兵ヲ分テ応援ヲ為サシム、

一隈ノ庄ヨリ鯰村及上シマノ渡ヲ目的進撃ノ事、
但第一旅団ノ兵ヲ以テ之ニ充テ、第二旅団ノ兵ヲ分テ応援セシム、
一熊本鎮台第十三聯隊ハ隈ノ庄ヨリ鯰村及上シマノ渡等ヘ進撃ノ兵ヲ、嚮導且応援ヲナサシムヘシ、
右之外第二旅団及黒川大佐ノ率フル兵并遊撃隊ヲ以テ今形ノ哨兵線ヲ押シ、隈ノ庄ヨリ大渡・小岩瀬渡シ・緑川下流ヲ漸次進撃スヘシ、
此時第一旅団司令長高島少将・第三旅団司令長川路少将ヘハ熊本籠城ノ景況既ニ聞ク所ノ如クナレハ、連絡スルノ策一日モ忽ニスヘカラス、迅速商議ヲ遂ケ既ニ其目的ヲ定ムル上ハ別ニ届出ルニ及ハス、速ニ施行スヘキ旨厳達シ置ケリ、

十一日

川村参軍高瀬ヨリ至ル、去ル五日議スル所尽ク成ラス、参軍ニ親問スルニ、高瀬口哨兵ノ配置苟クモスル所ニ非スト雖、時トシテ賊徒ノ襲来スルアリト、因テ尚亦此旨ヲ以テ猶一層注意スヘキ趣ヲ各旅団ニ布達ス、

十二日

前部署ニ従ヒ第二旅団ハ各隊ヨリ人員ヲ選抜シ、夜ノ深キニ当リ小舟数隻ヲ艤シ川尻ニ向ハシメ、黒川大佐モ小舟数十隻ヲ雇ヒ、同シク川尻ニ向フ、然ルニ第二旅団ノ兵ハ賊ノ斥候ト会戦シ、其本隊ノ早ク之ヲ知リ必死防戦スルヲ以テ、竟ニ達スル能ハス、黒川モ亦天明ニ際シ賊ノ防守スルカ為メ達スル能ハス、右翼川路少将・高島少将ハ部署ノ如ク遂ニ御舟鯰村ヲ進撃セシカ、賊忽潰散スルヲ以テ直ニ武宮ニ迫ル、鳥尾(小弥太)中将高瀬口ヨリ書ヲ送リ、断然黒川大佐ノ引率スル兵ヲ挙ケ高瀬ニ向ハシメントス、是レ兼テ、天皇陛下ノ特任アルヲ以テノ故ナリト、

十三日(四月)

賊八代ヲ再襲スルノ報アリ、黒川大佐ノ兵二中隊及新着ノ巡査百余名ヲ派遣ス此役士地遠隔スルヲ以テ、詳報ヲ得ス、故ニ略ス、安田権大書記官ヲシテ諫早・武雄等ノ士族一千人ヲ限リ召募ノ為メ長崎県ニ出張セシム、

十四日

部署ノ如ク、左翼山田少将・黒川大佐前夜ヨリ緑川及其他ノ河ヲ渉リ、杉島ヲ進撃シ賊敗走、正午十二時川尻ヘ進入ス、山川(浩)中佐右側一中隊ヲ率ヒ賊ヲ追フ、一人ノ之ヲ支フルモノナシ、終ニ長駆シテ熊本城ニ達ス、

十五日

未明清隆自ラ各旅団ヲ率ヒ大挙シテ熊本城ニ入ル、片岡侍従モ亦次テ入城シ、谷少将以下将校士卒一般ヘ御慰問ノ旨ヲ通達ス、是レ曩キニ高崎侍従番長カ　勅使トシテ高瀬ニ下向セシトキ、谷少将等ヘ御慰問ノ旨アリシカ、当時賊囲ノ中ニ在リ達スル能ハサルヲ以テ、長崎県令ニ托シ帰京セシニヨリ、片岡侍従持参セリ、清隆又薬品・糧米・酒・肉等ノ物ヲ第一旅団ニ命シ輸送シ、将校以下多日嬰守ノ労ヲ慰ス、黒川大佐ニ属スル旅団ハ、自今第四旅団ト改称ス、

十六日

賊背攻撃ノ各旅団防禦配布部署ヲ確定シ（第一旅団ハ宇土・松橋方面、第二旅団ハ隈ノ庄及近傍、第三旅団ハ御舟ヨリ堅志田方面、第四旅団ハ八代ロトス）、総督府ニ上申スルニ、賊徒熊城ニ逼リ猖獗ヲ呈フスルニ際シ、下官討賊ノ命ヲ奉シ、将卒ノ奮戦ニ由リ既ニ熊本ニ連絡シ、周囲ノ賊ヲ掃フヲ得タリ、仍テ向後ノ籌策ハ総督ノ方寸ニ在リ、故ニ所轄ノ兵員ヲ各所ノ要地ニ配置スルノ意ヲ以テス、

十七日

自後八代口各旅団ニ於テハ、直ニ総督府ノ指揮ヲ受クヘキ旨ヲ相達シ、且其旨総督府ヘモ上申ス、

（四月）十八日

清隆参軍拝命以来、取扱ノ布達類及各旅団士官昇級并人員表等ヲ合シテ総督府ニ進達ス、且清隆宿痾ノ僂麻質斯ヲ患ルヲ以テ、軍医ノ診断ニ従ヒ、土地ヲ換ヘ療養セント欲シ、総督府ヘ伺済ノ上本日長崎ニ発程ス、

二十日

長崎県下ニ於テ召募スル所ノ巡査、既ニ其員ニ満ツルト雖、熊本ノ連絡已ニ通シ多数ヲ要セサレハ、此内諫早ノ士族百五十名ヲ一小隊ニ編シ、之レヲ熊本ニ送リ、該県ノ警備タラシム、

廿二日

清隆征討参軍解任ノ命ヲ蒙ル、直ニ総督府ヘ上申、且各旅団ノ長官ニ通知ス、

鹿児島征討始末　三

一　博愛社設立書類四月

一　警視局巡査出張人数（四月二十三日調）

一　河田景與従軍願并指令
一　福島行治・原田啓ヨリ小森澤宛川尻口及鹿児島景況報知
一　川村参軍ヨリ総督宮及山縣参軍ヘ鹿児島近況報知
　附仝県下諭達写
一　仝人ヨリ総督宮ヘ薩地戦状上申五月
一　伊藤市郎ヨリ金井書記官宛鹿児島近状報知
一　岸良検事ヨリ大久保参議宛仝上
一　渡書記官鹿児島景況略誌（従四月二十五日至五月七日）
一　征討費支出高一覧表（五月二十一日調）
一　東久世ヨリ徳大寺宛薩地近況報告
一　臨時裁判所某日記（従五月一日至二十四日）
一　香川眞一佐伯戦報
　附三好判事日向地方探偵書（従五月初旬至二十七日）
一　石井省一郎仝上
　附西村捨三竹田戦報及宮本市五郎探偵書
一　兵器弾薬等買入人取締愛媛県届六月
一　尾崎書記官鹿児島・熊本出張日記（従五月十三日至六月三日）
一　品川書記官萩地騒擾報知
一　愛媛県上申避乱処置方
一　広島県上申管下取締方
一　古庄判事竹田戦報
一　岸良検事ヨリ大山綱良審糾云々及薩地戦状報知
一　西郁捨三諸探偵及竹田賊徒敗退後戦報
　附石井省一郎臼杵戦報
一　愛媛県上申海岸取締方
一　諸兵出張人員
一　在豊後海浅間艦長緒方少佐臼杵戦状報告
一　三好判事ヨリ河野幹事宛日向・豊後戦略報告
一　大塚正男ヨリ河野幹事宛薩地近状報知七月
一　西郁捨三上申、三好退蔵探偵報告書
一　太田警部聞取書

五〇　博愛社設立書類

五〇ノ一
明治十年四月廿日

大臣　　本局

参議

別紙議官（元老院議官）佐野常民、同大給恒鹿児島県暴徒御征討ニ付、負傷者救済ノ為メ有志者ノ寄附金ヲ以テ一社ヲ結ヒ度出

願ノ趣有之、陸軍省意見ノ趣モ有之ニ付、左之通御指令可相成哉、奉伺候也、

御指令按

願ノ趣難聞届候事、

（朱）「明治十年四月廿三日」

四〇ノ二　議官佐野常民・大給恒博愛社設立出願之儀

御下問ニ付意見上申

議官佐野常民・大給恒戦地創者救済ノ為メ博愛社設立之儀出願ニ付、御下問之趣致承知、願書并社則等熟視遂省議候処、其設立之法ニ於テハ最モ善美之儀ト奉存候得ドモ、今般御征討ノ事タル内国ニ係リ多数ノ死傷アリト雖ドモ、軍事病院医官及ビ看病人卒等適当ニ之ヲ備ヘ、治療一モ差支無之、然ルニ今マ新タニ結社救済ノ員、戦地ヘ派遣スルモ、恐クハ実際大ニ混雑ヲ生シ可申、抑欧米各国ニ於テモ他邦ト戦端ヲ開クニ当テハ、結社救済ノ例少カラスト雖ドモ、内国ノ反賊ヲ鎮撫ノ措置ニ至テハ、強チ此挙ニ及フヤ否ヤハ未タ確知致シ難ク候得ドモ、前条之次第ニ付、今度結社戦地ヘ派遣之議、軍医職任上ニ於テモ預メ心得無之候而ハ実際施行難致候間、御差止相成度、且又開戦中敵ノ俘虜・傷者等ハ、陣中病院ノ治術ヲ施シ候得共、戦後救済ニ至リテハ人民ノ救助ニシテ地方ニ関係ノ事件ニ候得者、敢テ軍衙ノ論ゼザル処ナレバ、此儀ハ其筋ニ於テ御詮議有之度奉存候、将タ外国医員携行ノ儀者、過般露国軍医戦地立越之節モ、已ニ御差止有之儀ニ付、是亦差支候儀ト相考候、尤別紙結社ノ如キハ、其事アルニ臨ミ俄ニ御決定有之候テハ、其方法善良ノ者ト雖ドモ、其実際ニ於テ整備難致儀ニ付、是等ノ儀ハ預メ其平常ニ在テ深ク御熟評有之候様致度、因テ此段意見上申仕候也、

陸軍卿山縣有朋代理

明治十年四月十九日　陸軍中将西郷従道

右大臣岩倉具視殿

五〇ノ三　別紙議官佐野常民・議官大給恒願出ノ博愛社設立ノ儀、

於其省差支無之哉、意見早々可被申出、此旨及照会候也、

明治十年四月十二日　右大臣岩倉具視

陸軍卿山縣有朋代理

陸軍中将西郷従道殿

此度鹿児島県暴徒御征討之儀ハ、実ニ容易ナラサル事件ニテ、開戦已来既ニ四旬ヲ過キ、攻撃日夜ヲ分タス、官兵ノ死傷頗ル夥多ナル趣、戦地ノ形勢逐次伝聞イタシ候所、悲惨ノ状誠ニ傍観スルニ忍ヒサル次第ニ候、抑死者ハ深ク憐ムヘシト雖トモ生ニ復スルノ法ナシ、唯傷者ハ痛苦万状生死ノ間ニ出没スルヲ以テ、百法救済ノ道ヲ尽ス事必要ト被存候、固ヨリ政府ニ於テハ看護医治ノ両法整備スト雖トモ、連日ノ激戦創痍ノ者漸ク増シ、自然御行届相成兼候場合モ可有之ト料察いたし候、

聖上至仁大ニ宸襟ヲ悩マシ玉ヒ、屢々慰問ノ使ヲ差セラレ、

皇后宮亦厚ク賜フ所アリタル由、臣子タルモノ感泣ノ外ナク候、就テハ私共此際ニ臨ミ、数世国恩ニ浴シ其万分ノ一ヲ報シ候為メ、不才ヲ顧リミス一社ヲ結テ博愛ト名ツケ、広ク天下ニ告ケテ有志者ノ協参(賛)ヲ乞ヒ、社員ヲ戦地ニ差シ、海陸軍々医長官ノ指揮ヲ奉シテ、官兵ノ傷者ヲ救済いたし度志願ニ有之候、且又暴徒ノ死傷ハ官兵ニ倍スルノミナラス、救護ノ方法モ亦不相整ハ言ヲ俟タス、往々傷者ヲ山野ニ委シ、雨露ニ暴シテ収ムル能ハサル哉ノ由、此輩ノ如キ大義ヲ誤リ　王師ニ敵スト雖ドモ、皇国ノ人民タリ、

皇家ノ赤子タリ、負傷坐シテ死ヲ待ツモノモ、捨テ顧ミサルハ人情ノ忍ヒサル所ニ付、是亦収養救治いたし度御許可有之候ハヽ、

朝廷寛仁ノ御主意内外ニ赫着スルノミナラス、彼徒ヲ感化スルノ一端トモ可相成候、欧米文明ノ国ハ戦争アル毎ニ自国人ハ勿論、他邦ヨリモ或ハ金ヲ醵シ、或ハ物ヲ贈リ、若シクハ人ヲ差シ、彼此ノ別ナク救済ヲ為スコト甚タ勤ムルノ慣習ニテ、其例ハ枚挙ニ暇アラス候、本件ノ儀ハ一日ノ遅速モ幾多ノ人命ニ干シ、即決急施ヲ要シ候ニ付、何卒丹誠ノ微意御明察至急御指令被下度、仍而別紙社則一通相添此段奉願候也、

明治十年四月六日

議官佐野常民
議官大給　恒

岩倉右大臣殿

博愛社々則

第一条　本社ノ目的ハ戦場ノ創者ヲ救フニ在リ、一切ノ戦事ハ曾テ之レニ干セス、

第二条　本社ノ資本金ハ社員ノ出金ト有志者ノ寄附金トヨリ成ル、

第三条　本社使用スル所ノ看病夫・運送人等ハ、衣上ニ特別ノ標章ヲ着シ、以テ遠方ヨリ識別スルニ便ス、

第四条　敵人ノ傷者ト雖トモ救ヒ得ベキモノハ之ヲ収ムヘシ、

第五条　官府ノ法則ニ謹遵スルハ勿論、進退共ニ海陸軍々医長官ノ指揮ヲ奉スベシ、

私共儀

此度同志者ヲ募リ、傷者ノ救済ニ従事致度志願之段御聞済相成候儀ニ候ハヽ、私共ノ内壱人戦地ヘ罷越シ可申、其節ハ熟練之西医一名同伴いたし度候所、文部省御雇ドクトルシユルツ氏事ハ軍医ニテ尤外療ニ長シ、実検(験)ニ富ミ居候趣、同氏招請いたし候ハヽ必ス実効相著レ、別シテ都合宜敷儀ト存候ニ付、御用向御差支モ無之候ハヽ、当分(同)仝氏携行ノ儀御差許相成度、此段併テ奉願候也、

明治十年四月六日

議官佐野常民

議官大給　恒

岩倉右大臣殿

五〇ノ四

余輩此惨烈ナル戦時ニ当リ聊カ報国慈愛ノ義務ヲ取ラント欲シ、別紙ノ通征討総督本営ニ願ヒ出テシ所、速カニ其許可ヲ得タリ、由テ四方ノ君子、右ノ主旨ト表情トヲ洞察シ厚ク協参(賛)アランコトヲ冀フ、

明治十年五月

大給　恒

佐野常民

(別紙)

(「五〇ノ三」文書中の四月六日付文書と同文に付、本文省略)

議官佐野常民

明治十年

仝　大給　恒

征討総督二品親王有栖川熾仁殿

(朱)「願之趣聞届候事、

但シ委細ノ儀ハ軍団軍医部長ヘ可打合候事、

五月三日」

博愛社々則

（「五〇ノ三」文書中の社則と同文に付省略）

五〇ノ五

今般報国ノ為メ博愛社ヲ結ヒ、負傷者ヲ救助療済イタシ度段、志願之通御聞届被成下候ニ付テハ、猶又左ニ書載ノ廉々御聞済被下度候、

一本社ニ相用候標章并印章ハ別紙雛形ノ通候間、其節御達置相成度候、

一医師其外本社ニ使用スル人員、戦場出張中ハ軍医其他ニ準シ、寝具・食料等御給与相成度候、尤其人名其時々本社委員ヨリ御届可致候、

一舟車并ニ人夫等ヲ要シ候節ハ、前条同断御仕払相成度候、

右軍団軍医部長ヘ協議ノ上奉願候条、至急御指令被下度候也、

明治十年五月

議官佐野常民

仝　大給　恒

征討総督二品親王有栖川熾仁殿

（朱）「第一条　同之通

但標章ノ図面印影各三十部可差出候事、

第二三条　寝具・食料・舟車・人夫等ヲ要候節ハ、其時ニ軍団軍医部長ヘ申出、部長ヨリ其筋ヘ打合ノ上支給候義ト可相心得候事、

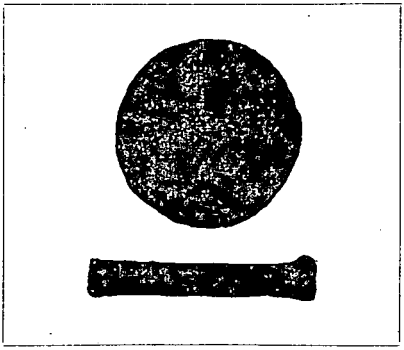
五月二十七日」

博愛社標章ノ図面及印影別紙各三十葉差出候、追而服製等相定候半ハ、其節ニ至リ御届可致候也、

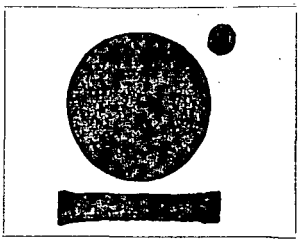
明治十年　　佐野常民

征討総督本営御中

博愛社一般標章



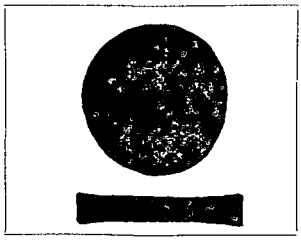
標肩員医



二寸

二寸五分

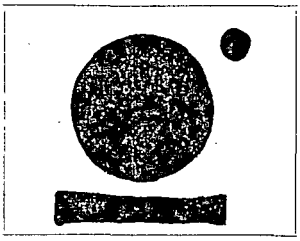
標肩夫病看



同上

同上

標肩係務事



同上

同上

博愛社印章

五一　警視局巡査出張人数

（宋）「十年四月二十三日　調　眞男」

三月十六日

警視局巡査三百五十人大坂ヘ出張

三月廿九日

仝八百人神戸ヘ出張

四月四日

仝五百人九州筋ヘ出張

四月十四日

仝九百人九州筋ヘ出張

通計　二千五百五十人

外ニ

弐千六百人（三月二日マテ各所ヘ出張ノ巡査総員）

合計　五千百五十人

五二　河田景與従軍願並指令

（五二ノ一）十年四月廿四日

大臣

顧問

参議

書記官

（宋）「東作間作中村」

別紙宮内省上申、従二位池田慶徳（旧鳥取藩主）願出之儀ハ、河田景與（前鳥取県権令）

へ御沙汰之趣モ有之候ニ付、左之通宮内省へ御指令相成可然哉、相伺候也、

御指令案

上申之趣ハ京都府へ別紙之通及指令候ニ付、其段従二位池田慶徳へ可相達事、

河田景與出兵願ニ付京都府へ指令

願之趣神妙之至りニ候へとも、已ニ壮兵招募之儀被　仰出モ有之事ニ付、難被及御沙汰事、

従二位池田慶徳ヨリ願ノ儀ニ付上申

従二位池田慶徳ヨリ別紙之通願出候、右者如何取扱可申哉、何分之御指揮有之度、此段及上申候也、

明治十年四月五日　　宮内卿德大寺實則

太政大臣三條實美殿

鳥根県下旧鳥取県ノ士族共ハ、臣カ旧臣ニ係リ候所、薩賊ノ暴挙ヲ憤リ、過日以来有志総代ノ者、臣カ逆旅ニ来リ、一方ノ御警備被　仰付度、臣ヨリ奉願呉候様屢依頼ニ及候へ共、本管県庁ヲ経スシテ臣ヨリ直ニ奉願ノ権理無之ノミナラス、今日朝廷御一定ノ兵制有之上ハ、容易ニ御聞届有之間敷、退テ後日何分ノ命ヲ待ツニ如カサル旨懇〻説諭ヲ加へ候所、失望ノ色顔面ニ溢レナカラ僅ニ帰邑仕候、抑仝族ノ旧臣ニ於ケル従前ノ情義ニ牽ルヘキニアラサルハ勿論ニ候へトモ、渠等奮発此ニ至リ而、臣カ執奏セサルヨリ渠等カ赤心果シテ上達セサルノ姿ニ渉リ、臣カ中心甚タ安カラス、如何ニモ黙〻ニ忍ヒ難ク、何卒時宜ヲ見合セ、何分ノ御用被仰付候様、本管長官ヘ商議イタシ、誠意貫徹為仕度ト日夜懸念罷在候内、今般仝県士族従五位河田景與儀仝地ノ仝志ヲ糾合シ、出兵奉願趣承知仕候処、臣カ情願前文ノ如キ折柄ニテ、臣ニ於テモ実ニ本懐ノ至リニ堪ス、就テハ景與願之通速ニ被聞食候様御執奏被成下度、臣ヨリモ偏ニ奉願候也、

明治十年四月　　従二位池田慶徳

宮内卿德大寺實則殿

五二ノ二

十年四月二十四日

大臣　　書記官（朱）「中村作間東作」

顧問

参議

島根県士族従五位河田景與出兵願之趣、審案候処、衷情尤ノ儀ニハ有之候へとも、已ニ壮兵招募之儀被　仰出モ有之事ニ付、左之通御指令相成可然哉相伺候也、

御指令案

別紙河田景與出兵願之趣神妙之至リニ候へトモ、已ニ壮兵招募ノ儀被　仰出モ有之事ニ付、難被及　御沙汰候条、其旨可相達候事、

出兵懇願書

下京第二十八区馬町通上馬町
五百五十五番屋敷寄留
島根県士族　　従五位河田景與

薩賊ノ大挙シテ肥後ニ入ルヤ、聖上御宸怒アラセ給ヒ、賊魁ノ位官ヲ削奪シ、詔ヲ陸海諸軍ニ下シ、速ニ鎮西ニ御発遣アリシヨリ、王師連捷尋テ　勅使ヲ鹿児島ニ御発シ賊ノ巣窟ヲ覆シ、山鹿・木葉・植木諸路ノ官軍累リニ賊ノ塁壁ヲ抜キ、賊ノ弾薬ヲ火ニシ、更ニ大兵八代ヨリ上陸シ、向背挾撃ノ策行ハレショリ、賊境日ニ蹙リ賊鋒漸ク挫ケタル由伝承候、就テハ掃蕩ノ期将ニ遠ニアラサラントス、然而開戦以来既ニ四十余日ヲ経、官軍ノ死傷モ亦尠シト為サス、此余万一曠日弥久ニ及ハヽ、天下不逞ノ徒相尋テ起ランモ亦測リ難ク、杞憂ノ至ニ奉存候、臣元鳥取藩一士族ニシテ、曩ニ維新ノ隆運ニ遭遇シ、藩主勤王ノ宿志ヲ躰シ、犬馬ノ労ヲ東征ノ日ニ尽スヲ以テ辱ク功臣ノ後ニ列シ、殊ニ重賞ヲ蒙リ、累ニ顕職ヲ経、鴻恩ニ浴スル数歳矣、今ハ罷官草野ニ在リト雖トモ、豈感激シテ報効ヲ図ラサルヘケンヤ、抑臣カ故国鳥取ノ仝志ノ士族共ハ、既ニ其常職ヲ解カレシ後ト雖トモ、尚依然トシテ旧態ヲ存シ、往〻撃剣操槍、平素筋骨ヲ固フスルヲ勉メ、非常ノ虞ニ応セントス、而其形当今ノ御趣意ニ背キ、自食ノ道ヲ謀ラサルカ如キヲ以テ、先年佐賀暴動以来、動モスレハ世上ノ嫌疑ヲ蒙リ、新聞記者ノ喋〻ヲ招ク屢ナリト雖トモ、元是旧藩主積年ノ鼓舞ヲ経、名節ヲ砥礪セントスルノ余リニ出、旧習ノ蟬脱シ難キ、又勢ノ已ムヲ得サル者アリ、豈浪(漫)ニ方向ヲ誤リ、順逆ヲ弁セサルモノナランヤ、既ニ過日以来有志ノ徒、旧知事池田慶徳ノ逆旅ニ至リ、其薦ヲ得テ一方ノ警衛ニ備ハランコトヲ乞甚切矣、而旧知事

兵制ノ時ヲ異ニスルヲ説キ、諭スニ退テ臨時何分ノ命ヲ待ツニ如カサルヲ以テセシニ依リ、僅ニ承服スト雖トモ、猶其意ヲ失フヲ以テ怏々トシテ帰邑スル如キ、所謂論ヨリ証拠ニシテ、其志弁ヲ待スシテ明ナリト申スヘク候、方今常備後備ノ兵員完全充実シテ維新草創間ノ比ニアラサルハ勿論ニ付、臣カ同志等金穀ヲ献納シ、以テ御軍資ノ万一ニ供シ度志願ニハ候得共、逐年疲弊ノ極迚モ弁シ得ル所ニアラス、而黙々坐視傍観仕候テハ臣子ノ情難忍候ニ付、何卒仝志一同ノ者共戦地相当ノ御用被　仰付候ハヽ、感泣ニ堪ヘス、必死ノ力ヲ竭シ、上ハ　天恩ノ万一ニ奉答シ、下ハ従前無実ノ汚名ヲ雪カセ度、区々ノ微衷御照察ノ上、至急御許可相成候様宜シク御執奏被成下度、此段奉懇願、尤仝志姓名ノ儀ハ追テ詳細可申上候、以上、

明治十年四月五日

島根県下旧鳥取士族

仝志総代

従五位河田景與

京都府槇村正直(知事)殿

五三　福島行治・原田啓ヨリ小森澤宛川尻口及鹿児島景況報知

五三ノ一

当省官員長崎及戦地出張之者ヨリ、当省事務課長小森澤中秘史ヘ、別紙之通戦地及鹿児島之景況報知有之候ニ付、為御参考備貴覧候也、

十年四月廿七日

中牟田海軍少将(倉之助、川村海軍大輔代理)

岩倉右大臣殿

五三ノ二

尓来益御清穆御勉務之筈奉恐賀候、就ハ於当地川村(純義)参軍殿ヲ始メ、海軍之諸将校以下格別相変儀無御座候、御放慮相成度、且迂生ニモ川村殿随行ニテ本月五日長崎出帆、仝日当地ヘ上陸、海軍人員も凡六十名程上陸相成、海軍ノ臼砲并クルップ砲ヲ揚陸、打方之儀本営ヨリ依頼ノ由ニテ当分ハ六弥太橋際ヘ据付相成、毎日数発ヲ放シ諸口進軍ニ声援ヲ為シ、既ニ一昨日ハ一進撃之処、山田(顕義、別働第二旅団司令長官)少将ノ引率スル兵ハ緑川ヲ押渡リ対戦ス、(納之助、別働第一旅団司令長官)高島少将ノ手ハ隈庄ヨリ進軍、黒川(通軌、別働第四旅団)大佐ノ手ハ川尻口下ノ方ヨリ進ミ川尻ヘ廻リ、此日之死傷大凡百名ニ不

過、未タ審ニ不相分、当地ノ賊ハ植木口ノ賊ニ比スレハ稍弱兵ト愚考仕候、過日七日ニハ川村殿随行ニテ植木口ヘ相越シ、翌八日吉次越ヨリ植木ノ間ヲ払暁ヨリ進撃、官軍実ニ憤(奮)戦ノ形勢ヲ熟覧仕候、此日ハ賊ノ堡塁三ケ所ヲ官兵抜キ取リ、速ニ堡塁ヲ築キ対戦ス、此間僅ニ四五間ヨリ多クハ十四五間ニテ両方ヨリ狙撃いたし居申候、植木口ノ賊ハ余程ノ強兵ト相見ヘ、其台場ヘ不切込内ハ遁去不申、夫カ為メ官兵モ多分ノ死傷有之、鎮台兵ハ思ノ外相進ミ、是ハ全ク士官ニアリト愚考仕候、右植木辺、或ハ木留辺ヘ斃レタル賊ノ死骸ハ大概鹿児島城下之者ニ有之、十ノ七八ハ此植木口ニ力ヲ込メシモノナラン、此口ニハ野津(鎮雄)・大山(巌)・三好(重臣)ノ三少将アリテ諸軍ノ指揮ヲ司リ、毎日程之進撃実ニ壮ナリ、扨過ル十日当地ヘ来リ候処、黒田参軍モ益勉強ニテ既ニ本日ハ払暁ヨリ川尻ノ賊巣ヲ抜キ、諸方火焔甚熾ナリ、是ヨリ速ニ熊本城下ヘ攻撃可相成筈ニ付、両日中ニハ極メテ城兵ト連絡ヲ取ルナラント想像仕候、本日ハ戦地ヘ趣キ諸兵ト共ニ賊地ヘ進入、賊ノ堡塁等熟覧シ、旁参考仕候処、賊所持ノ小銃ハ種類甚多シ、或ハスナイドルノ弾薬等捨置アリ、施条銃アリ、七連アリ、又火縄筒モアリ、ケベルモアル様ニ相見得申候、此所ハ杉島ノ内一ノ賊堡塁ナリ、今朝六時頃ヨリ川尻ノ放火相起リ、未タ火焔絶ヘス、本日ハ大勝利、尚此後ノ景況ハ追而可申上候、余リ御無沙汰仕居候ニ付、以乱筆御伺旁申上度如此御座候、百拝、

宇土宿陣　　福嶋行治

四月十四日

小森澤長政様

五三ノ三

倍御勇健云々相略ス、扨熊本前後ノ進撃ハ已ニ御承知ノ事トハ存候ヘトモ、過ル十四日背後之官軍大挙格別ノ苦戦ニモ無之、川尻ノ賊ヲ討払ヒ熊本ニ入城、夫カ為メカ植木及左右之賊モ引揚ケノ色ヲ顕セシニ付、此機ニ乗シテ諸口進撃、是又無難同十五日熊本ニ到達シ、一同微シク笑ヲ含ミシ趣ニ相聞申候、尤賊ハ矢部ヲ経テ日州ノ方ニ走レリトノコト、併シ八代口ニ来リシ賊ハ日州ニ走ル賊ト合スルヲ得サル為メカ、又ハ敗走セシヲ知ラサルカ、尚昨今モポチ〻〻銃発ノ響キ有之候由、前顕ノ次第ニ付、此節軍艦ノ配備ハ細島(宮崎県)・佐賀(大分県)ノ関辺ヘ浅間・孟春、日奈久(熊本県)辺ヘ第二丁卯・鳳翔、高橋沖ハ春日、夫レニ属シテ高雄丸ナリ、鹿児島ハ日進、筑

波ハ追而御指揮アルマテ当港ニ滞泊、沽輝ハ甑ニ損所アリテ此節当港ニ於テ修復中、龍驤ハ一昨十七日鹿児島ヨリ当港ヘ入着、依テ艦長ノ口頭ヨリ鹿児島ノ景況ヲ聞クニ、磯ノ製造所ヘ日〻本艦ヨリ巡回セシニ、何者ナルヤ夜ニ板塀等ヲ破リテ入来ル跡アル故、其所此処注意スル所、二十四斤ノ弾丸ヲ盗ミ去ル様子ニテ、其之ヲ持去ル仕方タルヤ、夜中塀ノ外ヘ取出シ、草等ヲ以テ之ヲ掩ヒ置キ、日中ニ亦守護ノ隙ヲ窺ヒ、窃カニ何方ヘカ持去ルナリト云、右二十四斤ノ弾丸ハ一個一人ニテ運搬スルニ適当ナル為メナルカ、外ノ大ナル地鉄等ハ一切手ヲ附ケサル由、前顕ノ次第ニ付、取締ノ儀、本艦ヨリ県庁ヘ厳ニ談判シタリトノコト、○本艦ニハ薩人モ多ク乗組居ルニ付、陸上ノ親子兄弟等ヨリ或ハ音信セントスルモ、書簡等ハ途中ニテ必ス開封スル故、尋常ノコトノミ披封又ハハガキニテ送リ越シ候由、○政府ノ官員タル薩人ノ留守宅ハ、追々破却スル趣ニ付、何人ノ所業ナルヤヲ探偵スルニ、総テ出兵セシ賊ノ家内ニテ婦女子ノ所為ナリトノコト、夫故カ破却ハ大概夜中ニ多シト云フ、○婦女子ノ勢ヒタルヤ驚ニ堪タリ、艦船等ヨリタマサカ上陸スルニ、官軍ノ人員ト見レハ必ラス尻ヲマクルト云フ（是ハ尻テモ食ヘト、云フコトナラン）

又磯製造所等ヲ巡回スルトキ彼等ニ行遇ハ、彼レ云フ、何ノ為メニ来ルヤ、鴉ニ糞テモ仕掛ケラル、ナ抔ト悪言ヲ吐キ候よし、○一体婦人等今日ニ至リテハ総テ神仏ニ祈禱ノ外無他事、日参・御百度・徒跣等天魔ノ入替リトハ此事ナラン、尤好天気ノ日ニハ酒肴ヲ携ヘ所〻ノ山、或ハ堤ニ毛氈ケツトヲ敷キ連ネ、東群西集雑沓ヲ極ムト云フ、○戦地ノ景況ハ日〻県庁ニ報告アル模様ナレトモ、其戦死等ノコトニ至テハ一切不漏、乍然誰レ云フトナク誰〻ハ手負セリ、誰〻ハ戦死セリト風説アレハ、其家内ニテ仮埋葬ノ式ヲ行ヒ、数多ノ婦女子何レモ日ノ丸ノ小旗ヲ捧ケテ之ヲ送ルト云フ、○扨又別府（晋介）等毎〻鹿児島県庁ニ来リ、兵員ヲ徴募スルコト探偵上判然タルニ、県官ハ一切不知ト云フニ付、或ル日本艦長自ラ田畑（常秋）大書記官ニ県庁外ニ於テ、他人ヲ払ヒ面会シテ此次第ヲ質セシニ（此質問ハ表向ニ非ス自己ノ訳ナリト云）、田畑曰ク、実ハ此事ナキニ非スト雖トモ、迚モ我等ノ力ニテハ之ヲ如何トモスルコト能ハス云〻ト答ヘシ由、其他談話了テ別レシトノコト、○市中ハ局外中立ノ姿ニテ、碇泊ノ艦船等ニ於テ需用品等買入ルニ一切差支ナシト云フ、但シ米価ノ廉ナルハ不審ナリトノコト、長崎等ニ比較セハ壱円丈ケニテ弐升以上ノ違ヒアル由、

右之外後便ニ譲ル、頓首〻〻、

長崎　　原田　啓

十年四月十九日

小森澤閣下

五四　川村参軍ヨリ総督宮及山縣参軍ヘ鹿児島近況報知 附同県下諭達写

五四ノ一

一昨二十六日午後十一時当港ヘ着、昨二十七日早天、総兵上陸、格別動揺無之候得共、追〻賊党帰県スル者モ不少、殊ニ当県人気至テ不宜、就テハ当分ノ兵員ニテ旧城下守備厳重相付キ候ヘとも、何レノ筋進軍ノ手筈無之候テハ、急ニ埒明不申儀ト見込候間、其御表ノ御見留相付候上ハ、速ニ二旅団位ハ御差廻シ有之度存候、右回着之上都ノ城并大口筋ヘ進軍致シ度、尤右ノ内二大隊位阿久根筋通行候ヘハ、人心鎮定居合モ宜布相成候義ト存シ候間、右御配当ノ儀ハ、大山少将ヨリモ申進シ候筈ニ付、何分ニモ御都合有之度、依テ着後ノ様子御報知旁申進シ候、総督ヘハ別段御届不申出候間、是又可然御依頼申進候也、

十年四月廿八日

熊本

山縣参軍殿

鹿児島

川村参軍

五四ノ二

一昨二十六日午后十一時鹿児島港ヘ着、諸船〻モ追〻入港候ニ付、昨二十七日早朝別紙甲号之通県庁ヘ相達候、未兵隊巡査とも陸続上陸仕候所、聊カ動揺之景況モ無之、市中等ハ至テ平穏ニ相見候ヘとも、警部巡査ノ儀ハ全ク兵員ニ充ンカ為メ徴集セシ者ニ相違無之、諸局有害無益ノ輩ニ付、此際別紙乙号ノ通廃止ノ義相達候条、此段御届仕置候、尚委細ノ義ハ夫〻着手ノ上、更ニ上申可仕候也、

鹿児島

明治十年四月廿八日

川村参軍

有栖川総督殿

（本）「甲」

鹿児島県

其県下嘯集ノ暴徒曩日熊本県下ニ乱入以来、県下ノ人心

不穏、追〻凶徒ニ応シ終ニ非命ノ死ニ就クモノ不少、天皇深ク之ヲ憂慮シ玉ヒ、親シク反正帰順ノ道ヲ開カセラレンカ為メ、勅使ヲ被差立候処、彼等毫モ之レヲ悟ラス、弥暴威ヲ逞フセント欲スト雖トモ、遂ニ挫折シテ今日ノ敗衂ニ及フ、於是熊本県下ヲ去リ、日州ヲ経テ其県下ニ帰リ、再ヒ良民ヲ害スルノ憂アランモ難計ニ付、今般更ニ陸海ノ兵員ヲ派遣シ、以テ人民ノ安寧ヲ保護シ、正路ニ帰セシムルノ御趣意ニ候条、一般ノ人民無疑念各職業ヲ営ミ、決シテ動揺セサル様、至急管下ヘ無漏諭達可致候事、

明治十年四月廿七日

征討総督二品親王有栖川熾仁

(朱)「乙」

鹿児島県

其県警部并巡査被廃候事、

明治十年四月廿七日

征討総督本営

五五　川村参軍ヨリ総督宮ヘ薩地戦状上申

五五ノ一

当地着後之景況ハ過日具申仕置候通ニ候所、今朝第四旅団曽我(祐準)少将始一仝、午前二時来着相成候ニ付、直様加治木ヘ回船揚陸之決議ニ候処、今朝ニ至リ当営ヨリ凡一里内外ノ所、下伊敷村ヘ賊兵凡二千人計集合并ニ蒲生郷ヘ千五百人計当分屯在、追〻大口ヨリ当地ヘ引揚ケ候様子ニ被察申候、今朝来既ニ接地ノ地ニテ候ヘトモ、未タ開戦不致、多分今夜賊ヨリ襲来可致之計策トモ被察申候、我守備最厳ニシテ、賊襲来スルヲ待テ一撃迂回ニ策ヲ定メ、尾撃セハ必定我ニ利アルノ地形ニシテ、必ス茲ニ賊胆ヲ破リ可申候、此一戦後ニハ機ヲ失セス進軍、要地ヲ扼シ、御報告可仕候、将亦追〻賊兵ハ当地ニ引揚ケ候ニ付、尓後弥大兵ヲ要シ候間、其地之御都合ニ依リ、尚亦兵員御差廻相成候様希望仕候、右ニ付当地ヘ過分之兵数被差廻候上ハ、山縣参軍被差遣、万事指揮被仰付候様いたし度、委細ハ大山少将ヨリモ具申仕候通ニ付、此段御届旁上申仕候也、

在鹿児島

明治十年五月四日　　川村参軍

熊本

有栖川総督殿

五五ノ二

今五日午前四時頃ヨリ賊弐千人程襲来、甲突川ヲ隔、尚一手五百人計リハ新昌越（新照院カ）ヨリ城山ヲ襲ヒ、例ノ切込之策ト相見へ候へとも、兼テ設置タル台場ニテ悉ク追払、味方頗ル勝利ヲ得候、死傷弐人ノミニテ賊ハ死傷多分ニ有之、其内隊長能勢ト申者ヲ打留、五時頃ニ至リ賊ハ伊敷村・武村等ヲ指テ逃走ル、其後再ヒ襲来之模様モ不相見候得共、益厳重ニ台場ヲ為守、今日迄ハ進撃不致、尚兵ノ到着スルヲ待テ諸口ヘ進軍可致見込ニ候、先ハ不取敢此段御届申上候也、

鹿児島出張

五月五日　　川村参軍

熊本

有栖川総督殿

追而山縣参軍ヘハ別段報知不致候ニ付、御覧済之上、本人ヘ御下付被下度候也、

五六　伊藤市郎ヨリ金井書記官宛鹿児島近状報知

拝呈、御分袖後益御安泰恭賀不斜奉存候、二ニ□（本ノママ）事客月二十六日横濱抜錨、本月二日午前十一時五十分毎上無異儀鹿児島湾ヘ着船、仝日午後県令（岩村通俊）初メ一仝直ニ人県相成申候、偖市中之景況ヲ目撃スルニ、人家□□（本ノママ）ハ宜家・土蔵ハ悉皆目塗リヲなし、諸道具等ヲ船ヘ積込ミ、島々ヘ遁逃スルノ有様ハ、恰モ火事場ニ不異、足ハ客月二十七日川村参軍当地ニ繰込（大隊ノ兵ヲ率ン）以来、人民驚愕ノ思ヲ成シ、浮説紛々右ノ為体ニ波及セシ由、無智人民ノ狼狽実ニ愍然タル景状ナリ、

仝三日通船雇上ケノ事ニ付、櫻島ヘ趣ク、偖該島之風景曽テ聞シ如ク至極絶景ナリ、只公私人民之応接ノ言語互ニ不明、実ニ困却セリ、極下民ニ至テハ言語丸テ不通ト云フモ可ナリ、漸ク手真似・足真似ニテ公用ヲ達シ午後十時過帰庁セリ、

仝四日午前九時三十分、賊軍一里計リノ近傍ヘ襲来、依テ兵隊ヲ直ニ繰出シタル旨川村参軍ヨリ急報有之、右ニ

付哨兵線外ノ人民ハ早々立退可申旨、急檄ヲ廻達セリ、仮病院及ヒ官員家族とも悉皆県庁内へ引纏メタリ、尤諸官員一仝、昼夜詰切リ、庁内ニ於テ焚出シヲナス、本日ハ右景況ニ付、市中人民ノ狼狽不一形、老幼男女或ハ県庁ニ来リ困難ヲ哀告スル等、実ニ現場之景状紙上ニ難尽、吾輩県令ノ命ニヨリ同勤一名ト同行、磯一里住島津(忠義)従三位殿旧知事公邸へ使タリ、于時午後六時四十五分ナリ、従三位殿ハ不在ニ付昨日桜島へ立退キナリ家扶新納時へ公用ヲ達シ、午後十一時昼(本ノママ)済帰庁セリ、該地ハ先ツ敵地ト看做セシケ所、殊ニ彼是夜分ニ相伺ヒ、行キ先キノ探偵等大ニ工夫ヲ労セリ、併シ当地ニ趣シ所、寂然トシテ陽ニハ更ニ異状無之、新納之咄シニ、夕方ヨリ賊ノ斥候ト覚シキ者折々此辺ニ出没セリト曰フ、此行タルヤ舟行ニテ、チヨンイン崎(潮音院カ)ト云フ所ヨリ上陸、扨公事ヲ仕舞ヒ、初メ上陸セシ処ニ伺候所、為留置ノ船夫逃去候哉、船とも更ニ不相見、不得止陸行ニテ午後十一時過帰庁セリ、官軍所々ノ哨兵ニテ誰何サレ、厳密之取調方ニテ、不計若干時間ヲ費セリ、併シ哨兵ノ厳密且軍規ノ粛整ナルハ実ニ感銘ニ堪タリ、五日午前三十分新上橋(シンカミ)口ニテ開戦県庁ヨリ十四五丁、官軍勝利、此時賊ノ大隊長能勢彌九郎ト云フモノヲ打取リ、首ヲ挙ケ本営ニ送リシト云フ、此戦タル賊ヨリ襲撃、官軍ハ元ヨリ防戦シ、是ヨリ哨兵線外所々焼払ヒ、火焔天ヲ衝ク、午後十一時四十分、城ケ谷ト云フ所ニテ小迫合、暫時ニシテ官軍勝利、賊徒潰走セリ、

仝六日県令ノ随行、戦地及兵燹ノ地所等巡覧トシテ午前七時出門、哨兵線路不残目撃セリ、官軍ハ全ク要地ヲ占メ、台場胸壁等充分ニ防禦法行届キ、兵隊ハ別働隊とも都合十三大隊繰リ込ミ有之、加フルニ湾頭ニ海軍若干軍艦ヲ浮メ不意ニ備ヘ、或ハ時宜ニ寄リ側面ヲ砲撃スルノ手当ヲ為セリ、当時官軍ハ全ク防戦ヲ第一トシ、県庁ハ籠城仝様ノ体裁ナリ、依テ海路ノ運輸ハ自由ヲ得、最早大丈夫ノ防戦ナリ、

仝七日午前四時過、武橋口川下ヨリ賊襲来、官軍又勝利、賊ノ死傷四十人余モアルヘシト云フ、現在川中ヨリ死骸ヲ引上ケシ十六人ト云フ、海中ヘ押流セシ分モ多少アルヘシ、官軍も死傷併セテ二十名余、官軍ノ分捕中ニ和銃アリシト云フ、尤賊ハ全ク手詰ヲ主トスル也、賊川渡リ襲来スル所ヲ胸壁ヨリ狙撃スルニ、玉接キノ早キヲ以テ壱人ニシテ五人ヲ打斃セシト云フ、開戦以来、線外ノ兵燹未タ撲滅セス、今夕ハ風烈シク火勢尤モ甚シ、此勢ニ

テハ鹿児島元城下二万計過半ハ全ク烏有ト成ルベシ、右着県以来ノ景状等如此ニ御座候、取込中大乱揮宜敷御推読可被下候、匆々恐拝、

五月七日夜

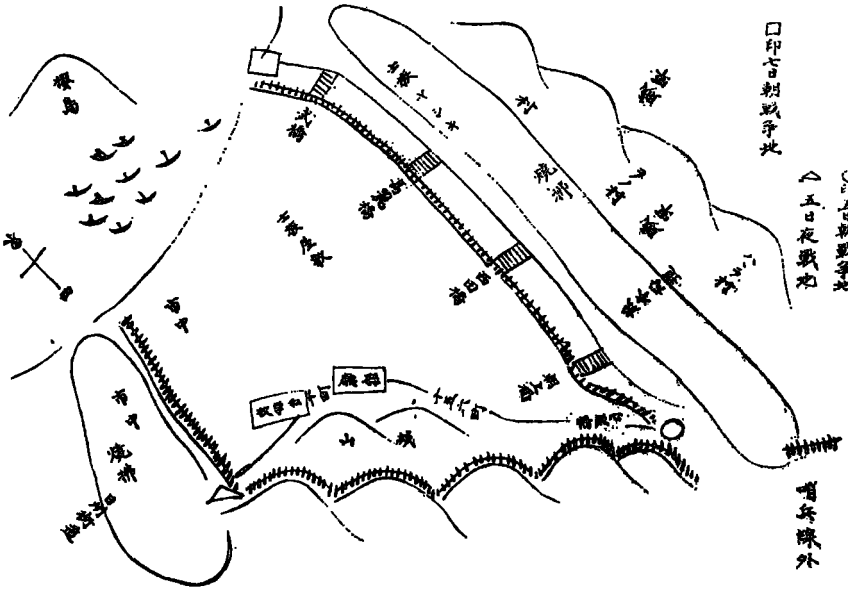
金井老君
閣下

（二等属）
伊藤市郎

二日、御地異状モ無之候哉、発足以来壱通新聞紙ヲモ見ル不克、実ニ穴中ノ熊ノ如シ、着県以来昼夜洋服ノ儘ニテ、只快シトスル者ハ酒・風呂ノミ、御察シ可被下候、発途ノ節も結構ノ品御投恵ニ預リ、千万難有仕合乍紙尾御礼申上候事、

五七　岸良検事ヨリ大久保参議宛鹿児島近況報知

時下益御清昌奉恐賀候、扨福岡暴徒御処分ノ儀ハ時々河野方ヨリ御届申上候通ニ而、一ト先ツ落着ニ及ヒ候折柄、川村参軍方ヨリ、捕獲之賊徒多数ニ可及、至急臨事裁判所鹿児島ヘ出張之義、総督宮ヘ上申相成、夫カ為メ差急



長崎ヲ経、河野始メ(敏鎌、元老院幹事)去ル十一日当県ヘ着仕候、当地昼夜トモホツ、ヽ不絶砲声ハ相聞候ヘ共、下官等着後未タ対(大)シタル戦無之、上ハ酋我少将下ハ高島少将ノ手ニテ兵備頗ル厳密、下ハ新上橋ヨリ川尻迄ヲ線ニイタシ、川ノ中央ヘ二重ノ柵ヲ設ケ、川土手東之方ハ、絶間ナク新上橋ヨリ川尻マテ柵塁ヲ築キ、城山ニモ数重之塁ヲ設ケ、何方モ昼夜番兵ヲ張リ、新秀(照)院・西田ハ一円焼払ヒ、上ノ(園)省・高麗町・上下荒田モ過半焼失、上ハ往還筋ハ勿論、(田上)タガミ山其他諸所ヘ塁ヲ築キ、上町ハ不残士族屋敷モ、タント(タ脱カ)・後迫辺ヲ少シ残シ悉ク焼払申候、賊ハ伊敷ヘ本営ヲ据ヘ、玉里辺ヨリ武岡迄、上ハ磯山、大乗院山上・タンタト坂上辺諸所ヘ出没、桐野(利秋)・邊見(十郎太)等ハ伊敷本営ニ罷在候トノ噂モ有之候、前条之次第ニテ未タ墓(捗)ゝ敷事ニ至リ不申候、町家并士族ハ櫻島・谷山・伊敷・犬迫其外近在近郷ヘ総テ立退キ、適ゝ僕婢等品物ヲ取ニ来ル者ヲ見受申候、昨今ニ至リ候テハ賊ノ方ニテ残忍之所業多ク、下町商人田邊伊太郎ナル者、鹿児島ヘ居残リ県庁用向相弁居、何カ用向有之、谷山方ヘ出懸ル所、途中ニテ賊等取押ヘ、眼玉ヲ抜キ鼻ヲ切リナトシテ殺シタル由、其外男女ニ不拘、諸所ニ於テ殺害イタシ候趣ニモ相聞ヘ、御仕舞ノ狂発カト存シ候ヘトモ、暴戻ノ所業如何ニモ可悪事ニ御座候、一時ハ自首致シ度申合候連中も有之候所、後日ヨリ賊等押寄来リ夫カ為メ自首も相止ミ候趣、右之情態モ有之候ニ付、臨時裁判出張差急候段、川村参軍咄シニ有之候、目下ノ形情大略如此之次第ニテ県庁モ手ノ下シ様無之、一時ハ避ケタル人民ヲ鹿児島ヘ引戻シ度、県令心配モ有之候ヘトモ応スルモノ無之、タマタマ帰リ度者も賊ノ脅迫ニ恐レ居候模様ニ被聞申候、避ケタル者ハ忽チ食ニ尽キ極難渋ノ趣ニ相聞申候、裁判所ニ於テモ二三名ノ外可取調者モ無之、早ク旅団ノ至ルヲ待チ、大挙進撃ノ日ヲ企望罷在候、抑当県人心如此団結シ、此ノ惨毒ヲ蒙リ、又西郷出兵ノ口実ニイタシ人心ヲ惑ハシメ候ハ、根元中原以下ノ口供書ニ有之、此一点ニ於テハ実ニ大関係ヲ持チ候儀ニ付、警部等ヲ吟味いたし候中嶋・仁禮以下ノ者ヲ是非トモ手ニ入レ、大事ニ取調、真正ノ口供ヲ作リ、人民ノ惑ヒヲ解キ候様いたし度、深ク注意罷在候得共、吟味イタシ候者ハ皆出軍致シ、木藤矢太郎ナル者、右吟味ニ関係ノ由、幸仝人ハ拘留いたし候ニ付、精ゝ取調相成候へとも、右ハ二月十七日ヨリ奉職警部外ノ者計取調、彼口供書ニ関係薄ク残念ノ至ニ候、出軍ノ者ハ即今致

シ方無之ニ付、責テハ取調ハ不致トモ、吟味ノ節ニ臨ミ候マテノ者ニテモ手ニ入度、県令トモ申合捜索中ニ御座候、下宮出張ニ付テハ別シテ前条之一点ニ熱心罷在候、

河野モ当地ニ於テ差向之御用無之ニ依リ、大山綱良一件等伺ノ為メ、一昨々日当地出発熊本ヘ赴候、仝人ハ夫ヨリ長崎ヘ引取候筈ニ御座候、長崎ヲ本局ニ致シ既ニ右松（祐永、鹿児島県元一等属）・今藤（去、元一等属）・松元（武雄、元一等属）・養田（長信元四等属）等ハ彼地ニ於テ取調ニ付、杉本検事当地ヘ相見ヘ次第下宮ニモ一応長崎ヘ引揚候、河野トノ約束ニいたし置候、

京師出発ノ時分、河野ヨリ粗言上いたし置候由、今般ノ国事犯ハ、可成九州地外ニ於テ苦役イタシ候様行政上御都合宜シカルヘク、仍テ鹿児島賊徒ノ儀ハ死刑ニ該ル者ハ当地ニ於テ決行イタシ、懲役見込ノ者ハ悉ク長崎ヘ送出し、彼地ニ於テ御処分相成度、河野最初ヨリノ見込ニ有之、着県以来岩村県令ヘモ右之趣及示談候処、県令ノ見込ニテハ死刑ニ該ル者迚モ、長崎ニ於テ決行相成度ト申事ニ有之、参軍方ニ於テモ格別異論モ不承、仍テ懲役以上ト見込者ハ大抵ハ長崎ヘ送出候事ニ相決シ、河野モ出発仕候、右ハ何れニいたしテモ人心ニ関し不軽事ニ存候間、別ニ御見込モ被為在候ハ、下宮迄拝承仕置度奉存候、

大山綱良一件モ司法省ヘ御委ネノ末、アチコチ引廻シ候様上（ママ）御都合ニモ無之ト存候得共、東京ニテ調候大山ノ仮口供ト右松以下ノ口供ト不合之廉不少、右松始メ臨時裁判所ニテ取調候上ハ、兎モ角モ一方ヘ片付不申候テハ吟味纏リ兼可申、右一件ニ付河野方ヨリ誰カ出京為致可申ト奉存候、右旁奉得貴意度、草々頓首、

五月十五日　　兼養（伊良、大検事）

大久保様（利通、内務卿）

二伸、島津家ハ櫻島ヘ御避ケ相成居候、貴家御親族、随テ私親族何方ニ避ケ居候哉、総テ相分不申、大進撃哨兵線ヲ押出し候ハヽ、当地ノ形情又一変可仕奉存候、

五八　渡書記官鹿児島景況略誌

謹啓

別冊ハ小生鹿児島出張中目撃之手扣略誌ニ付、供御一覧候、該地景況御参考ノ為メ御都合ヲ以テ巡達御一覧ヲ希候也、

十年五月十五日　　少書記官渡　元正

中村大書記官（省一郎）殿

明治十年五月六日鹿児島市街
官軍守衛防禦線略圖
於鹿児島造之渡正元

目今賊状

村田新八ハ伊集院郡山ニ
逆見別府潤造等ハ蒲生山田郷治本
恵野ハ伊敷村ノ本陣ニ居
熊本営ハ山崎ニ据ヱ
賊徒凡ソ四千餘人ト云

内外防禦線

外線ハ甲突川下流川崎
ヨリ起リ武橋高麗橋西田
橋新上橋ヲ経テ本兵ノ如ク
山岳ニ亘リ城山ニ合ス
西北ハ私学校ヨリ城邸館
ヲ見リ東後橋ニ達ス是ハ
近衛工兵ト教導団工兵ノ
築ク所ナリ

朱……線、防禦ノ内外防禦線ナリ

軍艦五艘（龍驤、春日、日新、孤波、清輝）
運送船十一艘

城内ノ堅固ナル地形ノ險天然ノ要害ナリ其山路險阻馬迅ニ人馬ニ行ク能ハス甲突川ニ向ヒ天城球館ノ右ハ高ク且土ヲ積ミ決背遠望ニ利セルヲ為ナリ城郭ハ四製城防積ノ二層ナリ目今海軍ノ線ヒ所ナル海上ニ羅列ヘル軍艦五艘外ニ運送船凡ソ十一艘ナリ

香川宮内大丞殿（敬三）
高崎侍従番長殿（正風）

鹿児島景況略誌

曩キニ賊徒河尻ノ一戦ニ敗走シ忽チ植木口ノ守リヲ解キ其堡塁ヲ棄テ悉ク矢部日向路ニ向ノ地方ニ潰散ス、官軍続イテ矢部ニ進入シ賊潰走、或ハ日向路ニ入リ或ハ奈須街道矢部ヨリ日向ヲ過リ人吉ニ出ル横道ナリヨリ人吉ニ聚ルノ景況アリ、仍テ征討参軍海軍中将川村純義ヲシテ台兵及軍艦ヲ率ヒテ鹿児城ニ派遣セシム、蓋シ其巣窟ヲ鎮定シ潰散ノ賊徒ヲシテ再ヒ鹿児城ニ根拠シ得サラシムルノ画策ナリ、

四月二十五日河村参軍及大山少将・高嶋少将別働隊第一旅団及巡査千人ヲ率ヒテ鹿児島ニ発ス、

二十六日艦船肥後小島ヲ解纜ス、

二十七日鹿児島港投錨上陸シ、本営ヲ旧小松邸ニ据ユ、

鹿児島市街諸方ノ防禦線ヲ張ル、

二十八日　二十九日　三十日　五月一日　二日　三日

防禦線ヲ造リ堡塁ヲ築キ、及県下在来ノ警部及巡査ヲ廃シ市街ノ警備ヲ整頓セシム、

五月二日

正元於総督本営、至急鹿児島出張ノ命ヲ奉シ、熊本ノ本営ヲ発ス、偶〻曽我少将第四旅団ヲ率ヒテ鹿児島ニ出張スルニ会ス、仍テ其便船ニ随行シ肥後小島ヨリ金川丸ニ乗船ス、

三日

午前第三時鹿児島行ノ艦船小島ヲ解纜ス、

金川丸ニ伏見宮及曽我少将以下　千三百名
品川丸ニ　千二百名
青龍丸ニ　四百名
千年丸ニ　四百名
黄龍丸ニ　千百名

四日

午前一時鹿児島港ニ投錨ス、本日港湾滞泊ノ艦船十六艘軍艦五艘午前九時鹿児島上陸、伏見宮ニ随行シテ本営ニ至ル征討参軍本営ハ旧小松邸ナリ、河村参軍・大山少将ニ面謁シ本営ニ止マル、夫ヨリ高島少将ノ本陣ヲ訪ヒ、其到着以後鹿児城ノ景況ヲ聞ク、

本日鹿児島市街南北徘徊事情ヲ視ルニ、市中壱人ノ人民ヲ見ス、街衢寂寥各軒閉戸セリ鹿児城ハ七民咸ナ桜島ニ避ク、

今朝諸方ヨリ探偵報知アリ、曰、

賊徒漸ニ鹿児島ノ周囲ニ屯集シ、該市ニ攻入ラントス、其兵凡ソ四千人、其方位

伊集院及郡山ハ　村田新八

蒲生・山田・加治木ハ　邊見十郎(太脱カ)・別府新助(晋介)等

桐野利秋ハ伊敷村ニ陣ス、

本営ハ山崎ニ置クト、

右ノ報知ニ因テ更ニ鹿児島市街周囲ノ防禦線ヲ定ム、

曽我少将引率ノ隊第四旅団ハ、今朝入港直チニ加治木ニ向フ筈ノ所、右ノ警報ニ依テ直ニ兵ヲ鹿児島ニ上陸セシム、

今午後大山少将・曽我少将市街ノ諸線ヲ巡廻ス、正元随行シテ鹿児島城背山岳ノ堡塁及諸方ノ防禦線ヲ巡視ス、

今夕曽我少将引率隊ノ内、一大隊分遣シテ加治木近方ニ出ス、議変シテ不果、

今夕諸手ノ警備全ク整頓シ、賊ノ来襲防禦ヲ尚ホ各隊ニ警ム、

今夜十一時西田橋外ニ失火アリ、各哨兵線一時ニ警備シ諸官本営ニ参集ス、探偵スルニ失火、他ニ異状ナキヲ以テ各退散ス、

五日

本日午前四時前ヨリ賊諸方集来開戦ス、時ニ西田市街ヨリ出火、賊兵突入交戦激烈、襲来ノ賊ハ皆抜刀奮進ス、官兵力戦、八時過ニ至リ賊悉ク潰散ス、新上橋内城山ノ堡塁ニ於テ能勢彌太郎(九)本日一カ切込ミヲ討ツ、ノ分隊ヲ率フ

八時、河村参軍山岳ニ巡廻シテ戦状ヲ巡視ス、正元随行ス、

此日降雨滝クカ如ク、又甲突川ノ向ヒ三四ケ所ヨリ出火、西北ノ風猛烈ニシテ終日炎焼、黒烟四方ヲ包ンテ山岳ノ哨兵等眼ヲ開テ賊状ヲ視察スルコト能ハサルニ至ル、夜ニ入リ市街四方類焼、火烟天ヲ覆フ、

今夜十一時賊数十名抜刀来襲セリ、防禦線ニ迎ヘテ連発シ之ヲ攘フ、此時別手組大坂ニテ雇ヒ入レタル撃剣家百八十名ナリ、陸軍少佐大沼渉之レヲ率フ巡廻シテ賊ヲ斬殺スコト七名、

但シ別手組壱名賊ノ為メニ左指二ヲ射ラルト云、十二時賊潰散砲声止ム、

今日終日軍艦ヨリ賊ノ屯集所ヲ砲撃ス、

六日　休戦

今午前九時ヨリ大山少将ニ随行シテ山岳ノ防禦線及市街橋梁堤防等ノ哨兵防禦ノ二線ヲ巡視ス、

本日斥候隊ヲ出ス、兵員一大隊二分シテ甲ハ谷山ニ、乙ハ吉野ニ向ツテ発ス、里程各〻一里許ナリ、賊ノ屯集所ニ至リ襲撃シテ賊潰ユ、賊兵三名ヲ斃ス、別手組撃剣隊モ仝行ス、

本日午後探偵者帰リ報知シテ曰、

昨五日午後六時頃、催馬楽村ニ賊二百名計リ来着、戸長役所并民家ニ止宿ス、今暁ハ朝駈ヲ以テ襲撃スヘキ手筈ノ所、昨夜酔眠（焼酎ヲ多ク飲ミタリト云）シテ天明遂ニ日高クナリテ醒ム、故ニ其策行ハレス、今朝何レモ空シク伊敷村ニ引返シタリ、其隊長ノ名未知、

桐野利秋ハ尚ホ伊敷村ノ陣所ニ在リ、

市來矢之助ハ四ノ三四五小隊ヲ率ユ、

下田村ニ賊徒多ク滞在ス、

総人員ハ四千人ト云、兵糧焚出シハ吉田村ヨリスト云フ、

七日

今午前四時、賊兵甲突川ノ下流ヲ天保山ヨリ洲崎ニ渉ル、兵員凡ソ二百名、官軍沖野村及ヒ洲崎ノ堤ヨリ之ヲ防戦攻撃シ、賊潰散ス、賊兵河中ニ斃ル、者二十六名（羅紗服ヲ着ン而ンテスナイドル銃ヲ持ノ者多ント云）、其負傷者ハ員数未詳、官兵死傷十名計、

今日正元河村参軍ヨリ熊本ノ総督本営ニ赴キ、至急出兵ヲ請フノ使命及上京シテ鹿児城ノ事情ヲ奏上スヘキノ命ヲ受ク、午前九時鹿児島港ニ千年丸（三菱社船）ニ乗船、十時解纜ス、

明治十年五月　　太政官少書記官渡　正元

五九　征討費支出高一覧表（五月二十一日調）

（朱）「明治十年五月二十一日　大蔵省上申写」

鹿児島県暴徒征討費支出高一覧表　十年五月二十一日

渡先	自最初至五月十四日支出	自五月十四日仝至廿一日仝	共計
太政官	四万二千三百八十九円		四万二千三百八十九円
内務省	四万三千五百円		四万三千五百円

陸軍省	九百五十五万円	弐百万円	千百五十五万円
海軍省	三十万円		三拾万円
宮内省	拾万円		拾万円
警視局	百四十五万六十九円五十銭	七万六百五十四円	百五十二万七百廿三円五十銭
長崎県	三万二千四百円		三万二千四百円
山形県	壱万五千円		壱万五千円
大分県	七万三千円		七万三千円
山口県	四万九千六百廿二円五十五銭壱厘		四万九千六百廿二円五十五銭一厘
鹿島県	弐拾万円		弐拾万円
熊本県	四十弐万五千円		四十二万五千円
福岡県	三十万円		三十万円
高知県	壱万三千六百二十円		壱万三千六百二十円
兵庫県		弐万円	弐万円
広島県		三千円	三千円
新潟県		六千円	六千円
総計	千二百五十九万四千六百壱円五銭壱厘	二百九万九千六百五十四円	千四百六十九万四千二百五十五円五銭壱厘

六〇　東久世ヨリ徳大寺宛薩地近況報告

従熊本表拝呈致候、去十三日午後六時神戸発帆、十五日午後五時鹿児島着、即夜河村参軍へ御慰労御沙汰相渡、翌日大山・曽我・高島三少将并佐官以下被下物、依例河村参軍ヨリ夫々拝領取計申候、抑鹿児島形況ハ旧都城北

方ハ磯山、西南甲突川ヲ限リ官軍哨兵線ヲ張リ、土俵ヲ以テ仮胸壁ヲ築キ、河中柵ヲ二重ニ築キ、高麗橋・西田橋・神楽橋各所大砲ヲ構ヘ、頗ル厳重守備相調、全ク籠城ノ姿ニ御座候、賊ハ人数追々相加、木島（貴島清）・中嶋（健彦）・渕辺（高照）ヲ大将トシテ凡五千余人、甲突川西ノ巒峯星々トシテ賊塁ナリ、去十七日ヨリ大砲四門ヲ以テ頻発砲弾着、哨兵線内ニアリ官軍又応之発砲ス、去七日以後遠方発砲計ニテ短兵ノ接戦ナシ、全都士民一人ノ住居スル者ナク、多ク櫻島ニ脱走セリ、久光親子亦櫻島ニアリ、旧門閥士族皆随従凡五百人計ト云、御守衛隊ト称シ櫻島ニアリ、其他人民田舎間ニ脱シ一人ノ復帰スルナシ、市街実ニ寂莫犬鶏為ニ空シ、哨兵線内ノ人家皆存スレトモ、神昌院（新照院）在ルヲ始メトシテ、琉球館以北哨外ノ旧士族邸宅一宇ノ存スルナシ、皆焦土ナリ、唯進撃兵ノ不足ヲ憂、空哨線ヲ守ルノミ、軍艦ハ龍驤・築波・日新・清輝・春日其他輜重艦港内ニ布列シ、時々巨砲ヲ発シ震天ノ威ヲ示シ、陸ノ声援ヲ取、去十七日大隅福山港ニ賊兵糧ヲ掠奪スト云、軍艦二隻進撃、賊六名ヲ捕縛シ、倉廩壱棟ヲ焼、本日強雨迅雷、及夕帰港、十九日広島丸乗込長崎ニ着、二十日ヲテント丸乗組、熊本へ到着、二十一日本営ニ至リ総督宮拝謁御沙汰書御渡、細川護久御沙汰書明二十二日可相渡候、熊本ノ形況ハ追々以電信参軍局ヨリ申達候間不申上候、山田（顕義）少将八代ヨリ進撃、三浦左敷（稲楼、少将）ニ進、熊本鎮台兵二千堀江大佐（芳介、中佐カ）率之、馬見原ヨリ進、黒川大佐（通軌）エヒラセ（阿蘇郡）ヨリ進、八日九日頃川路大苦戦大ニ戦機ヲ阻シタリ、賊ハ人吉ニ在テ兵凡六千、米糧餘リアツテ塩ナシ、通路ヲ海路ニ取ラント欲シ頻ニ沼海ノ各路ヲ進取力戦ス、砲丸弾薬此節ハ賊大ニ乏絶ニ趣キタリト云、城下焦土ノ酸毒実ニ見ルニ不堪ナク、

御用済次第二十七日頃郵船ニテ帰京可致含ニ御座候、早々拝呈、

於熊本郵亭

東久世通禧（侍従長）

五月廿二日

徳大寺実則（実）宮内卿

閣下

追而鹿児島存外暑気無之、将校皆無異御座候、今日ハ暑気強方、海上至テ平穏ニ御座候、木戸所労不相勝驚入候、乍憚宜布御伝声可給候、一行尾崎（三良、太政官大書記官）始メ何レモ壮健御放念可給候、

六一　臨時裁判所某日記 従五月一日至二十四日

明治十年五月一日　晴

一午後四時汽船扶桑号ニ搭駕、仝七時長崎港ヲ発ス、此夜風浪平穏ナリ、

仝二日　晴

一暁天草灘ヲ斜ニ経過シテ午後二時鹿児島港着船、先是我軍艦五艘、外ニ汽船三艘入港シ海備尤モ厳ナリ、○仝五時ニ至リ裁判官・県官共ニ上陸スルコトヲ得、裁判官ハ不残下町菩薩(ぼさつ)堂通リ京屋直太郎ノ家ニ投宿ス、市中目撃スル所家〻戸を鎖シ、家財ヲ収メテ四方ニ離散シ、予シメ難ヲ避ク、其肆ヲ開キ商業ヲ営ムモノ僅ニ指ヲ屈スルノミ、○官軍ハ防禦線ヲ市外ト士族邸ノ間ニ取リ、胸壁ヲ築キ哨兵之ヲ守ル、妄リニ士民ノ通行ヲ許サス、○旧城ノ山モ亦官兵ノ守ル所ト為リ、夜篝火ヲ見ル、

仝三日　晴、夜ニ入小雨

一裁判官一同出庁、明四日ヲ以テ再ヒ開庁ノ事ヲ公告シ各課ノ位置ヲ正ス、○本日島津久光入湯ト称シ家累ヲ提ケ櫻島ニ渡ル、市人之ヲ聞テ先ヲ争ヒ遁逃ス、是ヨリ後、市間土人ヲ見ス、○賊軍千余別府新(晋)介之ヲ率ヒ加治木ニ来リ、本夜ヲ以テ鹿児島ニ襲入スルトノ風説アレトモ終ニ其実ヲ挙ケス、

仝四日　雨

一午前七時裁判官出庁、各事務ヲ取ル、○賊ノ部将逸(辺)見十郎太残徒ヲ率ヒ西田村及ヒ武村ニ来リ、頓ニ襲入セント欲スルノ勢ヒアルヲ以テ官軍別働隊之ニ先チ進テ西田川ノ東岸ヲ占メテ陣ス、○総督本営ヨリ左ノ公布アリ、

暴徒追〻襲来候哉ニ相聞候条、庁下哨兵線外ノ人民立退候様至急可相達候也、

但哨兵線内ノ人民ハ立退ニ不及候事、

征討総督本営

仝五日(ママ)

本日裁判官・県官共ニ外宿ヲ徹シ庁中ニ移ル、吏員ノ家累モ亦庁内ノ別舎ニ集ル、○本夜ヨリ判任官・等外吏ヲ混シ時間三十分毎ニ庁郭ヲ巡邏シ不虞ヲ監ス、

仝五日　雨風

一午前三十分(ママ)城山ニ於テ開戦、弾丸時〻我頂上ニ飛フ、五時頃砲声尤盛ナリ、○少時アリテ官軍進メノラッパ

ヲ奏スルヤ、山上ノ砲声頓ニ衰ヘ、平ノ馬場辺ニ下リテ砲声復大ニ聞ク、此際新秀(照)院及高麗橋ノ方ニ当リテ火ヲ放ツ、〇六時三十分ノ頃ニ至リテハ砲声全ク近方ニ減シ、西田橋・高麗橋・武橋ノ方ニ当リ銃声遙ニ響キ砲声稀ニ轟ク、庁ノ楼上ヨリ之ヲ望メハ火数所ニ起リ焔烟天ニ漲ル、〇午前八時水城県官等ト共ニ風雨ヲ侵シ城山ニ登リ、諸塁ヲ巡リ而後山上西南ノ胸壁ニ至ル、戦地ヲ望ムニ、賊軍已ニ潰ヘ、玉里・武村辺ニ走リ潜伏ス、別働隊ハ西田川ニ拠リテ防禦線ヲ取リ、西田町ヲ焼キ、兵士ノ火焔中ニ奔走スルヲ見ル、且ツ塁ヲ守ル兵士ニ聞クニ、今朝賊ノ襲来スルヤ払暁百人計リ抜刀、谷ヲ攀テ突入スレトモ塁固フシテ入ル能ハス、一賊地ニ塗レ退キ斃ル、モノモ亦其数ヲ知ラスト云、

〇河村参軍・岡本陸軍中佐・有地海軍中佐・伏見宮陸軍中尉等ノ諸士モ亦此塁ニ在リ軍ヲ指揮ス、〇一士官アリ賊将能勢彌九郎ノ首級鮮血淋漓タルヲ提ケ来リ之ヲ参軍ニ示シ曰、今朝斃ス所ナリト、〇十時ヲ過キテ水城山ヲ下リ庁ニ帰ル、此時又庁ノ北上町琉球館ノ近傍ニ当リテ火起ル、大雨盆ヲ傾クル如シト雖トモ、諸方ノ火益熾ナリ、而砲声漸ク絶ヘ稀ニ我軍艦ノ空砲ヲ発シテ軍威ヲ示スアリ、〇本日ノ戦ヒ官軍死者一人、傷者壱人也ト云フ、〇夜十一時四十分又城山ニ於テ開戦、一時砲声盛ナリト雖トモ須臾ニシテ休ム、〇上町ノ火終夜滅セス、

(五月)
仝六日　曇

一午前二時五十分西田ノ方位ニ当リ銃声頻ニ響キ、砲声稀ニ轟ク、暫時ニシテ又休ム、〇昨五日ヨリノ火烟今夕ニ至ル迄尚未タ休マス、〇仝僚四方ニ奔走シテ糧食ノ予備ヲ為ス、就中山本守時周施尤モ勉メ、三菱汽船会社ニ謀リ精米十俵其他干魚等若干ヲ得テ衆心頗ル安シ、〇此日賊徒多数日向地方ヨリ来リ漸ク我北面ノ塁ニ近ツクトノ説アリ、官軍モ亦日ヽ備ヲ堅フス、

仝七日　晴

一午前第三時三十分、賊三百余川尻(西田川ノ下流)ニ来リ逼ル趣、川向哨兵之ヲ報スルヲ以テ直チニ其備ヲ為ス、賊等曰、見ヘタトテ打ツナカレ、皆来リ揃テ打ツヘシト、又或ハ川ヲ渡テ戦ハント云フ者アリ、其時官軍打方ヲ始レハ賊兵直チニ散乱ス、故ニ打方止メ令ヲ下セハ豈計ンヤ賊二十人計リ已ニ川ヲ渡テ岸下ニ潜居シ、突然出テ戦フ、因テ十五人ヲ斃シ一人ヲ俘ニス、我兵死傷合セ

テ二十三名（内士官壱名）、賊死傷大凡四十余人ナルヘシト云フ、
○午後水城逍遙ノ序、今暁斃ス所ノ賊南林寺墳墓ノ外ニ在リト聞キ、第一ノ哨兵線ヲ出テ、屍体ノ在ル所ニ至リ之ヲ点検スルニ其数十五、年齢十六七ヨリ二十五六位ナリ、皆銃創或ハ剣創ヲ受、醜体ヲ極メテ斃セリ、○各所ノ火尚未タ休マス、午後五時ノ頃ニ至リテハ上町旧福昌寺ノ辺最熾ンニ黒烟ヲ覆フ、○此夜一ノ砲声ヲ聞カス、

（五月）
全八日　晴

一本日初テ各所ノ火全ク滅ス、夜ニ入テ上町辺ノ残家ヲ焼ク、○此日砲声ヲ聞ク僅ニ二三発、

全九日　晴

一午前三時四十分賊ノ斥候数名、我北面ノ塁ヲ伺フテ出没ス、官軍射撃シテ悉ク之ヲ斃スト云フ、○此夜総督本営ヨリ賊徒自首者佐野邦富ヲ送付ス、

全十日　晴

一午前一時四十五分、城山ノ北ニ方リ砲声ヲ聞ク五六十発、二時ニ至リテ休ム、○此日鹿児島県第四課ヨリ右松（元警部一等）・木藤（元警部五等）・三浦（元警部六等）等ヲ交付ス、○午後十時頃又城山ニ於テ開戦、砲声終宵間断ナシ、

全十一日　晴

一午前第八時河野幹事（元老院幹事河野敏鎌）（兼養）・岸良大検事・大塚（正男）五等判事其他判事補二人、検事補二人来着シ、即日九州臨時裁判所出張所ヲ開ク、

全十二日　十三日異状ナシ

全十四日　曇夜ニ入而

一正午十二時官軍一大隊大斥候トシテ谷山（城ヲ距ル二里半、此所字涙橋ニ賊兵屯集云フト）ニ向テ進ミ、賊ノ巣窟ヲ突キ火ヲ放ツト雖トモ、賊兵已ニ跡ヲ隠シテ遁逃シ戦スシテ退ク、

全十五日　雨　異状ナシ、

全十六日　晴

一官軍瀧（たきのかみ）ノ上ノ火薬庫ヲ焼ク、兵士三人誤テ焼死、

全十七日　雨

一軍艦清輝号陸軍兵二中隊、海兵一小隊、巡査百余名ヲ載セ運輸船一艘之ニ属シ、午後一時当港ヲ発シ福山（城ヲ距ル海上八里、日向街道ノ一駅ナリ）ニ向テ馳セ、福山ノ湾ニ入ルヤ試ニ駅ノ中央ニ向テ一砲ヲ発スレハ、賊兵小銃ヲ放テ之ニ応ス、因テ又数砲ヲ発スルニ弾丸破裂シテ人家ヲ焼ク、火焔ノ起ルヲ見テ速ニ軽舸ヲ下シ、艦中一小隊ヲ残シテ他ハ皆上陸ス、賊兵抜刀之ヲ待一時支ヘ戦フト雖トモ勢

敵スル能ハス、終ニ左右ニ潰走ス、官軍モ亦之ヲ逐ハス、糧米百俵余、其他兵器等若干ヲ分捕シ、賊ノ兵糧蔵ヲ火シテ本艦ニ帰リ、汽管烟ヲ吹キ、火輪浪ヲ蹴テ還ル、此時兵火益熾ナリト云フ、○此日官軍傷者二人ノミ、賊ノ斃ル、者十五人、俘ニスル者五人、傷者未タ詳ナラス、

（五月）
仝十八日　晴

一午後三時過ヨリ、賊俄然武ノ岡ノ山上ヨリ我西田橋ノ塁ニ向テ大砲ヲ放ツ頻ナリ、官軍モ亦之ニ応シテ黄昏ニ至ル迄砲声間断ナシ、此日賊ノ破裂丸ノ為メ傷ヲ負フ官兵壱名ナリト云フ、

仝十九日　二十日　二十一日　異状ナシ、

仝二十二日　晴

一午前七時三十分、我第四旅団一中隊城ケ谷（城山ノ北ナリ）ヨリ進撃シ直チニ開戦、各所ノ砲台及ヒ軍艦ヨリモ頻リニ発砲シテ賊ヲ逐フ、賊終ニ冷水・岩崎・桂等ノ諸山ニ退キ胸壁ヲ守テ防戦ス、官軍兵少シテ賊塁ノ抜キ難キヲ虞テ退ク、正午十二時ニ至リテ休戦、○水城砲声ヲ聞テ又飛出シ、午前八時頃ヨリ十一時頃マテ城山ノ鐘撞堂ニ登テ見物スル内、官兵傷ヲ被リ戸板ニ載セテ行クモノ二人アリ、賊ノ死傷未詳、○此夜海軍楽隊大手門前ニ於テ楽ヲ奏ス、

仝二十三日　晴

一午前九時頃ヨリ賊上野原ノ山上（二本松ノアル辺）ヨリ県庁及ヒ参軍ノ営ヘ向ケテ大砲ヲ放ツ頻リナリ、弾丸庁ノ郭内ニ落ル数回、然レトモ幸ニシテ被傷者ナシ、

仝二十四日　晴

一午前三時頃官軍一大隊半、西田橋ヨリ進撃シ武村ノ賊塁ヲ襲フ、賊能ク防キ戦ヒ官軍利アラスシテ昧爽西田橋・高麗橋ニ引揚ケタリ、此時陸軍少佐永田某戦死ス、官軍死傷二十余名ト云フ、賊ノ死傷未詳、

六二　香川眞一佐伯戦報、附三好判事日向地方探偵書（従五月初旬至二十七日）

六二ノ一

一昨二十六日御届ノ末、佐伯屯集ノ賊ハ遂ニ三百人内外ニ及ヒ、事急ニ迫ルヲ以テ浅間艦ハ直ニ該地近海ニ廻艦シ端船ヲ以斥候兵ヲ陸揚セントスルノ際、賊ノ狙撃ニ逢ヒ死傷七八名有之、因テ本艦ヨリモ発砲一時海岸ノ賊ヲ退ケ候趣、其後彼等ハ市中ニ於テ金

銭其他ヲ掠奪シ、昨二十七日午前第十時頃ニハ復タ重岡駅ノ方ヘ引退候趣、何レ是等モ亦竹田ノ方ヘ可参コト相見込候、

一竹田追討之諸軍、賊要地ニ拠リ未タ掃攘ニ到ラス、玉來口ハ昨今休戦、今市口ハ本日休戦ノ趣ニ御座候、

右具陳仕候也、

明治十年五月廿八日　　大分県権令香川眞一

内務卿大久保利通殿

追而別紙六等判事三好退蔵、日向地方探偵書御参考ノ為メ進呈いたし候也、

六二ノニ

三好判事探偵書

書中○○ヲ付スルモノ地名ナリ

明治十年五月二十四日朝、豊後佐賀ノ関ヨリ小舟ヲ雇ヒ、翌二十五日午後九時頃日向国美々津（旧高鍋領ニシテ高鍋ヲ隔ルヒ里延岡ノ南八里ノ地位ニアリ、細島ヨリ三里南ノ海岸ニシテ良港ニアラサレトモ日本船千石積位ノ船ヲ出入スヘキ一港ナリ）ヘ着舟、仝所商人渡邊喜平ノ周旋ヲ以テ窃ニ上陸、喜平宅ノ土蔵二階ニ於テ、高鍋士族瀧澤弘（美々津小学ノ教員タリシモノニシテ退蔵ノ外甥ナリ、今募金ノ為メ該地出張セリ）ニ面会、該地方ノ景状聞キ得ル所左ノ如シ、

○五月初メ頃ヨリ（日ハ覚ヘス）薩人陸続日向地ニ入リ込ミ、宮崎（旧県庁ノアル所ナリ美々津ノ南十四里）ニ本営ヲ置キ、桐野利秋営中ニ在テ軍事一般ノ指揮ヲ為ス、兵士ハ薩人及ヒ日向士族、一旦熊本ノ戦ヲ経シモノ帰来シタルモノ多シ、其数詳カナラサレトモ凡ソ弐千人位ト云コト也、

○五月四日頃ヨリ浅間・孟春ノ二艦細島ヘ上陸、延岡ヨリ宮崎ヘノ通路ヲ絶チタルノ聞ヘアリ、俄ニ延岡地方ニ在リシ病院ヲ引揚ケ、患者ハ山手ノ間道ヲ護送シ、尽ク之ヲ高岡（旧鹿児島領ニシテ宮崎ヨリ四里程西南ニアリ）ノ病院本部ニ移シタリ、病院ヲ守ルノ兵凡ソ弐百名位ナリ、

○五月六日、七日頃ヨリ兵隊弐百三百位ツヽ、美々津ヲ経テ細島・延岡ヘ繰リ込ミタリ（細島以北ヘ出ルニハ必ス美々津ヲ経ザル可ラサルナリ）、其兵数詳ニスル能ハサレトモ、五月二十五日朝マテ美々津ヲ通過シタルモノ凡千弐三百ナルヘシ、

右ノ兵士ハ過半薩人ニシテ其他ハ日向ノ士族ナリ、其外他国ノ者加ハリ居リシヤ分ラス、

○五月中旬ヨリ（軍艦ヨリ延岡ヘ発砲シタル後ナリ）専ラ海岸ノ警備ヲ厳ニシ、細島ヨリ美々津迄ノ海岸要処ヘハ胸壁ヲ構ヘ番兵数名ヲ置ケリ、美々津以南宮崎マテノ間ハ港ト称スヘキ程ノ地ナキヲ以テ、都農（旧高鍋領ニシテ美々津ヨリ三里）・蚊口（旧高鍋領ナリ）・廣瀬（旧佐土原ノ海浜ナリ）・赤江（旧宮崎県庁ノ海岸ナリ）等ノ河口ヘハ必ラス番兵ヲ置ケリ、延

岡ノ海岸豊後境ハ更ニ厳重ナルヘシト雖トモ、細島ヨリ以北ノ模様ハ美々津ニテハ一切分ラス、

○細島・美々津ノ二港ハ殊ニ警備ヲ厳ニシ、昼夜出入ノ船舶ヲ査察シ、苟クモ疑似ニ渉ルモノハ出船ヲ差留ム、現ニ五月二十四日ノ夜マテ（退蔵カ着船ノ前夜ナリ）ハ美々津ヲ守ルモノ凡ソ三百名計ニシテ、港口ヨリ海浜所々ニ見張リヲ置キ、市中通路ノ口々ヲ守リ、市中人家ニ旅客ノ有無ヲ調査シ甚タ厳密ヲ極メシガ、二十五日朝ヨリ弐百数十名程延岡ヘ向ケ出発シ、現ニ（五月二十五日夜退蔵カ美々津ニ上陸セン夜ノコトナリ）美々津ニ在ル者ハ薩人四十名程、高鍋士族五十人余ナリ、兵員寡少ナルヲ以テ只時々市中及ヒ海岸ヲ巡邏スルノミナリ、

○兵士ハ戎服ヲ着スルモノアリ、平服ナルモノアリ、其様一定ナラス、勿論銃器弾薬ニハ乏シキト見ヘ、多クハ抜刀隊ナリ、袖印ハ白布ヲ用フ、

○日向地方ノ士族壮年ノ者ハ総テ兵ニ充テ既ニ編製シタル隊多シ、薩人多少必ラス其隊ニ加ハル、

○近日ニ至テ宮崎本営ヨリ令ヲ下シ、農商工ノ別ナク男児十八歳ヨリ四十歳マテノ壮兵ヲ募テ兵卒トナス、宮崎近傍ヨリ美々津マテハ既ニ之ヲ募リ終リ、今方サニ延岡一円ノ壮兵募集中ナリ、延岡募兵ニ出張シタルモノハ高鍋士族荻原恕平・田村吉克ノ両人ナリ、初メ荻原恕平ナルモノハ大義ヲ主張シ出兵不同意ノモノナリシヲ、本営ヨリ名指シテ以テ特ニ延岡募兵ノ事ヲ命シ、若シ命ヲ聞カサレハ直ニ捕縛スヘシトノ威力ヲ示サレ、遂ニ其命ニ従ヒ五月二十四日美々津ヲ発シテ延岡ニ入レリ、

○募兵・募金其他万般威力ヲ以テス、家ニ壮男アルモノ或ハ軍資金ヲ出シテ兵役ヲ免レンヲ乞フモノアレトモ皆允サス、必ス其人ヲシテ従軍セシム、金穀ハ必ス其地ノ士族輩ニ命シテ之ヲ募ラシム、各其家産ノ厚薄貧富ニ応シテ之ヲ課賦スルノ法ナリ、

○或ハ官軍ノ早ク来ランコトヲ望ミ、或ハ賊ノコトヲ誹議スルモノアレハ必ス縛シテ之ヲ責メ、甚シキハ之ヲ殺スモノアリ、高鍋士族秋月種世・黒水長慥初メヨリ出兵異論ノ党首ニシテ、其同意者数十人アリシカ宮崎ニ本営ヲ置キシヨリ頻リニ嫌疑ヲ受ケ、既ニ縛セラルヽノ勢アルコト数次ナリ、後遂ニ両人共ニ募金ノ世話掛ヲ命セラレ勢遂ニ已ムヲ得ス、只其命之レ従ヒ黽勉募金ノ事ニ従ヒ居レリ、是ヨリ先キ黒水長慥ハ屢郷里

ヲ脱スルノ策ヲ為シタレトモ、海陸ノ通路硬塞シテ遂ニ今日ノ危難ニ逢ヘリト云フ、

○右秋月・黒水等ノ党中横尾炳ト云フモノハ、窃ニ薩賊ノ暴挙ヲ謗議シタルコト洩レ聞ヘ、直ニ縛ニ就キタリ、延岡人（其族ヲ知ラス）某モ賊ノ忌諱ニ触レタルコトアリ、斬首セラレタリ、官軍ヨリノ探偵者三人延岡ニ於テ仝シク斬殺ニ逢ヘリ、

○前条ノ如クニシテ苟クモ事賊ノ忌嫌ニ触ルヽモノハ軽キハ制縛セラレ、重キハ斬ニ処セラル、故ヲ以テ人心恟々道路目ヲ以テス、人々互ニ疑懼恰モ薄氷ヲ踏ムカ如シ、

○宮崎本営ノ評決ハ料リ知リ難シト雖トモ、桐野利秋カ兼テ恃ム所ノ精兵数百（其数詳カナラス、百或ハ五百ナラン）ヲ幹軸ト為シ、日向士族其他ノ壮兵ヲ率ヒ大挙シテ豊後路ニ突出セントノ企テナリト云風評ナリ、

○桐野ハ五月二十五日ニ宮崎本営ヲ発シ、其日高鍋ニ一宿ストノ先触アリタリ、愈本営ヲ出発シタリヤ否ハ未タ分ラス（五月二十五日夜、半迄ノコトナリ）、且ツ高鍋ニ足ヲ留メ、尚為ス所アラント欲スルカ、直チニ都農・美々津ヲ経テ延岡ニ繰リ込ミ、長駆シテ豊後路ニ突出スル積ナリヤ、其意中知難シ、

○西郷ノ所在ハ日向ニテモ之ヲ知ルモノナシ、或ハ云フ今都ノ城ニアリ、兵ヲ勒シ鋭ヲ養ヒ村田其他ノ諸賊ト共ニ熊本ニ再出セント謀リタリト、桐野ハ愈宮崎本営ニ在ルニ相違ナシ、別府、逸見等ハ何レニアルヤ詳カナラス、

○日向口ノ参軍参謀ハ鮫島元（薩人ニシテ佐土原ノ区長タリシモノ）・坂田諸潔（高鍋士族ニシテ初メ福島士族二百五十人ヲ率ヒテ熊本城ヲ囲ミシモノナリ）其外壱人（飫肥士族ノ由ナレトモ姓名ヲ知ラス）ナリ、坂田諸潔最能ク日向ノ地勢人情ヲ熟知シ居、本営ノ画策ヲ主トリ高鍋士族秋月・黒水等ヲ困ムル如キ、皆坂田ノ策ニ出ルナリト云ヘリ（坂田ハ熊本ニテ傷ヲ負フタレトモ軽傷ニテ今治療中ナリ）

○富高（細島ノ山手一里許ノ所ニシテ区長所ノアリシ場所ナリ）ニ蓄ヘアリシ貢米三千石余賊等之レヲ掠奪セリ、

○病院本部ハ高岡ニ置キ、三田村・秋岡等ノ医員之ヲ担当ス、其外日向ノ旧藩下所々ニ支院ヲ置キ、其郷ノ人ハ必ス其地ノ支院ニ移シテ之ヲ療スルヲ常ネトス、此程高千穂口ニテ負傷シタルモノモ皆延岡・美々津ヲ経テ高岡ニ護送ス、

以上本月二十五日夜、日向国美々津ニ於テ瀧澤弘・渡辺喜平両人ヨリ聞キ得ル所ノモノニ係ル、勿論匆忙密誌ス

ルモノニシテ反覆丁寧スルヲ得ス、其誤謬ナキヲ保チ難シト雖トモ、細島以南ノ形状概ネ如此ナルベシト想像スルニ足ルモノアルヲ以テ、甚シキ差違ハアルマシト信ス、退蔵カ美々津ニ達シタルハ本月廿五日午後五時頃ナリシカ、昼間入港シ難キヲ以テ其沖ニ船ヲ駐メ、夜ニ入ルヲ待チ九時頃ニ至リ小舟ヲ港湾ニ繋キ、先ツ舟子ニ手簡ヲ付シ渡邊喜平（退蔵兼テ深ク相知ルモノナリ）ニ投ス、喜平直チニ船ニ至ル、其間凡ソ半時間ナリ、其舟ヲ港ニ繋クヤ土人両人（二度ニ来レリ）舟ニ就テ何レノ舟ナリヤ、何ノ用アリテ来リシヤヲ問フ、舟子答フルニ佐賀ノ関ノ漁船ニシテ飯米ヲ買ハン為メ入港シタリト答フ、土人大分県ノ景況如何ヲ問フ、舟子答フルニ異事ナキヲ以テス、土人其他ヲ究詰セスシテ去ル、其間退蔵ハ苫ヲ被ムリテ船底ニ俯伏シ息ヲ潜メ居レリ、舟子ノ上陸セシトキ市中ニテ巡邏兵両人ニ行キ逢ヒタレトモ誰何セサリシト云（蓋シ舟子ノ風俗土人ニ異ナルナケレハナリ）退蔵ハ喜平ニ誘ハレテ窃ニ上陸、其家ニ至ルマテ巡兵壱人ニモ逢ハス、遙カニ番兵所ノ台提燈ヲ提ケタルヲ望見シタルノミ、退蔵カ喜平ノ家ニ在リシトキハ別ニ異事ナカリシカ、外甥瀧澤弘ヲ窃ニ喜平ヲシテ招カシメタルトキ、弘ノ迹ヲ尾シテ来リシモノアリ、仍テ喜平ノ家属ヲシテ家ノ前後ニ瞭望ヲ為サシメ、緩急速カニ報知セシム、之レカ為メニ三人土蔵ノ楼上ニ在テ密話スルヲ得、窃ニ杯杓ヲ傾クルノ歓ヲ尽スヲ得タリ、此レ皆喜平周旋ノ然ラシムル所ナリキ、退蔵ノ志ス所ハ、姑ク該地ニ潜伏シテ深ク賊情ヲ探ラント欲スルニ在リト雖トモ、僅々数時間ノ密話モ尚如此心ヲ用ヒサル可ラス、人心ノ反覆計リ難ク危険不可言次第ニ付、渡邊喜平ノ促スニ任セ、再ヒ仝人ノ嚮導ニ従ヒ舟ニ帰リタリ、時既ニ二十六日午前三時過キナラント思ヘリ、ソレヨリ直チニ美々津ヲ発シ細島ノ沖ニ至ル頃ヒ天正サニ明ケ、風信殊ニ便ニシテ二十六日夕刻豊後国鶴見崎マテ来レリ、其夜蒲戸浦ニ汐掛リ、翌二十七日午前八時過佐賀ノ関ヘ帰航、此処ヨリ尚又海路ヲ取リ、午後三時頃大分県庁ニ達シ、香川権令及ヒ石井内務権大書記官ニ面会セリ、

○日向飫肥士族小倉處平ナル者ハ、薩ノ事アルヲ聞クヤ直チニ東京ヲ発シ京都ニ来リ、貴顕ノ内諭ヲ得テ日向ニ入リシハ二月下旬ノ事ナリシカ、其後何等ノ報知ナシ、故ヲ以テ人或ハ処平ヲ以テ賊ニ与ミセシト為シ、或ハ處平ノ深謀遠慮アルヲ保証スルモノアリ、然ルニ瀧澤弘ノ言ニ拠レハ、處平ハ現ニ一旦薩ニ赴キ、今ヤ

宮崎ノ本営ニ在リ、賊ノ為メニ周旋最モ力メ居ル由ナリ、

明治十年五月廿七日　　三好退蔵記ス

六三　石井省一郎佐伯戦報　附宮本市五郎探偵書及西村捨三竹田戦報

六三ノ一

過日一書拝呈仕候後、佐伯ニ出候賊、二十五日午後五時頃マテニ追々増加三百名計ニ及ヒ、市中口々ヲ始メ海岸ヲ守備仕、全夜中津久見（是ハ佐伯ヨリ大分ノ方四里余）ヘ張出シ、猶垣河内村ヘモ（是ハ当大分ヨリ六里余西南ニ当ル）四五十人程張出シ候旨、追々報告御座候間、甚懸念罷在候処、一昨二十六日ハ兼テ佐伯湾ヘ相廻リ候浅間艦モ佐賀ノ関ヘ帰リ候段相聞候ニ付、県官壱名差遣シ時情承リ候所、同日午前佐伯湾ヘ廻着、端船ニテ斥候為致候所、賊ノ伏兵ニ逢ヒ、十二人ノ内七人手負二名即死仕候ニ付、本艦ヨリ大砲発射一ト先佐賀ノ関ヘ引揚候趣ニ御座候段、艦長ヨリ承リ候、且清輝艦ニハ全日臼杵湾ヘ廻艦之処、賊勢猖獗之趣ニ付、是モ一ト先佐賀之関ヘ引揚ケ鹿児島ヘ相廻リ、川村参軍ヘ報告之上軍艦両三艘相廻リ候様いたすとの事ニテ、鹿児島表ヘ相廻申候、尤浅間艦賊ハ尚臼杵表ヘ進入モ難計ニ付、全所三海湾ヘ相廻リ呉候様及掛合、其外小倉表ヨリ昨日一小隊ノ兵着ニ付、不取敢守備仕候処、今朝ニ至リ俄然重岡駅ヘ（重岡ハ日向ヨリ竹田ヘ通セル当時賊ノ運路ナリ）引揚候段、別紙ノ通届出候、是ハ全ク竹田表ノ戦争追々切迫ニ付、道ヲ転シテ全所ノ応援ニ出候様推察仕候、若シ竹田ノ戦争緩ナリセハ臼杵ヲ衝キ、三重市辺ヘ出没シ、竹田ト連絡ノ手筈ニ可立到ト奉存候、扨昨日ハ三好六等判事日向路探偵ノ上当県マテ帰着（探偵書ハ県令ヨリ呈ス）、探偵ノ趣ニ因レハ、桐野利秋日向口ヨリ当地ヘ張出シ候手筈ノ様ニ御座候、右手筈ニ拘ハラス即今ノ如ク出没、民害ヲ為シ候ハヽ、実ニ県民ノ不幸ニ付キ、香川権令ヘモ申談、速ニ一旅団ノ兵ヲ差向ラレ、日向口攻撃線ヲ被相定候様総督府ヘ相迫リ置申候、既ニ佐伯ヘ張出シ候砌ハ、四国路ヘ航路纔ニ二十里内外ニ付、甚タ掛念仕、大早船ニテ愛媛県八幡浜、宇和島等ノ警察所ニモ相通シ候所、俄然路ヲ転シ候等、実ニ奔命ニ疲レ候様ノ次第ニ御座候ヘトモ、攻撃線相極リ要衝ヲ占メ、舒々打上ケ候ハヽ、当大分県ノ大幸不過之候事奉存候、其他異状モ無御座候得共、前件ノ次第上申旁寸楮如此御座候、最竹田戦況ハ西村子ヨリ上申ノ筈ニ付、別段不申上

候、匆々再拝、

五月廿八日午後四時　　於大分県庁
　　（内務権大書記官）
　　石井省一郎

内務卿
閣下

六三ノ二　上申

第四大区十一小区
中尾村平民
宮本市五郎

右之者臼杵ニ於テ雇入、本月二十六日四大区廿六小区佐伯村ヘ探偵トシテ差遣シ、仝二十七日午後十一時帰（ママ）阪ス、依テ該地ノ景況左ニ上申仕候、

一賊徒ハ昨二十七日午前十時頃重岡ヲ指シテ悉皆引揚ケタル由（是ハ市五郎確ト認メ候）、

一引揚ケタル賊徒ハ凡ソ三百名程ノ由、

一該地士族ハ壱名モ賊ニ応シタル者ナシトノ由（是ハ各遠路ニ避ケタル由）、

一佐伯村士族戸倉氏ノ土蔵二ツ打崩シタル由（是ハ裁判所ノ書類等入込ミ置タル由）、

一死体佐伯村ノ内字角石ノ外ニ壱人アリ（是ハ四大区二十七小区野田村ノ内字大越村平民姓名不詳）、

右之通上申仕候也、

十年五月廿八日　　佐伯警察署詰
　　四等巡査遠藤忠彦

第四課御中

六三ノ三　西村捨三竹田戦報

去ル二十二日警視隊大分県下ヘ繰込相成候際、石井権中（邦猷）警視モ来県ニ付、即日評決二十三日仝隊今市ヘ進行、小牟田（コムタ）・神堤（カツミ）・追分ケ等ヘ哨兵配置、田中ヘ一小隊分遣（別図有之）地方守備、且玉来在陣之陸軍（野津大佐引率ノ二大隊）ヘ照会、竟ニ二十五日神堤ヨリ両路進撃、竹田城外十丁内外ノ地ニ達シ、賊墨三ケ所ヲ乗リ取リ、迅速城下ヘ進入可相成之処、賊徒背後ヲ襲ヒ候勢ニ付、該地近傍字星子山ヘ打登リ築墨対戦、玉来ノ陸軍ヘ連通進取ノ議有之際、熊本本営ヨリ在小倉（保業）奥小佐ヘ豊後地新着ノ各兵隊指揮被命、二十五日夜今市着、二十六日戦地巡見、昨二十七日各方ノ官軍兵機進撃ノ事ニ決シ、警視隊モ未明ヨリ進撃候処、何分地勢険隘苦戦之趣ニテ星子山ノ墨ヘ午前十時比引揚（縮）候よし、玉来ノ陸軍ハ少シ戦線ヲ進メシ趣、大体賊勢退蹙スト雖

とも、相応ノ精兵モ加ハリ居リ、集散分合能ク応戦、目今之兵員戦略ニテハ早急陥落ハ無覚束被存申候、

一即今在豊後ノ官兵ハ在玉來ノ陸軍二大隊（野津大佐之ヲ指揮ス）警視隊九百名、遊撃隊一中隊（山口県下ノ近衛兵募集ノモノ）鎮台兵四中隊（奥少佐之ヲ指揮ス）ニテ其内先着ノ巡査二百名ハ大分庁下警察専任、中津ヨリノ一中隊ハ佐伯ヘ賊徒乱入ノ報モ有之、当分大分ニ在陣、遊撃一中隊ハ三重市守備ノ都合ニ配置相成有之候、賊兵ハ凡千五六百人（脅従兵トモ）乃至弐千人ニモ可有之哉、総長ハ三根崎半左衛門ト申者ノ由（曙）（二十七日午後三時玉来出張ノ官員帰県、本日陸軍一大隊熊本ヨリ全地ヘ着、追テ今一大隊着陣ノ由）

一管下諸旧藩士目下響応ノ景況ハ無之、其内中津ニハ少ク窺隙ノ徒有之、臼杵ハ賊徒進入ノ節ハ士族応分ノ防戦及候赤心ニテ、専ラ県庁ヘ保護ノ儀申出候ニ付、全所沖ヘ臨時浅間艦相廻リ候都合ニ有之、他之旧小藩ハ一向掛念ニ及ヒ不申勢ニ相見候、

一玉來陸軍ハ已ニ城外七八丁ノ場マテ相達居候得共、竹田ノ地勢タル肥豊巨嶽ノ間、岡陵起伏或ハ絶壁峭岸頗ル進取ニ難ナル由、

一竹田士族ハ凡五六百名賊ニ応シ、過半ハ脅従之徒ニテ、賊乱入ノ際不服ノ者ハ即席刺殺ス可シ、（三郎）規避ノ者ハ妻子ヲ斬戮スヘシ等申唱ヘ、凶暴威迫ヲ極メ候上、其編隊使用スルヤ新旧交互離背ヲ相防キ候由、士民一般頗ル厭悪いたし自首ノ者数十名有之申候、内部ヨリ被壊候ヘハ至極ノ都合ト帰順ノ路ヲ開キ折角誘導いたし居候、

一佐伯乱入ノ賊徒ハ多分延岡辺ノ者ニテ、銃器ハ十ノ一二ニテ昨日全所引掃、重岡ノ方ヘ参リ候内、或ハ竹田応援ノ為メ転陣セシ者ト被存候、

一昨二十七日三好六等判事日向ヨリ（探偵トシテ舟行ニテ美々津マテ参レリ）帰県、全所不容易ノ景況実見候事ニ付、直ニ山縣参軍（熊本マテ飛信十五時間ニテ相達ン、三好判事ハ午後四時頃帰県）ヘ報告、御手元ヘハ当県権令ヨリ以飛信上陳候筈、当地モ竹田ノ賊巣掃尽、日向境ニ守備ヲ置キ候ヨリ外急策無之為メ、竹田攻撃急ナリト雖トモ、何分天嶮ニ拠リ死守ノ賊徒、即今ノ兵員戦略ニテハ迅速掃蕩ノ期不相見、依テ山縣参軍ヘ此上至急出兵ノ儀照会致シ有之申候、

右上陳仕置候也、

十年五月二十八日　　西村権少書記官

大久保内務卿殿

石井権中警視ハ一昨二十六日熊本へ出立、石井権大書記官ハ総督府ヨリ豊後地戦状見聞ノ為メ被差越、去ル二十三日着県、暫ク滞在ノ都合ニ有之候、

新募警視隊頗ル不紀律ニ見受申候、先般来東京募集(ママ)査兵ノ向モ、予メ訓練方并ニ出先取締等厳密ノ規則無之テハ、不測ノ禍害ヲ蒙リ軍機ニ関スル事不尠ト被存申候、

六四　兵器弾薬等買入人取締愛媛県届

別紙愛媛県ヨリ届出候間、此段上申仕候也、

明治十年六月六日　　内務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

兵器弾薬等買入人ノ儀ニ付届

当県下伊豫国宇和郡八幡浜浦平民姉三郎弟中居豊藏ナル者、明治三年六月ノ頃私擅ニ本籍ヲ脱出シ、尓来鹿児島県下、日向国佐土原下田島ノ内福島村辺ニ流寓いたし居候趣ノ所、此頃仝県下佐土原賊徒ノ頼ヲ受ケ、県下宇和島及大洲地方ヘ弾薬等買込ノ為メ渡来いたし居候趣、兼テ為探偵日向地方ヘ差遣ノ巡査ヨリ報シ越シ候ニ付、百方捜索ヲ遂ケ候所、果シテ同人居合セ候ニ付、五月九日捕縛及取調候所、全ク相違モ無之、既ニ鉛弐拾貫目ノ余、大洲本町壱丁目和泉屋久三郎ノ周旋ニテ買込居候間、即チ現品ハ引揚置候、加之大分県下臼杵中津浦金清丸船主善吉ト申者モ同様賊ノ頼ヲ受ケ、日向国佐土原ニ於テ自分所持船ヘ椎茸積入、本年四月廿三日ノ頃仝所出帆、兵器弾薬等買込ノ為当瀬戸内回船致居候段、豊藏申立候ニ付、是亦精〻注意致居候ヘ共、善吉儀ハ大分県下ノ者ニ付、若仝県下ニテ右買入方等致候程モ難計ト存、不取敢仝県ヘハ其旨通知致置候、最豊藏儀ハ当時専ラ取調中ニ有之候、且仝人兄銕三郎モ右事件ニ付、聊嫌疑ノ筋モ有之候間、是亦所在精〻探偵中ニ有之候、此際行在所第十三号御達ノ趣も有之候間、此段不取敢御届仕候也、

明治十年五月卅一日　　愛媛県権令岩村高俊

内務卿大久保利通殿

六五　尾崎書記官鹿児島熊本出張日記

鹿児島及熊本ニ至ルノ報告

五月十三日東久世侍従長ト共ニ汽船テーホール号ニ駕シ午後七時神戸ヨリ発航、紀伊・土佐ノ峡ヲ過キ南洋ニ出テ日向沖ヲ経テ十五日午後第五時三十分鹿児島ニ投錨ス、仁禮海軍大佐（神戸ヨリ全船ス）先ツ上陸旅舎ヲ捜索セントス、第七時、小汽端艇迎トシテ来艦、東久世并従者一行与ニ上陸河村参事ノ本営ニ投ス、

是ヨリ先キ賊流言シテ曰ク、官軍大挙シテ至ル、鹿児島ヲ焦土ト為シ日向・大隅・薩摩三国ノ人民男女老幼ヲ問ハス悉ク之ヲ屠殺スヘシ、且小児ノ如キハ大ナル銕鉗ヲ以テ其首ヲ挾ミ斬ラントス、現ニ湾中繫泊スル所ノ軍艦銕鉗数千ヲ載ス云々、人民痴愚之ヲ信スル者多シ、「中央政府ノ何物タルヲ知ラシメサルノ弊一ニ此ニ至ル、慎マサルベケンヤ、他府県ニ於テ仮令斯ノ如キ妄説ヲ唱ヘ人民ヲ煽動セント欲スルモノアリトモ、容易ニ其逆意ヲ逞フスルコト能ハサルヘシ、其情真ニ憫察スルニ勝ヘタリ」老幼ヲ扶ケ家具什器ヲ荷担シ山野ニ遁匿シ畳席（席）障子ニ至ルマテ概ネ皆荷ヒ去ル、市街空虚寓居スヘキ家屋一モアルコト無シ、因テ参軍ノ本営ヲ以テ一時ノ旅亭ト為ス、本営ハ元ト小松帯刀ノ邸ナリ、城址及ヒ県庁ニ接近ス、翌日東納屋町呉服商藤安某ノ空宅ニ転ス、藤安ハ豪賈ニシテ家屋広大ナリ、家人其家具ヲ悉シテ遁走ス、唯後庭ノ一茶室幸ニ畳・建具ヲ遺ス、因テ寓居ト為ス、本営ヨリ夫卒ヲ付シ器具ヲ貸シ以テ爨炊セシム、

寓居ノ窓前小渠アリ、「此渠ヲ俊寛堀ト云フ、在昔僧都ノ鬼界ケ島ニ流ル、ヤ此所ヨリ発航スト云フ」、兵卒役夫其剰ス所ノ糧食諸物ヲ抛棄ス、積テ堆ヲ為ス、雨露ニ浸シ炎天ニ曝シ腐敗糜爛シテ臭気窓中ヲ突ク、蒼蠅之ニ生シ室中ニ充満ス、鼻口耳目ニ群集シ寸時手ヲ空フスレハ即満身蠅ニ因テ黒シ、夜間ハ蚤虱刺衝終夜眠ル能ハス、陣中ノ辛苦知ルヘシ、一行中熱病ヲ発セサル真ニ天幸ナリ、

市街ハ土民ノ影タニモ見ス、唯官軍充塞スルノミ、是ヲ以テ鹿児島ニ至ルトイヘトモ其風俗ヲ視察スルニ由シナシ、惟山水風光ヲ眺望スルノミ、土民若シ誤テ官軍ノ兵卒ト交接談話シ、若クハ県官ノ救恤ヲ受クル者アレハ賊忽チ之ヲ殺シ、其害親戚ニ及フト云、其惨酷言フニ忍ヒス、故ヲ以テ人民帰順ノ志アリトイヘトモ、敢テ発セス、県官モ亦其本職ニ従事スルニ由ナシ、

今県令岩村通俊、属官百余名ト五月二日ヲ以テ鹿児島ニ至リ、旧属官ヲ呼出シ、今日マテノ成リ行キヲ推問スル

ニ皆知ラスト答フ、今三日旧知事島津父子櫻島ニ避ク、四日人民悉ク負担シテ遁走、旧属官モ亦皆去テ賊ニ付ク、依然トシテ県庁ニ残ル者僅カニ三人ト云、

人民遁走ノ後、県官皆県庁ニ止宿シ陸軍ヨリ鍋釜ヲ借リ官員自ラ炊食ス、県令以下家族ヲ携帯スル者庁内ノ一隅ニ雑居ス、巡査ハ悉ク去テ賊ト為ル、県官・警部等交番シテ毎夜巡邏ノ役ヲ取ルト云、其困難思フヘシ、

旧知事島津父子（久光・忠義）ノ難ヲ櫻島ニ避クルヤ、旧藩士守衛ト称シ共ニ櫻島ニ至ル者多ク、且人民ノ此ニ逃走スル者ト島中士民麕集雑沓言フヘカラス、或ハ一ノ衛門ヲ設ケ高標ヲ掲示シテ御守衛人員取扱所ト題スト云、

旧知事ノ守衛ト称シ櫻島ニ至ルモノヲ分析スルニ二種アリ、其一ハ旧門閥家ニシテ真ニ旧知事ヲ懐ヒ島津家ト利害ヲ与ニセント欲スルモノナリ、其一ハ島津家ヲ懐フニモアラス、又西郷ニモ党セス、然レトモ今日ノ事ヲ坐視傍観スレハ或ハ郷党ヨリ卑怯憶病者ト晒ハレン、又ハ強迫ニ逢モ計リカタシ、是ヲ以テ名ヲ御守衛ニ托シテ難ヲ逃ルヽノミト云フ、

翌十六日（五月）官軍ノ哨兵線ヲ巡視ス、先ツ県庁ノ門前ヨリ広馬場ニ出ツ、右ハ琉球館左ハ旧城址ナリ、城ハ先年悉ク焼失、其右傍ニ二ノ丸アリ、県庁ノ背後ニ連リ一ノ堂宇依然トシテ存ス、是レ島津従二位ノ嘗テ住スル所ト云フ、旧城ノ左傍ハ私学校ナリ、西郷隆盛ノ壮士ヲ養フ所、其前面ノ馬場ニ於テ練兵セシト云、校ノ大サ約スルニ長サ二十間、横七八間、四壁空虚、建築至テ粗ナリ、斯ノ如キ学校鹿児島県下各所ニ散在シ、皆壮士ヲ集メ武ヲ練シ兵ヲ習練セシト云、即今日ノ反逆ヲ醸成セシ所ナリ、

琉球館ノ前ヨリ私学校ノ北ニ接近シテ哨兵線アリ、土塁ヲ築キ胸壁ト為シ番兵ヲ置ク、私学校ヲ通過シテ胸壁ノ下ニ至ル壁間ヨリ遙カニ敵ヲ眺ム、哨兵指示シテ曰ク、昨夜暗黒ニ乗シ向ヒノ山腹ヨリ賊数百、彼ノ山路ヲ迂回シ此村落ヲ通過シテ我カ胸壁ヲ襲撃セントス、我レ之ヲ覚リ大砲数発、賊恐怖且小銃ヲ乱射シテ遁走ス、昨夜ノ砲声即チ是ナリ云々、

夫ヨリ哨兵線ニ沿フテ城山ニ登ル、鹿児島ノ地形タル東ハ海岸ニ接シ、海中数箇ノ砲台アリ、砲台ノ用ヲ為サス、波堤ト為ル、時ニ湾中碇泊スル船艦ハ筑波艦・日進艦・清輝艦・龍驤艦・春日艦・テーボール・光運丸・難波丸・敦賀丸・廣島丸・高雄丸等ナリ、岸ヲ距ルコト一里ニシテ櫻島海中ニ突起ス、高サ一里、形象摺鉢ヲ倒置スルカ如

シ、是レ火山ナリ、絶頂突兀トシテ草木ナシ、七合以下樹木鬱蒼、山足斜ニ海中ニ入ル、風光頗ル佳ナリ、北西ハ連山弓月ノ形ヲ為シ、鹿児城ヲ包含スルカ如ク、天然ノ城壁ヲ為ス、其一ヲ名テ城山ト云フ、山太タ高カラスト雖トモ其嶮峭ナル馬牛通セス、人並ヒ行ク能ハス、蓋シ其名ニ背カスト云フヘシ、西南ハ甲突川ヲ以テ天然ノ渠濠ト為ス、石橋数箇ヲ架ス、「俗間所謂眼鏡橋ナリ、此工技早ク既ニ鹿児島ニ輸入ス」其最下ナルヲ武ノ橋ト云、次ヲ高麗橋、次ヲ西田橋、次ヲ新上橋ト云、西田橋ハ最モ賊ノ要衝ニ当ルヲ以テ賊屢此ニ攻撃ス、官軍ノ哨兵線ハ、城山ノ左背ノ山上ヨリ城山ノ山脈ニ沿ヒ屈曲羊腸蜿蟺高低シテ新上橋ニ至リ、折レテ南東ニ向ヒ甲突川ニ沿ヒ洲ニ至ル、皆上苞ヲ以テ畧ト為シ哨兵ヲ置キ之ヲ守ル、線ノ長サ大約二里余、山上ヨリ遙ニ谷ヲ隔テ、又連山アリ、賊之ニ拠リ砲台ヲ築キ時々我胸壁ヲ的ニシテ発砲ス、我亦之ニ応ス、故ニ処々昼夜砲声絶ヘス、或ハ寓居ノ比隣ヘ砲丸ノ飛来スルアリ、然レトモ八日ノ進撃以来相対峙シテ防禦スルノミ、

線外士民ノ邸宅悉ク賊ヨリ焼払フ、新昌(新照院)辺線内モ多ク焼失ス、然レトモ鹿児島中央士民ノ邸宅ハ皆全シ、富豪ノ商、門閥ノ士多ク此内ニアリ、今此区域兵燹ヲ遁ル、蓋シ不幸中ノ幸ナリ、

(五月)十七日、賊千余、福山ニ来リ糧米ヲ取ルトノ報アリ、福山ハ鹿児島ノ東北十里ノ海岸ニアリ、官軍即軍艦ヲ遣ハシ之ヲ攻撃ス、時正ニ大雨盆ヲ傾ク、軍艦至レハ賊将ニ米庫ヲ開キ運搬セントスルノ時ナリ、即大砲数門ヲ連発ス、賊狼狽岩石ヲ攀リ遁走ス、二十人ヲ斃シ六人ヲ擒ニシテ帰ル、米数千苞倉中ニ満ツ、時大雨殆ント咫尺ヲ弁セス、道路泥滑運搬甚タ難シ、賊ノ復タ襲来センコトヲ恐ル、漸ク白米二十五苞ヲ獲、余ハ悉ク焼テ帰ル、

翌日俘虜ヲ放チ帰サント欲ス、慰諭シテ各本土ニ還ラシム、虜曰ク、願クハ官軍ノ陳中ニ止マラン、如何ナル賤役トイヘトモ肯テ辞セス、復タ賊中ニ陥ラハ或ハ疑ヲ受ケ屠殺セラレン、然ラスンハ又苦使セラレント、是ヲ以テ見レハ近日鹿児島ニ輻輳スル賊兵五六千、其大半ハ脅迫ニ因テ従軍スルノミ、其情誠ニ憫諒スヘシ、人吉ヨリ鹿児島ニ帰ルノ賊三千ニ満タスト云、其余ハ皆近日脅迫募集スル所ナリ、我兵モ亦六千余、其数相敵ス、守ルニ余リアリテ進ムニ足ラス、惟哨兵線ヲ守リ輒ク進撃セス、十九日氣船広島丸ニ駕シ午前第十一時三十分鹿児島ヲ発

航ス、

二十日午前第一時長崎ニ着ス、同午後第一時小瀬船ヲテント丸ニ駕シ長崎ヲ発シ、翌二十一日午前一時過肥後国百貫ニ着ス、此所遠浅端艇二里余ニシテ白川ノ川口ニ達ス、上陸小島ヲ経テ陸行三里ニシテ熊本ニ達ス、

熊本市街七八分ハ兵燹ニ罹リ焦土ト為ル、一望惟瓦礫ノ堆ヲ見ルノミ、賊退散ノ後人民追〻山野ヨリ帰着ストイヘトモ、住居スヘキ家屋ナシ、或ハ竹ヲ束ネ縄ヲ結ヒ漸ク雨露ヲ凌クノ茅舎瓦礫中ニ星羅ス、或ハ無告ノ究民兵難ヲ蒙リ飢餓ニ迫マル者ハ、内務省派出ノ官員之ヲ救恤シ且之ヲ役シテ道路ヲ修繕セシム、良策ト云ヘシ、

総督宮ハ県庁ノ傍ナル学校教師館ヲ以テ本営ト為ス、山縣参軍ハ其隣館ヲ以テ本営ト為ス、参謀官以下皆之ニ属ス、戦地及京師ヨリノ飛報櫛歯ノ如ク軍陳ノ繁劇ヲ覚フ、

其隣館ハ即県庁ナリ、其向ヒニ裁判所アリ、細川旧知事ハ其墓所妙解寺ニ在リ、市街官軍充塞、輜重部ノ夫卒西東ニ奔走、姦商機ニ投シ物品ヲ非常ノ高価ニ販キ以テ利ヲ射ルモノアリ、夫卒ノ日雇賃モ亦常ニ陪徒ス、兵燹ノ情形憫ムヘシト雖トモ、中等以下ノ人民ハ概ネ非常ノ富ヲ致ス、久留米・福岡等ノ如キハ兵災ヲ被ラス独其利潤ヲ得ル、真ニ僥倖ト云フヘシ、俗間伝ヘ云フ、三年ハ拱手シテ餓(セ脱カ)スト、是レ貧民ノ常ニ乱ヲ好ム所以ナリ、川路少将ハ先キニ出水ニ進ミ、其一手ハ既ニ阿久根(鹿児島ヨリ一八里)ニ進ムト雖トモ、賊ト戦ヒ利アラス退テ水俣ヲ守ル、山田少将ハ八代ニ在リ、三浦少将ハ佐敷、野津少将ハ矢部ニ在リ、諸道兵ヲ進メテ人吉ニ迫ル、山田・三浦ノ手ハ中村吉村等ヲ攻取リ既ニ人吉ノ五里以内ニ進ム、野津ノ手ハ賊ノ豊後路ニ出ル者ヲ撃ツ、西郷隆盛・桐野利秋等現ニ人吉ニ在テ賊軍ヲ督スト云、

賊ノ一手ハ豊後路ニ出テ岡城ニ拠ル、官軍二大隊ヲ遣シ之ヲ攻ムトイヘトモ未タ抜ク能ハス、更ニ野津大佐ヲ遣ハシ援兵ヲ将(得)テ益〻之ヲ攻撃ス、且三田井ヲ取リ益進ンテ賊ノ連絡ヲ絶ントス、岡城ノ賊ハ薩人五六百、中川(津)ノ旧藩士加ル者多シ、未タ其数ヲ詳ニセス、

初メ山田少将ノ川尻川ヲ渡ルヤ、其川口ノ渡川場ニ舟数艘ヲ浮ヘ頻リニ渡ラントス、賊川向ニ砲台ヲ築キ之ヲ禦キ小銃ヲ乱射ス、終ニ進ミ得ス、其夜又一面大ニ進撃シテ川ヲ渡ラントスルノ状ヲ為ス、賊益〻兵ヲ増シ之ヲ防禦ス、又一面暗黒ニ乗シ兵卒ヲシテ川船数百ヲ荷担シ、陸行一里ニシテ川ノ上流ニ之ヲ架シ、船橋ヲ造リ従容ト

シテ渡ル、賊ハ尚川口ノ渡川場ニ在テ専ラ防守ノ術ヲ尽ス、且此所船ナキヲ以テ哨兵タニモ置カス、官軍無人ノ地ヲ行クカ如ク、翌朝賊大ニ狼狽終ニ以テ熊本城ニ連絡スルヲ得ル、其功多ニ居ルト云フ、熊本人大ニ其謀略ヲ称ス、熊本県士ノ賊ニ応スル者六七千ト云、就中池邊吉十郎・上田休・宮崎八郎等其魁タリ、池邊ハ兼テ賊魁西郷等ト通シ、西郷ヲ促シ屢迫テ兵ヲ出サント乞フ、且曰、西郷ニシテ一タヒ足ヲ挙ケハ天下響応セン、肥後一円ハ必ス簞食壺漿シテ義兵ヲ迎ヘンコトハ保証スヘシ、肥後堺ニ至ラハ既ニ宿割ヲ定メテ之ヲ俟ツ云々、西郷水俣ニ至ルノ日、宿割ハサテ置キ人民皆遁走、案ニ相違シテ賊軍大ニ困却スト、八代ニ至ル猶斯ノ如シ、西郷初メテ池邊ノ虚喝ヲ知リ大ニ之ヲ悔ユ、漸ク川尻ニ至リ池邊初メテ軍門ニ至ル、西郷終ニ面接セスト云フ、其後池邊ニ党スルモノ三千人、又上田休ハ士族二千人ヲ集メ鎮撫隊ト号シ、其名ハ官軍ニモ従ハス賊ニモ付カス専ラ人民ヲ鎮撫スルノミト、然レトモ其実ハ陰ニ賊ヲ助ケ、且専殺ノ罪アルヲ以テ現ニ拘留セラル、宮崎八郎ハ嘗テ東京ニ寓シ仕官ノ望ミアレトモ終ニ志ヲ得ス、後民権ヲ主張シ、湖海新報ノ記者ト為リ頻リニ官吏ヲ詈リ、一タヒ拘留セラレタルコトアリシ、其後帰県、猶民権ヲ唱ヘ、兎角県治ヲ妨害シ、区戸長ヲ煽動シ夫カ為メニ人民蜂起スルモノ二万人、鹿児島ノ賊起ルヤ否、公然之ニ荷担シ仝志ヲ募ル、仝志会スル者終ニ三百人、口ニハ民権ヲ唱フトイヘトモ其所業ハ全ク盗賊ナリ、或ハ豪家ニ押入リ、金穀ヲ掠奪シ婦女ヲ姦シ、官吏ノ妻女ト見レバ必其至ル所ヲ極メ、携帯スル所ノ金銭衣服ニ至ルマテ悉ク褫奪シ、甚シ者ハ（キ脱カ）数日陣営中ニ拘留シ、言フヘカラサル汚穢ノ醜罪ヲ犯シタル者アリ、熊本県下ニ於テ最モ惨毒ヲ檀ニシ悪逆ヲ逞フシタルモノハ此民権党ナリト云フ、今現ニ池邊并ニ其党類ト共ニ、人吉ニ在リト云、「余初ヨリ士族ノ民権ヲ唱フル者ヲ信セス、」

二十七日（五月）木戸従三位ノ凶訃至ル、

熊本滞留中面接スル人名左ノ如シ、

総督宮　山縣参軍

佐野議官　林内務少輔

品川内務大書記官吉原大蔵大書記官

富岡権令　北垣大書記官

小澤大佐　静間中佐

神領大尉　米田侍従番長

戸田元老院書記官南部判事
近野判事　細川従四位
大田黒惟喬　下津休也
江口　某　下津　某
鬼塚通理

(五月)二十八日熊本ヲ発シ陸行植木・向ヒ坂・田原坂・木ノ葉・高瀬等ノ戦地ヲ巡視シ長洲ニ至ル、就中田原坂ノ険ハ賊ノ拠テ以テ官軍ヲ扼シ官軍最モ苦戦セシ所ニシテ、衆人ノ熟知スル所ナリ、所在樹木皆弾丸ニ依テ枯赭、四方ヨリ乱射スル銃丸樹皮ヲ爬却シ、或ハ径リ数尺ノ大幹数寸ノ細キニ至リ中間ヨリ挫折スルモノアリ、其劇戦以テ見ルヘシ、

長洲ニ一泊、二十九日漁船ヲ僦ヒ諫早ニ渡ラント欲ス、逆風ニ依テ果サス、漸ク多比良ニ至ル、夫ヨリ陸行五里、三軒屋(肥前島原ノ街道ナリ)ニ一泊ス、三十日陸行十里、長崎ニ着ス、六月一日瀛船名古屋丸ニ駕シ、午後六時三十分長崎発港、馬関ヲ経テ三日午前七時四十分神戸ニ着ス、

右此度鹿児島并ニ熊本ヘ被差遣候ニ付、該地ニ於テ見聞ノマヽ書記仕候ニ付、誤聞モ可有之候得共、大体ニ於テハ大ナル齟齬ハ無之ト存候、尤各地滞留ノ日マテノ事情ヲ書記いたし候ニ付、出立ノ後已ニ数日ヲ経候ハヽ、既往ノ旧物ニ属シ候事件モ多ク可有之候へとも、唯御参照ノ一端トモ可相成候ト其儘呈上仕候也、

明治十年六月三日
(太政官)大書記官　尾崎三郎(三良)敬白

内閣諸公閣下

六六　品川書記官萩地騒擾報知

別紙概略貴覧ニ供ス、

十年六月六日
内務大書記官　品川彌次郎

内務卿大久保利通殿

明治十年五月三十日午前第八時萩警察出張所詰警部能一述利ヨリ一等巡査松田二郎ヲシテ県庁ニ来リ報セシム、其略云ク、昨二十九日夜半石野某(姓名不詳)ト称シ警部山本信三居所ニ来リ告ケテ曰ク、一両日来此地変動ノ兆アリ、人員ノ多寡ハ余未タ知ル能ハスト雖トモ往々嘯集、先ツ該地警察署及ヒ大区扱所等ヲ襲撃シ、遂ニ山口県庁ヲ放火

シ兵ヲ挙クルノ策既ニ熟セリ、余モ已ムヲ得ス同意セシカ如今遁レント欲シテ得ス、因テ密ニ顚末ヲ訴ル如此ト云フ、渠云フ所信偽詳カナラスト雖トモ、不取敢此旨具申ス（二郎言）、於是県令・大書記官各戒心アリ密ニ警備ヲ為ス、已ニシテ区長桂路祐ヨリ戸長白倉夾輔カ報状具申ス、云フ昨夜八時、越ケ浜ヨリ松本河原龍造寺ヲ過キ、目代（メンロ）ヲ経川上盛ニ溯ル者アリ、刀ヲ抜クモノアリ、携フル者アリ、間〻亦銃ヲ担フ者アリ、前隊後隊各二十人許、暗ヲ衝キ急行セリト聞ク、是蓋シ該地及ヒ須佐ノ兇類ナルヘシ云〻、此時ニ当リ山口分営ニハ一兵ナク、巡査ノ山口ニ在ル者モ八十人ニ超ヘス、而シテ各見張所其他ニ散在シ、現在ノ者六十名以内トス、賊情測ラレス衆心恟〻タリ、即チ電報ヲ以テ巡査ノ馬関ニ在ルモノ二十名ヲ召集シ、及ヒ臨機ノ処分ヲ以テ現在ノ巡査ニ銃剣ヲ（陸軍貯在密議）不虞ニ備ヘ県庁ヲ護衛セシメ、且細作ヲ発シテ萩・山口間ノ諸路線ニ出シ、備具ノ処分粗成テ天漸ク明タリ、

三十一日午前六時、萩詰四等巡査飯尾仙太郎夜ヲ冒シテ潜行、来リ報シテ云ク、昨日兇魁町田梅之進外四名不良ノ確証アルニ付、捜索捕縛し将ニ其余ニ及ハントスルノ際兇徒来襲ノ警報アリ、幾モナク数十ノ賊、警察出張所ニ小銃ヲ放発ス、気焔頗ル熾ナリ、警部以下寡勢防ク可カラサルヲ知リ、暫ク其線ヲ避ケ各〻散走、不肖モ亦走テ御許町ニ至リ、頭ヲ回シテ右ヲ望メハ烟焔雲ヲ烘スヲ見ル、即チ賊ノ出張所ニ火スルヲ知ルナリ、警部以下相離レ勢ヒ集合拾収ス可カラサルヲ知リ、已ムヲ得ス帰庁シ萩地ノ形勢ヲ報申スト云〻、於是乎兇徒ノ叛状始メテ顕然タルヲ以テ、直ニ出兵ヲ馬関出張陸軍ニ依頼シ、伍組編成ノ巡査中ニ就キ、十五人ヲ抜キ、警部高橋英一・大森勝英ニ属シ斥候トシテ一ノ坂ヲ踰ヘ、佐々並口ニ向ハシム、本日正午賊進テ明木ニ入リ、瀧口某ノ宅ニ火シ遂ニ来テ佐々並駅ニ拠ル、賊ノ数凡二百名計リナリトノ報アリ、午後二時林少検事巡査四十名ヲ率ヒテ而シテ発ス、巡査十名ヲ一組トシ、八等属富田國輔・仝秋良貞臣・九等警部宮原貞亮・十等属山田喜三分ツテ之カ長タリ、衆皆銃ヲ担ヒ剣ヲ携ヘ臨機ノ処分ヲ為スヲ許ス、又之レヲ分チ別道八丁越ニ向ヒ宮野ヲ守ラシム、時ニ山口砲兵所製造ノ弾薬現ニ五十万発アリ、陸軍営所ニモ又銃器数百箇アリ、苟モ賊ヲシテ機ニ乗シ志ヲ得セシメハ、敢テ県庁ヲ焼キ、敢テ官吏ヲ苦シメ、銃器弾薬ヲ擁シ山口ノ市街ヲ横行シ、傲然自得掠略イタラサル所ナカラン、其

人民ニ禍スル浅勘ニ非サルナリ、幸ニシテ備虞ノ処分早ク定リ、巡査一ノ坂ニ向ヒ、且官吏ノ強壮ナル者ヲ選ヒ百名ヲ得、分テ四組トナシ県庁内外ヲ警邏セシムルヲ以テ衆情稍安シ、

本日午後高橋・大森報状至ル、云フ、本日午後進ンテ佐々並ニ入、短兵急撃ス、賊魁町田等数人敗走、余賊百余名奥大下村（笹波ヲ距ル十五六丁）ニアリ、信偽（真）判スヘカラスト雖トモ、寡兵軽進スヘカラス、且タ持重退テ板橋ニ拠ル、速ニ応援アランコトヲ乞フ、

林検事モ亦夏木原ヨリ書ヲ県令ニ寄セテ云フ、前伍捷ヲ報スルニ付、木町ニ在ル一組ヲ前進セシム、請フ宮野ニ在ル者モ亦来会スル様達セラレヨ、八丁越ノ岐已ニ我カ有トナル、余モ亦進ンテ佐々並ニ入ラントス云々、

六月一日陸軍一中隊馬関ヨリ来リ、直ニ進ンテ佐々並ニ向、本日午前五時林検事諸組ノ巡査ヲ率ヒ進テ佐々並駅ヲ襲撃ス、賊数十人力支フル能ハス、塁ヲ棄テ遁ル、巡査佐々並ニ入、スナイトル銃九挺ヲ獲タリ、斥候ヲ出シテ新古両道ヲ守ル、

午前巡査二十五名先ツ進ミ、古戦場村ノ岐路ニ拠リ要所ヲ占メテ之ヲ守ル、十一時三十分賊挙衆来リ迫ル、小銃一発短兵相接ス、巡査頗ル阻ム色アリ、長秋良・山田衆ヲ励マシ之ニ当ル、

賊魁町田梅之進刀ヲ提テ猪突ス、曰ク我姓名ヲ知ラサルヤト、長秋良十歩ノ間ニ於テ、ヒストルヲ以テ狙撃ス、其右顴ヲ洞シテ之ヲ斃ス、彼生ク可カラサルヲ知リ刀ヲ握ツテ自尽ス、首ヲ庁下ニ致ス、梅兇暴無頼、而性極メテ残忍殺ヲ好ム、此ニ因テ罪ヲ得、禁錮十年客冬ノ役賊ニ与ミスルノ罪ヲ以テ、又禁錮十年刑ニ処セラル、此役遂ニ此ニ及フ、衆皆之ヲ快トシ、其肉ヲ啖ハント欲スル者アル、巨魁既ニ斃ル、余賊潰走、巡査進入無人ノ地ヲ行クカ如シ、梓坂ノ絶険守ル能ハス、椿街ノ大橋扼スル能ハサルナリ、沿道捕獲数賊アリ、尓後罷出、擒縛、六月四日ニ至ツテ已ニ七十余賊アリ、囚獄容ル、能ハスト云フ、

六七　愛媛県上申、避乱処置方

大分県避乱ノ人民処置ノ儀ニ付上申

大分県下豊後国各地方ヘ賊乱入、到ル所豪戸ヲ剝キ区戸長士族ヲ残害スル尤モ惨酷ヲ極ム、依テ仝国佐伯臼杵ノ

士民、陸続当管内ニ落来リ、固ヨリ乱ヲ避クルノ流民ニシテ目下ノ糊口ニ困却スル者モ有之時ハ、臨機救助向取計置、彼地ノ景況ヲ視察セシメ、徐々帰県為致候積ニ御座候条、不取敢此段上申仕候也、

明治十年六月六日　　愛媛県権令岩村高俊

内務卿大久保利通殿

六八　広島県上申、管下取締方

管下取締方ノ儀上申

管下津々浦々取締方法可届出旨本月五日午後第四時発電信ヲ以テ御達相成、既ニ概略上申仕置候通、先般取締一層厳重可致御達ニ応シ、定員ノ外臨時巡査百四十名召募夫々警備相設ケ、然ルニ管下之儀ハ離島所々ニ散在シ、一時入津之場所モ不少、尾道・鞆津・三原・御手洗・竹原等ハ既ニ警察署分署設置有之候ヘ共、尤出入雑沓ノ地景ニ付、夫々巡査ヲ増加シ、其他大崎島・東野村・内海・宮原・広村・能美島・瀬戸町・草津・厳島・玖波等都合十ケ所ニ於テモ人津船舶厳密取調為致置候、就中庁下ノ儀ハ海陸輻輳ノ土地ニ付、新規分署相設ケ、其外京橋・元安・本川等ノ三川ヘ、出入船舶改所五ケ所仮設シ厳重取調着手為致置候、頃日鞆津港ニ於テ鉛買入候者発覚シ、即今連累并牙保等取糺中ニ有之、右ハ作洲津山ノ士族ニテ安田熊吉ト申者、現今鹿児島ニ寄留いたし居候趣ニ相聞候ニ付、尚取糺ノ上追テ顚末具申可致候ヘとも、此段併テ上申仕候、以上、

明治十年六月七日　　広島県令藤井勉三

内務卿大久保利通殿

六九　古荘判事竹田戦報

古荘七等判事ノ手翰写

謹啓、先日寸書録上ノ後六月六日夕刻、竹田近傍ニ在リシ第二旅団ノ参謀部野津大佐初メ戸次（へつぎ）ニ来ル、将校悉ク爰ニ聚マレリ、翌七日千四百余ノ惣勢ヲ臼杵ヘ通スル白山越・再進越・白木越・芳野越ノ諸道ヘ配布セリ、八日早朝諸道ヨリ臼杵ヘ進撃、芳野越シハ能ク進テ、臼杵城ニ接近セル水ケ城ト唱フル山ヲ乗リ取リ、殆ント城下ヘ迫マレリ、其他諸道ノ官兵モ夕刻マテニハ諸峠ヲ越シ、

城下ヨリ一里手前ナル末広村ヘ達シ、爰ニ宿陣ス、九日午前十字頃ヨリ白山越、再進越ノ裾野ヘ当リ諏訪山アリ、賊之ニ拠ルヲ以テ末広ニ次スル官兵ヲ攻撃シ遂ニ午后三時頃賊ヲ諏訪山ヨリ追ヒ落セリ、亦水ケ城ニ在ル官兵モ進ンテ賊ヲ攻撃シ、海上ヨリハ三艘ノ軍艦大砲ヲ以テ劇発セシニ依リ賊敗走、臼杵ノ城ヘ拠ル、故ニ官軍城ヘ対シ陣ヲ張ル、十日昧爽我カ軍、城ノ西ヘ聳ヘタル山上ヨリ急ニ城ヲ攻撃セシヲ以テ賊城ヲ保ツ能ハス、佐伯道ヲ指テ敗走セリ、此勢ニテハ豊後ハ不日平定ニ帰スヘシ、何レモ右マテ上申仕候、匆々、以上、

六月十一日　　七等判事古荘嘉門

大久保内務卿殿

七〇　岸良検事ヨリ大山綱良審糾云々及薩地戦状報知

七〇ノ一　岸良大検事ノ手簡写

益御清穆可被為成御起居奉恐賀候、扨当地別段相替儀無之、熊本ヨリ護送ノ賊徒取調中ニ御座候、然ル処大分県ニ於テ暴徒六百名捕縛ニ付、至急裁判官出張ノ儀、大分県令ヨリ申立相成候由ニテ、総督ヨリ御達ニ相成、彼地暴徒ハ直様御処分可相分(成カ)見込ニテ、当所本局事務ハ下官引受、河野以下数名彼地ヘ出張相決、其段総督府ヘ申上候処、大山綱良審糾ニ付テハ宮モ御親聴相成度ニ付、当地ヘ御出張可相成、就テハ河野ノ不在ニテハ不都合ニ可有之段御内達有之、其故河野大分県出張先見合申候、彼地ヘハ不取敢熊本県出張之検事ヲ指出申候、大山モ今夜着港可致ト存候、鹿児島ヨリ別紙今日相達候付差上申候、自然早御承知ノ御事ト被存候ヘトモ、先般差上候続ニ有之候間、此段御承知被下度奉存候、大山取調向ノ次第ハ追々ニ申上候様可仕候、先ハ御伺旁匆々謹言、

六月十二日　　兼養(岸良)

大久保様

追伸、別紙鋏道架設一件、既ニ御耳ニ入候儀ニモ可有之、下官東京出発ノ節、司法省八等属高知県人高見保益ナル者ヨリ、今般着坂ノ上御直ニ別紙ノ趣言上仕呉候様依頼ニ有之、然ル処匆卒間申上後レ居候処、其後当地マテ申上ケ呉レタルヤトノ儀追々申越候付、紙上不容易事柄、軽卒之至奉存候得共、事柄ハ別紙之通ノ事ニ御座候間、御覧置被下候様仕度此段奉願候、

七〇ノ二　薩地戦状報知

五月二十九日　晴

午前第三時、官軍二中隊（第四旅団兵）鳥越及ヒ櫻ノ台ヨリ進撃シテ磯山ノ賊墨ヲ襲フ、賊不意ヲ打タレ狼狽シテ散乱ス、因テ益勇進シテ賊墨数ケ所ヲ取リ、磯山ト毛倉（花倉）山トノ間ナル人家ニ火シテ充分勝利ヲ得タリ、然ルニ第九時ノ頃ニ至リ賊兵迂回シテ磯山ノ海岸ヲ攀チ上リ我兵ノ背後ニ出、或ハ狙撃シ或ハ抜刀シテ夾撃ス、我兵寡少、且不意ニ出ルヲ以テ勢ヒ当ルヘカラス、終ニ一道ヲ開キ操引ニ退ク、此際官軍頗ル苦戦、或ハ賊ノ捕虜トナリ或ハ賊刃ニ斃ル、者アリ、其他死傷不少ト云フ、是ニ於テ磯山ノ賊墨不残取戻サレ、我鳥越及ヒ櫻台ノ胸壁ニ引揚ケ、両墨相対シテ盛ンニ砲戦ス、各軍艦ヨリモ亦発砲シテ声援ヲ為ス、午前十一時ニ至リテ砲声全ク休ム、

此日予暁来砲声ヲ聞テ不眠、午前七時頃ニ至レハ砲声漸ク遙ニ響ニ依リ、同僚三四輩ト衙門ヲ出テ愛宕山下ニ至リ番兵ニ問ヘハ、官軍既ニ磯山ノ賊墨ヲ抜クト云、因テ又磯ノ海岸ニ傍ラ紡績器械所ヲ距ル壱丁許手前ニ至リ海辺ニ大ナル岩石アリ、此岩下ニ立チ戦地ヲ仰望スレハ、官軍果シテ磯山ニ在リ、毛倉山谷ノ人家ヲ火スルノ時ナリ、賊ハ毛倉山ニ退キ樹林ニ出没シテ砲撃ス、然ルニ豈計ランヤ磯山ノ半腹（島津氏邸宅ノ上当リナリ）ニ一群ノ賊アリテ、突然発砲シテ予輩ヲ狙撃スル者ノ如シ、因テ命ニ中センコトヲ懼レ、此所ヲ去テ帰庁ス、時既ニ九時ナリ（後チ考フルニ迂回ノ我兵ノ背後ニ出ル者ハ必此賊ナラン）、

後チ聞ク所ニ拠レハ官兵六十名計引揚ノ際進退維谷リ、島津氏ノ邸内ニ潜匿シテ夜ニ入リ、這〻ノ体ニテ帰営スト云フ、此日官兵死傷六七十名ト聞ク、予等磯ノ海岸ニ在テ現ニ見ル所、即死四名、手負二十七八名ナリ、今月三十日ヨリ六月六日ニ至ルマテ休戦、別ニ名状スル者ナシ、

六月七日　晴

一武ノ岡及ヒ福昌寺山ノ賊墨ヨリ我哨兵線内ニ劇ク大砲ヲ発ス、我軍艦及ヒ各所ノ砲台ヨリモ亦之ニ応シ、午前六時ヨリ日没ニ至ルマテ砲声間断ナク、弾丸織ルカ如シ、大槊県庁或ハ参軍ノ営ヲ目的トスルカ如ク、弾丸ノ庁内外ニ飛来シ破裂スルモノ数十回、之ニ依テ婦人子供等ハ弾丸ノ及ハサル所ヲ探シテ避ケシム、市街ニ落ル者亦不少、為メニ軍夫ノ命殞ス者三人、重傷ヲ負フ者壱人アリ、

(六月)
仝八日　雨

一曉来前日ノ如ク、賊弾庁中ニ破裂スル者枚挙ニ暇アラス、病院并家累ヲ旧城中ノ破屋ニ移ス、

因ニ曰、巷説ニ拠レバ、賊ハ近頃種子島沖ニ於テ英国ノ商船ト貿易ヲ始メ、弾薬数万発ヲ購求シタリト云ヘリ、

仝九日　雨午後晴

一本日モ亦賊弾ノ我頭上ニ破裂スル者数回ナリ、

七一　西村捨三諸探偵及竹田賊徒敗退後戦報

附　石井省一郎臼杵戦報

七一ノ一

小官儀去月三十日以来竹田町羅災ノ者救助取扱ノ義ニ付、仝地出張、尚該事件ニヨリ熊本林少輔(友幸、内務少輔)方ヘ往復、一昨十日大分帰庁仕候、為メニ当地形況一向具陳不仕、不取敢竹田陥落以来之戦状概略別紙上申仕候、

一日向地方ノ探偵当地頗ル関係ノ儀ニ付、種々手ヲ尽シ候得共、賊徒ノ取締厳密ニ有之、他方ヨリハ一切入込ミ候事難相成、先般三好退蔵帰豊後、更ニ佐賀ノ関ヨリ別船相雇ヒ美々津知己ノ者ヘ書通、尓后ノ形況申越シノ儀并ニ地図之注文等申遣シ候処、今以テ帰港セス、定メテ賊徒拘留及候事ト被相察候、為メニ別船雇入モ舟人畏縮相応シ不申由、日州路、事情確知ノ路ヲ絶シ残念之至ニ御座候、

一淺間艦等ノ軍艦時々肥豊沿海乗廻シ、先日日向美々津・細島之両地ヘ乗込ミ砲撃及ヒ候処、賊徒数百人現出、小銃ニテ防戦候由、未タ大砲等ノ備ヘハ無之、尤日向地方ニハ旧佐土原藩ニ古製ノ大砲数門有之候ノミノ由、

一在肥後野津少将ヨリ延岡辺地理熟知之者差出候様申来候、右ハ三田井ヨリ高千穂越延岡ヘ進軍相成候事ト被存候(当時三田井ニ官軍出張、延岡マテ十六七里ナリ)、左候ヘハ当地入込ミノ海陸官兵追日進入、又此一路モ会合大兵進撃、延岡ヨリ高鍋(仝地マテハ延岡ヨリ一脉絡ノ地理ナリ)ヲ占得シ、肥後地方人吉、米良ト連絡候ヘハ、最早賊情縮少、内情露見、桐野等各地脅従之策モ相立申間敷ト被存申候、豊後地方ハ右様ノ現況ニ付、人心追日安堵いたし申候、為メニ旧諸藩士等応賊ノ色無之、佐伯士族ノ如キハ一切規避(忌)致候由、豊後地方ハ最早御安心ト奉存候也、

十年六月十二日　　西村捨三(権少書記官)

大久保内務卿閣下

七一ノ一

竹田賊徒敗退後戦状槩略

去月二十九日竹田敗退之賊徒、宇田枝・伏野等ヲ経テ重岡道潰走、官兵追蹤三十日宇田枝ニ転営、進軍可有之処、兼テ佐伯・重岡辺ニ出没いたし候賊徒来援セシ形況ニテ、更ニ転路、三重市ヘ突出セシ旨先日来深野辺出張ノ官兵遊撃一中隊小倉鎮台一中隊之ヲ探知シ賊徒百名計リト探聞セン由三十一日午前三時頃仝地進撃、賊塁三四ケ所ヲ乗取リ、町鼻ヘ突進セシ所、豈図ラン午前一時頃ヨリ賊徒千人内外仝地ヘ着陣いたし居リ各地ニ埋伏、三面挾撃セシヲ以テ竟ニ衆寡不敵、官兵敗退村田大尉外三十名計リ討死、午前八時頃深野ヲ経テ戸次ニ引揚ケ候、都合ニテ同日竹田ヨリノ追兵一小隊計リ玉田近傍ニテ交戦、是亦不利ニ付賊勢更張、仝夜一時六月一日半賊ノ全軍三重市ヲ密発シ、六月一日午前九時過キ臼杵ヲ去ル一里半計リ籠ケ瀬ノ壁ヘ襲来、官兵不利兼テ臼杵士族ハ方向宜シク毎ニ出兵ヲ請求セシヲ以テ、去ル三十日頃東京警視隊百余名ヲ出張セシメ、同地士族モ六百名計リ編隊（銃ハ二百計、諸般警備ノ手当ヲナン籠ケ瀬ニ胸壁ヲ築成セリ）旧城郭マテ退却必死防戦スト雖トモ、午後三四時頃竟ニ潰散旧城ハ海中ニ斗出スルヲ以テ走路ニ困難海中ニ飛入人苦アリ、屠腹スル者アリ、縛ニ就クモノアリ、軍艦ノバノテー、ラニ乗リ入リ狙撃セラル、モノアル等、云フヘカラサル惨状ヲ極メタリト、尓来賊徒仝地ニ拠リ外ハ一里内外ノ険要ニ胸壁ヲ築キ、哨兵ヲ張リ、内ハ士族ノ貨財ヲ奪略シ、就中留恵社該社士民旧知事ノ附与金ヲ基本トシ結社セシモノニシテ巨額ノ金員ニ立至リタル豊後最一ノ社ナリ、賊徒侵入前、現有金ハ他ヘ密托セン由諸物品貸付ヲ糴売スル等ノ挙動ニ及ヒ居リシ由、然ルニ竹田ヨリ追踪ノ官兵ハ宇田枝ヨリ牧口〻〻ヨリ戸次ニ転シ、賊情探偵合機大挙ノ軍策ニ有之処、去ル七日ニ至リ第三旅団二大隊隅田丸ニテ大分着船三好少将引卒ノ兵ニテ人、吉熟著後海路ヨリ同兵、官軍益振ヒ八日ヨリ廣内末廣口ノ進撃ヲ着鞭トシ、八九十ノ三昼夜海陸ノ官兵大攻撃六月一日以来浅間・日進艦等時々臼杵湾ヘ、来往炮撃殊ニ三日間砲撃最モ力メタリト十日午前七時ニ至リ賊兵不支市中ニ放火シ、佐伯ヲ指テ散〻潰走此役官軍無比、官兵一手ハ津久見峠ヨリ佐伯ヘ尾撃、一手ハ三重市ヨリ重岡ヘ進撃可相成手筈ノ由、海軍ハ直クニ津久見沖ヘ回船セシ趣、如此形況ニ付、不日官軍日向口ヘ進入ノ捷報可有之ト被存申候、右各地ノ戦状折略供御一覧候也、

竹田ハ自首人五百人計内百五十名計リハ官兵ニ抗セン者外ニ八十名計リハ賊ニ随行セシヨン、兵火ニ罹ル者千戸余、臼杵ハ無拠賊ニ応ゼシ者百名計自首、兵火ニ罹ル者三百戸余、官兵ハ熊本地方ヨリ陸路ノ回兵凡四大隊、海路二大隊外ニ警視隊・遊撃隊等若干有之、多数ノ兵員ト相成候也、

十年六月十二日　　西村捨三

七一ノ三

石井省一郎臼杵戦報

恭呈、臼杵表ノ戦況追々県令ヨリ上申仕候通リ、至極ノ好都合ニテ速ニ掃攘仕、即今ニテハ重岡辺ニ屯集ノ趣ニ御座候、乍併追々官兵モ増加攻撃線モ相定リ候事故、最早当県モ懸念ハ勿論別段配慮筋モ無御座候運ニ立到リ候間、大ニ安心仕候事ニ御座候、付テハ救助筋ハ西村子担任取扱候筈ニ付、小官儀ハ、一両日内ヨリ熊本表ヘ引取候覚悟ニ御座候、最竹田表兵燹ニ掛リ候者千戸、臼杵表ハ三百戸位之事ニ御座候付、不日夫々行渡リ可申ト奉存候、臼杵士族ハ最初ヨリ方向宜シク、既ニ賊臼杵ヘ乱入ノ節ハ警視隊ト共ニ防戦大ニ尽力、死傷モ不少事故、追々御手当等之事取調、県令ヨリ具状之筈ニ付、厚ク御評議御座候様奉懇祈候、其他佐伯士族等も賊ニ党与之者モ格別無之、一体当県各旧藩ニ士族モ竹田ヲ除クノ外、方向宜敷方ニ御座候、中津士族最初増田暴挙ノ行掛リモ有之、彼是掛念仕居候へとも固ヨリ小藩ノ事故、又々暴発等ノ力モ無御座、至極一体ニ鎮静ニ帰候間、先々御掛念被成下間敷奉存候、其他別条無御座候へとも、寸楮前件之趣為可申上如是御座候、匆々再拝、

六月十二日　　於大分県庁

石井省一郎

内務卿閣下

七二　愛媛県上申、海岸取締方

愛媛県ヨリ別紙之通申出候間、則上申候也、

明治十年六月十三日　　内務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

管下動静ノ儀ニ付電報之拝答

本月四日午後七時五十分、西京出電信（六日午後十一時着）、又五日午後一時三十分仝所出電信（八日午前九時着）夫々拝承、既ニ電信ヲ以テ概略拝答仕置候、抑々当県地ノ儀ハ巨細御垂示之通、手広ノ海岸蜿蜒殆ント二百里、此間各浅深も有之候得とも、所謂潮落舟膠スルノ地少ニシテ大槽五十石以上ノ船ノ着岸セサルナシ、故ニ巡査及ヒ臨時徴募之巡査（百五十人ナリ）合セテ六百五十名ヲ星布スルニ固ヨリ不足ト云ハサルヲ得ス、然リト雖トモ目下賊徒ノ跡ヲ見ルニアラス、殊ニ管下予讃ノ海岸ヨリ些ノ疑義アルノ徒ヲ上陸セシメタル儀之ナク、且又管下無異状差向増員可相願見込ミ無之候得共、尚

此上不容易之形状有之候ハ、其節何分之御指揮可相伺、
此段抃答旁上申仕置候也、
明治十年六月八日
愛媛県権令岩村高俊
内務卿大久保利通殿

追テ薩賊ノ中四国ヘ渡リタル云々ハ、若シ過日上申仕候豊後・臼杵・佐伯ノ士族輩多人数乱ヲ避ケテ、管下宇和郡八幡浜御崎辺ヘ渡海落来候ヲ誤認シタルニ之アルヘキカ、尚厳重捜索ヲ遂ケ可申候也、

七三　諸兵出張人員

一歩兵一大隊半
内
一大隊ハ東伏見宮仝時ニ出帆ノ事、
半大隊ハ都合ニ依リ砲兵ト仝船出帆ノ事、
一砲兵一小隊
半大隊ノ歩兵ト同船ノ事、
一騎兵半小隊
別船ヨリ馬共ニ乗込出帆ノ事、
一歩兵一大隊乗込ミノ船都合ハ大坂表西郷(従道)中将ヨリ報知ノ事、
阪　一大隊ハ仙台鎮台兵
京　半大隊ハ名古屋仝断
神　砲兵隊ハ東京仝断
京　騎兵隊ハ近衛兵
外ニ汽成(ママ)隊ノ内ヨリ士官若干名参謀部或ハ東伏見宮ヘ随行ノ事、

七四　在豊後海淺間艦長緒方少佐臼杵戦状報告

七四ノ一
在豊後海淺間艦々長緒方海軍少佐ヨリ別冊之通届越候間、不取敢此段上申仕候也、
十年六月十五日
海軍少将赤松則良
太政大臣三條實美殿

七四ノ二
臼杵戦状等御届
去月三日佐賀ノ関ヨリ実況御届仕候処、其後仝四日午前第七時三十分佐賀ノ関出艦、仝九時二十五分臼杵湾回艦、

然ル折柄、佐賀ノ関ヨリ区長ノ者飛船ヲ以テ大分県庁ヨリ金貨送致之旨報知ニ由リ、為受取暫時同港回艦ノ処、折節日進艦ニモ入港、臼杵表ヘ陸地ヨリ進撃ノ様子も各所ヨリ報知有之、砲撃ノ都合仝艦ト協議ノ上、同五日午前第二時十分佐賀ノ関抜錨、仝四時四十五分臼杵湾回艦、然ルニ当日ハ降雨、且濃霧ニシテ陸地相見ヘス、同午後一時頃ヨリ微晴ニ依テ賊営ニ近寄リ、攻撃数刻ニおよひ候へとも、陸兵ノ進撃不相分、同四時頃回転ヲ止メ仝湾ヘ碇泊、其後引続毎日砲撃いたし候半ゝ、陸兵未明ヨリ進撃ニテ臼杵近傍頻リニ砲声相聞ヘ候ニ付、一層攻撃ヲ増シ未タ賊営ハ陥レス候へとも、不日打払可申見込ニ御座候、尚詳細ノ儀ハ後日御届可仕候得共、此段攻撃大略御届仕候也、

浅間艦々長

十年六月八日　　海軍少佐緒方惟勝

神戸出張

海軍少将赤松則良殿

七四ノ三

当艦客月二十六日以来各所回艦、砲撃ノ実況別紙浅第六百三十二号・仝第六百四十三号・仝第六百四十四号・仝第六百四十五号ヲ以テ川村参軍殿ヘ御届書ノ通リニ御座候、其後引続キ臼杵湾警邏未タ仝所ノ賊モ挙動不相分候ヘトモ、近々陸地ヨリモ進撃ノ筈ニ付、不日ニシテ打払ノ見込ニ御座候、此段旁御届仕候也、

浅間艦々長

十年六月七日　　海軍少佐緒方惟勝

海軍少将赤松則良殿

七四ノ四ノ一

以下浅間艦々長緒方少佐ヨリ川村参軍ヘ届書ノ写

(朱)「浅第六百三十二号」

佐賀ノ関ヨリ臼杵及佐伯ヘ回艦進撃ノ景況及引揚ケ云々御届

本月二十五日午前第六時五十五分、佐賀ノ関抜錨、臼杵湾ニ向ケ出艦、仝八時五十五分着湾、直ニ陸地探偵之末、午後零時ヨリ両艦人員ヲ以テ市中巡邏ヲナシ、仝五時十分右人員帰艦ス、同七時三十分頃、大分県三等巡査平山虎蔵佐伯ヨリ帰途ニ来艦、其報ニ重岡ヨリ佐伯ヘ賊兵百五十名計操込ノ確報ヲナス、依テ即夜進撃ノ為メ仝八時四十五分臼杵湾抜錨、其際清輝艦佐賀

ノ関入港云々、仝艦々長ヨリ出ス書簡ヲ持チ水兵壱名来艦、其書ニ都合次第至急此港ヘ回艦云々ト有之、直ニ回艦面会御用済ノ末、今二十六日午前零時三十四分同港抜錨、直ニ佐伯湾ヘ向ケ航進、仝四時五十五分着湾、仝五時ヨリ陸地探偵ノ為メ端舟ヲ以テ福間少尉・内田少尉補、水兵十名差遣シ、右端舟松ケ崎ト申所ヘ寄セ聞合候所、賊兵三百余名仝ク佐伯ニ屯集之趣、然レトモ尚巨密探偵ノ積リニテ仝所土民ヲ差遣し、我艇モ佐伯近岸ニ漕寄セ種々陸地探偵ヲナス内、賊民家ノ内ヨリ不意ニ海岸ヘ起リ、端舟ヲ見掛小銃発砲、直ニ本艦ヘ報知ノ為メ引返ス、其際別紙之通リ死傷トモ九名有之、艦ヨリモ又是レヲ見受ケ直ニボートヲ向ヒニ出シ、午前七時二十分帰艦、直ニ艦内戦備ヲナシ、本艦ヲ陸地近ク乗リ寄セ、仝八時十分ヨリ艦備砲ヲ以テ賊ノ巣窟ヲ同九時五十分マテ砲戦八十斤ニテ六十三発、四十斤ニテ六十三発、距離千八百ヤード ヨリ六百ヤード ヨリ八百ヤード ニ至ル 遂ニ賊逃去リ海岸 直ニ小銃隊陸戦ノ筈ナレトモ、何分賊多人数、且陸地不案内深山之地形ニテ、我兵ヲ以テ尚進撃ノ見込ナリ、依テ一ト先、清輝艦ニヨリ回艦 佐賀ノ関 ニ報知、且協議旁トシテ同時ヨリ仝港ニ向ケ引揚ケ、仝午後二時三十五分臼杵湾投錨仕候条、此段御届仕候也、

十年五月廿六日

進撃之際死傷人名

即死	三等水兵	小松由藏
仝	四等水兵	寺田良吉
手負	一等水兵	安室熊吉
仝	二等水兵	井上安吉
仝	仝	關　壽雄
仝	仝	鈴木與作
仝	四等水兵	赤堀鈕三郎
仝	仝	森本　司
仝	一等若水兵	山口梅吉

右ハ本日午前大分県下豊後国佐伯ニ於テ進撃ノ際、斥候トシテ端舟乗組、仝所近岸ニ漕寄セ探偵中、賊民家ノ内ヨリ不意ニ小銃発之砌死傷、前書人員頭書之通巨細ハ乗組医官別紙診断書之通御座候也、

十年五月廿六日

（宋）「別紙医官診断書ハ略ス」

七四ノ四ノ二
（宋）「浅第六百四十三号」

佐賀ノ関出艦佐伯及日州地回艦各所砲撃
之実況御届

五月三十日午前第五時三十五分佐賀ノ関出艦、仝第五時五十七分佐伯湾回艦陸地之模様探索之所、過日来屯集之賊徒追〻重岡辺へ引揚ケ候趣ニ付、仝午後第九時仝湾出艦、仝三十一日午前九時頃日州細島村へ回艦、陸地ヲ遙観スルニ、港口海面ヨリ右手之山頂ニ当リ円形ノ家アリ、果シテ賊営ナラント察シ、先ツ細島村へ向テ砲撃ノ処、無間モ右之山上へ三四名之賊相見へ頻リニ当艦へ砲発ス、依テ右之山上下ヲ砲撃スルニ、山上ノ兵逐〻増加リ四五十名ニテ発砲、艦体数ケ所へ打付ケ尚左手之上ニモ相見候ニ付、大小銃ヲ放テ砲撃之処、港外浪高ニテ回転自由ナラス、然ルニ仝港近傍満面ニ賊兵之模様ニ付、海岸ニ沿テ回転、無間も美々津辺ニ至リ、果シテ賊営数ケ所ヲ遙視ス、依テ陸地ニ寄セ回転砲撃スルニ、此所ハ賊応砲不致ニ付、尚延岡海湾へ向ケ、仝十時頃ヨリ航路ヲ定メ、仝午後零時頃延岡海湾へ回艦、湾内屢〻回転スルニ海岸遠浅ニテ近寄ルコトヲ不得、鰯索ノ方ニ進寄セ、港内ヲ遙視スルニ、左右之山上ニ賊営二ケ所相見へ、賊兵モ多分遠近ニ走セ集リ候模様見受ケ候ニ付、仝所ハ砲撃不致仝一時三分ヨリ回転ヲ止メ、豊後ニ向ケ航路ヲ取リ、仝八時三十五分臼杵湾回艦投錨いたし候、前顕細島村及美々津辺ニ於テ砲撃之砌、小銃二百発、大砲五十四発打捨申候、賊銃丸艦体数ケ所へ打付ケ候ヘトモ、乗組人員死傷無御座候、右各所之実況荒増御届仕候也、

浅間艦々長

十年五月三十一日　　海軍少佐緒方惟勝

川村参軍殿

七四ノ四ノ三
(朱)「浅第六百四十四号」

豊後・日向海警備之儀外艦へ御差回し
相成度見込上申

豊後・日向海之実況ハ別紙御届仕候通リ、佐伯ノ賊モ一応重岡等へ引揚候後、尚又昨今進入、同所へ屯集之趣ニテ御座候、尤重岡等ヨリ出ル時ハ、海岸之地へ日アラスシテ達し、殊ニ渡海場モ各所へ有之、且又近来日向地ニ至リテハ細島近傍延岡辺ヲ掛ケ満地ニ兵ヲ屯シ、専ラ防禦之策ト見へ、嶮地ニハ見張リ番兵場ヲ設ケ居候模様ニ御座候、右之景況ニ付、豊後・日向之海

面一方ヲ守レハ尚一方ヨリ進入シ、当艦一艦ニテハ警備届兼候段、過日清輝艦々長井上中佐ヘ見込之筋相談仕置候通リ、至急御軍議ノ上、外艦ニモ御差回シ相成候様いたし度、此段見込上申仕候也、

浅間艦々長　　緒方海軍少佐

十年五月三十一日

七四ノ四ノ四（朱）「浅第六百四十五号」

各地方廻艦実況御届

去月三十一日臼杵湾回艦之処、佐伯表ヘ又〻賊徒進入之趣、仝所区戸長共ヨリ報知ニ因リ、襲撃ノ為メ本月一日午前一時六分臼杵発艦、仝五時頃佐伯回艦直ニ仝所ヲ砲撃之処、賊ヨリ応砲不致、暫時挙動ヲ試ルニ斥候体ノ者相見ヘ候得共、余程遠隔之処ニテ当艦近寄不申ニ付、錨ヲ投シ戦備いたし候際、同午後二時頃大分県庁ヨリモ賊襲来之模様ニ付、当艦応援トシテ至急府内沖回艦ノ儀同庁ヨリ蒸気船（船名大分丸）ヲ以テ急報有之候ニ付、同二時五十八分佐伯湾抜錨航進之途中、佐賀ノ関ヘ日進艦碇泊ヲ見受ケ候ニ付、仝艦ト協議ノ為メ入港、然ル処折柄臼杵表ヨリノ報知ニ、同所ヘ此日賊多勢乱入、警視隊并仝所士族隊ニモ防戦能ハス敗走ニ及ヒ、同所遂ニ賊ノ拠ル所トナリ、海路ヘ出ル欤、大分ヘ出ル欤、又同所ヘ屯集スルカ、賊ノ挙動不相分ニ付、伊藤中佐（伊東祐亨、日進艦長）ト協議之都合有之、当艦ニハ同五時五十八分佐賀ノ関抜錨、臼杵ヘ向ケ進航、仝七時五十分頃同湾回艦、直ニ陸地ニ近寄セ大砲四発ヲ試ミニ発シ、同九時投錨、同二日払暁抜錨、尚砲撃いたし同午前第九時三十分臼杵出艦、佐賀ノ関伊東中佐ヘ協議ノ為メ同十時二十四分佐賀ノ関入港、同午後一時二十六分佐賀ノ関出艦、仝二時三十四分臼杵湾回艦、尚賊ノ挙動ヲ試ミルニ何レモ方向不相分ニ付、同所ヘ戦備いたし居候処、今三日佐賀ノ関ヘ主船局ヨリ諸物品回送之旨同所ヨリ報知ニ付、本日午後三時五十六分臼杵出艦、仝五時十分佐賀ノ関回艦いたし、尤物品積入且艦内石炭囲場等ヲ積直シ次第、直ニ臼杵ヘ回艦之積リニ御座候、臼杵并佐伯之義ハ賊要地ニ胸壁ヲ設ケ防禦之趣ニ御座候条、各地之実況大略御届仕候也、

浅間艦々長　　海軍少佐緒方惟勝

十年六月三日

征討参軍川村純義殿

七四ノ四ノ五
（朱）「浅第六百五十号」

臼杵及津久見攻撃実況御届

（六月）本月八日臼杵之賊攻撃之実況大略御届仕置候後、仝日ハ陸兵モ近傍ニ攻寄セ昼夜対戦之処、同九日早暁陸兵諸道ヨリ盛ニ進撃砲声ハ遠近ニ響キ、素ヨリ当艦ニハ兼テ陸地賊営之方向ヲ見計ラハセ戦備いたし居候ニ付、不絶攻撃、然ル折柄日進艦ニハ津久見、佐伯等警邏ノ末入湾、直ニ陸地間近ク進ミ一層進撃、湾内両艦ノ回転自由ナラス、跡ヨリ回転、日進左ニ碇置シ、当艦右ニ出テ共ニ激発、此ノ時陸兵ハ縦横奮戦ノ央、殊ニ両艦ノ弾丸賊之背後ニ屢破烈シ、賊四方ヨリ攻付ケラレ道路ニ放火シ逃去、同日臼杵攻略ニ至リ、夫ヨリ日進艦長伊藤（弁東祐亨）中佐ヨリ当艦ニハ津久見回艦ノ都合協議ニ付、同日午後四時頃ヨリ臼杵出艦、仝六時頃津久見回艦（仝所ハ臼杵ヨリ佐伯ノ通路ナリ）逃去ノ賊ヲ横撃スヘクト予シメ通路ニ寄セ戦備之処、仝夜九時果シテ遠近ニ続〻トシテ提燈ノモノ通行、尤モ土民ヲ害スルノ愁アルヲ以テ容易ニ砲撃シ難ク、先ツ空砲ヲ発シ試ルニ提燈逡巡、尚亦潜ニ燈ヲ消シ海岸ノ道ヲ去行（即チ佐伯通路ナリ）、然ルニ暗夜之事ニテ人形分明ナラス、此時野砲等ニテ砲撃ニ及ヒ、仝十日早朝臼杵ノ方ニ当リ砲声相聞ヘ、臼杵ノ山頂ヲ遙観スルニ、数多ノ兵津久見ノ下ヲ指シ走セ降ル、然ルニ官賊分明ナラス、暫時砲撃見合セ申候ハヽ、海岸近傍ニ走リ出テ一視スルニ、果シテ賊粧ナルヲ以テ、直チニ大小銃ヲ放チ散〻横撃、弾丸一〻賊ノ前後ニ砲烈シ大ニ賊胆ヲ破リ、激発数刻ニシテ賊遂ニ潰走致シ候、其後同午後四時頃漁舟陸地ヨリ当艦ニ漕寄セ、臼杵ノ士族一名来リ賊状ヲ報知スルニ、果シテ佐伯ヲ指シ逃走ナラント、且海岸或ハ山上ニ賊死四名ヲ捨テ、其他其手負ノモノハ運送シタル趣ニ御座候、尤連日ノ攻撃ニハ候ヘトモ当艦ニハ死傷更ニ無之候、当近傍潜伏ノ徒ヲ探索之半、仝九時頃陸軍兵津久見到着、野崎陸軍中佐ヨリ磯林陸軍中尉ヲ以テ戦状通知、且佐伯進撃之儀等協議ニ付、尚日進艦ト一議ノ上、不日佐伯攻撃可致積リニ御座候条、此段実況大略御届仕候也、

津久見湾

浅間艦々長　　海軍少佐緒方惟勝

十年六月十八日

海軍少将赤松則良殿

七五　三好判事ヨリ河野幹事宛日向・豊後戦略報告

従竹田一封ヲ呈セシ後直チニ小野市駅ヘ重岡ヨリ二里手前ナリ至リ、野津大佐ノ本営ニ投シ日〻戦地ノ景況ヲ目砲スルヲ得タリ、連日ノ梅霖深山幽谷ノ露宿、兵士ノ艱苦実ニ憐ムヘシ、吾輩文官ノ座食中心(心中)大ニ安カラサルモノアリ、却説賊等モ三国峠・旗返しノ二険頓ニ守ヲ失ヒシヨリ兵気大ニ挫ケタルモノヽ如シ、去ル二十日ノ夜半ニ至リ、重岡屯集ノ賊及ヒ佐伯口ノ分トモ一時ニ引払ヒ、日向路ヘ遁逃セリ、官軍直ニ進テ重岡ヲ取リ、赤松峠日豊ノ境ニアルモノ也ヲ扼シ佐伯口ハ陸地峠ヘ兵ヲ進メ、豊後路ハ総テ官軍ノ有トナリシカ、二十四日ニ至リ賊等大挙シテ諸口一時ニ襲来、非常ノ劇戦互ニ許多ノ死傷アリ、赤口ノ本道ハ官軍奮戦撃テ之ヲ斥ケタルノミナラス、漸ク進テ賊地ヲ攻略スルノ勢ナリ、佐伯口ハ遊撃隊賊ノ為メニ破ラレ陸地峠ノ全線又賊ノ有トナリ、今日尚未タ之ヲ恢復スルヲ得ス、其後ハ双方共ニ敢テ戦ヲ挑マス互ニ持(自)重シテ防禦ヲ厚クスルモノヽ如シ、二十五日以来ハ哨兵及斥候兵等ノ小セリ合ニテ数日ヲ費シ快戦ヲ開ク能ハサルニ付、局外ヨリ之ヲ見レハ或ハ官軍ノ進路遅延ナルヲ疑フモノアルヘシト雖トモ、重岡ヨリ延岡マテ十里、重岡以南豊日ノ境ニ至テハ、右翼ノ古道ハ所謂梓越ノ絶険ニシテ、僅ニ樵夫ヲ通ハスヘキノ一線路アルノミ、赤松口ノ本道ハ路税平易ナリト雖トモ、群山屹立ノ間一線ノ細路渓水ニ沿フテ下ル、樹陰濛〻昼猶暗し、賊等両岸ノ諸山ニ要砦ヲ構ヘ、便ニ依テ射撃洩ス所ナカラントス、左翼モ名ニ負フ陸地峠ニシテ、一卒之レヲ防ケハ万兵之レニ当ルヘカラサルノ要地ナリ、此他惣太郎峠アリ、兵二郎峠アリ、猿ケ岡アリ、赤木ケ峰アリ、孰レヲ攀チ何レヲ登ルモ峻坂険路ナラサルハナシ、賊等此地理ヲ占メ、此険阻ニ拠リ必死防戦セントス、官軍暴進セサルハ固ヨリ其所ナルノミナラス、却テ其戦略ヲ相見ルヘキモノアリ、蓋シ賊等既ニ三国・旗返シニ敗レ、赤松峠ノ襲撃ヲ逞フスルヲ得ス、退テ延岡ヲ保タシ(シ)トスレハ海陸夾撃セラルヽノ恐アリ、延岡ニシテ保ツ能ハサレハ宮崎以北ハ賊ノ有ニアラサル知ルヘシ、此レ賊等ノ死力ヲ尽シテ此ノ防戦ヲ為ス所以ナラン、然ルニ高千穂口ヨリ進ミタル第一旅団野津少将ナリハ、岩戸宮水延岡ヨリ十里程ノ間ニ出テ、海路ノ淺間・日進・鳳翔等ノ諸艦ハ日向

海ニ迫マリ、豊後口ノ諸軍モ部署粗定リタリト聞ケハ、賊等仮令嶮要ヲ死守スルトモ、諸道ノ官軍連絡夾撃一挙シテ延岡ノ根拠ヲ抜ク、必ラス応サニ近キニアルヘシ、余ハ尚追々御報知ニ及フヘク、此分要詞ノミ匆々拝啓、

六月三十日朝認

豊後国重岡駅

征討軍団本営

三好判事

河野幹事殿（敏鍵、元老院幹事）

過日寸閑ヲ得テ大分県庁ニ至リシ所、図ラス海野勲ヘ面会、馬関マテノ御様子モ委細承知いたし、慶躍啻ナラス、定メテ其後長崎ヘ御引取、万事御尽力ノ事ト存候、乍憚岸良・小畑其他ノ諸君へも宜布御致声奉願候、

七六　大塚正男ヨリ河野幹事宛薩地近状報知

房次郎ニ託シ一書ヲ呈ス、貴兄モ近々当地ヘ御越シノ由、当地ノ事ハ委細香川等ヲ以テ御協議申通ニハ候得共、猶貴兄御出被下候ハヽ、彼是好都合ト待入候、

進撃ノ官軍モ毎戦捷ヲ奏シ、昨今ハ進テ加治木ト蒲生トニ至リ、又別軍ハ垂水ト福山ニ進ミ鹿児島以西ハ先ツ我有ト相成候、尤伊集院近傍ニハ残賊多少居リ申トノコトナレトモ、是ハ皆戦争ニ堪ヘスシテ帰リタル者、或ハ銃瘡ヲ受ケタル者共ニテ、昨日川村ノ話ニ拠レハ一両日中ニ此者共ヲ処置セン為メ、一大隊計リノ兵ヲ伊集院近傍ニ出スト、左スレハ余程罪犯を聴ヘ可申ト相楽候、

扨二十九日ハ夜十時頃菩薩通辺（宣脱カ）ヨリ出火、徹宵消ヘス、三十日朝八時頃ニ至リ漸ク鎮火、市中過半焼失、余ス所ハ僅ニ県庁近傍ノ数家ノミ、千辛万苦シテ帰リ来リ漸ク商業ニ復ントスル市民共、又此大火災ニカヽリ家屋ヲ失ヒ、市街ニサマヨヒ、児ハ餓ニ泣キ、老ハ溝壑ニ転セントスル景況ハ、実ニ惨然目モアララレヌ次第也、然ルニ県庁ハ猶予ナク各所ニ救恤所ヲ設ケ大ニ尽力スルニ付、市民ハ此火災ニ逢テ始メテ官軍ノ難有ヲ知リシニ似タリ、

先ハ取急、右ノミ匆々、他ハ近々拝晤ニ譲リ候、頓首、

七月三日

正男（五等判事、大塚）

河野幹事大兄

七七　西村捨三上申、三好退蔵探偵報告書

七七ノ一

別紙御参考之為メ供高覧候、三好退造(蔵)ハ御承知ノ通日向人ニテ、目今総督本営ヨリ同地嚮導探偵等被申付、其言信ヲ取ルニ足ルモノニ付、来報ノ都度〻〻上申仕候事ニ御座候、賊将桐野、熊田駅出張ハ此報知中ニハ不相見候ヘトモ、他ノ探偵ニテハ専ラ此説有之、且賊徒戦勢ノ鋭ナル必ス来陣候事ト被存申候、重岡進入以来殆ント二旬ニ垂ントシテ戦線退縮、攻守勢ヲ異ニシ候次第遺憾之至リ、何卒衝背ノ一挙賊巣顛覆センコトヲ企望ノ至リニ不堪候、誠恐謹言、

十年七月六日　　西村捨三

大久保公閣下

七七ノ二

三好退藏来報

七月六日午前十一時五十分来

明治十年七月四日午後マテ、重岡及柚ノ原等ニテ見聞スル所ノ形勢左ノ如シ、

○七月一日午前三時頃ヨリ、官軍重岡口ノ中央「赤松谷」左翼「猿カ谷」ヨリ進撃、賊ノ要処ニ構ヘタル山上ノ胸壁ヲ乗取リ、尚進テ其他ノ数塁ヲ抜カントスルノ際、賊ノ迂廻兵不意ニ起リ、劇戦数刻官軍ノ援隊来ル晩キヲ以テ遂ニ其胸壁ヲ保ツ能ハス、原哨兵線マテ引揚ケタリ（此胸壁ハ頗ル険要ノ処ナリシカ遂ニ、保ソコト能ハサリシハ遺憾ノ極ナリ）、賊今之ニ拠テ死守ス、

○七月二日赤松峠ノ一手ヨリ臼砲ヲ以テ賊塁ヲ砲撃ス（賊ハ一層高キ山上ニアリ、臼砲ヲ用ユル所以ナリ）

○七月三日午前二時半頃ヨリ賊大挙シテ（凡千七八百ノ兵数ナルヘシト見ユ）右翼ノ木浦梓越ヨリ襲来、砲戦最劇、官軍奮進（小川少佐・井衛少佐ノ二将ニシテ第三大隊及ヒ遊撃隊ナリ）、賊ヲ斃スト雖トモ、賊勢撓マス、午前十時頃ニ至リ賊黒土峠（梓越ノ前ニアリ）ノ左右ヨリ迂回シテ迫マリ来リ、不意ニ山中ヨリ射撃シ（草木ノ間ニ在テ其形影ヲ顕ハサス只硝烟ノ発スルヲ見ルノミ）官軍苦戦、遊撃隊最其中ニ包マレ遂ニ潰走セリ、（又改）小川少佐ノ台兵之ヲ受ケテ奮戦、右ニ当リ左ヲ支ヘ十二時頃ニ至テ漸ク喰ヒ留メタリ、然レトモ黒土峠ハ賊ノ有ニ帰シ、其胸壁ヨリ吾軍ヲ下射スルヲ以テ、吾レ亦城ケ越ナル、又一層ノ高岳ニ拠リ砲撃刻ヲ移ス、午後二時頃ニ至リ賊大砲ヲ胸壁ニ据ヘ（フランスボードナルヘシ、破裂弾ヲ発射ス）、頻リニ吾軍営ニ向テ発射ス、吾レ亦臼砲ヲ以テ応戦、賊敢テ進マス、互ニ戦闘線ヲ守ル、砲戦夜ニ入テ休マス、

右ハ僕自ラ弾丸雨注ノ間ヲ徘徊シテ目撃スル所ノ槩略ナリ、

○七月四日午前三時頃ヨリ仁田村柚ノ原口ノ官軍（奥少佐・青山少佐・野

崎中佐等ナリ、陸地峠ノ賊塁ニ進撃ヲ試ミ大砲二門ヲ左右ノ山上ニ置キ、大小砲ヲ以テ攻撃シタレトモ賊亦善ク拒キ、砲丸ノ至ル所ハ賊迹ヲ収メ影ヲタニ顕サス、他処ニ埋所シテ吾カ兵ノ進ムヲ待ンモノヽ如シ、此レ全ク賊ハ所謂陸地峠ノ天険ニ拠リ逸ヲ以テ労ヲ待ツノ便利ヲ得タルカ為メナリ、官軍モ亦地勢ノ不利ナルヲ以テ敢テ迫マラス、夕刻ニ至ル迄格別ノ劇戦ニ至ラス、

右ハ自ラ目撃スル所、及ヒ聞ク所ナリ（僕ハ七月三日午後八時頃ニ仁田村柚ノ原ノ本営ニ至リ一泊、猶、昨四日午後重岡ヘ帰ル）

本日七月五日ナリモ柚ノ原口ハ陸地峠進撃ノ筈ナリシカ未タ報知ヲ聞カス（重岡口ハ左右中央トモ休戦ノ模様ナリ）

○梓越モ（重岡ノ右翼兵ナリ）昨日七月四日ナリ午前午後戦闘止マス、賊又迂回兵ヲ以テ柳ケ瀬（右翼ノ又右翼ナリ）ニ迫マリタレトモ、我軍配兵虚隙ナキヲ以テ直ニ撃テ之ヲ斥ク、賊引去ル、午後四時頃又左右前面ヨリ一時ニ迫マリ来リ、砲戦頗ル劇（官死傷モ許多アリタル由、一昨三日ノ戦ニハ死傷甚少ナカリシ）ニシテ、一時間計リハ砲声山ヲ撼カス計リナリキ（僕柚ノ原ヨリ帰途、此砲声ヲ聞ケリ）、夜ニ入リ賊退キタリ、

右重岡本営ニ帰テ聞ク所ナリ、

○日向飫肥士族川越進（旧宮崎県十五等出仕タリシモノナリ）、陸地峠ニテ降伏自首シ、賊勢ノ緩急ヲ具陳スルモノ左ノ如シ、

豊後口ノ賊軍ハ奇兵隊二十四中隊（一中隊八十人・百人・百五十人人員不一定、平均百人位ナルヘシ）外ニ報国隊（竹田士族ナリ）、中津隊等数十人アリ、佐土原士族（町田啓二郎之ヲ督シテ（ゾハニ在リ、人数不詳）高鍋士族等ヲ合シテ数百人ナルヘシ、奇兵隊ノ中、三中隊ハ飫肥ノ兵ナリ（小倉処平之ヲ総括ス）高岡兵一中隊アリ、其他ハ総テ薩兵ナリ（日向ノ旧薩領士民モ加ハリシナラン）

（総）摠隊長（司令官ナリ）ハ野村忍介（薩人私学校党ナリ）ナリ、

○七月三日ニハ赤松口ノ本道ヲ襲フ積リナリシガ、官軍警備厳密ナルヲ偵察シ、議ヲ変シテ右翼梓越木浦ヲ衝突スルコトニ決シ、陸地峠及赤松口ヘハ押ヘノ兵ヲ残シ其他ハ総テ梓越ノ方ヘ廻兵シタリ（七月三日、四日梓越ノ戦闘、激烈ナル推シテ知ル可シ）、

○延岡ヘハ佐土原兵一中隊アリ、其余ハ日向地方新募ノ老兵ヲ以テ守レリ、

○佃島（細島カ）・美々津ハ高鍋兵ト農兵ヲ以テ之レ守レリト聞ク、

○延岡ニ正義隊（薩ナリ人員ハ弐千位ナランカ）来ルト云フ評判ナリシカ、六月二十一日頃マテハ来ラサリシ、指揮官トシテ池上四郎（池上四郎）ハ来ルト云フコトナリシカ、是亦来着セシヤ否ヲ知ラス、

○桐野ハ六月二十一日迄ハ宮崎本営ニ在テ万事ヲ指揮シ、延岡迄ハ来ラサリシ、西郷モ此程宮崎ニ来リシト云フ評判アリタレトモ其実否ヲ詳カニセス、

○宮崎ニハ別ニ精兵ヲ残サス、僅ニ数十名ノ護衛ヲ置キ総テ豊後口ニ向ケタリ、延岡及細島・美々津ハ甚タ手薄キカ如シ、然レトモ六月二十二日後ニ兵ヲ増シタルヤ否ハ計リ難シ（該犯ハ六月廿二日延岡ヲ、出テ豊後口ニ向ヒタリ）、

○賊ハ尚高知士族ノ応援ヲ待チ居レリ、今暫ク持（待カ）チ堪ユレハ高知及山口ノ援兵来ルヘシト宣言セリ、

○宮崎ニ本営ヲ置キシ後ハ（熊本ノ敗後ナリ）、賊ノ圧制至ラサルナク、少シク賊ノ忌諱ニ触レハ忽チ縛セラル（東京新聞紙ヲ読ミタリトテ拘留セラレタルモノアリ、推シテ可知ト云）、壱人モ賊ノ命ヲ拒ムモノナシ、

○高鍋士族秋月種世・黒水長慥外拾余人、賊ノ為メニ縛セラレ、一旦宮崎ノ本営ニテ糾弾ヲ受ケ、其後ハ日向口ノ参軍坂田諸潔ニ預ケラレタリ、其所以ハ五月三十日頃淺間艦ノ美々津ニ向テ発炮シタル節、佐賀ノ関小舟港改ニ徘徊シタル故、直チニ引揚ケ糾問シタル所、三好退蔵ヨリ頼マレ高鍋人ヲ迎ニ来リタリ、委細ハ美々津商人渡邊喜平承知シ居レリト船頭ヨリ申出テタルニ付、渡邊ヲ捕鞫シテ実ヲ得、此事ニ及ヒタリト云フ評判ナリト云ヘリ、

右ハ親シク川越進ヨリ聞ク所ナリ、外ニ高鍋士族一名官軍ニ捕ヘラレタルニ付、就テ始末ヲ問ヒシニ、川越ノ言フ所ハ大同小異ナリ、就中、川越ハ有志ノ人物ニテ其陳スル所確実、賊情之レカ為メニ了然、去ル三日ノ戦官軍ノ為メニ甚タ便益ヲ与ヘタルモノアリ、

七月五日午前認

七八　太田警部聞取書

別紙川路少将ヨリ申出候間、入御内覧候也、

但御一覧後伊藤（博文）参議へ御回被下度候也、

十年七月八日　　大久保内務卿

三條太政大臣殿

船都合ニヨリ当地滞在中別紙之通リ宇和島出張有馬三等大警部ヨリ申来リ候条、不取敢此段上申候也、

十年七月七日　　一等中警部太田正直

陸軍少将川路利良殿

高知県幡郡宿毛出張黒澤強ヨリノ書状略ニ曰ク、

昨二十二日午後半隊長荒尾征次郎中村ヨリ帰営、彼ノ

地ノ景況タルヤ、過ル二十二日ノ夜左ノ一件ヲ見出シタリ、該地ニ二三ノ巨魁来テ暴挙ヲ企ツル為メ頻リニ党ヲ募ルモノアリ云々、余ハ略ス、尤モ巨魁ノ姓名等ハ相分ラス、

右ニ付一層注意ノ義、本日モ既ニ佐伯警部補ヲ以テ該地ヘ差シ立テタリ、此段御含ミマテ申進置候也、

六月廿八日　有馬純堯

太田正直殿

粕谷司馬雄殿

鹿児島征討始末　別録一

一　鹿児島県景況「朱」一月

一　谷山登太郎陳述中原尚雄ヨリ聞取書

一　大山綱良ヨリ北島秀朝ヘノ書翰「朱」三月

一　同人ヨリ月形潔ヘノ書翰

一　外国人兵器火薬等密売取締方上海品川領事ヨリノ来翰

一　逆徒　親征ノ儀香川真一献議

一　鹿児島県景況及探偵書

一　鷲尾・島本一件書類

一　千田貞暁探偵、大山綱良書翰類

一　同上岩倉右大臣ヨリ三条太政大臣ヘ回達

一　西郷隆盛ヨリ大山綱良ヘノ手翰

一　賊徒檄文及広告写

一　前田芳利分捕薩賊児玉實美日誌（従二月十二日至三月十六日）

一　島津ヘ御口達案「朱」四月

一　品川領事ヨリ兵器取締ノ儀来翰「朱」五月

一　力石警部高知県探偵書「朱」六月

一　別働第三旅団分捕高知県関係書類及ヒ西郷ヨリ別府ヘノ書翰

一　静岡県士族堀龍太陳述書

一　日下部書記官口陳手控

一　降伏人川越進口供書「朱」七月

一　金札製造云々分捕書類

一　太田久平口供書

七九　鹿児島県景況

本月十九日出之芳墨、今月三日飛来拝読、如貴命新歳之嘉瑞千里同風万福不尽、

尊台御清栄御勤務之条奉南山候、次ニ小生依旧、馬年十九添、碌〻奉務罷在候間、此段御休意奉願候、偖御申越承知左ニ申述候、当県士族中ニ神風連・学校党・古勤王党ト申シテ、只今五ツノ（本ノマヽ）党派有之、右之内民権党ト申者、隠ニ奸謀ヲ回シ、已ニ愚民ヲ煽動シ、本月初旬愚民弐千人程集会シ、県下十三大区三小区八代郡松求麻村戸長詰所乱入致シ、少〻暴動所業有之ニ付、直ニ警部出張、戸長等ト共ニ百万説諭ヲ相加ヘ、漸〻引取候ニ付、巨魁并ニ先達候輩弐百人計捕縛、只今山崎警部・大塚警部等出張吟味中ナリ、加ルニ一昨日二十一日ニ県下五大区八小区植木村江愚民千弐三百人計リ集会、已ニ竹槍抔ヲ製シ強訴ヲ為サントセシヲ、警部・区戸長夫〻尽力説諭相加ヘ、漸ク鎮撫致候次第ナリ、尤巨魁且煽動人ハ漸〻捕縛可致見込ナリ、先ハ県下之景況御洞察被下度、少〻ヅヽ苦情ハ更ニ断ル所無之候、尚又鹿児島表不穏ルニ付、去年十二月已来再三再四探偵人ヲ差出シ置申候処、去冬一時ハ余程切迫之勢ヒ相見候処、漸ク先〻静ニ相成候処、近日中探偵人ヨリ之報知ニ、鹿児島人弐百名余リ、本月二十七八日比ヨリ来月初旬マデニ、東京カ西京カヘ上京致ス趣ナリ、何カ事ナケレバ宜敷、大ニ痛心罷在候、尤鹿児島人去冬以来銃器ヲ沢山買入レ申ハ実正ナリ、此頃中モ県下人吉地方ニ於テ七連銃ヲ買入レ候ナリ、夫レ是レニ付、当県ニ於テモ警察官ハ勿論、一同注意罷在候ナリ、何ニカ必ス遅速ヲ不問、発スルニ相違無之ト愚考仕候也、県下モ一体ニ昨冬暴動以来、人心不穏大キニ困難、先ハ御答旁匆〻、

明治十年一月二十三日

八〇　谷口登太郎陳述、中原尚雄ヨリ聞取書

中原尚雄ヨリ暗殺ノ始末承得候次第、左之通御座候、

一中原尚雄儀ハ、兼テ懇意ノ者ニ候処、帰省イタシ候旨承候ニ付、当月末方彼宅江参候処、何モ以前ニ不相変、段〻懇話ニ立至リ候故、私ニモ今一度上京致シ度候得共、旅費ニ相苦居候、其上勤場モ無之場合ニ及候テハ、

尚更困窮ノ訳ニテ、東行ヲ催シ候儀遅引致シ居候段、相咄シ候得ハ、同人申聞候ハ、当時警視庁モ盛大ニ取起スノ賦ニ候間、勤場ノ処ハ決シテ迦(逃)レ申間敷、殊ニ先度奉職致し居候訳モ有之、何モ故障ハ有之間敷、同人モ別テ力ヲ得候事ニ候ヘハ、自是相共ニ上京致し互ニ尽力可致トノ事ニ成行申候、就テハ厩跡学校之儀ハ、如何ノ景況ニ候哉ト承候ニ付、当分入校ノ人々夥敷、毎家入校致シ候処、我々共ノ如キ入校不致者ハ、隣家兼テノ交際モ、何欤隔テ有之向ニ相成、却テ嫌疑ヲ受ケ候場合ニテ、迷惑ノ仕合ニ候段申述候処、此学校人数ハ出京可致トノ説有之候、是非其意ハ可有之事ト被相考候、同人之胸算ニテハ、梅花ノ時節カト見居候旨承ニ付、今少シハ遅成候半、五月頃カト承得候、是ハ慥成処ヨリ聞届候段相答候得ハ、決シテ無疑、東京ニ於テモ其評判有之、五月之招魂祭ニ名ヲ託シ、出懸ケ可申トノ説ニ符合セリ、如此時機ニ至リ、互ニ学校外ニテ何モ同腹ノ事故、其上ハ可秘訳無之、打明シテ可談トテ、忽チ顔色ヲ変シ、膝ヲ立直シ、此一条ニ付テハ一大事ヲ被命罷帰候、是非共此私学校ナル者ヲ瓦解セシメ候策ヲ施シ候次第ニテ、各郷ニ於テハ如何ニモ手ヲ下シ安ク、是ハ掌中ニ有之候得共、庁下ニ於テハ甚タ六ケ敷、乍然此根拠ヲ不破候テハ、瓦解ニ至兼候ニ付、此処ニ於テ秘中ノ秘策ヲ用ヒ、十分可相崩之事ヲ決シ居候ニ付、第一西郷隆盛ヲ暗殺セハ、必ス学校ハ瓦解ニ可至、其他桐野・篠原ノ西士(両士歟)迄鷺候得ハ、其跡ハ至テ制シ安ク、尤西郷ニハ同人知己ノ事故、面会ヲ得テ可刺殺覚悟ニ候、勿論此人ト共ニ鷺レ候得ハ、我身ニ於テハ不足ハ無之トテ、余程思切テノ談ニ御座候、勿論桐野・篠原迄鷺サハ、跡ハヱリクツト唱ヘ、其暗号ヲ英仏ト云ヘリトテ、何モ無疑念打明シ候ニ付、今一層深ク問詰候ニハ、ケ様ノ大事承候上ハ、相共ニ身命ヲ抛テ一向振ハマリ可申、何分ニモ早ク事ヲ不挙候テハ、終ニ難仕遂時機ニ罷成可申候ニ付、速カニ可相決トテ引別レ罷帰、途中ヨリ再ヒ立戻リ、此上ハ弥臆病ノ事ハ無キ哉ト、両三度繰返シ候処、決シテ懸念ハ有之間敷、安心イタシ候様トノ事ニ御座候故、其約定ノ人々ハ慥成見居有之候カ、弥決死ノ者ナラデハ破レ可申、誰某ニテ候哉ト尋掛ケ候処、末廣直方等ノ人々ニテ、可疑人物ニテハ無之、イヅレ其人(人々)ニハ面会為致、其上屹ト大事ヲ取究メ可申トノ事ニテ、三日ヲ過

キ出会ノ儀申来候ニ付、尚雄宅へ参候処、末廣直方・高崎親章・柏田盛文出会致シ、皆〻列レ立、伊集院町家閑屋ヲ借受候テ参候処、柏田ニハ同意ノ人数募リ方トシテ、伊作辺へ差越シ候手筈等談合有之、其余格別汲入候談判モ無之、皆〻罷帰候得共、私ニハ尚雄宅へ一泊イタシ候処、東京ニ於テ決死ノ約定イタシ候園田長照・野間口兼一・末廣直方・安樂兼道・土持高・菅井誠美・高崎親章・樋脇賢助・伊丹親恒・平田才七・大山綱介・猪鹿倉保・田中直哉・山崎基明等ノ姓名ヲ記シ候手帖ヲ為見、底意顕然露洩イタシ候儀ニ御座候、

右之通相違無御座候間、此段申出候也、

丑一月　　谷口登太郎

八一　大山綱良ヨリ北島秀朝ヘノ書翰

八一ノ一　尚以別紙開キニテ差上候間、何卒御熟覧之上、是非御落手相成候様奉懇願候、以御都合船行郵便より御差被下候得ハ、一同安心之至奉存候間、呉〻奉願候、

奉謹啓候、先以尊台愈御安泰被為渉奉賀候、随テ迂生依旧碌〻奉職罷在候条、乍余事御休神可被下候、扨過日ハ英国サトー氏、同国ウルヰス氏(E. M. Satow イギリス公使館付書記官)(W. Willis イギリスの医者)態々尋訪相成候央、追〻御承知も被下候通、前代未聞ノ次第ニ立至リ、折柄其地迄陸路不案内ニ付、随行願出候故、県官福島勇七付添差遣シ候処、不測も召捕ニ相成候、乍併事情洞察為相成欤、御放免相成候由ニテ、昨一日無異儀罷帰、畢竟先生御尽力被為下事と当人より申出、厚ク奉拝謝候、然ルニ右便ニ御託シニテ、征討将軍宮云〻太政大臣殿より之御達書相達、実以驚愕此事ニ御座候、就テ今般西郷大将政府江尋問之筋有之、出京之儀先〻御県者勿論、政府并各府県各鎮台へ夫〻通知致候通ニテ、於下官も名義判然タルニ付、聞届置候末、即今ニ立至リ候テハ、全ク事実も貫徹不致、福島より之申出ニハ、専使之者皆共御県へ召捕相成候趣、警固之巡査より内話之事も為有之哉ニテ、然ル上ハ県官共ニ暴徒トカ逆賊トカ御看做シ相成居候欤、実以不得其意候、殊ニ御征討被仰出候上ハ、曲直判然之上、夫〻御処分可被為在事ト、是迄心得居候処、畢竟西郷出京之旨趣及下官より夫〻政府へ御届等之次第、全ク貫徹不致より欤、只今迄も疑惑ヲ生シ居候次第御洞察可被下候、仍テ犯罪人之形行御規則ニ基キ検事局へ受継、局長渥美氏右御処分ニ付、其地迄通行相成候間、委細同人よ

り御聞取被下、万〻事情致貫徹候様、無御見捨御尽力只管奉懇願候、右ニ付一昨日英国軍艦便ニ託シ、別冊之通太政大臣殿へ御届書差出、然ルニ既ニ惣督宮(総)追〻其御地へ御進発之(宋)(有之哉歟)哉ニ被伺申候間、甚以恐入候得共、尊台より、可相成ハ御直ニ御差上之御都合相叶候得ハ、実以国民中之幸不過之、如何様共御周旋之程奉懇願候、尤西郷大将ニ於テハ、今般曲直御裁判ヲ仰キ候迄ニテ、勿論一人一騎ニ相成候迄ハ旨趣相貫度、就而ハ下官ニ於テも是非趣意致貫徹候様、分而倚頼事故、不得止百事手切之余、先生迄も御難題ヲ奉掛上、何れ他日時ヲ待テ可奉厚謝候、此旨至急奉拝賀候、恐々頓首、

三月二日　　大山綱良(鹿児島県令)

北島秀朝(長崎県令)殿

八一ノ二

今般陸軍大将西郷隆盛外二名上京之次第ハ、兼テ御届申上置候通ニテ、既ニ去ル十五日当地発程致シ、尤通行ニ付テハ、先〻各府県・各鎮台へ通知致置候処、於熊本県ハ、未前ニ庁下焼払、剰通筋川尻迄押出、及砲撃候旨追〻報知有之、実ニ意外ノ次第ニ立至リ候、然ル処、彼地へモ去ル九日(十九)、当県征討之命被　仰出候哉ニ相聞、何共奉恐入候、乍然、西郷大将儀ハ、先般辞表差上以来、於県下厳粛ニ謹慎致シ、且数万之士族輩、自費ヲ以学校ヲ開キ、忠孝ヲ重シ、諸生ヲ教導シ、第一方嚮ヲ不誤様勉テ説諭シ、既ニ佐賀ノ暴動、曳続キ熊本・山口同断之節、県内安静、終ニ一毛ヲ不損ハ、全国ニ明瞭ナル事ニ候処、何等ノ御嫌疑アツテ、大久保利通・川路利良ヨリ私怨ヲ以スルカ、不容易国憲ヲ犯シ、暗殺ノ内諭ヲ下シ候儀、実ニ海外ニ対シ、乍恐、政府上ノ御失体ト奉存候、尤随行ノ者共、銃器帯刀ヲ以テ途中保護ノ儀ハ、暗殺ヲ被命候程ノ者、無異儀上京不相遂ハ勿論ノ事ニ而、不得止於下官も聞届置候、就テハ愈当県征討被　仰出ノ上ハ、県官且士民ニ至迄、御征討ノ御趣意被為在候哉、夫々無名ノ恥ヲ蒙ラセ候テハ、鹿児島県人民ト雖皆王民ニシテ、政府ノ命令ヲ不奉者一夫も無候得共、何分士民挙而動揺ニ立至リ候間、至急　御勅諭被成下、尤西郷大将ノ趣意も致貫徹候様、御処分被下度、此段愚誠ヲ以テ奉願候也、

明治十年三月二日　　鹿児島県令大山綱良

征討総督有栖川殿下

追テ去ル廿八日付ヲ以、太政大臣殿江ハ伺案ヲ以テ

伺出置候、

八二　大山綱良ヨリ月形潔ヘノ書翰

未余寒甚敷御座候処、愈御清穆之筈奉賀候、然者当地之次第追々御伝承被下候筈、乍去此迄寸分も事情通知不致、適々専使差送(立)候者、無法ニ長崎県へ被取押候次第、追々報知有之、乍去先月十九日太平丸ヨリ内務省木梨精一郎君同行、裁判官并検事局水尻氏出京相成候ニ付、此度西郷始メ出京之次第明瞭ニ相成候事と被察候得共、其後征討総督有栖川宮既ニ長崎へ御出張之旨彼方より懸合有之、実ニ今意外之事ニて、併国中挙て憤懣ニ不堪、併於県庁者県規ヲ遵奉之次第ハ、此節吉本・大井氏出京ニ付、何も御聞取被下、事情徹底致し候様只管御尽力奉願候、当県ニ於而ハ最早明土(冥)ニ相成ル而已ト決心致し居候得共、此末全国之帰嚮スル何ヲ以民心ヲ御定め可相成哉、此節社(こそ)真ニ天下ノ安危ニ関スル而已ならす、海外ニ対シ尚更之事ニ奉存候、諸有志中為天下呉々御尽力可被下候、中々ニ警視・内務之始抹実ニ愕ニ堪入候、何分宜敷御尽力奉依頼候也、

三月三日　　大山綱良

月形(司法省少検事)　潔様

八三　外国人兵器火薬等密売取締方上海品川領事ヨリノ来翰

本月二日御寄発之電信に、鹿児島入津船舶之事並ニ同日同県人兵器火薬等を購入する事在る哉御尋之処、右ハ別紙甲号電報之如く、内務省ニて本月廿八日相伝候内転輾電信局取継候内ニ、暗号ヲ相誤り候もの欤、或者本省訳者番号の桁違ひ致候もの欤、昨日之字ヲ運漕船と取違候哉に推察仕候、最も去月廿七日西京丸入津之節、従前鹿児島ニて傭入之学校教師スカフフル(Schepel のことか)上海人之言ふ処に寄れハ蘭人鹿児島ヨリ去月出発、此地江渡航いたし、今壱名者同県傭カワナー是ハ三菱船乗組洋人ヨリ伝承スル処ニ係ル并ニ横浜居留ブラウン従前ウヲルスホール并ニフキスセン方に勤居候ものニテ従前兵器等ヲ取扱居ル人同日同船当港江着、当日より本港兵器を探訪スル者四(組)出候ニ付、疑惑不少故に、右三名之旅寓ニ巡査を遠附シ、挙動を窺わしめ候に、スカフフル義ハ着日早々此地新聞探訪者を招き、何欤内談致候事まて忠告を得、翌廿八日ノルトチャイナー新聞局ニおゐて、別紙切抜新

聞之通載録致し、是に依て卑官臆測致候ニも、前述之スカフフル者、鹿児島より内意を受て、此地を始メ、此度之一挙なる哉、決而西郷・桐野・篠原者賊名を下すものならす、却而閣下之内命を蒙りし巡査該県ニ到リ、大事を企候事露見し、其事判然スルヲ以テ、西郷以下ハ東京江出テ堂々其事を政府江上告シ、閣下ニも其是非を伺候為に出京を計る而已、左右士族を率るハ、夫か為め行路不慮之事有るも計り難きを以て引卒す、其西郷以下曽而政府江対シ反謀之意なき歴然たる確証在るハ、鹿児島県則チ政府より置かれたるものに毫も妨を為さす、県勢依然として、西郷出発之時も県官西郷并に僱洋人も離盃に会宴し、離別の挨拶も、速に帰県を一回祈望すと、相互ニ別れたりと相見得候、

一然る後スカフフルは本月二日出船之法郵船（フランス）タイケルニてマルセイル港江向け出発致候間、若クハ欧州江如斯揚言を為す欤とも卑生推察仕候、

一カワナー義ハ今に当港に在りて、何欤奔走之儀に相見候、当人之言上に依れハ、上海江学校を建設せん等の事有り、是ハ嘘にして、果して兵器を購入するもの欤と被存候間、巡査を遠附し挙動を窺居候、其兵器を購入せんとする者も、当人等之頼を受け別人を仕役候者欤と推察被致候、乍然此地道台・海関税務司・巡捕長等にも大々打合差留候積ニ付、此地並ニ寧波・漢口等者心遣無御座、厦門・天津・香港領事江も既已厳重取調候様申遣候得共、唯香港等の如き者フリーポルト之故を以懸念不少と奉存候、

一右スカフフルは、航海学等を心得居、従前神戸辺ニ居留し居候頃ハ、水導者（水先案内）を致し、沼海航海者暗熟致し居候者ニ付、若クハ小船を借入して兵器を積み、一直鹿児島ニ渡航するも難計ニ付、別段注意仕居候、

一横浜プラウンハ教師フラウン之悴なる由、是以疑敷被存候間、注意探訪仕居候、其来由ヲ問候者在るニ、支那政府江鎮甲船を売却致度等之事を申居候、是以突然渡航セシものにして、予め清官と夫等の前談有る様ニも不被存、可疑義と愚考仕居候、前項之取締者充分相附道台等も大ヒニ予防致呉候得共、万一船舶在りて洋中等ニ而船移等致候事相聞候ハヽ、長崎県令江或者税関長江暗号電信を伝候積リニ付、鹿児島沖江現今軍艦打合、封港等之御処分未タ相附居らす候ハヽ、臨時長崎港停泊之軍艦出発、汽船・帆船・廻船之差別なく、

厳重取締候様御達置願上度と奉存候、
只今俄国(ロシア)汽船バタラツク臨時長崎港江向ケ出船ニ付、
是以探訪旁不取敢申上候、再拝頓着、
明治十年三月三日　　総領事品川忠道
大久保内務卿閣下
尚以別紙新聞切抜き之防言者、今明日中応答致候積ニ付、御含まて申上置候也、

八四　逆徒　親征ノ儀香川眞一献儀

大分県権令臣香川眞一、誠恐誠恐謹テ太政大臣三條實美閣下ニ白ス、微臣伏而鹿児島県士族暴発ノ情況ヲ察スルニ、実ニ不容易之形勢ト云ヘシ、元来同県士族ノ如キ、其慓悍強暴制スヘカラサルヤ、天下皆之ヲ怖ル、況ヤ各県不平ノ士族輩、素より其勝敗動静ヲ窺ヒ、以テ進退ヲナスノ意ナキヲ保セサルヲ乎、之ヲ前日江藤・前原等の乱ニ比スレハ、其大患タルコト論ヲ俟タス、若シ一ヒ熊本鎮台守禦ヲ失シ、彼レ兵ヲ分チ四出セハ、其禍害ノ及フ所豈止(タダ)ゝ九州ノミナランヤ、真ニ天下安危ノ秋ト云フモ溢言ニハアラサルヘシ、固ヨリ廟算至ラサルナク万ニ此事ナシト雖モ、全土ノ景況ヲ察スルニ、豈之ヲ黙ゝニ附シ深憂遠慮セサルヘケン乎、今ヤ当県士族ノ如キ一時徴募ニ応シ、唯微官カ指揮之レ従フト雖モ、従来各小藩ヲ合併スルヲ以テ人心一和セス、時勢ノ変動ニ因リテハ亦其方向ヲ誤ルモノナキヲ保証スル能ハス、微官伏テ以為、今ニ及ンテ早ク親征ノ大令ヲ発シ、大旆西ニ向ヒ蹕ヲ馬関(下関)或ハ小倉ニ駐メ、以テ六軍ヲ駕御シ玉ハヽ、彼胆破レ気沮ムノミナラス、全国ノ士民方向一ニ帰シ、各所勤王ノ義兵奮起、軍ニ西征ニ従ンコト疑ヲ容レス、而シテ四境ヨリ迫リ撃チ、賊ヲシテ腹背顧ル能ハサラシメハ、賊勢猛ナリト雖モ、天威ノ向フ所六師ノ進ム処、巨石ヲ以テ累卵ヲ圧砕スルカ如ク、一挙シテ之ヲ殲滅スヘシ、是所謂牛刀割鶏ニ類スル挙ト雖モ、其兇焔ヲ未旺ニ撲滅シテ、其禍害ヲ滋蔓セシメサルハ、非常ノ英断ニ非サレハ速ニ其効ヲ奏スヘカラス、仰願クハ、早ク大旆西発ノ御廟議ニ決セラレンコトヲ、僭越ノ罪ヲ顧ス敢テ微衷ヲ上陳ス、臣香川眞一誠惶昧死白ス、
明治十年三月四日　　大分県権令香川眞一
太政大臣三條實美殿

八五　鹿児島県景況及探偵書

(三月カ)今月五日鹿児島発ニテ吉本二級判事補・大井三級検事補ノ両人、中山(中原)以下処分方ノ儀ニ付、伺ノ為メ出京ノ途上、下ノ関ヨリ月形潔同船候ニ付、鹿児島地景況伝聞セシコトヲ同人ヨリ山田司法大輔(頼義、陸軍少将兼務)ニ転話セシ処、当地御出張ノ儀ニモ有之ニ付、内務卿ヘモ上陳候様トノ事ニ付、為其罷出候事、

一鹿児島五日発ニテ阿久根(鹿児島県)迄陸行、同地ヨリ茂木(長崎県)迄乗船、七八日頃長崎ヘ着港候由(勅使一行ニハ行違ヒト相成リシ由)、

一去月十九日迄ニ暴徒一切出払、尓後県地頗ル平穏、相撲興行相応ノ看客モ有之候様ノ勢ニテ、平常ニ不相変候由、県庁事務モ是迄通相変ル事無之取扱居候由、

一中山(原)以下ハ暴徒出払後三日程相過、裁判所ヘ引渡候由、夫迄ニ検事ヨリ及掛合候ヘトモ相渡不申由、

一裁判所ヘ受取後、裁判所長ハ兼テ出京ノ事ニモ有之、該裁判所ハ引揚ノ命令モ有之義ニ付、中山(原)以下処分方モ一向着手難相成勢ニ付、夫ニ取締及ヒ則出京候処、長崎ニ於テ該地裁判所長大塚(正男)五等判事ハ勅使一行同船ニテ薩行相成候故、是亦行違ト相成候ニ付、直ニ出京ノ心組ニテ上途神戸ヨリ出東京候由、

但シ中山(原)一派ノ者都テ強壮ニテ相変ルコト無之、只黒江某ノミ捕縛サレ候節少ミ怪我致候由、

一暴徒出払後(出陣ノ節、一人四三百発程ノ弾薬持参ノ由)別段弾薬器械等運輸候様ノ勢無之、然シ敵地同様ノ事故十分ノ捜索確聞も出来不申候ヘトモ、弾薬製造等ノ模様別段無之由、

一吉本・大井両人出京ノ際、大山(綱良、県令)曰ク、今般ノ一条ハ必(畢)竟中山(原)以下捕縛白状ノ次第ニ付、西郷以下私学校一派ノ者不堪憤懣出行候事ニテ、敢テ鹿児島全県叛反候様ノ始末ニ無之、依テ木梨帰京ノ際モ其辺十分ニ了解致置候ヘトモ、一向弁明ノ地ニ不立至、遺憾ノ次第ニ付、其辺弁解候様致シ呉度トノ談有之候旨、

一西郷以下出行ノ前、現ニ検事局等外吏江川某ナル者、薩人同行ノ義申立候ヘトモ承見不致、其他同行申入ノ者許多有之候ヘトモ、私学党派ノ外ハ一切加入不致候由、

一佐土原(島津忠寛)旧知事舎弟啓二郎ト申人、今般西郷以下ニ相応シ、島津家ヘ金子借用等ノ儀申入相成候ヘトモ、西郷以下ノ暴挙ハ一切島津家ニ関係セサル事ニテ、右様ノ

入費ニ金子貸与ヘ候様ノ儀ハ承見(知カ)致シ難キ旨、家令内田正風ヨリ断然返答候由ニテ、外容ニテハ西郷一派ノ景況ハ更ニ無之由、

一大山曰ク、何分今般ノ始末情実貫徹セサルニ付、該地ヘ出張ノ官員等有之候ハヽ、従前県庁ニテノ取扱配慮ノ辺モ明瞭ニ属シ可申ト申居候由ニテ、外見ヨリハ金穀、弾薬等県庁ヨリ輸送候様ノ形状無之趣、

一十九日西郷一行出払後ハ兵隊等更ニ不見受、別段戦地ヨリノ報告も無之、私学校党派ノ家族共ハ心配ノ様子モ相見ヘ、出行ノ節一党ノ者ハ一人モ生帰ハ不致ト覚悟誓約出行候由、該党外ノ者ハ相撲見物等平常ノ通ニ有之由、

一外容ニテハ県庁ハ平常ノ通事務取扱、島津家も一切相変ル事モ無之ニ付、内情如何様ノ目論見有之欤、警察手先ノ者も一空ニ帰シ、密探機事ニ参スル者ハ中馬・黒江等捕縛サレタル故一切不相分旨、

右様ノ始末故、勅使着薩相成候共、該地ニテ兵端相開ケ候様ノ事ハ決シテ有之マシクト申居候由、

八六　鷲尾・島本一件書類

八六ノ一　報國社条規

第一章　本旨

第一条　此社者同志力ヲ協セ上ハ宝祚ヲ無窮ニ奉持シ、下人権ヲ拡張シ皇国ノ元気ヲ煥発センヲ要旨トス、

第二章　職制

第二条　社長　一員

衆員ヲ管督シ及社務一切ノ事ヲ総理ス、

第三条　議長　一員

議員ヲ董督シ議事ヲ掌理ス、

第四条　幹事　二員

社長ニ次テ社務ヲ幹理ス、

第五条　司計　二員

社中会計ノ出納ヲ管理ス、

第六条　書記　三員

文章ヲ提掌シ簿帳ヲ斉頓シ及会議席ニ出テ決議闘論ヲ詳記スルヲ掌ル、

第七条　職員ハ凡テ公撰投票ヲ以テ之ヲ定メ、六ケ月毎ニ之ヲ替撰ス、
但シ書記ハ便宜ニ依リ之ヲ社外ニ求ルコトアルベシ、然ルトキハ之ヲ社長ノ特撰ニ委ス、

第三章　摠則

第八条　凡社員タルヲ得ル者ハ必ス連署簿ニ調印スルヲ要ス、
第九条　入社ヲ乞者アレハ幹事之ヲ社長ニ告ケ、社長之ヲ諾シ、然ル後之ヲ衆員ニ公布スヘシ、
第十条　脱社ヲ乞者アレハ幹事是レヲ社長ニ告ケ、社長之ヲ承諾シ、然ル后之ヲ衆員ニ公示スヘシ、
第十一条　社員タル者毎月金壱円ヲ出シ以テ社中ノ経費ニ供スヘシ、
但毎月始会ニ之ヲ司計ニ出スヘシ、
第十二条　社員旅行シテ一ケ月已上ニ及フ者ハ定月之出金ヲ許ス、
第十三条　臨時ノ経費ヲ要スルトキハ、其事由ヲ会席ニ詳言シ、臨席三分ノ二之ヲ可トシ、然ル後チ各員ニ醵金スヘシ、
第十四条　社中ノ諸経費ハ毎月之ヲ精算シ、表ヲ作リ以テ社員ニ公示スヘシ、
第十五条　毎月土曜日ヲ以テ社員集会ノ定日トス、
但午後一時ヲ到着ノ期限トス、
第十六条　常会ノ外衆員ノ会同ヲ要スルトキハ、社長若シクハ議長之ヲ社員ニ公布スヘシ、
但社員五名已上連署シテ臨時会同ヲ促ストキモ亦是レヲ社員ニ公布スヘシ、
第十七条　社員若シ不参スルトキハ之ヲ幹事ニ報知スヘシ、
第十八条　社員旅行セント欲スル者ハ其地方ヲ幹事ニ報知スヘシ、
第十九条　雑誌ヲ作リ社員ノ論説及ヒ会同ノ決議等ヲ刊行シ、之ヲ江湖ニ公売スヘシ、
第二十条　本社ハ東京一ケ所ト定メ便宜ヲ以支社ヲ各州県ニ設ルコトアルヘシ、

第四章　議事則

第二十一条　凡社員タル者皆議員タルノ権ヲ有ス、
第二十二条　会議ハ毎月土曜日ノ午後第二時ヲ以テ始メ第六時ニ至テ訖ルヘシ、
但シ時宜ニヨリ時間ヲ伸縮スルハ議長ノ権ニアル

ヘシ、

第二十三条　議事ハ都テ衆説ノ多キヲ以テ決ス、若シ可否同数ナルトキハ議長ノ意見ヲ以テ決ス、

第二十四条　議事ニ先チ議員各探簽シテ其番号ヲ定メ、順次ニ席ニ着クヘシ、

第二十五条　議事ノ始ニ当リ、書記前会ノ決議及ヒ論ヲ朗読シ、次ニ議長本日議スヘキノ大旨ヲ演舌スヘシ、

第二十六条　同意ヲ表スル時ハ必ス起立スヘシ、

第二十七条　題案ハ前会ニ之ヲ議員ニ示スヘシ、

但シ時宜ニヨリ直チニ之ヲ議スルコトモ有ルヘシ、

第二十八条　議員一事ヲ建議セント欲セハ幹事ヲ経テ之ヲ議長ヘ出スヘシ、

第二十九条　議員発論セント欲セハ必ス起立シテ而シテ論弁スヘシ、

但シ議長ニ向テ発論シ互ニ面論スルヲ許サス、

第三十条　二員同時ニ発論スルヲ許サス、

第三十一条　議論枝葉ニ渉ルトキハ議長之ヲ制止スヘシ、

第三十二条　凡発言ハ其声明瞭ナルヲ要ス、

第三十三条　事故アリ半途ニシテ退席セント欲スル者ハ先ツ幹事ヲ経テ是レヲ議長ニ告ケ、若其臨時ニ起ル者ハ直ニ議長ニ告ルヲ要ス、

第三十四条　議事已ニ始マルノ後チニ到ル者ハ、独リ議長ヲ揖シ席ニ就クヘシ、互ニ面語スルヲ許サス、

第三十五条　題案及ヒ論説ノ決義ヲ政府ヘ建言シ、或ハ雑誌ニ登録セント欲セハ臨席三分ノ二、之ヲ可トシテ然ル後チ之ヲ践行スヘシ、

第三十六条　議長若シ出席セサレバ臨時投票ヲ以テ仮ニ議長ヲ公撰スヘシ、

第三十七条　議員十五名以上出席セサレハ其日ノ議ヲ開カス、

第三十八条　議員已ニ席ニ就ケハ吹煙談話及ヒ妄リニ席ヲ離ル、ヲ許サス、

第三十九条　傍聴ヲ乞者アレハ書記其姓名ヲ録シ、之ヲ幹事ニ告ケ其席ニツカシムヘシ、

鷲尾鹿児島ヘ説諭ニ赴カントノ趣意ニテ、今日宮内省ヘ書面ヲ出スコトニ決定セリ、

此草案等ニ関スル者、鷲尾ハ勿論、島本・春木・六等判事岡本等ナリ、

此願書ハ昨夜鷲尾家令（未）「欠字本ノママ」田雅徳方ニテ某現物ヲ一覧ス、

報國社ノ抑発起ハ鷲尾・海老原ト云フ、

八六ノ二
報國社ト称シテ表面人権主張ヲ趣意トス、初メ芝増上寺境内池徳院ヘ集会ノ処、狭少トテ昨今愛宕下天徳寺ヘ転ス、毎月土曜日ヲ以テ会日トス、尤尾張町ニ於テ小会ハ屢〻アリ、社員ヨリ一ケ月金壱円宛ヲ募ル、社員殆ト三百名ニ至ル、今現ニ調印スルモノ百八十五名余ト云、尤モ此社ノ発起以来陰陽ノ別ハアレトモ、金策又ハ入社ヲ募ル事ニ尽力スル者左ノ三名ニアリ、

鷲尾家　島本　岡本

一島本仲道ハ昨年十一月中ヨリ浅草寺住職唯我韶舜ト示シ合、同寺会計向ノ事一切引受調理スト雖モ、金融ノ付キ兼計算ノ不立ヲ以テ、第四国立銀行社長市川好三ヘ談シ、今三万円ノ金ヲ引出サント大ニ手術ヲ旋シ居ル由、然ルニ浅草寺一ケ年会計高ハ五六千円ニテ充分仕賄ノ立ツヲ、今浅草寺ノ名義ヲ以テ三万円ノ金額ヲ借受ントスル、是レ疑団ノ一也、

社長

元一ノ宮（上総国）一万石　加納久宜（後鹿児島県知事、子爵）

会頭

鷲尾家
四條家

幹事

壬生
本山元卓

後見

高知
島本仲道（審次郎、元警保頭）
岡本謙三郎（元大蔵大丞）

元櫻井（上総国）一万石　瀧脇信敏

元岩城　安藤

元小見川（下総国）一万石　五條家
内田正學
宇田　某

八六ノ三
壱番町三番地　島本仲道

右モノ云フ、今般西郷ノ起ルヤ天下革命ノ時ナリ、有志ノ輩ハ国家ニ忠良ヲ尽サヽルヲエス、其ノ忠良ヲ尽ノ旨意タルヤ政府ヲ保護シ、内閣ノ奸吏ヲ除去スルニアルノミ、今内閣ノ奸吏ヲ除去スル一朝ニナシカタキモノアレ

トモ、素ヨリ官吏ノ進退ハ人民ノ権利中ニ存スルモノナレハ決シテ名聞ヲ誤ルノ畏レナシ、又止ヲエサルノ機会ニハ腕力ヲ用ユルモ妨ケナカル可シ、夫レ西郷ハ勢ヒヲ熊本ニ伸張シテ其身ハ却テ近日伊豫ニ来ルトノ説ヲエタリ、然ル上ハ板垣モ必ス応ス可シト、

島本仲道嘗而此件ヲ以テ鷲尾隆聚ニ計ル、同氏異議ナク応ス、蓋シ島本ノ意ハ名義人ヲ他ニ求メテ其身ハ隠ニ参謀タルノ策アルト見ユ、兵器金石ハ島本ノ周旋トナル、

尾張町新道壱番地ニ別宅アリ、島本義久持ナリ、当時北洲舎ニアルモノ北川・斎藤・廣瀬ナリ、今西ハ三重県ノ北洲舎ニ至ル、

冨士見町五丁目拾三番地　（後元老院議官、伯爵）鷲尾隆聚

右モノハ兼テ島本ト懇意ナリ、今般島本ノ説ヲ聞クニ及ンテ、異議ナク魁首トナリ有志輩ヲ集ムルコトハ拾余名ニ及フ、其議事ハ皆島本ノ意ニ出ツ、在官人モ多ク見ユ、

増上寺地中ニ会ス、土曜日午後一時ヨリ三時迄ナリ、

尾張町壱丁目四番地ヘ別宅アリ、臼井岳預ル妾ハ、元日吉町ノ妓ナリ、菊ト云フ、

池ノ端東照宮裏ナリ、　（元老院書記官沼間守一カ）沼間　某

元ト元老院ノ官員ナリ、島本ノ説ニ応ス、有志輩ヲ募集スルニ三拾余名、其内官員モ見ユ、司法ノ増田判事モ来ル、（長雄、七等判事）弓町八番地國友某、淡路丁ノ川村某等専周旋人ナル由也、

右之件々ハ昨今結盟ナラントスルノ勢ニテ未タ果サルモノ、如シ、猶委敷精索ヲ遂ケ上申ス可シ、

十年三月五日

八六ノ四

維新前ヨリ身ヲ国家ニ委シ大勲ヲ奏セシ臣多シト雖モ、中ニ就テ西郷隆盛等数輩ノ士在ル有テ撥乱反正、遂ニ維新ノ偉業ヲ翼賛シ以テ今日ニ至レリ、臣等モ亦之ニ尾セシヲ以テ戊辰己来過当ノ恩賞ヲ蒙リ、深ク感荷ニ堪ス、爰ニ前日鹿児島県下ノ暴徒征討及西郷隆盛等位記褫奪ノ大令ヲ謹承スルヤ、実ニ隆盛ノ暴徒ニ党スルヲ知ル、是レ何ノ深意ノ有テ然ル乎、蓋シ其源由ノ有ルアラン、臣素ヨリ之ヲ知ラス、然リ而シテ今ヤ堂々タル官軍之ヲ一撃ニ朴滅スルハ掌ヲ指スカ如シト雖モ、倘シ曠日弥久数旬ヲ経ルニ至レハ、彼我共ニ数千人ノ死傷アルモ亦タ未タ計ルヘカラス、然レバ人民ノ憂苦ハ論ヲ待タス、闔国ノ元気衰乏ヲ如何セン、且暴徒ノ輩他日至当ノ処分アルモ、等ク是レ同胞兄弟ノ数人ヲ

斃スノミ、誠ニ遺感(憾)ナラスヤ、此ニ於テ隆聚庸愚不肖ト雖モ、身命ヲ国事ニ委シ直ニ該地赴キ、島津久光ニ協議シ西郷隆盛ニ面接シ暴徒ニ党セシ源由ヲ尋問シ、其討論スヘキハ之論シ、其ノ匡スヘキハ之ヲ匡シ、其審決スル所ヲ具状シ、然ル後チ隆聚別ニ裁下仰クモノ有ントス、是固ヨリ不肖ノ企及フ所ニ非ルカ如シト雖モ、聊カ上ハ宸襟ヲ安シ奉リ、下ハ人民ノ憂ヲ救ヒ、洪恩万分ノ一ニ報セントスルノ微衷ニシテ、隆聚生涯ノ懇願也、乃チ懇願如ク允許アラハ幸甚シ、目下焼眉ノ際至急何分ノ下命ヲ待、誠恐謹言、

明治十年三月十日　　正四位鷲尾隆聚

宮内卿徳大寺實則殿代理

宮内大丞山岡鉄太郎(鉄舟)殿

八七　千田貞曉探偵・大山綱良書翰類

八七ノ一

過刻拝謁ノ節、御下命ノ通大山綱良ヨリノ書翰写并手続書上申文ニ相添差上候、尤書翰本紙ハ警視局ヘ相廻シ置候間、左様ニ御承知可被下候也、

第五部華族

三月八日　　（東京府大書記官、旧鹿児島藩士）千田貞曉

岩倉具視様

八七ノ二

大山綱良ヨリ封書相達候手続書

外国人コツフス(オランダ人、Coops Buggers)鹿児島県ヨリ上京ノ趣ヲ以テ、三月七日第五銀行ヘ封書相届ケ上書左ノ通リ、

東京三田洋紙漉器械所届

林徳左衛門殿

右ノ内ヘ封書上書左之通リ、

千田傳一郎様　極急用　　大山綱良

右封内ニ大臣公ヘ大山綱良ヨリノ上申文、甲号ノ通リ、外ニ千田貞曉宛書翰乙号ノ通リ、

右同断ノ内ヘ封書上書左ノ通リ、

東京三田洋紙漉所

林徳左衛門殿　急キ無事　宿許　コツフス氏ヘ托ス

右封内ニ宛名ナシノ書翰二通、丙号ノ通リ、外ニ、鹿児島県ニ於テ捕縛ノ巡査等口供書三冊、

右林徳左衛門届ノ封書、第五銀行ヨリ同人ヘ届ケ開封ノ

上、

千田貞曉

右林德左衞門届ノ封書第五銀行ヨリ同人ヘ相届ケ開封候処、千田傳一郎宛ノ封書アリ、故ニ則チ千田方ヘ同人持参候事、

八七ノ三
（甲号脱カ）
（内容は前掲「八一ノ二」と同文に付略す）

明治十年二月　日

鹿児島県令大山綱良（朱印）□（印文「鹿児島県令大山綱良」）

太政大臣三條實美殿

右　大　臣岩倉具視殿

八七ノ四
（朱）「乙号」

尚〻各学校丸テ人ナシ、女学校ノ分ハ愈盛大ニ御座候、裁判検事局孰レモ安堵丸テ御用ナシ、捕縛人名上中下五十余名ニ相及ヒ候、

一翰奉拝呈候、時下余寒甚敷候処、愈御清穆被為成御奉職奉賀候、随テ下生帰県無異儀奉職罷在、且県下中別テ静謐当分招魂祭角力興行中ニテ、人知ラヌ賑〻敷事ニ御座候、御安神可被成候、当分ノ御心持如何ノ御事ニ候哉奉伺候、偖近頃御手数ノ儀奉願上候得共、当県今般ノ次第逐一去ル十四日出立ニテ御届トシテ属差出（県属官）候処、何レモ通行所ニ無之崎陽（長崎）辺ニテ被取押候説モ有之、併シ去ル十九日木梨精一郎（内務省書記官、琉球藩内務省出張所在勤）琉球ヨリ上京ニ付、当地滞在委細国情次第旁〻示談ニテ御届篤ト同人保護ニテ候間、最早相達候半、然ルニ今日洋人帰国ニ付、一封御届致、何卒出張県官ノ内御任付差出候様御達被下度、併シ高兒ヨリ御差出尚仕合ニ存候、野村綱事真福ラニ（トカ）帰県ノ処、最早隠謀発覚取調最中ニ付、県庁ヘ掛ケ込〻自訴致シ候次第ハ、追〻御承知ノ筈ト察上候ヨリ不申上候、樺山覺之進（資紀、熊本鎮台参謀長）氏モ籠城ノ内ニテ、実ニ不愍ノ事ニ御座候、兼テ趣意ハ有之様子ニ聞得候ヘトモ、何分ニモ熊本神風連ナト盛ンニテ城ヲ取囲ミ候故、得抜ケ難ク様ニ御座候、其他御有志中ハ如何ニ御目論見ニ御座候哉、決シテ無名ノ事ハ御取止可被成候、当地ヘ御挨拶共ハ決シテ御無用ニ御座候、我等県官ニ於テハ傍観ノ外無之、只一死ヲ相待計御座候、別紙ノ趣ニテ届出候間、為御含草稿入御覧候也、林方ヘ一封差出候間、御覧可被下候、此旨要用迄御依頼如此候也、

二月廿八日

千田貞曉殿　　大山綱良

尚〻

太政大臣殿ニハ在坂ノ様ニモ相聞候ヘ共、態ト白封ニテ差上候ニ付、其御地在職ノ人ヘ宛、御出被下度、上封モ御取計可被下様奉願候也、

千田公

八七ノ五
(朱)「丙号」

過日田口太平丸ヨリ差立候間、無異儀相達候半、無覚束存シ、又〻別冊差上候間、新聞ヘ早〻差出シ相成度、最早相弘リ候ハヽ其義ニ不及候也、

二十六日

別紙千田氏ヘ至急御届書相願差遣候間、達次第御持参御渡可被給候、尤此書面ハ入御覧不苦候也、

八七ノ六
甲第九号

今般陸軍大将西郷隆盛外二名政府江尋問之筋有之、旧兵隊等随行、不日ニ上京之段届出候ニ付、朝廷江届ノ上、更ニ別紙之通各府県并ニ各鎮台ヘ通知ニ及ヒ候、就テハ此節ニ際シ、人民保護上一層注意着手ニ及ヒ候条、篤ク其意ヲ了知シ、益〻安堵可致、此旨布達候事、

但凶徒中原尚雄以下ノ口供相添候、

明治十年二月十二日　　鹿児島県令大山綱良

(以下の別紙「八七ノ七より八七ノ一一」は前掲「四ノ一、二、三、四、五」と同文)

八八　千田貞曉探偵・大山綱良書翰類、岩倉右大臣ヨリ三条太政大臣ヘ回達

(朱)「十九号」

以書状致啓上候、

聖上倍御機嫌克御駐輩被為在、貴官弥御靖寧御奉職之由遙賀此事ニ候、然ハ鹿児島県令位記褫奪御布告之義ニ付テハ、去ル五日電信ヲ以云〻御申越之次第モ有之候処、既ニ別紙写之通、同人ヨリ千田東京府大書記官ヘ之書面、并貴官宛之上申書等一覧候処、反跡顕然タルハ勿論之事(可然脱カ)ニ候条、官位記褫奪之儀ハ、速ニ御布告相成候方ト存候、

因テ書類写夫〻御廻申候、右之内大山綱良布達并通知書・中原始之口供等、印刷有之候分ハ既ニ御詳知有之候義ト存、御回不申候、

本月二日三日付両信到達、一〻披見致候、当地内閣一同奉職罷在候条、御降神可被下、戦地景況等ハ電報ニテ逐次致承知候条不申進候、

右如斯候也、

三月九日　　右大臣（岩倉具視、在東京）

（三条実美、在京都）太政大臣殿

（以下の内容は「八七ノ一、二、三、四、五」と同文）

八九　西郷隆盛ヨリ大山綱良ヘノ書翰

迫出降（隆）藏外壱名御遣被下、来船（勅使来鹿）之次第承知いたし候、乍然事柄分兼候得者、彼方策も尽果候而、調和之論ニ落候欤、畢竟敵方ニ於テ熊本落城ニ相成候而者、各県蜂起可致ニ付、全力を熊本ニ相尽シ、於是、事破れ候ハヽ、もふハ無致方、それ切との策相立候義、慥ニ聞得候ニ付、即彼之策中ニ陥リ、此籠城ヲゑさニいたし、四方之寄手を打破リ候得ハ、此処ニて勝敗相決可申、地形ト云ヒ人気ト云ヒ、其所を得候ニ付、我兵も一向此処ニ力ヲ尽候処、既ニ戦モ峠をやり過し、六七分之所ニ打付申候、今や孟（武）奔ありとも、再ヒ戦勢ヲもり返候期有之間布、余程敵之兵気も挫ケ候ニ付、少シ此間ニ息ヲ休ヒ（メ）油断為致候而、又一策廻シ候目算ニ相違無御座候間、決而狸ニたまされさる義肝要之事ニ御座候、征討総督之令書、先日差上置候、全ク暗殺ハ打消シ候趣、合戦ヲ幸ト致候旨ニ相見得、可悪之巧ニ御座候、然ル上ハ何分曲直分明ならされハ、鎮撫もへちまも無之、断然条理ニ不相戻処御尽力可被成候ハヽ、最初より我共（等）ニおゐてハ勝敗を以論し候訳ニてハ無之、本〻一ツニ条理（衍カ）ニ懲れ候見込之事ニ付、能〻其辺ハ御汲取可被下候様、偏ニ企望いたし候也、

三月十二日　　西郷吉之助

大山綱良様

追啓候、別紙当県之兵隊、協同隊より探偵差出候処、探得候形行申出候ニ付、差上申候、大概四方之探偵も同様ニ御座候、久留米・柳川・肥前辺よりハ追〻報知有之候、

九〇　賊徒檄文及広告写

九〇ノ一

別紙賊兵之檄文并広告書二通、熊本区戸長ヨリ天草戸長ヘ廻通致来候趣ヲ以、同地戸長当県ヘ参庁届出候間、同地警備方等之儀ハ、南ノ関出張石井内務書記官ヘ照会致置候、依テ別紙写之通、為御参考御届仕候也、

明治十年三月十七日　　長崎県令北島秀朝

内務卿大久保利通殿

九〇ノ二

今般義兵大挙之掲示及ヒ鎮撫兵設置候儀ニ付、掲示共別紙差越候条、書写之順次至急御廻達有之、原本ノマヽ願ハ各村共速ニ張出行届候様御取計有之度、此段急々及御廻達候也、

三月十一日

第一大区各戸長惣代
第一大区四小区戸長
大木　淑愼
第一大区々長
第三大区兼務
中路　新之
第二大区々長
坂梨　惟修

九〇ノ三

国体懼ルヘク痛嘆スヘキ者アリ、加之万民ヲシテ愁苦セシムル所以ノ者ハ権姦、天皇陛下ノ聡明ヲ壅蔽スル者アレハナリ、臣子ノ情分豈坐視スルニ忍ンヤ、今吾輩義兵ヲ挙、姦ヲ除カント欲ス、衆庶安堵シテ擾ル、勿レ、疑フ勿レ、

明治十年二月　　熊本隊中

九〇ノ四

広告

此際ニ当リ兇悪ノ徒有志ノ名ヲ仮リ市在ニ懸ケ、金穀等押借致候様子ニ相聞、不埒之至ニ付、漸次各区ヘ鎮撫兵設置候筈ニ候得共、差寄之処右様之挙動有之候ハヽ、捕縛之上最寄之鎮撫兵屯所ヘ可届出候也、

明治十年三月九日　　熊本本営

九一　前田芳利分取児玉實美日誌（従三月十一日至三月十六日）

（実）「此間子行文体ヲナサス、文字不分明ノ処有之トモ、一切原文ノ儘謄写、其実ヲ人セザルヲ旨トス」

明治十年丑二月ヨリ

日　誌

三月廿四日植木ノ賊畧ヲ乗取候節

警部補　前田芳利分取　　兒玉實美

二月十二日　　雪

晩一時出立イタシ六字伊集院ニ着、休足ス、横井ニ着ス、道神（水上カ）ヨリ列ヲ立出縣（かけ）、我カ隊ヲ別レ、第六番隊加治木病院掛被　命、明日八字出足、加治木ニ趣ク縣（かけ）、種子島吉兵衛様両人六番大隊附医員武井順介・國生喜介・永田祐右衛門・金田傳助・岩瀧藤太・田上早苗・川北厚藏・尾ノ上吉次郎・内藤泰介・折田誠助・森賢省・鎌田正彦・木佐木雲囁・前田玄石・山口圭太郎、

十四日　　雪

午前九時縣発足、午後三字加治木ニ到着ス、

十五日　　大雪

午前八字加治木発足、積雪路ヲ埋ミ辛労無限、溝邊ノ内石原ニ休シ中喰シ路程三里、石原出立シ横川ニ到着午後二字、路程弐里、暗語梅カ松、

十六日　　晴天

午前八字横川発足、湯ノ岡（尾）中喰、大口ニ午後二字半ニ到着ス、路程六里、谷カ岡、

十七日　　半雪

今朝七字大口町発足、肥後境積雪四尺位路ヲ埋メ、誠ニ以艱難辛労無限、亀山峠ノ難儀言語ニ難尽、肥後ノ内石坂ト申処ニ昼飯、水俣ニ午後四字到着ス、路程八里、雪カ山、

十八日　　大雪

午前七字水俣発足ス、雪降四方不弁、道ヲ埋ム、昼飯佐敷、午後日奈久ニ到着、路程十里、

十九日　　半雪

午前八字日奈久町松本岩三郎宅ヲ発足シ、八代川ヲ打渡リ、川辺ニ茶店アリ休息ス、見物ノ貴賤群ヲ為スリ（セ）、途中砲声二ツ聞ケリ、且熊本方角ニ向テ黒烟天ニ鏤ケリ、決シテ出火ナラント途中談ス、二軒ノ茶店アリ、是ニテ

昼飯ス、午前二字半小川町一刀儀七ノ宅ニ到着ス、山カ谷、路程七里、

熊本鎮台ハ籠城ノ由、谷少将(干城)ハ我家内城中ニ引具シ城ト共ニ斃ル、ノ決意、樺山少佐(資紀)ハ初メ局外論ヲ唱フト雖モ、即今ハ谷ト共ニ籠城ノ由、城ノ内外地雷ヲ埋メ用意ノ由、広島鎮台及ヒ東京巡査四百名繰込タル由、広島台(鎮台)ニハ大坂兵人夫ノ由、中根氏報知セリ、連中ハ五百名アル由、

廿日　晴天

午前八字小川ヲ発足ス、地形全ク平地ナリ、麦盛長アリ、進テ宇土(うと)ノ町宣宗寺ニ於テ昼飯ス、町中全ク動揺シ人民家ヲ片付遁去レリ、台兵ノ火ヲ掛ント欲スルノ勢アリト云フ、川尻町泰詳寺ニ宿営、午後一時到着ス、路程六里、

廿一日　晴天

今朝台兵巡廻シ、暗夜道迷ヒ川尻迦(本ノママ)レニ参リ砲発セリ、国分兵隊配番ヨリ追掛、台ノ生捕、地雷糺問ス、台兵伍長旧囚州士族ノ由白状ス、スナイトル十六挺・喇叭・時計分取ス、第二番大隊午後九時到着ス、夕方池田・長谷場様ヘ行違ヒタリ、夕方又ゝ一番大隊着ス、明日進軍スルノ賦、本営ヨリ通ズ、

廿二日　晴天

今朝一時ヨリ川尻出発ス、中途ヨリ先軍ノ砲声ヲ聞ク、我兵両道ニ分ル、敵兵城内ニ砲台ヲ築キ防戦ス、終日ノ戦ヒ都テ難戦ス、実以甚シ、戦死拾余人・手負四五十名、医院混雑ス、手負川尻ニ送ル、終夜進軍ス、勝敗不分明、夕方ヨリ病院宮寺村小笠原内ニ直ル、

廿三日　晴

今日同断進軍ス、最敵軍勢ヒ盛ン、台場ヲ厳ニス、今日之戦味方ノ戦死手負数多アル、夕方砲台ニ行テ見物ス、日夜ノ戦、兵士弱ル、

廿四日　半(本ノママ、天)

今日同断(不分明)ニ防戦ス、今夜今夕田崎(本ノ儘写ス)村ヘ直ル、夕方佐土原ノ兵弐百余名切込ノ賦、別府氏ヨリ聞ク、昨日小倉台(鎮台)ヨリ助兵ノ来ルヲ五番大隊(着陣ス)三小隊ニテ防戦勝軍ノ由、半ハ打取タル由ヲ聞、未詳、

廿五日　晴

今日同断、城ヨリ遁レ出ルヲ捕ス、糺明ニ依テ殺サル、今朝川尻ニ差越、本病院ニ出頭ス、然ルニ山口一二(不分明)戦死持越居ル大井宗之助ニ行逢ヒタリ、如何トナレバ植木戦ヒニテ進軍シ、木ノ葉ニテ平地新助手負ス、昼過立帰

リ朋友ニ達スルノ考ナリ、春日村ニ指越シ皆留主(守)、兒玉小源太足痛ンテ引ノ相咄シ大砲ニ差越見物ス、夕方帰リ掛、宮地源吾宿ニ立寄、一二事件談シテ帰ル、

廿六日　晴

今日同断、加治木三小隊繰出シ、木ノ葉戦ニ差渡難戦スルノ評判ニテ、武田勇藏所ヘ差越居ル折柄、繰出シニ相成立帰ル、尤種子島氏ト同道向(本ノマヽ)エ町ニ差越居帰リ掛リノ事、

廿七日　晴

今日木ノ葉(元ノマヽ)難戦(引崎)、手負死過分アル由報知ス、依テ拙者植木・木ノ葉ニ加右衞門報知ニ指越候処、昨日ヨリノ戦ヒ苦戦、夥敷戦死手負過分、病死半方引直ルヲ報知ス、且拙者共木ノ葉ニ着阪一泊ス、熊本ヨリ植木三里、木ノ葉(元ノマヽ)弐里、山鹿三里也、

廿八日　晴

今朝木ノ葉ヨリ出発、植木ニ帰ル、植木ニテ病院衆ニ行逢タリ、病院本所ヨリ東広住村堀田ト云者所ニ宿ス、今日又〻木ノ葉ニ敵配出シタルヲ報ス、依テ兵隊繰出ス、加藤彦□(アキ)郎ニ逢ヒタリ、一昨日加治木六番隊敗軍、小隊戦死拾七人、手負不数知、敗軍三小隊ナリ、山鹿ハ勝軍ナリシ由、太尉・中尉・少尉打取タル由、針打三(銃脱カ)百挺分取タル由、玉弐万発余、城攻撃十二ドリン臼砲参(マヽ)リ由報知アリ、

高瀬ニテ加治木隊ハ越山氏ノ由

三月一日　曇

今朝ヨリ城攻撃ノ由、昨日百余人繰出シタル由、大尉初都テ打取タル由、兵粮乏敷由、米買ニ出タル由、一昨日山鹿戦ヒ味方少〻、敵死人百廿八人、一所ニ打レタル由、桐野氏大将タル由風評アリ、拙者共滞在ナリ、高勢(瀬カ)ノ敵大勢ナリシ由、大砲指遣シニ相成タリ、今日攻撃アル筈未実否不詳、

二日　曇

今日城内攻撃、二十ドリン昨日打ダメシアリ、今日ヨリ攻撃ノ由、拙者滞陣、國生君本病院ヘ引迫リ、一昨日池端諸兵衞小隊引列打出候処、味方ヨリ打取タル由伝聞ス、高瀬・山鹿之一条不分明、然レトモ勝利ニ相違ナシ、昨日島津学校四千人余川尻ニ着陣ノ由、長州兵弐千名九州地着陣ノ由、

三日　晴

今朝ヨリ木ノ葉台場ヘ敵兵寄掛、撃戦夥敷砲声烈敷処ヨリ、加右衞門召列報知ニ指越候処、敵兵余程ノ勢ヒ、田原辺差越見物致シ居候処、敵多勢味方少勢、不得止事正

面ヨリ引揚候処、双方ノ横矢モ同様、決而(元ノマヽ)惣而引揚(元ノマヽ)ニ為相成筈と考、引取タリ、然ルニ敵兵付入、木ノ葉ヲ焼打、田春(原)坂迄押寄タリ、夕方拙者共田春(原)ヨリ引取タリ、戦死手負多数アリ、途中猪ノ原休太(本ノマヽ)ニ行逢ヒ、宮城源五殿フクラヨリ口ニ貫通ノ由伝聞、驚入タリ、然ルニ宿陣ニ立帰ル処手負取込居タリ、終夜田春(原)坂戦争烈然タリ、立岩モ同断タリ、

四日　雨

今朝モ同様タリ、手負戦死多数タリ、拙者共一旦引取交代之談合イタシ、午後三時頃ヨリ田崎ノ様引取タリ、然ルニ中村氏ヨリ本営ニ指越談合ノ上、又ヽ夜中植木ノ様立帰タリ、其日夜モ撃戦アリ、山鹿防戦アリシ由、然レトモ勝利ノ由（今日木留ノ戦、余程勝利追打イタンタル由、打取弐百名、味方手負戦死少ノ有ノ由、途中ニ而聞、今日夕方味方横矢打タリ、敵兵狼狽タリン由、打取モ多アリン由聞）、

五日　雨

今朝同断、最城内防戦余程兵粮乏敷由、近日落城ニ決したタル由風聞アリ、今日之戦、余敷(程カ)烈敷手負少ミアリ、敵少シハ引シ由、応兵山鹿ヨリ参リ横矢ニ而屯兵ヲ追落シタル由聞、

六日　晴

昨日戦ヒ続キニテ木ノ葉撃戦アリ、勝敗決セス、十一字頃ヨリ切込ニ相成、敵余程打取タリ、三度ノ切込弐百名切殺シタリ、味方戦死手負二十余名、味方ノ勢余程付タリ、今晩も合戦アリ、先日勇吉戦死之由聞、驚キタリ、

七日　晴

今朝モ同断戦アリ、戦死手負四拾余名アリ、病院混雑ナリ、今日モ切込ミ敵百余名切倒シ、分取過分アリ、味方モ先生組桐野御舎弟・西郷御子息・同御舎弟・篠原君即死ナ（菊次郎、戦死せず）（小兵衛、二月二十七日戦死）（国幹、三月四日戦死）リ、兒玉強之丞(助)・越山君深(休蔵カ)キナリ、其外不詳、不遠内落城ノ由、大坂モ土佐兵追落シタル由、長州モ起リシ由、肥前モ同断ナリシ由風聞アリ、今日ノ手負六拾余名、

八日　晴

今日城内・田原・山鹿・木留戦同断、余程田原敵ノ勢盛大ナルヨシ、今日手負戦死過分人員不詳、手負丈ハ療治丈ハ四拾名位ナリ、援兵参リシ由伝聞アリ、

九日　雨

今日モ同断、就中田原強兵ノ由、最味方新兵ニテ不計策故、手負戦死モ過分ニ有之、敵兵モ過半切倒シタル由、夜中十時頃兒玉佐七手負、宮地治郎・(不分明)太次衛列越療治ノ上一泊為致、川尻ヘ指越候事、

十日

今日モ同断、尤熊本ヨリ応援四小隊参リシ由、戦ヒモ最中ナリ、勝敗決セス、苦戦難筆紙ニ尽シ、実以甚シ、今日戦争手負拾弐人有之、戦死分ラス、

十一日　曇

今日戦十時頃ヨリ戦烈敷相成、敵ヨリ攻撃ニ掛リ、国分兵堅守之場押掛リ破レント欲スル処援兵参リ防止メ、切込ミニ相成、敵味方接戦苦戦甚シ、手負モ過分、即死病院療治丈ケ八拾余名、即死不分明、植村彌治郎深手ニ而参リ、永田・森君ハ山鹿ニ被参、夕方帰院ニ相成病院混雑無計、別府氏(晋介)帰県之由、用事ハ分ラズ、今日之切込ニ敵ハ味方ニ二倍増ノ即死手負アリタル由、銃類分取限リナシ、敵ノ台場ヲ乗取候得共、味方ノ要害ニ悪敷シテ引取タル由伝聞ス、山鹿ハ双方対陣之由、在所之人民随服人三手付クル由、城内モ兵粮乏敷、依テ毎夜十名余ノ捕縛アリシ由、是ハ兵卒ノ由、兵粮ハ納米ニ粥(本ノマヽ)ノ由伝聞セリ、

十二日　晴

今日戦ヒ同断、十時頃ヨリ山鹿進撃アリシ由、手負即死モアリシ由ニテ、粂山新平川尻ヨリ帰掛ニ立寄呉候処、原五眞助モ元気ノ由伝声アリ、依テ出先ノ様差越ニ付見送ニ植木迄指越候処、右手負ニ行逢ヒ鍋田ト云フ所ニテ進撃ノ由、敵余程打取タル由ノ噂ニテ安堵ス、夫ヨリ新平ト一盃傾ケ相別ル、又〻戦場ニ指越見物ス、折柄轟木ト云フ所ニ砲声烈敷相聞ヘ居処、国分台場ヘ五ノ四援兵ニ指越防戦致シ居、然ルニ国分隊ヨリ敵ノ後口ニ相迫リ時ノ声ヲ掛ケ候処、敵ヨリ又筒ヲ振向ケ後テ打掛ケ候処ヲ右台場ヨリ援兵、敵ノ砲台ニ切込ミ接戦ス、夫ヨリ敵ヲ破リタル由、手負ノ御方ヨリ聞ク、今日ノ手負二十余名アリ、熊本城モ余程烈敷砲声相聞ヘタリ、

十三日　半天

今日戦同断也、城内モ無余日落城ノ由ニテ、本営ヨリ報知各隊ヘ要心スルノ伝報アリシ由ヲ聞ク、今日戦双方台場ヨリ発砲ノミ、二時頃ヨリ山口・岩淵同伴轟木ノ様見物ニ指越、夕方帰院ス、終夜ノ戦アリ、最今日本営ヨリ各病院合併ニ相成、植木病院ニ鎌田・原田氏被参候事、

十四日　晴

今朝八時頃ヨリ不分明佐山田国分堅メノ砲台ヘ、敵ヨリ進撃ニ相成、味方無勢ニ而防兼、引ント欲スル折柄各隊ヘ援兵ヲ乞テ引取タリ、既ニシテ援兵右ノ砲台ニ馳付候処、味方既ニ引取、跡越ニ相成、敵ヨリ包打致シ難戦ス、已

ニシテ切込又ハ炮戦、砲台ハ敵ヨリ乗取、壱町位モ引取タリ、手負戦死過分アリ、今日手負人員九十余名、其内池田正義君手負タリ、是ハ浅手ナリ、長谷場壮健ノ由、山鹿モ戦アリシ由、城モ戦アリ、終日烈戦アリ、今日永田・森・内藤・岩瀬君川尻病院ニ被参タリ、我院営混雑ナリ、

十五日　晴

昨夜ヨリ憤戦続キ貴島清六小隊引列、一昨日川尻ニ着陣ノ由ニテ、昨夜田原ノ様援兵ニ参リシ由、今日ハ味方ヨリ進撃切込ノ由ヲ聞ク、夕方撃戦アリ、貴島隊凡五十間ヨリ切込ニ相成、双方手負・即死夥敷、敵ノ砲台ハ乗込候得共、要地悪敷所ヨリ元ノ通リ引取タリ、手負療治四十八名ナリ、終夜ノ防戦アリ、国ニ東京ヨリ勅使并巡査参リ取締ノ由ヲ聞ク、貴島隊都合千弐百求磨(球)ヨリ参リシ由、之ヲ田原ヘ指向ケラレタル由、山鹿ノ方モ撃戦アリシ由、是モ勝敗不詳、

十六日　晴

（以下欠）

九二　島津ヘ御口達案

大臣殿ヨリ嶋津(珍彦・忠欽)ヘ御口達按

西郷隆盛等国憲ヲ犯シ叛迹顕然タルニ依リ、征討仰付ラレ候次第ニ付、建言之趣御採用可相成筈無之、難及奏聞候条、其儘致返却候、朝廷ニ於テ公平至当之御処分相成候ハ不待論事ニ付、其辺掛念ニ及ハス、且当節ニ至リ鹿児島県下ニ於テ、賊徒等尚募兵等之挙動ニ及ヒ候趣ニ相聞ヘ候、付テハ県下之儀も夫々御着手相成候ニ付、帰国之上右之趣父子(久光・忠義)ヘ可申聞候、

四月廿二日午前九時十分発

三條太政大臣　岩倉右大臣

島津建白之儀ニ付、昨夜一分御答申入候末、今朝両参議示談致シ候処、総而御同意之趣ニ候、此段更ニ申入ル、

九三　品川領事ヨリ兵器取締ノ儀来翰

四月廿二日午前十二時五十分発、同日着

西京　三條太政大臣殿　　東京　岩倉右大臣

三七。ケノ八。ノ三。クソウナ三。ノ八。ニヲヨ。ウ八

ム六。タキム。子一。ニテゴヘントウノコト。ゴライダン。ノ。ジョウジョウ。ツ六。ナ三。子九。二八。ワ四。ゴドウイ。ム九。ン。ウ三。ウヲタツシアリタシ。シカシナガラ。イチウ六。ンノコトニツキミヤウチヤウリヤウ。七四。ル七。ノウエショウゴジウニジマデニサラニイチ。ム五。ウウ六。ンリョ。モヲシイルヘシ。

鹿児島県士族等暴発事件ニ付而ハ、本港ニ於テモ兵器取締向注意可仕ハ、下官之職掌ト相心得、已ニ御沙汰以前本港道台ヘ照会及置候折柄、三月三日閣下ヨリ電信ヲ以テ軍器取締向厳重注意可致旨之御達シヲ蒙リ、尚其節外務卿殿ヨリモ、右御達之趣ヲ遵奉セヨトノ御命令有之、弥以謹承仕候、尚更ニ馮道台ヘ新敷及懇談候処、皇国之儀ハ他各国トハ自ラ訳違ヒ、親睦ヲ厚フスルハ固ヨリ論ヲ待ス、将ニ御依頼モアラハ、清政府ヨリハ軍艦ヲ出シテ、御加勢ヲモ可致程ノ念慮ニ有之、況哉軍火取締之如キハ勿論、如何ニモ厳重処置可致、尤モ弥着手スルニ於テハ、自然商業上ニ妨ケスル事ナレハ、万一居留之西洋人等ヨリ、苦情之起ルモ難計ト雖モ、之レハ本道之権力ヲ以テ右等ニ関セス、我政府之為メ充分取締ヲ為スヘシト断然引受ケ、然ル上ハ向後本領事ノ照会アラサル兵器ハ、本邦ヘノ輸出ヲ許サル、コトニ海関税務司ヘ申談シ、且沿海之密商ハ勿論、本道ノ管轄外ナレトモ、懸念スヘキヲ寧波迄之取締モ相立、実ニ特別之注意ニ預リ候段ハ、太政府之御都合ハ勿論、随而下官ノ職務上ニ於テ尽所之確乎タル取締相立、既ニ此程大蔵卿殿ヨリノ御命令ニ依リ、兵器物項購入之時ハ、則チ小官ヨリ道台ヘ照会及ヒ、而シテ其売主ヨリハ紙面ヲ以テ海関ヘ申出テ、双方夫々手数ヲ重ネ、其末稍ク船積之運ヒニ立至リ候程之儀ニ有之、右体厳重取締相立候段ハ御安念被下度、就而ハ万一向後清国々内ニ於テ何等非常之事アル内ハ、亦皇国ニ於テモ、粗右之手続ヲ以、諸開港場ニ於テモ、注意不致候半而ハ難相成哉トモ被存候間、此旨曽而御含置被下候方ト存候、将亦前陳之通、于今厳重取締モ相立居候義ニ付、弥平定之後ハ、右取締方解釈之儀、右道台ヘ報知之都合モ有之候義ニ付、其節ハ速ニ御沙汰被下度、且右体馮台之厚意ヨリ、已ニ大政府之御都合トモ相成候義ニ付、同氏ヲ始メ其他右ヘ関係注意セシ諸官員江ハ、相当之御挨拶トシテ御送与物御遍送相成候様致度義ト奉存候、尤モ右等之件々、此程外務卿殿ヘハ、惣テ書類相添詳細具上仕置候儀ニ付、必

ス御協議モ可有之ト奉存候間、予テ右之趣閣下へも御含マテ此段上申仕置候也、

明治十年五月八日　　在上海　総領事品川忠道

内務卿大久保利通殿
工部卿伊藤博文殿　閣下

尚以本文上申之手続ハ、公然申立之上輸出之取締ヲスル迄ニシテ、又二月廿六日外務卿殿より電信ヲ以テ、同日長崎出帆ノ西京丸乗組之外国人承諾之旨ニテ、鹿児島註文ノ銃器弐万挺上海倉船ニアル由御達有之、尚又翌廿七日ニハ、長崎県令ヨリ鹿児島傭外国人西京丸へ乗組、上海・香港等ニ於テ兵器ヲ購入スル旨之電報モアリ、依而同船入港後、旅客寓居ハ勿論、乗組之者ヲモ夫〻取調候処、鹿児島購入之兵器之事ハ承知セス、然レトモ長崎ニテ伝聞スルニハ、蘭人（スケツプルカ）スカフ、ルハ、該県ヨリ西京丸出船ノ両日前ニ着シ、亦同船ノカワナノモ一時該県へ傭ワレタルヨシ申聞、将タ従前横濱ニ在リテ、兵器ヲ取扱居候ブロウント申者、西京丸船ヨリ着港イタシ候得共、是以テ外務卿殿ヨリ御達ノ鹿児島購入兵器取扱フ者欤ト推察セラレ、依テ此三名ニハ巡査ヲ遠附シ、其挙動ヲ窺ヒ候折柄、港内ニアル兵器売買上非常ニ価額騰貴シ、殊ニ俄国船ハタラツク号ハ長崎往来ヲ始メ、亦同国スクーネルアリウト号船ハ僅ニ五拾二噸積ニシテ、三月一日突然長崎ヨリ入港ス、此時乗組之者取調候処、鹿児島人一名、水夫頭之体裁ニシテ乗組候由、殊ニカワナーハ従前水導者ヲ本業ニ致シ居候由ニテ、呉淞江迄汽車ニテ往来セシコト両度有之由、巡査長ヨリ告知有之、弥以疑惑ヲ生シ、若シクハ彼等申合セ港外ヨリ出テ兵器積移シスルモ難計、旁以三月三日右バタラツク号船長崎へ向ケ開帆ニ付、船内捜訪ノ為メ本館ノ官員一名可為乗込之処、曽而人少事務差支候ニ付、本港居留罷在候宮城県士族小野寺常治ナル者適宜ノ人物ト見込、同人へ示談之上、一時日給ヲ以テ相傭、委曲申含メ該船へ為乗組、長崎へ出発午後同所へ滞在為致置、件〻探偵方心得サセ、将亦右之外本港居留地内密商等之予防方ハ、タイド・ウヘノトル江相頼、兵器売買上現況取調候処、余リ行届過キ候程ニテ、一時ハ大ニ面倒モ出来、尤モ右ハ穏ニ事済ニハ相成候得共、総而上海領事管轄内ハ寧波ニ至ル迄、悉皆取締ヲ附候義ニテ、何様密商ヲ為サントスルモ、

到底行ハレ難キ事ヲ信用罷在候、前述之アリウト船モ竟ニ積荷不裝儘ニ開帆致候、実ニ今般之事件ニ付、軍火之取締筋ハ百事下官ノ意ノ如ク貫徹仕候義ニ付、閣下於テモ御満足被下度、就而ハ前陳之小野寺常治ナル者、一時相傭使役候義、一体伺之上可取計之処、何モ非常之場合急務ニモ有之、無餘義少官専断ヲ以テ取計候儀ニハ候得共、右傭給其外旅費之義ハ、一時当館金之内ヲ以テ繰替渡ニ致シ、余ハ追而取調更ニ上申モ可仕、其節右費用ハ御送附被下度、此段モ御含迄併而申上置候也、

九四　力石警部高知県探偵書

八十綱本年五月二十一日、高知県下ノ事情視察ノ命ヲ奉シ、二十二日ヲ以テ庁下ヲ発シ、廿四日高知県庁下ノ逆旅ニ投宿シ、三日間滞在シ事ヲ終ヘ、廿八日ヲ以テ彼地ヲ帰発シ三十日帰庁ス、其高知ニ到ル翌二十五日東奔西走、暗ニ景情ヲ探クルニ、一モ怪ムベキ廉ナキガ如シ、廿六日立志学舎ニ到リ塾長大石某ニ面シ、尋テ立志本社ヲ訪ヒ幹事小谷正允ニ面シ、頃日片岡健吉ノ携帯シ上京ナリシ建白ヲ借覧センコトヲ求ム、小谷氏諾シテ八十綱ニ通読セシム、后チ之ヲ写書シ猶事状ヲ聞クニ、物皆穏カニシテ常ニ異ナルコトナシト、其詳悉ノ如キハ下文坂(板)垣氏面晤ノ段落ト事同シケレバ今茲ニ贅セズ、

廿六日曽而一面ノ識アル立志社員当時高知県八等属学務ヲ奉セル河本正路ヲ訪ヒ、板垣氏ニ八十綱ヲシテ面セシメンコトヲ求メ、午后車ヲ同シテ板垣ノ邸ニ到リ謁ヲ乞フ、速ニ面スル処アリ、八十綱満胸ニ積結スル疑件ヲ一〻述ヘテ、以テ事ノ信否ヲ審聴ス、其概意左ニ記ス、

一目今ノ立志社論ハ如何ント問ヒタレバ、答ヘテ社論ハ載セテ建白ニ尽スト、建白ノ要領タル、施政ノ順序ヲ誤マリシ条件ヲ前段ニ詳載シ、尋テ施政ノ順序ヲ誤マリシモ必竟輿論ヲ用ヒズ、常ニ専断事ヲ処スルアリ然ラシムト、依テ民撰議院ヲ開テ、　天皇陛下ノ尊栄ヲ増益セントスルニ文ヲ結ヘリ、

建白書ハ別ニ記シテ、以テ各賢ノ一閲ニ供セントス、

一該建白ハ成果ヲ立トコロニ期サル丶ヤ、儻シ万〻一急速ニ採用成ラサルトキハ、別ニ含有セラル丶議之レアルト問フニ、答テ国家内外多事、此時ヲ以テ然リトス、故ニ建白ヲ携ヘテ登京セシ片岡健吉ハ、宮内卿ヘ奉呈

シ落掌ニ至レバ速ニ帰郷ノ筈ナリ、此際強テ成果ヲ立トコロニ見ントスルニアラズ、敢テ又干戈ニ訴ヘテ腕力ヲ試ントスル等ノ意念ハ、目今毛髪ダモ之レナシ、然ルニ頃日内務トヤラヨリ、探偵トシテ入リ来ルモノアリ、此人ヤ軽躁事ヲ農商ノ間ニ探リ、農商ノ談スル処ノ件々自己ノ想像ヲ添ヘ、高知士族ハ不日干戈ニ訴ントスル形跡アリ、其証ヤ片岡氏ガ上京前、家財ヲ悉ク市人ニ売却シ、立志社ガ草鞋数百足ヲ購求シタリ、猶且社中ニ軍馬二十頭ヲ買ヒ入レタリ抔ノ数件ヲ記シ、以テ探偵ノ命ニ復シタルコトアリシ由、夫レガ為メ世上高知士族ハ、已ニ反意ノ顕跡タルモノアリ抔、種々妄評ヲ下セシモノナラント、其事固ヨリ更ニ形跡ナキニアラザレトモ、片岡ハ不用ノ二三品ヲ近隣ノ商家ニ売却セシコトアリ、草鞋ノ如キハ社員中ノ一人商ヲ営ナムモノアリ、懲役所ニテ製シタル物ヲ店頭ニブラサゲントシテ、僅ニ三十足程ヲ買求メタルコトアリ、馬ノ如キハ、頃日立志学舎ノ生徒ニ運動ヲサセシメントノ主義ニテ、馬二頭ヲ購求シテ学舎ニ繋キ、以テ生徒ニ乗ラシムト、

一護郷兵ノコトヲ問ヒタルニ、答ヘテ、抑々護郷兵ノコトタル、万々一西陲ノ暴徒高知郷士ニ襲来蹂躙スルニ至ルトキハ、整備厳粛ナル海陸軍固ヨリ之ヲ防守シ、人民ヲシテ毒焔ヲ免カラシムルハ信シテ疑ハザル処ナレトモ、独リ海陸軍ニ之ヲ依頼シ、人民ハ傍観シテ不可ナキニアラズ、熊本県下人民ノ如キ自尊ノ気風ニ乏キヨリ、看々家財ヲ失シ妻子兄弟東西ニ離散シ、狼狽周章至ラザル処ナク路頭ニ倉皇シ、終ニ其安スル処ヲ知ラザルニ至ル、豈鑑ミサルヘケンヤ、茲ニ於テ彼ノ轍ヲ踏マンコトヲ恐レテヨリ、護郷ノ論起リタル所以ナレバ、暴徒ノ襲来スルトキ己レヲ守ルノ談ヲ成サントス、然レトモ目今内乱ノ際ナレハ、四五人会合シ其事ヲ談スル、或ハ嫌疑ヲ蒙ランコトヲ思ヒ、念ノ為メニ県庁ヘ護郷兵団結云々ノ届ヲナセリ、然ルニ県官之レニ令スルニ団結ノ文字穏当ナラザルヲ以テス、依テ再応県庁ヘ護郷ノ主意ヲ弁解シ、団結ノ文字ハ容易ニ掲載シタル訳ニテ、固ヨリ兵隊ヲ編製セントスル意ニアラザルヲ述フルニ、県官又主務ノ省ヘ申禀云々ノ指令スルヲ以テ、立志社ニ於テハ図ラズ事重大ニ渉リ根元ノ主意ヲ失シタリトテ其挙ヲ中止セリト、然レトモ一時ハ少壮輩大ニ激動シ、稍モスレハ事変ニ至ラント

スル景情アリシヲ以テ、板垣氏痛タク大義ヲ示諭サレ、衆皆感シテ示後人心甚タ静穏ナリト、板垣氏等民権拡張ノ宿志ハ金鉄ノ如ク、素ヨリ巍然トシテ抜ク可ラズ、其之ヲ実地ニ試ミントスルヤ、尤急進ナルモ人民ヲシテ自主独立ノ何物タルヲ了得セシムルニ至ルハ、必シモ事ヲ遠永ニ期セサル可ラサルヲ以テ、現ニ近日新聞誌二種ヲ発兌セントシ、又庁下二ケ所ニ寄席ヲ設ケ、社員十名計、交ルゝ出席シ、輿地誌略、自由ノ理、民間雑誌、佐賀電信録、熊本・山口ノ乱抔ヲ取交セ講談シ、独立ノ気風ヲ養成セントス、猶且立志学舎ノ生徒学業大ニ進捗シ、目今ノ教員学力ノ限リヲ生徒ニ授ケタルニ因リ、頃日東京慶応義塾ヘ教師ノ雇換ヲ照会シタリト、又以テ急進ナルモ事ヲ遠永ニ期シ、美果ヲ佗年ニ見ントスルノ情実ヲ見ルニ足ル、

一熊本城ニ在ル谷陸軍少将ヨリ、高知表ニアル旧武官片岡等江宛、此際高知ニ於テ義兵ヲ募リ、以テ朝廷ニ献セシメンコトヲ照会アリ、其文書ハ石井陸軍少尉(高知)ヘ、熊本ヨリ携テ高知ニ赴ク航路、都合アリ偶ゝ坂府ニ到ル、然ルニ坂府滞在北村陸軍中佐(高知人)モ谷少将ノ意見ヲ果サント、石井ト倶ニ高知ニ到リ義兵ヲ献シ海陸軍ヲ裨補シ、西陲ノ賊ヲ討タンコトヲ、立志社及ヒ其外士族ニ議シタレトモ、応スルモノナシ、北村中佐ハ板垣氏ヲ訊ヒ、同シク義兵ノ件ヲ談論アリタリト、板垣氏之レニ答ヘテ、生ガ一般ノ士民ヲシテ谷少将ノ求メニ背カシムルノ意念ハ万ゝ之ナク、故ニ求メニ応セントスルモノ、社外ハ勿論社員タリトモ之レアルトキハ、幾人ナリ同行ス可キヲ述タリト、前日壮士兵募集ノ令アリシモ、未タ一人モ応スルモノナシト、蓋シ斯ク応セザルハ、各社毎ニ多少今日ノ政府ニ向テ、平常不平ノ廉ナキニシモ非ルヲ以テナリ、

一西郷ノ挙兵ハ如何ト問ヒタルニ、板垣氏答テ、西郷ノ挙兵ハ無論其名分ヲ誤リ、実ニ賊ノ賊タルモノニシテ、江藤・前原ノ数等下級ニ位セリト、如何トナレバ江藤・前原ハ一敗地ニ塗ルト雖トモ、各其国家ノ為メニ憂ヘノ切ナルニ出ツ、西郷ノ如キハ、仮リニ政府カ刺客ヲ薩地ニ派遣シタルト見テ論ヲ立ルモ、一身一己ノ為メニ幾万ノ兵ヲ挙ケテ天兵ニ抗シ、為メニ衆庶ヲ苦艱セシムルハ、私憤ヲ洩発シタルモノナリト云モ不可ナキガ如シト、

一向後西陲ノ賊徒倍ゝ跋扈、中国路等ヲ蹂躙スルニ至レ

バ、官ニ乞テ固ヨリ海陸軍ヲ裨補シ賊ヲ討ツ処アラント、

右之外猶数条伝承スト雖、禿筆ノ能ク及フ処ニアラザルヲ以テ、要領ヲ摘載シ以テ同僚ノ諸君ニ報道ス、又以テ該県地今日無事静穏ナルヲ推測スル処アレ、

本庁第四課

明治十年六月一日　　九等警部力石八十綱

各警部御中

九五　別働第三旅団分捕高知県関係書類及ヒ西郷ヨリ別府ヘノ書翰

九五ノ一

別紙川路少将ヨリ総督本営ヘノ報告并西郷ヨリ別府(晋介)ヘノ書翰写、山縣参軍ヨリ差越候ニ付、為御参考御廻申候条、御落手相成度候也、

六月十五日　　西郷陸軍中将(従道、行在所陸軍事務取扱)

大久保参議殿

伊　藤参議殿

九五ノ二

昨五日当団兵、鬼岳(田水)攻撃ノ節、賊所持ノ書類別紙一綴リ分捕候処、右書面中探索ノ事多クハ信スルニ足ラス候得共、警視局巡査服調製ノ事ハ略ホ其実ヲ得タルニ近ク、然レバ高知県士桐野ヘ面談云々等ノ事ハ信ナルヤモ難量、且ツ鹿児島県下ヘ通船差止メ之儀ハ、兼テ御達ニ相成居候得共、尚ホ一層厳重御取締相成度儀ト存候条、不取敢此段上申候也、

水俣在陣

別働隊第三旅団司令長官

六月六日　　陸軍少将川路利良

征討参軍山縣有朋殿

九五ノ三

高知県ノ両士ヨリ大坂辺ノ景況承リ得候形行、左之通ニ御座候、

西京ハ護衛兵只騎兵アルノミニテ、外近衛等ノ者モ無之由、乍然役人連ハ皆ナ巡査十名斗リ宛ハ警衛有之候由、

大坂并ニ神戸等ノ病院傷者相重候故、名古屋表ヘモ差送リ候由、是ヲ以テ手負夥多ナルヲ知ルヘクト之事、

募兵ハ至極困却之様子、只タ紀州・加州ノ両国ノミ募ニ応シ、兵ヲ差出候得共、其他ハ決シテ応スル者無之由、

三条家ヨリ旧知事ヲ相招キ、旧君臣ノ情議ヲ以テ、士族共募兵ニ応シ候様尽シ可呉段被相達候処、越前春嶽侯(松平慶永)ヨリ、旧君臣ノ情義ヲ以テ、士族共募ニ応シ候様尽力可致筋、可有之時勢ニテハ無之訳ニ御座候得者、御受難致旨返答相成候処、是非御受致シ呉レ候様、強テ被相達候ハヽ、迚モ御即答出来難クトテ其場ヲ引取リ、旧知事中集会之上評議有之、斯ク迄ニ相達候ニ付テハ、夫形リ捨テ置ク訳モ参リ兼ネ候間、兎角家令共ヨリ、朋友ノ情義ヲ以テ通知致候様為取計可申ト之返答、相成候外有之間シクトノ事決着致、其段旧知事中ヨリ返答ニ被及候由、然処高知県ニ於テハ家令県内迄ハ参ラルヽ由ニ候得共、其辺之義ハ一言モ相達セザル由、外ニモ大体右等ノ振合ニテ可有之由、

高知県武市半平太等国事ニ斃レ候人数三十余名、近頃御賞典相成候処、壮士輩先友ヲ吊(弔)フヲ名トシテ、一統集会ヲ催シ、却テ好機会ヲ得テ勢揃ヒ相成候由、右等ノ策略ニテハ、高知県壮士之志操ヲ鑠シ候儀、難相成趣キニ相聞ヘ候、

奸軍ノ勢ヒハ日ニ相衰ヘ、近来捕縛之患ヒ薄ク相成候ノミナラズ、莫大ノ金ハ仕捨、且ツ募兵ハ不相調、大ニ時日ヲ費シ候故困却相極リ、何トカシテ佳戦ヲ謀ント役人中大狼狽、今形ニテハ不日瓦解ニ至ラントノ事ナリ、

高知県人藤好静、村松政克日向表ニ於テ奇兵隊(大隊長野村忍助)江面会、事情委細承リ届候得共、尚ホ桐野(利秋)氏迄ハ是非面会致度ト之事ニテ、奇兵隊ヨリ案内相附ケ、十七日江代(熊本県)江参着候テ、右両人ヨリ申立候趣キ左之通リニ御座候、

土州ニ於テ是迄及遅延候次第何共申訳無之、定テ因循モノト思召被下候半、実ニ是迄延引致シ候モ余ノ義ニ無之、銃器弾薬ノ乏シク如何共難致処ヨリ、斯迄相延ヒ罷成申候、乍然此方ヨリモ何レトカ御知セ可有之モノト、壮兵輩モ遺憾ニ存居候位ニ御座候段申来候旨、桐野氏ヨリ県令布告之使節差立□□□□御座候、

ニ相心得居候段被相答候処□□□□御座候、

夫ヨリ事ヲ挙候始終巨細ニ被相談候ニ付、頓ト安堵致候ニ付、速ニ罷帰リ勃興致、互ニ気□ヲ相□□候様都合可然候ニ付、此上ハ一刻も早ク帰県可致□時□罷在候テ相立チ候由ニ御座候、幾度モ因循ハ不致候間、其儀ハ合点致呉候様申述候由、

高松ノ分営ニハ台兵二小隊位ヒ操(繰)込居候故、深ク探索致候処、弾薬等ハ一切不持込、只タ彼レギリニテ参リ居候

由ニ御座候得共、速ニ逃ケ出ス廻シ者ニ相見ヘ申候、
高知県ヨリ奸軍出役致居候長官之者ハ、大体相斃レ候由、
山路モ八代ニテ斃レ候由ニ御座候、現在差知レ居候者モ
縣元ハ一切為相知不申由ニ御座候、
高知県相発シ候得者、四国ハ大体勃興ノ勢ヒニ及候得共、
松山ダケハ致シ方無之ト云事ニ御座候、
高知県ノ沖合ハ時々軍艦相廻リ来リ、始終動静ヲ相窺ヒ
居候由、
□長崎茂木(もぎ)寄留人池田太兵衛、鉛買上ケトシテ今日
当港□ニテ話シ□
東京巡査二千長崎江下リ二日滞在、其内一千六百名当廿
六日八代江(やつしろ)出兵之由、跡ト四百名ハ県下江分配之由、右
八代出兵、水俣ヘ下リタル由、近日出水山(いずみ、鹿児島県)手ニ進入ノ兵
ナラン、
長崎ニテ泥染木綿ノ夷服薩兵ノ袖印シ□付ケ、至急六
千枚調方之由、定メ薩(テ)兵ニ紛レ支度用ト之由、
川路氏ハ水俣在陣ニテ、鹿児島ヨリ頻ニ来陣催促アレト
モ日ノ延ニテ即今水俣之由、
肥後ヨリ追々手負ヒ送リ来リ、五日跡モ二度ニ三百五十
名積来リ、又今日三百名来ル日配リ之由、当今ノ手負多
ク深手トノ話、
先頃ロ魯国江使節至リ、榎本(武揚)帰朝、政府ト論ヲ立テ、近
日下向、同人下リ候筈之由、是ハ是非西郷様江談判事件
有之噂サ候由、
病院浅手十五日前帰隊ニ付脱兵多ク有之ニ付、近頃ロ何
方ノ取締リムヅカシク成リタリ、
長サ一間半三筋立ノ長大砲製造之由、此丸ハ一時間火消
滅不致仕掛ケ丸トノ話、
薩兵豊後進入、出兵ハ三千名ニテ追々近国ヨリ附属ニ相
成候兵八千位ヒ、凡ソ近頃ロ一万千位ヒニ成リタルトノ
説ノ由、
土州板垣モ五千募リ、豊後別府演秋ト云フ所ニテ八日位
ヒ前進戦争有之トノ説、
□天草魚売リ水俣ヨリ話シヲ聞取リノ雑説□
天草江ハ水俣ヨリ脱兵多ク故取締リムヅカシク成リタリ、
水俣本営袋ヘ転陣、総勢四千ノ内二千ハ方々進入ノ戦兵、
跡ト二千ハ守衛ノ兵ト定ム、若シ戦兵敗走ニテ引揚ケ乗
艦之節、守衛必死ヲ極メ後リシテ防守用之由、□
土人ハ軒別一人宛在宿ノ令、□
小舟ニテモ出入禁止セシハ乗艦用橋舟ニ致候由、□

携曰砲出水口引揚ケ候ハヽ、久木野口頗ル難儀ノ様子ニ御座候間、是迄同砲ヘ相附ケ置候保護兵拾五人相添ヘ、至急彼ノ方御差出シ可被賜候、若シ罷リ帰ラス候半、破竹三番半隊ダケ御遣シ賜ハ決尾相成候半、速ニ引揚ケ来候様御申付可被賜候也、

六月三日　　仁禮新左衛門

上場出張
中隊長
御中至急

九五ノ四

西郷ヨリ別府ヘ差遣候書翰ノ趣ニテ、新納泰助（旧知事付、当分桜島ニ在リ）弟某賊軍ヘ書ヲ磯巴ニテ面会候節写来候由、先日鮫島氏御遣シ被下、御容体相尋候処、未タ御全快ト申程ニハ不至段致承知候、乍折角御愛養偏ニ奉希候、陳ハ昨日高知県人桐野ノ処ヘ来訪候由、今日態と高城十二被差遣、委細承候、土州ニ於テハ只今迄遅延致シ、定メテ因循者ト御考ノ筈、実ニ銃器弾薬ニ乏シク、夫故如此次第ニ押移リ候間、最早直様出発可致、決テ因循不致トノ事至極差迫リ居候由、第一打合ニ為参候者ト相考候、右ノ土州人ハ早ク国元ヲ発シ漸ク相参リ候由、日向ニテハ奇兵ト相逢ヒ委敷情実ヲ承リ候ヘトモ、是非桐野氏ヘ面会致シ帰リ度トノ事ニテ、彼路ヨリ案内相付ケ、江代（熊本県）迄参リ候、乍併最早跡ニハ発興致候哉モ不被計トノ事ニ御座候ヘトモ、松山并丸亀等ノ人数竹田ヘ攻撃ノ事ハ少モ噂無之、四国中ニハ松山辺モ発スベキ萌無之、其他ハ大体可相発トノ事ニ御座候、三備ノ所モ憤発ハ致居候由ニ御座候ヘトモ、突出候様ノ事ハ出来間敷趣ニ御座候、尤日州ヘモ此方ヨリ差出置候斥候、昨日相帰リ候処、奇兵隊ニハ去ル十六日ニ竹田城ヲ攻落シ、先鋒隊ニハ重岡ト申処ニテ巡査ヲ追散シ、生捕モ致候趣申来候、彼ノ角力隊ノ説ハ全ク虚説ト相見候、如何ナル間違ニ御座候哉、少シハ疑ヲ生シ申候、現ニ砲声ヲ聴キ候様トハ全ク極メ切リタル説ニテ、相違ノコトト相考居申候、高知県ヨリ姦軍ニ相加リ出役致居候テ長官タチノ者ハ皆斃レ候由、既ニ相知レ居候者モ一切県元ヘハ知ラセ不申由ニ御座候、山県（山地カ）モ出軍致候処、是レモ相斃レ候由、北村ハ非役ニテ大坂辺ヘウロツキ居候様子ニ相聞申候、片岡謙吉（健）ハ不相変確乎トシテ罷在、弾薬ノ世話方ニテ上坂致居候趣ニ候、其外両人ヨリ承候ヘトモ形行ハ別紙ニ記シ置候間、御覧可被下候、此旨御容体伺旁奉得御意候、

五月十七日

九五ノ五　都ノ城辺ノ景況

一都ノ城ノ旧主ハ島津某（元三万七千石トカ）元来賊徒ニ関セス、県下騒擾ノ際ヨリ其旧臣当今士籍ニ入ル者百名余ト共ニ櫻島ニ転居ス、○初メヨリ賊徒ニ与シ出軍スル士族モ若千名アリ、其数詳カナラス、出軍後跡ニ残ル者ハ近来賊ノ強迫ヲ恐レ、去月末本月初メヨリ櫻島ヘ立退キ来ル者数人ナリ、賊ハ去月末頃ヨリ、都ノ城辺人民所有ノ錫ノ器物ハ多少ヲ不問、都テ取揚候由、是ハ銃丸ノ用ニ供スルト云フ、士族ノ外農工商トモ壮年ノ者ハ強迫シテ募兵スト云フ、近日来金并梅干ノ有高ヲ取調中ト云フ、都ノ城辺ハ別段屯在ノ兵ハ昨今迄見掛ケズ、三四名ツヽ巡廻強迫ス、其魁ハ人吉口ノ輜重方ニテ前田一介ナラント、人吉口ノ賊ハ必敗北スルナラント、五六日前ヨリ都ノ城辺頻リニ風説アリ、然ルニ一昨日彼地ヨリ櫻島来着ノ者ノ説ニハ既ニ人吉破レタリト、其故如何ト問ヘハ、粮米等是迄北方ニ運送スルヲ逆ニ南方ニ運フト云、近況ニテハ都ノ城近傍小林郷（宮崎県）辺ニ拠ル所存カ、頻リニ胸壁ヲ築クノ風聞アリ、○細島ヘ軍艦数艘着クト云、其島ハ賊徒三十名余ニテ守レリ、着艦ノ趣ヲ聞クヤ一二千ノ兵ヲ増加スト、

六月五日所聞

九六　静岡県士族堀龍太陳述書

書記官聞取書

静岡県士族　堀　龍太（元海軍少尉　昨日辞職）

六月廿一日東京発程、東海道駅ニ於テ有志輩トモ談之次第有之、三十日西京着、鳥取人唯武連トハ在職之頃より交際モ深ク候処、同人トモ見込之次第少ヽ異ナル義有之、依テ　太政大臣公ヘ委詳建言仕度御旅館江参上候処、書記官江可申出旨指揮ニより参上致シ候、唯武連（従道、行在所陸軍事務取扱）ハ西郷中将殿之指揮ヲ以テ、壮兵募集之事ニ尽力、現ニ在阪致シ候事、

建言致度趣意ハ

第一

勅令ヲ以テ休戦之儀被　仰出度候事、

此訳者追討ノ兵士多クハ中国以東ノ人ニシテ、炎蒸之

時ニ際シ西国之気候ニ不慣、滞陣弥久遂ニ病死之者多カル可キ欤、愍然不可言憂慮之余リ恐多キ言ニハ候へとも、

天皇陛下之御勅諭被為在候ハヽ、数万之生霊塗炭之苦ヲ免レ可申ハ必然ノ事ニ有之候、

朕薄徳ニシテ治世ノ方ニ乏シ、上祖宗ニ対シ下蒼生ニ向ヒ何ノ面目アラン、依テ位ヲ次帝ニ譲リ、天下ノ蒼生ニ謝セントス云々、如此明詔アラハ誰カ其　聖徳ノ至仁ニ感セザラン、西郷隆盛ノ如キ天地不可容ノ罪人ナリトモ、素より

天皇陛下ヲ敵視シテ今日ノ挙動アルニ非サルハ人ノ知ル所ナリ、明詔一トタビ下レハ、感泣以テ命ヲ奉シ休戦致スコト必然ナラン、賊将西郷ヲ誅セシ後チ、天下ノ事如何可有之欤、大ニ治不治ニ関係スル一大事とも考候ニ付、右之詔勅有之候ハヽ、休戦ハ勿論人民安堵之域ニ至ル可ク、又誰カ譲位之事ヲ甘奉スヘキ、必ス止メ奉ル可キハ論ヲ俟タザルナリ、然ルトキハ海外各国トモ其

明天子タルコトヲ認メ、賛賞止マザルニ至ル可シ云々、

第二

最早戦地之情況今日ニ至リ、休戦ノ詔勅被為在候訳ニハ至リ兼候御廟議ニも可有之欤、然ルトキハ精兵ヲ以テ大暑ニ至ラサル前鎮圧可致見込之事、其訳ハ現ニ諸道之官軍西郷隆盛何レニ在ル欤ヲ明知セス、徒ラニ賊軍ニ迫リ候義、甚タ策ノ得タル者ニアラサル可シ、依テ官軍少シク退去シテ徐ニ諸賊ニ当リ、其強弱ヲ試ミ最モ強ナル処ヲ以テ隆盛ノ陣ナルヲ知リ、一挙鏖殺セバ必ス西郷ヲ得テ三十日ヲ出テズシテ平定ノ功ヲ奏スル必然ナル可シ、併シナカラ実地ニ就キテハ自ラ又考ル所モアルベシ（西郷隆盛最後ノ戦争ハ必ス、熊本城ニ向フ可クト被考候）

第三

高知県紛紜之事ハ決テ御煩慮ニハ及ハサル可シ、其訳ハ該県ノ士風多クハ自主自信ノ甚キ者ニテ各々所見ヲ異ニシ、決シテ人ノ指揮ニ甘ンセズ、到底事ヲ起スノ議協ハザル必然ナリ、縦令事ヲ起スコトアルモ必ス自ラ敗ル、ニ至ルナリ、依テ御懸念ニ及ハサル事と勘考仕候、

右者書取ヲ以テ上言可仕候処、意ノ如ク書スル能ハス、口上ヲ以テ申上候、

今日直ニ下坂、

中ノ島三丁目十七番地成井芳次郎方
西照庵止宿
静岡県士族
堀　龍太

唯武連モ此方ニ止宿罷在候、

九七　日下部書記官口陳手扣

一藝州募兵ノコトハ船越衛上京、大久保参議并西郷中将ヘ申談シ、廣島県士ノ内前年実地戦争ヲ経タル者ヲ、壮兵ノ名義ヲ以テ召募ノ見込ニテ、過日西本清介ヲ廣島ヘ遣シタリ、猶事宜ニヨリ船越モ同地ヘ参ルヘキ見込、兵員ハ凡千人ノ積リノ由、

一十津川募兵ハ五百人乃至ハ百人位ノ見込ニテ、即今大坂鎮台ヨリ士官数名教授ノ為メ十津川ヘ参リシ由、

一岡山募兵ハ凡一大隊ノ見込、右召募ノコトヲ命セラルヘキタメ、同県士杉山某ヲ伊藤参議・西郷中将ヨリ呼出シニナリタル由、

一高知県近況急ニ暴挙等ハアルマジ、各党ノ議論建白ノ方ニ決シ、建白ノ趣意政府採用ナケレハ幾回モ建議ニ及ヒ、傍ラ兵器等ノ準備ヲナシ、弥事不行ノ場合ニ至ラハ兵力ニ依ルノ見込ナランカト察セラル、○最初出来シタル建白書ヲ止メ、再ヒ吉田源太郎ナル者執筆建白書ヲ作リシ由ナレトモ、未タ世上ニ流布セス、

一五月卅日比、長崎県下茂木ニテ、賊壱名捕縛糺問セシニ、デ子マルカ領事ヘ依頼、金策并弾薬買入等ノコトヲ謀リシ者ノ由、尤事ハ不遂又領事ヨリノ書面等モ無之由、此賊鮑根ヨリ天草ヘ渡リ長崎ヘ到リシ由、

一鹿児島賊徒ノ内帰順ノ意ナル者無キニアラサレトモ、川村・川路等ヘ降ルヲ恥ルノ情アルカト被察、依テ総督宮鹿児島御巡視アリタキ旨川村ノ見込ニ付、東久世熊本ヘ巡回ノ節、右之次第山縣参軍ヘ申入、山縣参軍ニモ同意ノ由、

右二項東久世侍従長ノ話

九八　降服人川越進口供書

九八ノ一
豊後口賊ノ降伏人及捕縛人ノ口供ヲ得タルニ付、別紙写ヲ以テ高覧ニ供シ候、勿論此分ハ六月廿日頃迄ノ日州路形状ニシテ、其後鹿児島連絡ノ通ジタルニ付テハ、

定テ日向路ノ形勢モ一変シタルコトト存ジ候得共、試ニ御参考ニ供シ候、却説重岡口ノ戦モ七月一日ヨリ昨日ニ至ル迄防戦進撃虚日ナク、官軍奮進勇闘嶮ヲ犯シ要処ヲ突クト雖モ、賊兵陸地峠（カチヂ）・赤松峠・梓峠ノ三路ニ拠リ必死固守スルノミナラズ、時ニ深山幽谷路ナキノ地ヨリ迂回兵ヲ以テ襲ヒ来リ、重岡・小野市ヲ襲撃セントスルノ勢アリ、官軍（野津大佐・堀江中佐・野崎中佐・奥少佐等ナリ）各処ノ警備ヲ厳ニシ、木浦山ヨリ陸地峠迄ノ間凡十里余ノ諸山ニ連絡ヲ取リ戦闘線ヲ張レリ、七月三日四日ハ梓峠ノ一面頗ル劇戦、官軍死傷少ナカラズ、賊亦許多ノ死傷アリシ模様ナリ、其後ハ昨日まて格別ノ戦ナシ、三日ノ戦ニハ賊大炮ヲ黒土峠（梓峠ノ北ニアリ）ニ掛ケ頻ニ射撃シタリ、其後ハ官軍ノ砲撃ニ圧セラレ賊大砲ヲ発セズ、遊撃隊（和歌山兵）一大隊重岡ニ着シタリ、谷少将モ一昨日重岡本営ニ着セリ、

右豊後口戦状ノ概略御報知申上候也、

十年七月七日午前認　　三好退蔵

大久保公閣下

九八ノ二

降伏人日向国清武（旧飫肥藩領ノ属地ナリ）住士族川越進（旧宮崎県十五等出仕タリシモノ）口供

聞取書

一自分ハ鹿児島暴徒ノ挙動無名義ニシテ、朝憲ヲ憚ラザル義ニ付、初ヨリ出兵随行不同意ノ旨、書面ヲ以テ区長野村某へ申出、其後ハ士族中ノ会議等ニモ一切関係セス、郷地ヲ去テ宮崎へ出デ、専ラ養蚕ノ業ニ従事シタルニ付、委細ノ事情ハ知ラサレトモ、旧飫肥藩士族惣計三中隊程熊本へ向ケ出発シタルコトハ承知セリ、隊長ハ伊藤直記・川崎新五郎・高橋祐兼等ニテ、惣指揮官ハ薩人伊藤新八ナリト聞ク（一中隊ノ人員凡百五拾人ナリ）、

一其後三月初旬ト覚ユ、薩人貴嶋宇太郎日向ノ兵ヲ募リタル節、飫肥士族小倉處平新兵ヲ卒ヒ（其数ヲ詳知セス）、都ノ城迄繰出シタル処、柳原勅使鹿児地ヘ下向セラレタルヲ聞キ、人心纏リ難キニ付一旦飫肥ヘ引返シ、既ニ出兵シタルモノモ呼返サントノ説起リ、使ヲ熊本ニ馳セテ其意ヲ通シタルニ、熊本陣中ノ議論ハ確乎トシテ変セス、其使者ニ要スルニ後兵ヲ募リ来ルヘシ旨ヲ以テシ、若シ此事ヲ聞カザレハ生還スルヲ許サズ等ノ勢ニテ、使者タル者モ止ヲ得ス之ヲ諾シテ返リ、追々新兵ヲ募リ熊本へ送リタリ、

一熊本敗北ノ後、飫肥兵一中隊ハ日向宮崎へ引取リ、一

中隊ハ美々津ヘ留マリ、一中隊ハ細島ヲ守レリ、

一熊本敗軍後ハ薩人モ追々日向路ヘ入込、宮崎支庁ヲ軍務本営トシ、桐野利秋之ヲ督ス、尤桐野来リシハ五月中旬カ下旬ナラント覚ヘタリ、其以前ハ鮫島元薩人ニシテ佐土原ノ区長タリシモノ宮崎支庁ニ来テ万事ヲ指揮シタリシト聞キシガ、其後何クニ行キシヤ知ラス、

一五月下旬頃ヨリ中旬ナリシヤ確ト覚ヘズ日向一般壮兵ヲ募リテ兵隊ヲ編製セントス、其他金穀徴集等総テ圧制ニ出テ、賊勢当ル可ラサル模様ニ付、自分モ此度ハ迚モ難免ニ由リ、寧ロ賊ヨリ迫マラレザルニ及ンデ其意ニ応シ、他日ヲ待テ計ヲ為スニ如カズト決意シ、親友山下源次ヘ深意ヲ告ケ置キ自ラ出テ、賊軍ニ加入シタリ、其深意ト云フハ、賊ヨリ疑ヲ受ザル中ニ賊ニ与ミシ、機会ヲ窺ヒ官軍ニ投入降伏自首スベシトノ目的ナリ、

一五月廿九日飫肥兵ノ大小荷駄方トナリ、宮崎ヲ発シ佐土原・高鍋ヲ経テ延岡ニ来リタリ、其後飫肥兵ノ日向路ニ散在シタルモノ追々延岡ニ集マリ、次第ニ豊後ニ繰込ミ、自分ハ六月廿二日始メテ延岡ヲ発シ、熊田・葛葉等ニ止宿シタリ、

一六月廿四日赤松峠ノ戦ニモ、機会モアラハ官軍ニ投入セント企テ居タレトモ、大小荷駄方ニテハ其都合ヲ得難キニ付、兼テ知音ナル飫肥兵惣括小倉處平ニ依頼シ、探偵掛ニ転シ情勢ヲ窺ヒ居タリ、

一七月一日ニ至リ、賊軍赤松峠ノ官兵ヲ襲撃スル筈ナリシガ、守備厳密ナルヲ偵察シ、議ヲ変シテ八戸ヨリ梓越及木浦ヲ進撃セントノ企アリ、奇兵隊弐拾四中隊ノ内六中隊ヲ陸地峠（カチヂ）ニ、四中隊ヲ赤松峠ノ方面ニ残シ置キ、其余ノ兵ヲ大挙シテ梓峠進撃ト決議タルコトヲ慥ニ承知致タルニ付、此事ヲ早ク官軍ニ報告センガ為メ陸地峠辺ノ探偵ニ名ヲ託シ、葛葉ニ於テ小倉處平ニ別ヲ告ケ同処ヲ出発、陸地峠ノ番兵ヲ欺キ、夜ニ入ルヲ待テ山中ニ潜匿シ、翌二日午前三時頃ヨリ窃ニ山ヲ下リ、官軍ノ哨兵線ニ近キタル処、哨兵両人ニ差押ヘラレ柚ノ原本営ヘ拘引セラレタリ、

一豊後口ノ賊数凡弐千七百人位ナルベシ、司令長官ハ薩人野村忍介ナリ、飫肥兵ノ指揮官ハ薩人川上彦一ナリシガ、過日戦死シタリ、

一賊等米穀ハ充分所持スレトモ、弾薬ニハ乏キカ如シ、然レトモ高岡・佐土原・延岡等ニテ製造シ、追々送リ来ル由ニ付、其数ノ多少確知スルヲ得ス、尤鉛ハ先般大阪ヨ

リ買下シタル分ト、日向地方ニテ求メタル分（網ノイワヲ等ナリ）以テ弾丸ヲ製スルト聞タリ、大阪ヨリ鉛ヲ買下シタルハ如何ノ手続ナリシヤ委細詳知セス、

一延岡ニ於テ大炮二門ヲ製造シタリ、其製方及種類ハ承知セス、小銃ハ多分エンピールナリ、或ハ火縄モアリ、丸デ銃器ヲ持タザルモノモアリ、

一賊兵奇兵隊弐拾四中隊（一中隊凡八十人位ナリ、或ハ百名若クハ百五十人平均一中隊百人ト見テ可ナランカ、未詳カナラズ）ノ分ニ佐土原・高鍋ノ兵アリ、其員数ハ知ラサレトモ合計三百人ニ満タザルベシ、竹田・中津等ノモノモ加ハリ居ルト聞キタレ共、其数幾許ナルヲ知ラズ、

一日向路ニ在リシ精兵ヲ挙テ豊後口ニ出デタルガ如シ、故ニ宮崎ヲ発スルトキハ本営護衛ノ兵凡三十人モアリシナラン、桐野ハ旧宮崎県権令福山健偉ガ住セシ官宅ニアリタリ、六月廿二日迄ハ延岡ニ来ラズ依然宮崎ニ在リト聞ク、西郷モ此間宮崎ニ来リタル評判ナリシガ、其実否ヲ詳ニセス、

一薩ノ正義隊（其数二千人アリト云）三田井口及延岡ニ来ル筈ナリト聞キタレ共、六月廿二日迄ハ来ラズ、池上四郎左衛門モ延岡ニ来ル積之由、是亦到着セザリシ（池上ガ戦死セント云フハ虚説ナリ）、

一延岡ノ兵ハ多ク三田井口ニ在リト聞ケリ、其他ハ延岡海岸等ノ守兵ニ充テシナラン、然レトモ延岡ニ在ルハ佐土原ノ一中隊ノミニシテ、其他ハ新募ノ農兵等ナルベシト思ハル、

一細島・美々津ハ高鍋兵ノ守ル所タリ、飫肥兵二中隊ニテ此両港ヲ守リ居リタレトモ、豊後口ニ繰揚ケシ後ハ一人モ美々津・細島ニハアラズ、尤日向沿海ノ防禦ハ参軍（仮）阪田諸潔ノ任スル所ナリト聞キタリ、定テ新募ノ農兵ヲ配布セシナルベシ、

一病院ハ高岡ヲ以本部トシ、佐土原・延岡ヲ以テ支院トス、重傷ノ者ハ高岡ニ送ルヲ常トス、豊後路ノ死傷モ沢山アリ、

一佐土原ノ町田啓次郎モ今葛葉ニアリ（町田ハ旧知事ノ三男ナリト聞ク）

一賊等（専ラ薩人ヲ云フ）常ニ云、兵数ハ今尚三万人アリ、而シテ鹿児島ハ日ニ勝利ヲ得、高知・山口ノ援兵モ将サニ至ラントス、仮令援兵来ラサルモ高知・山口事ヲ挙ルトキハ、海軍ハ高知ニ向ヒ陸軍モ力ヲ分タザル可カラズ、最早延岡辺ニハ海軍ノ襲来スル気遣ナシ、今暫時ノ辛抱ナリトテ頻ニ兵気ヲ皷（鼓）舞シ居レリ、人々必死防戦ヲ期シ口ニ難苦ヲ称スルモノナシト雖モ、孰レモ戦ニ倦ミタル色アルガ如シ、

一賊ノ挙動総テ強迫ニ出ツ、動モスレバ殺シテ仕舞ヘノ一語ヲ発ス、人々屏息其命ヲ聴カザルモノナシ、少ク賊ノ忌諱ニ触ルレハ忽チ縛セラル、東京新聞ノ論説ヲ称シテ人ニ伝ルモノアリ、忽チ縛ニ就ケリ、其他ハ推シテ可知ナリ、

一高鍋士族秋月種節・黒水長慥外拾余名（其姓名ヲ知ラス）縛ニ就キ、宮崎本営ニテ一旦糺問ヲ受ケシガ、其後参軍坂田諸潔ニ預ケラレタリ、其縛セラレシ所以ヲ聞キシニ、右数人兼テ官軍ニ応シ居レリトノ嫌疑ヲ受ケシ折柄、五月三十日頃軍艦美々津ヲ炮撃シタル節、佐賀ノ関ノ漁船港頭ニアリシヲ、賊等不審ニ思ヒ其舟ヲ拘留シ船頭ヲ取糺シ、尚美々津商人某ヲ捕鞫シタル処、三好退蔵ヨリ依頼ヲ受ケ秋月・黒水ト謀リ事情ヲ探偵セシコトアリト白状シタルヲ以テ、直チニ右拾数人捕縛セラレタリト聞ケリ、其後如何処分アリシヤ承知セス、

一自分ノ同郷人親友モアレトモ其意中測リ知リ難キヲ以テ、官軍ヘ投入スル事ハ誰レニモ告ルヲ得ス、独リ窃ニ脱出シタリ、尤小倉處平（飫肥兵惣括ナリ）ナドハ迚モ降伏ハセザルベシ、

一旧飫肥領ニテ募リタル農兵ハ海岸ノ警備ニ充テタリト聞ク、豊後口ヘハ一人モ来ラズ、

囚人日向高鍋士族綾部直躬口供ノ中

一先般鹿児島ヘ岩村県令始メ官員入県ノ聞ヘアリ、征討惣督有栖川宮モ御着船ノ評判アリタルニ付、高鍋区長武藤東自首ノ書面ヲ鹿児島ヘ差出シタル処、自首スルモノハ罪ヲ免ルストノ答アリシニ付、一旦出兵シタルモノモ前非ヲ悔悟シ首出セント欲スルモノハ、区務所ヘ書面ヲ以テ可申出旨区長ヨリ諭達シ追々自首セントスル際、坂田諸潔参軍ト称シ薩人同行（其姓名ヲ知ラズ）ニテ来リ、鹿児島ヘノ通路ヲ絶チ、頻リニ新兵ヲ募ルコトヲ区戸長ニ強迫シタリ、於是人心一変已ムヲ得ズシテ兵員ニ加ハリシモノ甚タ多シ、

一佐土原兵一小隊延岡ニ着シタレトモ、銃器不足ナルヲ以テ該地ヘ逗留セリ、

一延岡火薬製造所ハ総テ婦人ヲ用ユ、男子ハ一人モ入ルヲ許サス、故ニ弾薬何程アリヤ其数ヲ知ルヲ得ズ、

一美々津ヘ高鍋兵二小隊詰メ居レリ、隊長ハ岩下律三・岩下愼一ノ両人ナリ（一小隊八十人ヲ以テ編製ス）

一賊軍ニ木砲三門アリト聞キシガ、其何クニアルヲ知ラズ、

一高鍋人ノ捕縛セラレシモノハ、秋月種節・黒水長慥・横尾潜蔵・横尾炳・城勇雄・田村義勝・瀧澤弘・荻原恕平・柴垣如矢郎・黒水長平・手塚元吉・竹原麻太郎ナリ、外ニ美々津商人渡邊喜平、佐賀関舟子四人ナリ、

九九　金札製造云々分捕書類

別紙ハ三田井口ニ於テ賊兵所持之書類中ニ有之候趣ヲ以テ、野津(鎮雄)少将差回来候ニ付、為御参考差進候也、

七月九日　　小澤(武雄、軍団参謀)大佐

西郷中将殿

別紙

目今騒擾之際、上下ノ冥費多端ニ渉リ金貨紙幣ノ払底ナル所ヨリ、自然通商ノ不融通ヲ醸シ百般ノ事業ヲ怠ルニ至ルモ難計候ニ付、此際管内融通之為メ左之通壱円以下五銭迄之金札ヲ製シ、近日発行相成候条、一般ノ人民無疑念通用営業益可相励旨、本営ヨリ掛合之趣モ有之ニ付、予テ為心得布達候事、

十年六月廿日　　宮崎　軍務所

日向国　　郡代所

二、三、四、五、六、七、十五大区

壱円金札　五拾銭同　廿銭同　拾銭同
五銭同

追而往復村継□(朱)「本ノマヽ」尾ヨリ返却可致事

請取払之義、人馬賃銭并大払賄旅籠之義取調可差出旨、去月廿九日附ヲ以テ達置候得共、今以不差出区モ有之、就而ハ不日発行相成候金札ヲ以テ下渡候条、精算之上受取手形相添可差出候、此旨相達候事、

十年六月廿日　　宮崎　軍務所

日向国
前同区
郡代所

前書之通熊本々営ヨリ郵便ヲ以申越候条、為御心得此段申進候也、

七月十四日　陸軍中将西郷従道

参議大久保利通殿

参議伊藤博文殿

一〇〇　太田久平口供書

一〇〇ノ一

別紙太田久平口供、総督本営ヨリ差送来候ニ付、御参考之為メ及御差廻候、此段申進候也、

七月廿五日　陸軍中将西郷従道

参議大久保利通殿

参議伊藤博文殿

一〇〇ノ二

元飫肥領日向国宮崎郡城ケ崎往

士族

太田久平

右之者義ハ下官曽テ知人ニ御座候処、今般下官当臼杵ニ出張仕居候義ヲ聞伝ヘ、一昨十二日大橋寺ニ尋ネ来候間、夫ゝ承リ居候処、同人義モ一時出兵之義ヲ被命候ヘ共、素ヨリ順逆ヲ弁ヘ病気ト偽リ出兵致サヾル処、其後給養掛リニ任セラレ、強テ催促ニ預リ、止ムコトヲ得ス給養処ニ出勤致シ、兎角病気ト称シ不勤ノミ致居候処、今般同人之請求ニ依リ幸ニ土州・長州辺ニ探索ヲ被命候間、此レ天之幸ト存シ、七月一日豊後国海部郡佐伯村ノ商船朝栄丸ニ日向国赤江川ヨリ乗船仕リ、豊後下ノ江着船仕居候処、到底今般ノ一挙ニ就而ハ夫ゝ議論も有之候得共、勢ヒ止ムヲ得サル次第ニ立至リ候、最早平定迄ハ帰国不仕心得ニ御座候段申立候、且賊ノ内情聞取書相添上申仕候也、

十年七月十三日　臼杵出張軍団会計部

平部二等副監督

谷少将殿

一〇〇ノ三

元飫肥領日向国宮崎郡城ケ崎住士族太田久平ヨリ聞取書

一元佐土原領廣瀬ニおゐて紙幣ヲ製造シ、六月廿五日ヨリ壱円札之分ヲ発行スルノ布告アリ、

一桐野ハ当時宮崎郡河原町元宮崎県権令ノ官舎ニアリ、

一西郷ハ宮崎郡下北村泰禅寺ニ在リト聞ケトモ、其実ヲ詳カニセス、

一鉛山ハ美々津并ニ都ノ城辺ノ山奥ヨリ頻リニ堀出スト

云フ、

一元宮崎郡支庁ヲ軍務所ト、区長ヲ郡代所ト、副長ヲ吏郡所ト改称ス、

一諸器械ハ元佐土原領廣瀬（御一新ノ節、佐土原城ヲ移セン処ナリ）ニ於テ製造セリ、桐野ハ此宮崎ト廣瀬ノ間ニ絶エス往復スト云フ、

一病院ハ高岡ニ置ケリ、

一宮崎ノ守衛兵ハ凡千人位モ有ル可シ、内三百位ハ士族ニシテ余ハ新募ノ農兵ト云フ、然ルニ此兵ハ残ラス豊後口ヘ繰出シ、交換ノ兵ハ鹿児島ヨリ農兵来ルト云フ、

一各所ニ在ル守衛兵ノ持ツ銃器ハ多ク（ミニーヘル）并ニ火縄銃ノ大門ヲ改製シ管打ニ変シタル銃器多シト云フ、

一廣瀬ノ守衛兵ハ凡三百人位農兵ナリ、

一延岡ニおゐて農兵凡千五百人程ヲ募ル、内二百人程豊後口ニ向フ、

一細島ハ凡奇兵五百人程ニシテ守備セシガ（飫肥ニ十番隊モ此内ニ在リ）、此ハ豊後口ニ出張セリ、跡ハ何方之兵ニテ守衛スルカ詳カナラス、

一美々津ハ凡二百人程ニテ守衛スト、先般軍艦ヨリ発砲スルトキハ此兵隠レテ応セス、此時軍艦之側ラヨリ漁船一艘陸地ヘ漕寄セ来ルヲ召捕テ、三好退蔵ノ通信ヲ獲タリ、是ニ於テ高鍋ノ士族横尾以下十三名官軍ニ通スルヲ以テ縛ニ付ケリ、

一赤江・川尻・蟹町（海岸ナリ）ノ番兵ハ元宮崎県ノ官吏ナリ、凡五十人程アル可シ、

一折生迫（ヲイヲサコ）・城ケ崎・内海ノ番兵ハ士族并ニ農兵ヲ打混セ一ケ所凡八十人程ツヽニテ、五日間毎ニ交換セリ、此三ケ所ヲ守ル兵総テ元飫肥領清武ノ兵ナリ、至極弱兵ト云ヘリ、三ケ所ニテ総人数七百人位モアル可シ、

一油津ノ守衛兵ハ飫肥ノ士族ナリ、人員ハ詳ナラス、

一外浦ハ元薩賊・飫肥賊ト混交シテ守ル、凡三百人位ナリシカ今ハ如何、

一海岸番兵ノ銃器ハ大概火縄銃ナリ、

一飫肥ハ未タ農兵ヲ募ラス、

一宮崎近傍ハ至極僅少ノ守衛ニシテ、殊ニ弱兵ノ上銃器ハ乏シク故、夜ニ乗シ海岸ヨリ上陸、俄然宮崎ヲ突カハ、賊必ス狼狽ス可シ、又日向元四藩モ薩ノ威ニ圧セラレ余儀ナク従軍スル者多キヲ以テ、必ス降参スル者多カル可シ、

元宮崎県用達

（大坂住所　改称鴻ノ池トモ云　詳ナラス　フ井上市之助弟）

大坂西道頓堀　大井仙象（当時宮崎ニアル可シ）
日向問屋　淡路屋與助

右之者等大坂ヨリ日向ニ鉛ヲ下セシ由、何レ日向ノ商船ニ荷造物ヲ変シ下シ候由ナリ、

鹿児島征討始末　別録二

一〇一　高崎親章外二十人始末書

一〇一ノ一
十年四月十日

大臣　書記官
顧問
参議

別紙高崎親章外十九人（二十カ）、鹿児島ニテ捕縛ニ逢候始末書第壱号ヨリ弐拾号マテ、東京ヨリ相廻候ニ付、供高覧候也、

第一号　高崎親章
第二号　野村　綱
第三号　山崎基明
第四号　末廣直方
第五号　田中直哉
第六号　柏田盛文
第七号　樋脇盛苗
第八号　安樂兼道
第九号　平田宗質
第十号　中原尚雄
第十一号　園田長輝
第十二号　松下兼清
第十三号　西彦四郎
第十四号　猪鹿倉兼文・（大山綱介）
第十五号　菅井誠美
第十六号　伊丹親恒
第十七号　前田素志
第十八号　土持　高
第十九号　高橋爲清

第二十号　　野間口兼一

一〇一ノ二（朱）「第壱号」

手　続　書

高崎親章

以手続書申上候

一私儀旧警視庁ニ奉職罷在、権少警部相勤居候処、昨年十一月熊本県暴挙之砌該地へ出張罷在、然ルニ右暴挙之残徒等為追捕、同十二月三日鹿児島県へ出張之処、該県下所謂私学校党ナル者各銃器ヲ求メ、弾薬ヲ貯ヘ、刀剣ヲ瑳等、不容易姿ヲ顕シ、殊ニ私学校ニ競附スル者日ニ盛ナルヲ現ニ目撃シ、其外探知之廉々ヲ以テ、同月十二日熊本へ帰リ、翌十三日熊本出発、同二十一日東京帰着、右之件々ハ勿論、其外之事共管長ニ開申シ、且ツ自己之見込モ申述、然ル後チ寓居ニ帰リ熟々我県下之形状ヲ察スルニ、彼ノ私学校党ナル者ハ皆我親戚朋友ノ者ニシテ道ヲ同フスヘキ兄弟ナルハ彼等方向ヲ不誤様、何レニカ力ヲ尽度ト思フ折柄、県地ヨリ実父親廣病気之趣申越候ニ付、看病トシテ帰省致度ト存、既ニ願書ヲ認メ居候処、同県士族樋脇盛苗ニ出会、諸事談話之末、県下之話ニ及候処、盛苗モ共ニ帰県同行可致、夫ニ付而モ県下ハ方今不穏趣ナレハ此事ニ一際尽力致度モノナリ、尤外ニモ近々帰県ノ人有之趣ニ候得者、共ニ談合致度抔話合ヒ、其日ハ夫迄ニテ相別レ、翌日旧権大警部大山綱昌之宅ニ差越、曩ニ鹿児島県下ノ景況実地目撃セシ事共物語リ、帰県ノ話ニ押移リ候処、帰県セラルヽニ付テハ彼ノ私学校党ヨリ探索抔ト指目セラレ、彼ニ嫌疑ヲ生セシムル等之事有之候テハ不都合ニ付、外ニモ帰県之人々有之趣ニ候間、同行旁咄合モ然ルヘカラントノ話マテニテ、同人ハ公用ヲ以テ外出致シ、然ルニ同日安樂兼道ニ出会雑話之末、同人モ帰県トノ事ニ付同行致度ト申居候内、園田長輝モ帰県ノ様子ニ候ヘハ、本夜長輝カ宅ニ来会如何ト同人申ニ付、其意ニ従ヒ其夜淺草下平右衛門町園田長輝カ宅ニ罷越、此日十二月二十五日ト覚候、然ル処来集之者凡十四名ニモ候哉、其内ニハ始メテ面会之者モ有之、各自来会スルトコロノ趣意ハ我県下之不穏ハ私学校党アル故ニシテ、此党ヤ我カ郷土ニ於テハ何レモ兄弟親戚朋友ノモノニシテ、我々カ郷土ハ皆田舎ナレハ

右ノ兄弟モ自然城下士ノ為ニ彼ノ私学校ニ引入ラル、姿ニ相成、今日天下ノ形勢ヲ知ラス、世ノ事情ヲ察セス且私学校ノ何タル趣意ヲ弁ヘス、彼ニ煽動サレ無名ノ挙ニ拘ハリ、大義ヲ失スル等ノ事ニ至テハ、実ニ天下ノ大事ニ関シ、旁黙止忍ヒサルトコロアル以所(所以)ニシテ、各議スルトコロハ、各自帰県ノ上ハ、右ノ兄弟朋友ニ信義ヲ尽シ名分ヲ説キ、互ニ大義ヲ確守シ、且ツ未タ入校セサルモノハ其名実ナキヲ知ラハ、成ルヘク入校セサル様致シ度トノ訳ニテ、其外弁論出没アレトモ胸臆致居カタク、帰スル処概略如此、且ツ当地発出之儀ハ各都合モ有之候ヘハ、各自適宜ニ可致抔話合ヒ、其夜ハ夫迄ニテ各帰宿シ、私儀ハ前ニ認メ置トコロノ帰省願書ヲ差出シ許可済之上、同月二十九日東京出発、本年一月十一日自宅ヘ帰着仕候事、

一其後チ父ハ病痾ノ看護致居、傍ラ友人ニ交通シ其状態ヲ見ルニ、友トスヘキ者ハ皆私学校ノ党ナラサルハナシ、於是我帰県ノ後レタルヲ知リナカラ、前文之意ヲ主張シ親戚等ニ説理シ、未タ十分ノ意ヲ悉サル内、本年二月三日午後九時頃、郷土湊町ノ旅人宿ヨリ同県士族谷口藤太ト申者面会致度旨書面ヲ以テ申越候ニ付、何心ナク右旅宿ヘ差越、同人ヘ面接ノ処、次ノ間ヨリ突然四五名ノ人躍入、無言ニテ前後ヲ取巻キ私ノ両手ヲ押ヘ細縄ヲ以テ厳シク縛セラレ候ニ付、如何ノ訳ニテ縛セラル、哉、事柄承知致度旨申述候得共、只御用ト而已相答、其四五名ハ何人ナルヤ不相分、然ルニ市來湊警察分署ヘ連越、同所裏口ノ柱ニ繋キ置、直ニ私ノ居宅ヘ差越、書類・手帳等取上候様子ニテ、翌日午前六時頃巡査三人、外ニ私学校ノ人員四五名ニテ護送シ、雨中笠蓑ヲモ不衣、鹿児島廣小路警察第一分署ヘ連越、凡一時間位椽(縁)ノ柱ニ繋置、夫ヨリ調所ヘ廻サレ、何人ナルヤ定テ同県警部ニモ候半、始メ一人面接シ私ノ履歴ヲ尋ラレルニ付不残相答ヘ、次ニ下県之儀尋問ニ付、親病気ニ付帰省之趣相答候処、其方儀斯マテ見苦敷縛セラレシ次第ハ自カラ承知ノ筈、其次第可申立トノ事ニ付、自分ニ於テハ捕縛セラルヘキノ罪無之、捕縛セラレシ廉ハ自ラ御方〻明ナルヘシ、御方ヨリ承リ度ト申述候処、其人相代リ暫時白洲ノ角ニ扣ヘ居、次ニ二人内一人ハ中山五兵衛ナル由列席ニテ、其方儀帰県ノ次第ハ東京ニ於テ同志ノ者ト何カ訳アル会議致シ、其筋ノ命ヲ受ケ探索等ヲ為サンタメニテ罷帰候者ナレハ、其事柄明白

ニ申立ツヘクトノ事ニ応シ、自分儀東京ニ於テ別ニ訳アル会議致セシ覚ヘハ無之候得共、鹿児島県私学校ノ人員此頃何欵穏ナラサル形勢ニ立至リ、此節柄実ニ不容易儀ト察シ、右私学校之人員我郷土ニ於テハ皆親戚信友ノ者ナレハ、我心意ヲ述ヘ方向ヲ不誤様、協和信実ヲ以テ互ニ大義ヲ確守スヘキトノ事共、在京ノ間同僚ニ会談致セシ事有之云々、前文之次第不包申述、且ツ探索ノ事ニ付テハ素ヨリ自分職掌ノ事ニテ、探索ニ係ル事柄アレハ善悪ニ不拘シテ探偵スルハ勿論ノ事ナリト、心底潔白ニ申述候処、イヤマダ其外ニ川路ノ邸宅ニ於テモ会議セシ事有之、其節ハ川路モ其席ニ臨ミシカト尋ラレ候ニ付、自分儀ハ其節出会セサレハ川路ノ出席カ否ヤハ承知セス、尤此事ニ付テ川路ノ出会スヘキ事柄ニ無之、多分出席有之間敷ト相答候処、イヤ川路モ出会セシニ相違ナシ、其時ニ大事ナルコトヲ決議シ、其事ヲ行ハンノ悪意有之事明瞭タリ、既ニ同僚ヨリ白状ニ相成候ニ付テハ、其通リ可服ト詰セラレ候ヘトモ、仮令同僚ノ申立トハ乍申、其大事云々ノ事件、何事ナルヤ其訳柄モ不相分、心底ニ毫モ覚エ無之ヲ、誰カ心服スヘキノ理アランヤト弁スル処、此強情者ト高声ノカヽルヤ、等シク帯刀ノ壮士二人左右ヨリ各ユス棒ヲ携ヘ支体ノ差別ナク無数ニ打擲スルコト凡三四回ニ及ヘリ、為夫左ノ指ヨリ出血スルコト甚シ、斯マテ苛責ヲ受クルトモ大事ヲ行フノ工ミ素ヨリ心底ニ無之候事故、如何ハセンモ致方ナク、烈酷ナル拷問ニ殆ト気ヲ絶スルニ至ル、暫アツテ下カレノ声ニ応シ縄取ニ引レ、該所ノ末ノ間ノ椽(縁)ノ柱ニ繋レ、其日ヲ過キ其夜モ其儘ニテ睡眠モ不出来、苦痛ヲ究メ罷在候処、翌五日同僚ノ拷問ニテ傷疵ヲ蒙リシ者医療ヲ受ケ候席ニ私モ其療治ニ預リ、同日午前十二時頃同僚十四名ト共ニ該所ヲ被引出、同所字新地ノ囚獄所ヘ連行カレ入獄相成候事、

一同月八日午前五時過番人等数人来リ、私共同僚十八名ヲ各腰縄ニテ引出シ、県庁内第四課ニ於テ銘々一人ツヽ白洲ヘ廻サレ、私ハ其六七人目ニテ、接待ノ人ハヤハリ調候時ノ三人ニテ、其一人申様、其方儀是迄申立之口供読聞カセ候間可承、尤多人数之事故、少々齟齬スル廉モ有之ヘク、夫レハ同僚ノ申立ニ付、其通心服可致トノ前言ニテ、其口供ハ只一通リノ読聞ニ候ヘハ暗シ居リカタク、然レトモ其文意ニハ、自分共儀明治

九年一月以来警視庁ニ奉職致居候処、此頃鹿児島県下不穏形勢ニ立至リ、実ニ不容易儀ト察シ、同志ノ面々東京ニ於テ会議致シ、川路利良ノ命ヲ受ケ県地ニ帰リ鹿児島私学校ノ人員ニ離間ノ策ヲメクラシ、其暴発ノ際ニ乗シ暗殺シ、私学校ノ人員ヲ鏖ニシ、直ニ熊本鎮台ニ報シ、合テ陸海軍攻撃シ、各追々上京可致之手筈致居候処、密謀発覚シ御捕縛相成、御調ヲ受ケ、何レモ川路利良之内命ヲ受ケ容易ナラサル儀ヲ取企候事、今更何トモ恐入候事トノ読ミ聞セニテ過日拷問之節陳述セシ廉々ハ一句モ無之、前後毫モ心ニ覚ヘナキ事而已ニ付、文言ノ順序ヲ追テ左様ナル申立ヲナセシ事更ニ無之ト申述ル事モ半言曰ハセス、三四人ノ守卒私ノ左ノ指ヲ押ヘ何カ押付ル様子ナレトモ覚無之、只其事ナキヲ申述ントセシモ其間縛セラシ儘引出サレ、跡ヨリハ押出シ無理無情ニ引出サレ暫時庭ノ柱ニ繋カレ、無程先ノ内獄ヘ被連行、元ノ如ク入獄相成候事、

一同月二十六日県庁内新築檻倉ヘ移サレ候事、

一本月十日警視局警部出張ニテ出檻相成、東京巡査護送ニテ該地前ノ浜滞船金川丸ヘ乗移リ、同十二日同所出帆、翌十三日長崎着、即日長崎警察所ヘ拘留相成、同十六日長崎県警部付添同湊出立、同十八日神戸着、翌日大坂着、翌二十日再ヒ神戸ヘ帰リ飛脚船名古屋丸ヘ乗込、同廿二日東京着、直ニ大審院ヘ被差廻、即日第六大区二小区戸長ヘ御預ケ相成、同三十日前文之始末御尋ニ付、聊相違ナキコトヲ以テ手続申上候事、

鹿児島県士族

明治十年三月三十日　　高崎親章　拇印

一〇一ノ三（朱）「第二号」

始末書

野村綱

始末書

明治辛未（四年）御親兵ノ命ヲ旧藩ニ奉シ、市ケ谷ニ営ス、当時小隊長タリ、兵制改革ノ際異論アリ、辞シテ帰郷シ専ラ教育ニ従ヘリ、

尓来癸酉（明治六）年ニ至リ、力ヲ尽スト雖トモ其実ヲ挙ル能ハス、同年夏志ヲ決シテ眼ヲ海内周遊ニ属シ、将ニ郷ヲ発セントス、先是友人ノ京ニ在ル者出京ヲ促ス数名、然レトモ辞スルニ生里子弟ノ情ヲ以テセリ、

因茲書ヲ裁シテ決志ノ略ヲ演ヘ、先ツ都城（鹿児島ヲ距ル十七里、当時宮崎県ノ支庁アリ、友人ニ遊フ、時ニ宮崎県召テ第二大区（高岡ヲ基本区トス事情殊ニ迫レリ）区長ニ命ス、其事情ニヨリ之ヲ奉シ其委托ノ事ヲ終ヘ、将ニ前志ヲ達セントス、

同年九月該県出仕ニ命シ、委スルニ教育ヲ以テシ嘱托甚タ重シ、仍テ素志ニ非サルモ尚皇国ノ一部百分ノ一ニ居ル、地僻民陋ナルモ又何ソ為ス所ナカランヤト、大ヒニ着手ノ順序ヲ改メ、茲ニ三周年殆ント其微功ヲ奏セントスルニ至リキ、

然ルニ昨丙子（明治九）九月廃合県ノ命ヲ拝スルヤ、其却歩センヲ恐レ、旧長次官ト議シテ該地ニ残留シ、十一月十二日鹿児島ニ帰ル、

以為ク、素志ヲ達スルノ好機会ヲ得ルモ、三十八万人民（日州人口概数）ヲ如何セント、若シ時機ヲ得ハ復置ヲ計ラサルヘカラスト、而シテ温泉ニ浴スル一週間（鹿児島ヲ距ル十一里）ニシテ家ニ帰ル、時ニ壮士動揺ノ際ニシテ、都城・高城・高岡等ノ知音追〻来リ、旧知事公　天気御伺ノ為御出馬、西郷氏亦云〻アリト告クルアリ、壮士奮然タリ、故ニ其実ヲ認メン為ニ来ル等ノ大意ニシテ、尋テ見込ヲ問フ、其旧知事云〻ノ事ハ誤伝タル明ナリ、其他ハ其事実ヲ知ラス、尚問フ者ニハ雷同スルノ不見識ナルヲ論シ、其指ス所ノ名（万民塗炭ノ苦ヲ脱スヘシ）ヲ以テスレハ、我輩モ亦罪人タルヘシノ説ヲ以テ解キ帰セリ、

嘗テ佐賀暴動ノ挙アル、使ヲ軍門ニ奉シ、帰レハ飫肥辺云〻（彼ニ通スルモノナリ）、県庁後事ヲ慮ルノ際、清国ノ事起リ、各所ノ景況ヲ以テ長官深クコレヲ憂ヒ、綱ヲシテ其ヲ鎮定セシム、綱各地ノ有志ニ対シテ緩急必ス命ヲ待ツヘシノ説ヲ以テ約セシ、

之レ等ノ情アルヲ以テ誠ニ如此ニ至ル、廃県ノ前ニアリセハ其策モアルヘキニト、復置ノ事ヲ計ルノ念ヲ増ス、

十二月一日旧県ノ用アリ、福山健偉ノ宅ニ会ス、席上上村行徴彼ノ輩ノ勢ヒヲ話ス、則チ二十四五日甚シキ激論ヲ桐野ノ宅ニ為ス、桐野モ終ニ同シテ二十六日西郷ニ至リ其機会タルヲ演フ、西郷名ナキヲ以テ容レスト聞クト、皆コレヲ信トセリ、

同五日鹿児島ヲ発シテ大坂ヨリ陸行シ、同廿八日着京、先是神戸ニ着スルヤ篠崎五郎（兵庫県第四課長）来リ、鹿児島ノ形勢ヲ問フ、見ル所ト其一日ニ聞ク所等ヲ告ク、暫クシテ来リ云フ、本日川路大警視ヨリ来使ノ旨アリ、足下ノ言ヲ以テ報スト、

着京シテ道路ノ説及ヒ新聞紙ヲ見聞スルニ、鹿児島動揺ノ説流布ス、コレ音信ノ不通ニ生ス、願クハ復置ノ挙アリ電信ヲ宮崎ニ通シ、以テ鹿児島ノ事ヲ通シ、而シテ彼ノ一箇ノ宗旨ニ等シキ私学校党ナルモノ既ニ染ミシハサシオキ、少年輩ヲ入ラシメサルハ彼ノ地ヲ出サシムルニ如ス、出サシメント欲スルモ遠地能ク為スナシ、願クハ近地ノ学校ヲ盛ンニシ、其民政ヲ密ニシ民情ヲトルヘシ、此策ヲ達スルヤ、内務卿ニヨラサルヘカラスト、一月三日謁ヲ得テ鹿児島ノ事情ヲ陳シ、尋テ右ノ主意ニ及フ、尓来追〻昇堂シ鹿児島ノ探索書類ヲ見、従前西郷氏トノ交際上ヨリ彼ノ輩（桐野・篠原・大山・村田・池上以下）ノ人トナリヲ聞可シ、同伴子弟ノ就学ノ事ヲ願ヒ、既ニ下国ニ決セシ十七日、書ヲ以テ十九日、廿一日ノ間ニ便舟アルヲ告ケラレ、既ニ之レヲ決ストイヘトモ、尚未タ果サヽルモノアリ、廿四日ニ延ヒ廿六日ニ延ヒ、終ニ三十一日ニ延引セリ、

下国ノ主意ハ彼ノ輩ノ深意ヲ探知シ以テ之レヲ告ケ、若シ暴発ノ現状ヲ顕サハ直ニ出京シテ其実ヲ告クルニアリ、仍テ第一ニ諸長者（内田・村等ヲサス・柱・上）ノ説ヲ聞キ、若シ都合ヲ得ハ西郷ニモ面シテ其実情ヲ得ンコトヲ欲シ（綱ノ想像陽ニ制ンテ陰ニ放ツモノヽ如シ）而シテ其勢ヒ緩ナラハ前議（即チ復置ノコト）ノ主意ニ出ラレンコトヲ希望シ、其急ニシテ万一モ綱ノ行ヲ拒マル、如キアラハ、腹心ノ友ヲシテ告クヘシ、然ルトキハ其符如此等上言ニ及ヒ置キ、暗号一葉・二十一名名書一通・金百円・書面宛書一葉ヲ領手シ而シテ尚思フ事アリテ曰ク、此行タル外ニ人ナキヤ、今回ハ穏ナル（近聞皆然リ）方ニアリ、然レハ私ニハ及フ間敷（綱ハ鹿児島県庁トハ常ニ主意ノ違フテ自ラ陰然嫌フ所トナルヲ知ルトイヘトモ、私学校ニ於テハ本来ノ異論ハアルニモセヨ、三四年モ外ニアリンヲ以テ疑ルヽコト少ナカラント信セリ、故ニ政府サヘ従事セスンテアラハ何時モ此ノ役ニアタルヲ得ヘントセリ）ト、然レトモ大警視ニモ告ケ、夫レ〻都合ニ及ヒタリ、仍テ今度行テ来ルニハ鹿児島暇乞ノ気持ニテ可然ト命アリシ、二月五日兵庫ヨリ迎陽丸ニ乗リ、九日早朝鹿児島前ノ浜着、常ニ異ニ端舟ノ来ラサルヲ不審ク思フ内ニ、軍装ノ者乗リ込ミ舟長出テ応接、時ヲ移セトモ其何事ヲ知ラスシテ上陸スルヲ得ス、暫クシテ高雄艦入港云〻アリ略ス、

十日ニ至リ同部屋ノ両人ト談シ上陸ヲ乞フノ書ヲ出ス、其発意一二ノ人陸地ノ保証ニテ上陸スルヲ聞ケハナリ、

十一日朝ニ至リ、尚何事タルヲ知ラス、然レトモ何トナク風評アリ（舟ノ往来ハ禁スルモ番兵交番ノ舟ヨリ少〻売リ者来リ、又会計方等三名陸ニ呼ハル、コトアリテ曳レンナリ）弾薬云〻捕縛云〻少シク知ル、一昨日ノ事ヨリ彼是考慮スレハ其事実ハ知レサルモ、既ニ事ヲ挙ケタルモノ、如シ、故ニ関係ノ書類ヲ密ニ捨テ、其暗号ヲ深ク納メテ用意ヲ為

シ、我カ来ルノ遅ヲ悔ヒ、情実之上国ニ通セシヤ、外面ノ事ハ自然高雄丸ノ知ル所アラン、如何シテ内情ヲ得ヘキヤヲ工夫シ、形チニ現ハレタルハ一目シテ知ルヘシトイヘトモ、其実ヲ知ルハ人ニヨラサルヲ得スト、爰ニ易難ノ二策ヲ考フ、易ナレハ其人ニ問ヒ、其実ヲ得テ道ヲ求メテ出ヘシ、難ナレハ我カ行ノ事ヲ告ケ、欺テ以テ情ヲ得、其機ヲ見テ脱スヘシト、

同日午頃共ニ談セシ両人ノ願ヒハ其許ヲ得タレトモ、我乞ノ如何ナリシヲ知ス、故ニ両人ニ托シテ旧参事上村ニ計ラレンコトヲ托ス、

同日午後四時頃、封書原田宗高ヨリ来リ、上村ヨリ云〻鑑札ヲ都合セリトノ趣ニテ、一通ノ鑑札ヲ得テ上陸シ見ルニ、海岸ヨリ夫〻ノ固メアリ、勢ヒ既ニ如此キカト眼ヲ配リ家ニ帰ルニ、婦人女子ニ至ル迄勢ヒヲ張リ、凶徒等、両御丸（前ノ左府幷旧知事ヲ云）ヲ始メ西郷・桐野・篠原・県令等ヲ暗殺シ、城下ニ火ヲカケ、一時ニ鏖スル筈ナリシニ発覚シテ縛セラレタリ、故ニ出兵ノ賦ナリ抔イヘリ、隣家田尻逆宅ヘ到ル、知音四名来会ス、様子ヲ聞クニ先ツ彼ノ届書・口供等ヲ見セ、勢ヒ甚タ非常ナリ、又上村行徴ニ行ク、勢ヒ亦同シ、茲ニ於テ見聞スル処ヲ以テ既ニ如斯難策ヲ踏マスンハ其実ヲ得ル能ハスト、其令ノ発スル所ヲ問ヒ、県庁ニ出テ県令ニ面セントス、不在、大書記官田畑ニ面シ我輩昨年末上京シ、今回此地ノ動静ヲ告ル事ノ内命ヲ内務卿ニ奉シ帰県ス、然ルニ前ノ浜ニ両日滞舟セシメラレ今日許可之上ニ上陸シテ次第ヲ聞クニ、不容易事ト成立、既ニ御届ケ及布達ニモ相成タル事ニシテ之ヲ承知セリ、故ヲ以テコレヲ訴フノ旨ヲ演告シテ帰家ス、暫クシテ、田畑ヨリ来状、過刻承知之趣県令江告ケシニ、尚直ニ聞カントス、故ニ出庁スヘシノ旨ナリ、直ニ出庁ス、田畑出テ暫ク扣ヨト、又出来リ県令ハ第一分署ニ行キタリ、彼レヘト云テ案内ヲ付ス、到レハ（名ハ分署ナレトモ実ハ兵営ニ異ナラス）一ノ扣所（「ケノト」ヲ布ケリ）コ、ニテ暫ク扣ヘヨト、暫クシテ此方ヘト案内ス（十二日午前、二時頃カ）、到レハ糺問所ニシテ罪人ニ対スルモノ、如シ、爰ニ於テ其席其体ヲ怒ルトイヘトモ忍コソ我カ策ノ要ナリトス、頓テ問フニ先刻田畑ニ申シ出タル旨ヲ告ヨト、即チ其旨ヲ演ヘ畢テ此席ハ何等ノ式ナルヤヲ問ヘトモ答ヘサリキ、続テ都合三回尋問ス、其問ヒ道ヲ行キ及ヒ人ニ接対シタルコト交友ノ名及ヒ其次第等ナリ、而シテ扣所ニアルトキハ制スル者来テ問フ事アリ、又知面ノ人ヲシテ話ヲ聞カシメ、其次第ヲ記スヘキヲ告ク、

即チ書シテ出ス、其書面ハ前ニ田畑ニ告クル趣ノ意ニシテ、上京ノ次第鹿児島ノ景況ヲ告シ事、下国ノ次第等ヲ虚実相混シテ書綴タリ、

十二日午後ニ到リ書面外ノ残リナキヤヲ問ヒ、又国事談ヲ為セシ人ハナキヤ、ナシ、又学校離間ノ事、汝之レヲ為ス必ス命ヲ受ル所アラン、決シテナシ、ナシト云ヘカラス、其実蹟アリ、汝現ニ入校ヲ拒ミシ事アリ、拒ミシコトナシ、然レトモ常ニ彼ノ学校ノ少年ニ益アラサル、我カ信スル所ニシテ此節ノ事ニアラス等、学科ノ論ヨリ西郷ノ大将タルヤ知ルヤ等ニ及ヘリ、

十三日暁欤、呼出シ、二十名ノ暗殺云々、大久保内務ノ知ラサル理ナシ、知ルニ於テハ汝ニ必ス伝ヘタルヘシト、以ノ外ノ事ナリ、左様ノ事ヲ知リ何ソ命ヲ奉センヤト答フ、又繰返シ〻之レヲ云ヒ、之レヲ弁スレトモシキリニ問フ、爰ニ於テ彼ノ二十輩ノ口供ノ疑団益深ク或ハ強迫等ノ為ス所ナランヲ察シ、我策モ行ハル、ヘカラス、数語ヲ費モ無用ナリト格護シ、御注文ノ意ハ分レリ、然レトモ覚ヘノナキヲ云ヘカラス、如斯ノ作法ハコレ何物ソト云テ幾度問テモ答ヘス、暫クシテ其通ニ違ヒハナキ故、畏レト云捨テ引入タリ、扣所ニ五六人来リ、命ナリ縄ヲカケルト云、命ハ誰ノ命ソ、県令ノ命ナリ、承知セリト、座シテ縛ヲ受ク、

午後糺問所ニ引カル、問フニ暗殺ノ一事ヲ以テス、答ルニナシトノミ、云ハサレハ打テト左右ヨリ臀ヲ打ツ、止メテハ「ユウエ」〻〻（申セノ片言ナリ）トノミニテ（其中第二連ノ跡ニテ痛イカト問フ、生タカラタナリト答ヘン）、只タ腰骨トカ、トニカ、ルノ痛キヲ感スルノミ、冷汗ノ出ルヲ覚フ、暫ク打テ下サレト声ハ聞テモ存分立ツ能ハス、左右ヨリ手ヲ取リ退ケ、水ヲ飲シテ扣ヘシメタリ、

夜ニ入リテ引出サレ、汝カ申立ノ趣ノ大意ヲ読ミ聞ルト云テ読ミ聞カセラレタリ、其読法不明了ニシテ分リ難キ所アリ、読ミ終テ之レヲ問フ、汝カ申出ヲ書立タルノミト云テ知ラセス、ソレ拇印ヲト云ヤイナヤ、左右ヨリ手ヲ取リ押シ付タリ、夫レヨリ牢屋ヘ引キ入レラル、入リ見レハ其内ニ二十名ノ連中モアリ、互ノ情ヲヒソ〻〻話シ最早一悪口ノ外ニアラスト格護セリ、

同二十六日仮檻倉ヘ五十六名共ニ移サル、初メテ常罪人ト殊別ナルヲ以テ猶密ツニ互ヒノ情ヲ語ル（一倉各七名）、

三月十日官兵ノ受取ル所ト為リ、仮檻倉ヨリ出、廿一名金川丸ニ乗リ付ク、

以上

明治十年四月二日　　野村　綱印

一〇一ノ四
（朱）「第三号」

始末書

鹿児島県士族
山崎基明

私儀

明治四年十月ヨリ警視方ヘ従事、現今権少警部奉職罷在候、然ルニ鹿児島県下ノ儀、同六年ノ末政府破論後不断掛念仕居候処、近頃ニ至リ私学校徒盛ニ銃器弾薬等用意致シ、甚シキニ至テハ奇策奸計ヲ以テ、追々諸郷人迄モ引入レ候風説聞及候折柄、昨年十二月二十三日不計園田長輝ニ出会、右事件互ニ物語リノ末、タトイ私情トハ云ナカラ徒ニ親族朋友ノ奸計ニヲチイリ、万一暴挙スル様ノ事アリテハ実ニ忍ヒサル次第故、何卒方向ヲ誤マラサル様致度キモノナリト咄テ其時ハ相別レ候、然ル処同二十五日同人ヨリ一報ヲ得候故、出向キ候得ハ、外ニ同志ノ輩拾四五名モ有之、互ニ前件ノ主意ヲ述ヘ、先ツ此節ノ儀ハ銘々帰県致シ、親族朋友ヨリ我郷内人ヲシテ方向ヲ誤マラシメサル事ヲ大主意トシ、之レ説クニ、忍耐ヲ旨トシ臨機応変真意ヲ通シ度キ趣キヲ以テ長官ヘ通シ、帰省暇ヲ願フ可キ旨ニテ、其後ノ都合ハ万事右長輝ヘ託シ置キ候処、翌二十六日都合程能ク相済ミ候故、右長輝ヨリ通知ニ付、早速親看病帰省暇ヲ願イ、翌二十七日東京出発、横濱ヨリ郵便船ネバタ号ニテ神戸ヘ暫時上陸、同三十一日長崎ヘ着シ、同所ヘ六日程船待致シ、同十年一月六日和船ニ乗リ同十一日鹿児島県下字川内ヘ着、翌十二日鹿児島ヘ一宿、同十四日高岡ヘ着シ、実地ノ形勢熟察スルニ、私学校徒ノ盛ナル事ハ聞シニ増サル勢ヒニシテ、在官或ハ自立ノ輩ハ却テ賊ノ如ク嫌視スルノ風情故、能キ機会ヲ待テ説カスンハ却テ人気ヲ害センノミト存シ、全ク湯治養生ノ為メ帰省セリト唱ヘ、折ヲ見合セ居ル内、有馬純房ナル者来リ、尤此者ハ少シ人望モアル者故、互ニ時世ノ咄シヲ致シ、我カ真意ヲモ通シ候得ハ稍後悔ノ体ナレトモ、惜イ事ニハ已ニ私学校ヘ百三拾名位、島津学校ヘ九拾名位、双方共名簿差出シ候折柄、島津学校ノ主意ハ何ソ、強テ政府ヘ兵器ヲ携ヘ迫ル様ノ主意ニハアラス、唯政府ニ弊害アラハ即チ上京シ直議セン

トノ主意ニ付、則チ我徒九拾名ハ旧恩ノ為メ旧知事上京ノ節従行スル心得ナリトノ咄ニ付、然ラハ同ナガラモ其島津学校ノ方ハ少シ道理モアル様ナレハ今一度議論ヲ起シ、何レカ理ノアル方ニ一決シテ如何ト物語リケレトモ、何分一度破論シ分裂固着セシ人気今更如何共力ニ及ハスト申体ニテ、其他一般ノ人気ト雖トモ士族輩ハ大方右両校ノ問ニ帰シ、之レニ帰スルノ根元タルヤ、家禄帯刀モ皆元ノ通リニナル抔ト云フ奸計ノ風説ニ迷フタルモノニシテ、実ニ説クニ道ナキ形勢故、此上ハ有志輩ヲ求メ、法律政治ノ学社ヲ組ミ、其レヲ以テ自然風俗ヲ正サンヨリ外ニ術ナシト存候ニ付、少シ其方ヲ心得タル田原中兄、中村賤夫等ノ輩ヘ相語合、種〻心配スル内、突然二月六日ノ朝九人内二人ハ帯刀、余ハ棒ヲ所持シ私宅ヘ来リ、鹿児島県庁ヨリ御用ト呼ハリ、直ニ両手ヲ捕リ縛シ、其儘船ニテ宮崎警察分署ヘ送リ、暫時アリテ糺問所ヘ引出シ、其方ハ嫌疑ノ廉有之ニ付、詳ラカニ白状セヨトノ糺シニ付、家出後経歴セシ次第ヨリ述立ケレハ、余計ナル事ヲ云フ勿レト無法ニ打チ、唯此度下リシ主意ノミ云ヘトノ事ニ付、此度下リシ主意ハ近頃当県下不穏ノ風説聞及候ニ付、我親族朋友ヨリ成丈ケ郷内ノ人ヘ方向ヲ誤マラサラシメン為メ下リシト述レハ、何ノ其位ノ事ニテ帰ルモノナリト責打チ、然ラハ其方ノ長官ハ誰ヤト糺シニ付、夫レハ川路利良ナリト述レハ、然ラハ彼ヨリ何カ御用ヲ承知致シ居ルニ相違ナイ、夫レヲ申セノ、或ハ中原徒ノ者ト何カ隠謀ヲ巧ミ居ルニ違イナイト云イ、或ハ西郷・桐野・篠原徒ノ事ニ付、タトヘ殺サルト共言ハレ、又大事ヲ承知致シ居ルニ相違アルマイ、逐一白状セヨト更々責打チ拷問一方ナラス、依之タトヒ如何様責ラル、共、ナイ事ハ申サレヌト答居候得ハ、然ラハ先ツ下ケヨトテ其席ハ下ケラレ、夫レヨリ翌日都之城ヘ護送一泊、翌八日鹿児島警察第一分署ヘ送届ケラレ、直チニ糺問ニ付、前件ノ通リ申立候得ハ、其席ハ夫レニテ相済ミ候処、再度糺問ニテ其方ハ若シ暴発ノ時ハ西郷・桐野・篠原等ヲ殺ス見込デアロウト責問故、左様ナル主意ニテハ無之ト答ケレハ、然ラハ其方ハ軍ノ事ハ誰ヲ目的ニスルカ、何レ大将ヲ目付ルデアロフ抔ト無理ニ責問ニ付、タトヘ軍ハ然ル道理ニモセヨ、我主意ハ決テ然ル主意ニハアラスト答居候得ハ、先ツ其席ハ下ケラレタリ、夫レヨリ暫時アリテ県庁内裁判所四課平(ママ)ニ引出シ、口供ヲ読聞セラレ候時、右口供中暴挙ノ際、西郷始私学校徒ヲ皆殺スル

ト云フ文言相聞ヘ候ニ付、其口供ハ我申立タル主意ニ異レリト云ヘ共、早ク拇印ヲサセヨト、側ラニ付居ルモノヲシテ無理ニ拇印ヲサセラレタリ、夫レヨリ囚獄ヘ入レ置キ、亦同月二十五六日頃県庁内ヘ仮檻倉ヲ造リ右ヘ移サレ、其後三月十日勅使柳原公ノ命ニテ官軍ヘ御受取リニ相成候迄ノ始末御尋ニ付、此段申上候也、

鹿児島県下
日向国諸県郡高岡住
士族
山崎基明 拇印

明治十年四月二日

一〇一ノ五（朱）「第四号」

始末書

鹿児島県第二十九大区一小区二十五番地平佐郷士族当時東京第四大区小石川水道町五拾二番地有島武方寄留
末弘直方
二十九年四ケ月

先般鹿児島県ヘ帰省イタシ候儀ニ付委細手続書ヲ以左ニ申上候

一明治七年中警視庁ヘ奉職罷在候処、昨明治九年九月頃ヨリ追〻鹿児島県私学校入校之者モ一層増加之趣伝聞、然ニ昨九年十一月初頃ト覚、愈彼之私学校党ニ於テハ銘〻銃器亦ハ刀剣等ヲ我モ〻〻購求、或ハ狙撃、或ハ弾薬製造等之事ニ気ヲ用ヒ、加之之レニ鼓舞スルニ種〻ノ事ヲ以人心ヲ励シ、遠カラスシテ一大事件ニ及ハントスルノ景状アリト県地出京之人々ヨリ承リ、実ニ私不肖ノ身ナカラモ、苟モ今日警視ノ部下ニ奉職ヲ辱フスレハ、千万一有事ノ日ニ及ンテハ如何ト聊憂慮心ナキニシモアラス、然ニ昨九年十二月初頃ト覚、私朋友ニテ吉井仙吉ナル者、其時分一旦帰省イタシ居候処、帰京候ニ付尚県地之状態訊問スルニ、私学校党ニ於テハ万端之準備誠ニ隆カンナリト、既ニ戸長役所等ニ於テ弾薬製造方有之、乍去イマタ私学校エ入校之人名（コレ私郷里乃チ平佐郷ヲ云フ）ハ確然不相分トノ事故、因テ私郷里（旧城下ヲ距ル十二里）之処ハ多分外郷里トハ入校之勢モ少差アル欤ト想像罷在候得共、何分私旧友親戚之者等其時分絶テ通信無之事故、イツレニ方向ヲ定メ、イツレニ名分ノアルアレハ斯ク銃器弾薬之準備ヲナス欤ト、実ニ親戚朋友間之情義ニ於テ配慮スル処トナリ、今日ノ方向如何ンヲ聞キ亦如

何之名アツテ彼之学校ェ入校ヲ望ム欤否哉ヲ問ヒ、互ニ面ヲ接シテ赤心ヲ明サンコトヲ思ヘトモ、数百里之隔路如何ンセン、又信書ヲ以ナリトモ前件郵送センコトヲ望メトモ、其時分郵送之書面悉ク途中（コレハ鹿児島内ヲ指ス）ニテ開封トカノ流説紛〻タレハ、迚モ出来サル事ト憂慮ニ堪ス罷在候、兎角前顕之勢ニテハ、私郷里ノ者共モ到底入校ヲ望ムハ必然ナリト相考、果シテ然ルトキハ斯ク隆盛之私学校党ナレハ、彼之西郷等ハ如何之大義ニ拠テ事ヲ挙ルヤ、何分之名分ヲ以テ事ヲ為スヤハ迚モ我等推知スル処ニアラサレハ、私共旧友知己ノ者モ亦何等之名分ヲ以テ斯ノ如キノ準備ヲナシ、何等之次第ニ拠テ彼之校ニ入ランコトヲ冀望スルヤト、万〻一モ彼之校之盛ンナルヲ望ム、全ク人之タメニ強迫誘導サレ、知ラス識ラス唯〻諾〻トシテ一向ニ風靡候様ノ事共有之候テハ、第一一個之自立心ヲ紊ル而已ナラス、終ニハ大勢之極度ニ至リ如何之変動ニ立至ルカモ難計儀ト、日夜憂苦罷在候折柄、昨明治九年十二月上旬頃ニモ候哉、安樂兼道・樋脇盛苗ナル両名之者共私宿所ヘ来訪イタシ呉、彼両人中ニハ自然私ニ於テモ県地之景状ニ付テハ粗承知之筈ト存候間、此上ハ倶ニ親戚朋友間ニ方向名分ヲ説ンカ為メ帰省之処、如何ト問懸候ニ付、素ヨリ拙者ニ於テモ至極之同意ナリト其節ハ別ニ懇談等モ不致候得共、茲ニ於テ始テ帰省之処ニ決心イタシ候、

一抑彼之私学校ナル者ハ、明治七年六七月頃ヨリ設立スル処トナリ、其後追〻年月ヲ経過、次第ニ入校人員繁殖セリ、然レトモ第一昨明治九年中ニ随而勢ヒ甚盛隆ヲ極メ、旧城下壮士輩ハ勿論、各郷之処ニ於テモ、日〻入校ヲ望ミ競フテ彼校員ニ列センコトヲ願ヒ、授員タル者ハ各非常之準備ヲ旨トシ、何ニ欤不穏之形勢灼然タルヲ以テ、熟〻考フルニ、万一彼之私学校党ヲシテ激裂之所為ニ渉リ、今日之政府ニ托シ暴挙之事共有之候テハ、所謂熊本・山口県等之覆轍ナリト、乍不及モ国家之一大事変ニ関係センコトヲ懼レ、殊ニ鹿児島県ノ如キハ維新前後国家ニ勲労アル尠シトセス、然ルヲ若シ今月ニ於テ兵戈ヲ弄シ国憲ヲ犯ス者アルニ至テハ、其罪実ニ免カル可ラサルハ勿論、千載朽チサル賊名ヲ負フノミナラス、遂ニ維新之前功モ一朝ニシテ水泡ニ属シ、併テ各自今日之栄誉ヲモ失墜候テハ、真ニ不相済事ト反覆思考イタシ、尤彼等若大義ヲ謬リ兵戈ヲ弄

シ、曩キノ熊本・山口等之挙動ニ及ヒ愈賊名顕然タルニ於テハ、仮令父子親戚兄弟朋友間ト雖、東西互ニ涙ヲ揮テ戈ヲ交ヱサルヲヱサル義ニテ、然ルトキハ親ハ子ニ斃サル子ハ親ニ斃サレ、又兄弟朋友間モ同断ナラン欤ト、於茲ニ猶一日モ早ク旧友知己之間ニ方向名義ヲ説カン為メ、益帰県之思ヲ促カシ、就テハイツレ外ニ同志輩モアラン欤ト、日ハ失念昨年十二月中旬過ニモ候哉、園田長輝ナル者私所ヱ問ヒ来、同様帰省イタシ度トノ事ニ付、然ラハ互ニ帰県之上各尽力イタシ度旨相約シ、右畢テ同人申ニハ、彼ノ中原尚雄ナル者ハ今般帰県ノ処如何ト発言候ニ付、定テ宜カル可クト相答、兎ニ角是ヨリ同伴、中原尚雄カ宿所ヲ問ヒ度トノ事ニ付、罷越候処、幸ヒ同人儀モ在宿ニテ、前件之趣ヲ以テ倶ニ帰省ハ如何ト、種々懇談ニ及候処、同人ニ於テモ聊異存無之旨返答イタシ、実ニ期セズシテ其説之符合スル、真ニ愉快ナリト皆々慶喜之至ニ堪ヘスト、イツレ此上ハ一日モ早ク県地ヘ馳下リ、銘々ノ見込ヲ以テ第一名分大義ノアル処ヲ主張シ、彼我之信情ヲ聞仲スルニ如スト、乍去昨日遷延機ヲ失シ候テハ又我輩之見込モ難相立ト、頻ニ熱心ニ候得共、何分各奉職之身ナレハ、夫々帰省ニ付テモ成規モ有之儀ニ候得共、如何之都合欤ト相考、日失念昨年十二月中、大山綱昌方ヱ一先罷越、前文之次第ヲ以帰省之趣意詳細申伸候処、夫レハ誠ニ宜カル可ク、決シテ今日帰省等之成規上ニ付テハ聊差間之廉無之欤ト相被答、尤大山綱昌ニ於テモ銘々帰省之件ニ付テハ一美事ナリト、所謂警察上之本趣意ニテ未発予防之挙ト被申伸、第一我輩ニ於テモ、人民ヲシテ自守自立之権利ヲ保全スル一助ナランコトヲ希望シ、イツレ帰省ニ付テハ段々外ニ同意之人々不少哉ニ承リ候ニ付、願ハクハ一度ヒハ互ニ同志輩之面々倶ニ相会シ、各自之見込ヲ伸度事ト考居候処、帰省懇望之者ハ誰人ニ限ラス聊心中相互談論之タメ一同面接、然ル上、東京出立候ハヽ県着之後モ万事都合モ可被宜ト銘々集合之期日ヲ相待居候処、幸ヒ園田長輝下宿ヱ集会之積相決、昨年十二月二十三日頃ニモ候哉、夕方ヨリ各出会、互ニ譚話スル処ハ第一帰県之上ハ忍耐ヲ旨トシ、厘モ激論等ニ渉ラサル様相約シ、万一彼等ヨリ粗暴之所為ヲ受ルトモ忍フ可キハ充分ニ忍ハサレハ、迚モ銘々ノ信実モ不相立候而已ナラス、却テ彼ノ私学校党ヲシテ激発ヲ促カス様之事ニ立至リ候

テモ我輩之赤心モ相立兼候儀ハ勿論、殊ニ不容易国家之一大事件ト相成ンコトヲ懼レ、呉〻モ帰県之上ハ柔順ヲ眼目トシ、唯信仰守ルニ如ズト、亦自己之信事ハ彼ニ属シ、彼之信事モ亦聞知シ、互ニ大義名分之アル処ヲ談論、決シテ今日臣民タルノ方向大義ヲ謬ラス、且国民タルノ一大義務ヲ失ハサル様ニト、類ニ触レ事ニ就テ各自之信実ヲ述ルニ止ルト相約シ、サレトモ、彼ノ西郷ニ於テハ従来大義ヲ唱フルノ人ナレハ、断ジテ不名不義ノ挙ニハ及ブマイト皆〻信用イタシ居ル事ト談話イタシ候、因テ己カ説ク処ト儀ノ符合スル者ハ真ニ望ム処ナレトモ、若否ラスシテ違フ者ハ唯今日義之合ハサル処無致方事ト思ヒ、決シテ己レカ説ニ服セサルヲ以テ侮ル可ラスト、先ツ是等之事ヲ一同申合セ、尤帰県之折モ多人数一同出立候ヨリハ四五名位ツヽモ後レ先キ立チ出立候方、県地着之節都合モ可被宜ト申合セ候事、

一昨九年十二月二十五日頃ニモ候哉、帰県ニ付テハ万一彼等暴発之時分ハ真ニ報知等之都合モ有之ニヨリ、今一応イツレニ欤出揃度トノ事ニ付、下谷龍泉町旧川路邸内エ集合候テモ差閊有之間敷ト、前大山綱昌ヨリモ達事故、本日正午十二時頃ヨリ出会候処、其節大山綱昌儀モ参リ、帰省之上ハ第一温柔ヲ旨トセサレハ銘〻之信実モ貫カサルハ勿論、今般ノ帰省タルヤ、万一彼等暴発之時分ハ各図ヲハヅサス電報之処ハ専一ト、愈明治九年十二月二十六日頃ヨリ前後ニ便船次第出発之儀相決セリ、

一帰省願書等モ夫〻許可ヲ得、九年十二月廿八日私儀モ発足、外ニ同行柏田盛文并田中直哉都合三人供〻、同日横濱ヨリ玄海丸ヘ乗込神戸港エ同三十日着、明治十年一月一日又〻日宝丸エ乗換当港出帆、明治十年一月十日ヲ以鹿児島県エ着ス、

一帰郷候処、直ニ親戚之者共来訪候ニ付、平佐（コレハ私郷中ノ名）之儀ハ私学校エ入校之処ハ如何之模様欤ト問訊スルニ、実ニ過日来誠ニ盛ナリト、最早大抵八拾名位ハ入校望ミ名簿迄モ差出シタル由承リ、因テ私従来親友之名ヲ指シ、何某抔ハ如何ト尋ヌルニ、疾ク入校シタリト、乍併華（花）房某・三輪某之両名ハ入校望之者トハ最初ヨリ異議ヲ唱ヘ、今日マテイマダ私学校党エハ組セサル旨承リ候ニ付、コレハ私親友之者ニテ、イツレ一夕互ニ大義名分シアル処ヲ以、第一方向如何ンヲ談論致シ度

儀ト考居候処、量ランヤ彼之友人モ遠カラスシテ来訪イタシ呉候ニ付、幸ヒナリト相互当時之形勢ヲ論シ、兎角今日私学校盛ンナリト雖トモ、名分大義ニヨリ己レ身ツカラ快トスル処ナケレバ、仮令私学校ハ衆ノ企望スル処ナリトモ、強テ入校ヲ願フニ及ハサル儀ト互ニ信情ヲ申伸、夫ヨリ始終来往、先ツ此両名ハ実ニ符節ヲ合セタルカ如ク各自主自立之権利ヲ主張シ、第一今日事ヲ為スハ名ノ正シキヲ基本トシ、万一有事ノ日ニ於テハ錦旗ノ本ニ斃レン事ヲ茲ニ於テ始テ義ヲ同フス、

一前花房・三輪之両名ハ素ヨリ親友之者故、或ル日柏田盛文・田中直哉并花房・三輪之両名モ倶ニ出会、三輪・花房ノ両人ニ訊問スルニ、斯ク銃器・弾薬ノ製造購求ニ付テハ、一体資本ノ儀ハ如何ノ金筋ヲ以右費用ニ充ツル者欤ト旁談話ノ末、先ツ学校方之レハ一郷里ノ学校ヲ言フ教育金ハ勿論、郷備金等之レハ所謂一郷ノ共有金ナリヲ以テ前件費用ニ充ツルトノ事故、私共ニ於テモ大キニ愕然、然ラハ私学校入校之者而已ニ斯ク手厚ク非常ノ準備ヲナスニ付テハ、公然タル彼ノ国危難ノ時兵□(本ノマヽ)持スルノ国民軍相当ノ者ニ於テハ、如何ノ緩急軽重アルアレハ均一ノ準備ヲナサヽル者欤ト論セシニ、如何ニモ尤ノ議論ト花房・三輪ノ両名モ更ニ異議ナク、因テ該両人ヨリイツレ不日ニシテ、屹度戸長等ト右次第論破スヘキトノ事ナリ、

一帰県後追々旧友親戚輩等エ接スル毎ニ、条理名分ノアル処ヲ正シ、斯ル盛世ニ遭遇シ猶独立自主之権利ヲ保有シ、常ニ能ク方向ヲ定メ決シテ無根ノ風説ニ蠱惑サレズ、名分ヲ明ニシ、開明ノ今日ニ当リ漫リニ彼ノ束縛ヲ受ク可ラス、然レハ彼ノ私学校ト雖トモ、名ナキノ事ニ兵器ヲ弄スル等ノ事アレハ、万々彼ノ私学校党ニ組スヘカラスト懇々相噺居候処、親戚輩ノ処ハ段々入校セサル者モ有之候得共、漸次己レカ信意ヲ我郷里ノ人々ヘ貫カンコトヲ希望スル折柄、量ランヤ左ノ始末ニ及ヒタリ、

一明治十年二月四日私愚弟田中直哉同伴、伯父亡廣瀬小左衛門宅ヘ罷越居候処、午前第十時頃ニモ候哉、拾余名ノ人々各草鞋ヲ履キ、脚半ヲ当テ銘々三尺内外之棒ヲ携ヘ、一同ニ座中ヘ踏込、突然私ノ咽喉ヲ押ヘ候ニ付、何事ナラント子細ヲ問ヘトモ更ニ不相分、散々ニ支体ノ差別ナク打擲イタシ候間、私ニ於テモ大キニ打驚キ直ニ起上リ、何事ナレハ斯ク麁暴ノ所為ニ及フ可

キ哉ト静カニ致呉候様相支居候処、右人数之内後ヨリ碇ト私ヲ抱キ留メ、打テ打テト声ヲ懸ルヤ否ヤ頭部ヲ三四回程打擲サレ、其折頭部ヘ傷痍ヲ受、流血淋漓終ニ私学校党ノ為メニ縛セラレ(隈之城)警察分署ヘ引カレ、夫ヨリ無程夜ヲ徹シテ旧城下(廣小路)警察第一分署ヘ送ラレ、翌五日朝六時過ニ着、此時始テ同僚之者共段〻縛セラレタルヲ悟リ、実ニ四視スレハ互ニ面部ヨリ出血、或ハ支体ヲ悩マサレ、真ニ見ルヘカラサルノ醜躰ヲナシ、心中如焦、同日午後第五時過調所ヘ引廻サレ強問之次第左ニ伸ル処ノ如シ、

一明治十年二月五日午後第五時頃、其節ハ姓名確ト存セサレトモ、警部中山甚五兵衛トヤラ申人之由、私ニ問ハルヽニ、其方今日斯ク縄ニ付キシハ如何之事ト考ヘ居ル欤ト被申候ニ付、私答ヘテ曰ク、中心ニ浮フ所ハ定メシ東京表ヨリ帰省イタシ居候ニ付縛サレシ事欤ト申立タレハ、何ヲ申ス、其方共今般帰省イタシ居候ハ、第一趣意ノアル事故夫レヲ申立ツ可シト、判然同類之者ヨリ最早逐一白状ニ及ヒタリト高声ニ被相問候ニ付、答テ曰ク、私共今般帰省ノ趣意ヲト御尋ナレハ、決シテ今日聊タリトモ包蔵ス可キニアラス、速ニ可申立ト云テ全体此度帰省之事タルヤ、私親此内ヨリ病体之事故、帰省イタシ候、乍併兼而警視庁ヘ奉職之身ナレハ万〻一モ変動之次第ハ事大小トナク出張先、又ハ帰省先キ等ニ限ラス速ニ警視庁エ報スヘキ心組ナリト、コレハ素ヨリ私共章程中ニ有之事ト答ヘタレハ、其時大イニ声ヲ高クシテ何ヲ喋〻スル、余計之事ヲ申立ルニ及ハスト言テ、直ニ左右ヨリ一同肢体ノ差別ナク打立テラレタリ、私申ニハ左マテ非常ニ打擲ヲ成サランテモ自ラ帰県之趣意ハ巨細申立ヘシト云タレハ、暫時右之打擲ヲ止メタリ、因テ申ニハ帰省ニ就テハ聊趣意ナキニアラス、第一彼ノ私学校党ニ於テハ近来余程盛ンノ由ニテ既ニ東京表ニ於テモ種〻ノ浮説等伝聞スルニ、県地之形勢不穏之哉ニ承リ候間、実ニ親戚朋友間ノ情義ニ於テ忍ヒサル処有之ニヨリ、一面会之上互ニ名分大義ノアル処ヲ以テ、方向ヲ謬ラサル様談度トノ趣意ハ勿論有之候ト申立タレハ、大イニ叱リテ曰ク、然ラハ東京ニテ誰ヨリ県地不穏之旨承知候欤ト問ハレ候ニ付、答テ曰ク、誰ト申儀ハ判然不相分、色〻ト通路之説又ハ新聞等ニモ掲ケアルヲ目ニ触レシコト共アリト云ヒタレハ、又〻左右ヨリ一同打擲甚敷、此時私学校

人員傍ラニ群居シテ罵声囂〻タリ、続テ問ハレシハ、彼之私学校ナル者ハ誰カ設立シタル者ト心得居ル欤ト云ハル丶ニヨリ、答テ曰ク、コレハ西郷氏ノ設ケラレシ者ト心得居マスト申タレハ、然ラハ此私学校ノ規則ハ承知カト問ハル丶ニヨリ、又答テ曰ク、彼ノ学校規則之儀ハ仄カニ聞処ハ、第一王ヲ尊ヒ民ヲ憐ミ国家危難之時ハ各自之義務ヲ尽シ国難ニ斃ル丶トノ校則ナランカト申タレハ、例ノ高声ニテ斯ク正シキ私学校ニ何之弊害アル欤、夫レヲ申立ヘシト云ハル丶ニヨリ、私ニ於テハ右弊害ノ有無更ニ存知スル所ニアラスト申畢ルヤ否ヤ、直ニ打擲サレ、或ハ打転ロバシ外之趣意ヲ申立ヨ、申立ヨト非常ノ強問ニ候得共、暫ク黙シテ云ハサレハ大イニ叱リ付、追テ取調ルニヨリ篤ト勘考胸ヲ改メテ申立ヘシト、サガレート云テ第一席ノ調ヲ止メタリ、

一明治十年二月六日午後第二時頃、又〻調所ヘ廻レトノ事故、其節モ前中山某ハ勿論、外ニ姓名知ラサル人両人列席ニテ問ハル丶ニ付、昨日之申立一ツトシテ確証ナキ事而已申立タルニヨリテ、今日ハ逐一速ニ証拠ニナルコトヲ不残申立ヨトノ事ニ付、私答テ曰ク、昨日ヨリ申立通リ之事ニテ、此節帰県之儀ハ第一親戚朋友間之処ヘ互ニ名分大義ヲ確守、決シテ不名不義之挙動ニ組セサル等之儀ヲ談論センカ為メナリ、然レトモ万〻一鹿児島県ニ於テ暴発之挙ニ立至リ候節ハ、自ツカラ電線ヲ以テ夫〻東京方ヘ申越スハ兼テ覚悟之事ニ候ト申畢ルヤ否ヤ、直ニ左右ヨリ肢体ノ差別ナク打立テ、其打擲昨日ヨリ一層甚敷、其折又〻問ハル丶ニ、其方共ニ於テハ不容易儀企居ル者共ニテ、若シ事アルノ日ニハ横矢ヲ射ル欤、或ハ先陣後陣ヲ突クニ誰カ大眼目トシテ一人ヲ殪スノ企アルニ付、夫レヲ申立ヨ申立ヨト愈声ヲ高ラカニシ、愈怒リテ之ヲ問ハル丶コト数回ナリ、私答フルニ、ソレハ決シテ無キコトナリト云ヒタレハ、何ニ不届ケナト云ツテ傍ラニ居ル壮士輩打擲ハ勿論、其時ハ猶〻憤激ノ様子ニテ草鞋ヲ履キタル足ヲ以テ私頭ヲ踏押エ、或ハ首ヲ蹴リ、終ニ其残酷甚敷ニ至テハ頭ヲ打チタルニ傷ヲ蒙リ流血淋漓タレトモ、右横矢ヲ射ル欤、先陣後陣ラヲ衝クニ誰カ眼目トシテ壱人ヲ殪ス等之心中更ニ無之ト、反覆答タレハ、然レハ先ツ一時ニ責殺シテモナランニヨツテ、又〻取調フルニ付サガレート云ツテ第二席ノ強問ヲ止メタリ、

一右両度之調ニテ直ニ同年二月七日鹿児島県囚獄ヘ入ラレ候ニ付、実ニ乍遺憾モ寃罪ニ処セラレ、私学校党ノ為メニ非命ノ死ニ就クハ必然ナラント死活旦夕ニ迫リ罷在候処、明治十年二月八九日頃ニモ候哉、県庁第四課ヨリト欤呼出之趣申来リ、一同罷越候処、次第ニ壱名ツヽヲ呼出サレ、何カ読聞カセル物音遙ニ相聞ヘ居リ、然ルニ無間モ大音ニテ叱リ付ル声耳ニ響キ、コレハ定メテ抵抗スル処ヨリ斯クノ如キナラン欤ト察シ居リタレハ、無程私ニモ呼出サレ、其方ノ口供読聞カスヘクトノ事ニテ、尤多人数之事故齟齬イタシ居ル処モ有之居候得共、左様相心得ヘシト云ツテ読聞ケラレ、右畢ルヤ直ニ拇印可致ト云ハレシカ、曩キニ申出ル廉トハ全ク相違之儀共有之段申伸候得共、素ヨリ両手ハ碇(錠)ト縛セラレ居タレハ抵抗スルニ力不及、傍ラニ居タル者ヨリ直ニ墨ヲ付ケ、終ニ拇印ヲ捺シタル事故、実ニ無致方儀ト思ヒ、此上ハ唯々一死ヲ待ツ而已ト相考、断頭近キニ在リト思ヒシカ、又々囚獄ヘ引戻サル、然ルニ明治十年二月廿五六日頃ト覚、鹿児島県庁構内新檻倉ヘ引キ移サル、其時路傍ニハ男女老若群集我輩ヲ望ミ種々ノ罵声罵々タリ、明治十年三月十日ヲ以テ官軍ノ手ニ請取ラレ、実ニ千死免カル可ラサルノ虎口ヲ脱シ再ヒ天日ヲ拝スルコトヲ得タリ、

右通ノ事ニテ始末御尋ニ付、此段申上候、以上、

鹿児島県第廿九大区一小区廿五番地
平佐郷士族当時東京第四大区三小区
小石川水道町五拾弐番地有島武方寄留
末弘直方拇印

明治十年四月

二十九年四ケ月

一〇ノ六(朱)「第五号」

始末書

東京第四大区三小区小石川水道町
五拾弐番地有島武方寄留
鹿児島県下第廿九大区一小区百五拾
六番地平佐郷士族
田中直哉

当丑二十三年十ケ月

始末書

私儀

今般鹿児島県下ニ於テ私学校徒ノ捕縛スル所ト成リ、其

末熊本県下ニ乱入シ御征討被仰出候ニ付、勅使柳原公鹿児島江御下行相成、官兵ノ為メ虎口ヲ脱シ現時臨時裁判所へ御呼出之上、其始末巨細申上候様トノ御沙汰ニ付、左ニ申上候、

一私儀明治九年五月東京発足、鹿児島県へ帰リ熟〻該県ノ景状ヲ視察スルニ、県下ハ他ニ異事無之候得共、只私学校徒之跋扈スルノミニテ、聞ク処ニ拠レハ、加治木ニテハ私学校徒之猖獗ナル他郷ニ比スヘキナシ、而シテ其甚敷候至候テハ、百姓ノ門高ヲ悉ク割直シ、或ハ人夫ニ与ヘ、或ハ戸口ニ割付、其名ヲ該郷之共有高ト唱ヘ、百姓等難渋申立、不服ヲ鳴ラシ、其筋ヘ歎願スルモノ等有之候処、其末終ニハ私学校連之撞擲スル処ト相成、其打擲サレタルモノハ何病院ニ入リ、現ニ苦痛酸辛之状見ルニ堪ヘタリト、而シテ其暴行タルヤ頭ヲ包ミ棒ヲ持チ実ニ強賊ノ所為ナリト、或ハ聞ク何々郷ハ私学校徒之為メニ戸長ヲ免セラレタリトカ、或ハ某々郷ハ其郷共有金ヲ以テ銃器ヲ買入ル、而シテ共有地モ悉ク私学校徒ノ占メテ耕作スル所為ナリト、種〻紛〻私学校徒ノ行業枚挙スルニ遑アラス、因テ私共二三ノ友人ト以為ク、終ニ其余波ハ我郷ニ波及シ、或ハ郷金ヲ費シ教育上前途ノ目的ヲ失ヒ、人々ノ困苦ヲ負フ遠キニ非サル可シト、我隣郷合併論ヲ立テ、合併区中ノ代民区会ヲ開キ、一ハ壮士輩ヲ教育シ方向相定メ、一ハ区会ヲ開イテ其暴勢ヲ制スルノ策ヲ施サント、終ニ私共大区及ヒ隣区受持ノ区長ニ迫リ（区長ハ皆私学校徒ナリ）、隣郷ノ正副戸長・学校教師ヲ会シ合併論ヲ立テンコトヲ以テセシニ、区長等不得止人ヲ集合スルノ令ヲ発シタリ、而シテ会スルコト二席、種〻弁論ヲ費シタリト雖トモ、何分人心未タ此度ニ達セス、衆議一決ノ処ニ参ラス、因テ以為ク、是レヨリ区長・県令ニ迫リ、其局ヲ結フニ如カスト、区長ニ迫リ、前件ノ次第ニ付、此上ハ是非共隣郷ノ合併ヲ為シ、区会ヲ開キ給ハンコトヲ以テシタリシニ、陽ニハ敢テ拒ムノ様子モ無之候得共、陰ニハ彼等ノ私学校誘入之策立サルヲ以テカ、頻リニ防禦スルモノヽ如シ、因テ又県令ノ宅ヲ訪ヒ此事ヲ懇請ス、然レトモ県令ノ意、又区長等ト髣髴タルモノヽ如シ、故ニ此事ハ区長・県令ニ委シ、彼等ノ自カラ着手スルニ非レハ能ハスト思込ミ相休メ申候（是レモ私学校ノ猖獗ニシテ一郷々々ノ開運ヲ妨ケ、教育上ノ進歩ヲ遮ラサル様ニトノ予防着手ニ御座

候)、

一右之見込モ不伸ニ拠リ、是ヨリ宗教ノ道ニテ人々ノ智識ヲ開キ、権利義務ノアル所ヲ知ラシメ度ト思ヒ込ミ、元大山県令ニ建白シタリ、其書ノ大意ハ旧来当県之儀ハ真宗信教之厳禁ニテ候処、県治之今日ニ至リ、天下画一之制度ニ帰スヘキ儀ニテ、勿論信教之自由ヲ束縛被成候儀ハ之レ無カルヘシ、且三四年前県治ニ改リシ後、県庁ヨリ真宗信教不相成、何トナレハ旧知事公ニ対シ不相済抔トノ告諭文有之候ニ付、ソレヲ一〻駁議シテ建白シタリ、幸ニ開教自由ノ時運相成候乎、宗旨ハ各自人民ノ信教ニ任セ候云〻ノ県達アルニ至リ、是ニ於テ私共両三名西京ニ上リ、本願寺方ヘ附キ説教僧派出ノ儀ヲ請ヒ、許可ヲ得テ相帰リ、専ラ本願寺ヨリハ日〻盛大ニ着手布教ノ手ヲ押シタリ、因テ私共ニハ少〻見込モ有之候故、仮説教所ヲ我郷ニ設立センコトヲ県地ニ願出候処、一向捗ラサルニヨリ、数度促願イタシ候得共不相済候、是モ私学校徒(第四課ニテ六ケ敷申候由、四課ハ警察ニテ総テ私学校徒ナリ)ト県庁トニテ斯スルコトト考ヘ、我々ノ力ニテハ事及ハサルヲ悟リ憤懣ニ堪ヘス、又〻上京ノ志相決申候、

一明治九年十一月下旬警視庁ヘ奉職、警部補相勤居候私従兄廣瀬昌柔ト同伴ニテ上京、十二月上旬東京着仕候、尤私県地出立之時マテハ庁下及ヒ他之郷々ハ私学校ノ勢力熾ニ有之候得共、私之郷里ハ一人モ人校ノ者ハ無之候処、着京之上県地ヨリ来候同郷之者之噺ヲ承リ候得者、私郷之儀モ既ニ私学校ヘ入校セントスル模様ニテ、現ニ自分出立之前ハ塩焙等ヲ晒シ銃器ヲ装ヒ居レリトノ事故、夫レテハ実ニ不容易事ト同郷書生柏田盛文并兼テノ親友猪(鹿)ケ倉兼文等ト往来シ、色〻憂慮談話之際、愚兄末弘直方等帰省致候旨之噺モ承リ候故、私共儀嘗テ親敷交際致シ居候竹馬之友、今日如斯景状ニ立至候テハ、一ハ平日之交誼ニ対シ、一ハ国家之安危ニ関シ、傍観致スヘキ時機無之(私儀ハ前件申上候合併区并区会等ノ論、且開宗仕懸之事モ有之、宜敷都合モアラハ兼テノ宿意ヲ達シ度存慮モ御座候)、就テハ倶ニ県地ニ下リ彼等之説ヲ聞キ、我見込ヲ伸ヘ、可成事暴発ニ不出様相防度考ヘニテ、左之趣意等相含罷帰申候、

一明治九年十二月着京後、人々之伝話ヲ聞クニ、当時鹿児島私学校徒ノ猖獗実ニ言語ニ絶ヘタリト、曰ク該校

人員ハ隊伍ヲ組ミ日〻射撃ヲ専ラニシ、入校之人員ハ日一日ヨリ増加シ、此末決シテ無事ニ沈マルヘキ景状ニアラス、現ニ該校人々ノ唱道スル処ニテハ十二月何日ニハ陣揃ヲナシ、東京ヲ指シテ出ントス、或ハ曰ク、家貲ヲ尽シテ軍装ヲ専ラニシ、其唱フル所ノモノハ一ニ政府ヲ仆シ奸吏ヲ攘フトカ、或ハ外債ノ為メニ九州一円ヲ抵当ニシタリ、是政府ヲ覆サスンハ何レノ政府ヲカ覆サント、或ハ曰ク、日本政府ヨリ魯国ニ貸スニ何開港場ノ台場ヲ以テシタリ、或ハ曰ク、英国ヨリ西郷隆盛ヲ将校トシテ日本兵ヲ借サンコトヲ以テシタリ、或ハ何、或ハ何〻ト種〻ノ怪説一方ナラス、又曰ク、西郷ハ陸軍大将ナリ、大将ノ名目ヲ以テ兵ヲ引率スレハ鎮台ハ決シテ抗スルモノニアラス、或ハ曰ク、西郷自カラ云ヘリ、予兵ヲ率ヒテ出ルアラハ、敢テ一騎モ損セスト、紛〻タル流説枚挙スルニ遑アラス、因テ私共以為ク、業已ニ如此ノ形勢ナラハ、我郷里ノ親戚朋友モ最早私学校ニ入校シタルナラン、若シ入校セシナラハ迚モ詮方ナシ、併未タ入校セリトテ多キニハ至ラサルヘシ、現ニ十一月下旬迄ハ一人モ入校セサリシ故、一時モ早ク県ニ帰リ、我々ノ赤心ヲ吐露シ大義ヲ説キ、名分ヲ唱ヘ、我説ニ同フスルモノアリ静穏ヲ計ルノ一助ニモ相成候ハヽ、此上モナキ仕合ナリ、又或ハ今日上京之目的アルモノハ同行帰京スヘシ、又郷費ニテ東京ヘ書生ヲ出シ、追〻ト教育ヲ盛大ニ引興スベシ抔思込ミ、加之外城ノ儀ハ旧城下之為メニ奴隷使セラレ、毎事ノ彼ノ買ル処トナル尠ナカラス、又候彼ノ下ニ立チ、彼カ鼻息ヲ伺フ様ニテハ、何ノ日カ外城人カ城下人ト併立シ、自立自主之精神ヲ発揮シ国民タル義務ヲ弁知スルニ至ラン、若シ我親戚朋友ニシテ一歩ヲ誤リ、政府ニ向テ干戈ヲ弄スルアラハ、我輩平生ノ交誼ニ戻(悖)ルノミナラス、此ノ戦タルヤ親ハ子ヲ打チ、弟ハ兄ヲ屠ルノ戦ニシテ、何レニシテモ倫理ヲ紊リ、戦場ニ兄弟相見サル能ハス、此時之去就実ニ為ス所ヲ知ラス、如カス速カニ県ニ帰リ親戚朋友之間ニ説キ、名分ノ紊ル可ラス国憲ノ犯ス可ラサルヲ諭シ、又兼テ城下人ノ買ル処ヲ説キ漸次激気ヲ静メ、白刃ヲ接シ弾丸雨飛之間ニ相見ルモノヲ変シテ、上ハ国家ノ治安ヲ保チ、下ハ人間ノ倫理ヲ乱ラス、朋友ノ交誼ヲ全フシ、以テ一郷ノ方向ヲ定メルニハト熱心シタリシニ、皆々其旧里故友ヲ思フノ情ハ一徹ニ出テ、彼ニ伝ヘ是レニ談シ何ト

ナク帰県ノ思ヲ為ス者数十人ニ至レリ、我儀ハ当時疾病ニ罹リ居候処、帰県之面々ハ一先茂草下谷川路利良ノ旧邸ニ会シ度トノ事ニ候得共、何分病中之事ニテ相扣居候処、安樂兼道態ト使ニ来リタリト参リ呉候ニ付、出席仕候、其時ノ会議トハ外ニハ何ニモ無之、只帰県候上ハ可成信実ヲ以テ親戚ノ際朋友之間ニ談シ合ヒ、専ラ平穏ニシテ激発セサル様ニ尽力シ、只々我等ノ衷情ヲ彼ニ写シテ、ドウガナ戦端ヲ開カサル様ニトノ趣意ナリ、若シ一朝鹿児島ニシテ暴発スルアラハ尋常ノ事ニアラス、終ニ日本独立之安危ニ関スルアラン、何分ニモ速カニ県地ニ帰リ旧里親友相親ムノ情ヲ以テ、名モナク義モナキ暴挙ニハ組セサル様ニ尽力致度トノ事ニ御座候、私儀ハ此席ニ出シ儘ニテ外ニ談合等モ不致候得共、只々親戚朋友僻遠ノ地ニアリ、天下ノ事情ニ通達セス雷同帰随スルアランカト憂慮罷在候、

一右等ノ考ニテ明治九年十二月二十八日東京発足、横濱ヨリ玄海丸ニ乗込、神戸ニ着シ、明治十年一月一日、日宝丸ニ乗付、馬關・鞆津等ニ汐懸シ、長崎ニ達シ大和船ニテ我郷里（鹿城去ル十里半）川内川ニ着シ帰宅スル同年一月十日ナリ、帰リタルヨリ、我親友及ヒ親族ノ噺ヲ承リ候ヘハ、何々某々ハ既ニ私学校ニ入レリ、入校人員大低八十余名ナリ、而シテ戸長所ニテハ日々銃器ヲ買入レ、銘々ヘ相渡シ弾丸ノ準備モ大低備ハレリ、而シテ私ニ為申聞候ニ付、先度御方相帰候儀、世間ニテハ評判一方ナラス、或ハ不殺シテ上京為致タルカ残憾ナリ抔トカ、種々ノ説両親共ニモ聞及、憂慮ノ体ニテ為申聞候ニハ、先度真宗開教事件ノ事共者、猶更私学校徒ノ忌悪ヲ抱シ基本ニ相成候抔承申候次第ニテ、曩キニ思込ミタル合併区会・開教着手等ハ、迚モ行ハル、景状ニ非ルノミナラス、県地ヨリ上京ノ者ニ承候ヨリハ一増甚敷勢ニテ、我住所ナレトモ居ルニ居ラレヌ景況ニ御座候、然レトモ幸ニ壮年輩ニシテ花房・三輪抔申者入校不仕候ニ付、我々ノ信実ヲ明シ候ニ、彼ニモ大ニ力ヲ得タル姿ニテ、此上ハ大義ヲ確守（ノテ）テ動カスト迄ニ云ヘリ、猶外ニ親類ノ者入校セントスル者モ入校不仕者モ御座候、

一右三輪・花房ノ両人ヨリ戸長等ニ時々談合為致、暴発ヲ防キ度熟談ノ折柄、戸長等（私学校徒）ハ既ニ軍用金ノ用意ヲ為セリ（是レハ郷ノ共有金等町中ニ課金等ナリト）、又曰ク、八升壱合米前借ニテ県庁ヨリ七百円

位請取タリ抔承リ候、其節ノ風評ニ某々郷ノ噺シニハ、出兵ノ日限今日明日モ知レス、私学校徒ノ者ハ皆〻其用意最中ナリト（最モ外城ヨリハ旧城下ニ報知役ト申者ヲ遣シアリ）伝聞セリ、而シテ二月四日ノ日ニ愚兄末弘直方ト列合、伯父廣瀬ノ宅ニ参ル途中、両三日前旧城下ニテハ私学校徒等弾丸ヲ掠奪シタル様子ナリ（抔脱カ）談話致シ、廣瀬ノ宅ニテ談話ノ折柄、十人余ノ人々二尺ニ足ラヌ棒ヲ持チ、何ノ徽章モナク脚半ト草鞋ヲ着ケタルモノ踏込、上意ナリト云フヨリ早ク無二無三ニ打擲スルニヨリ、何等ノ訳ニテ斯セラル、カ、暫時可待給ト申セシカ共、中〻以テ聞入ル、体ニアラス、其頃中私ニハ一人ノ棒ヲ取リ檀ニ働カサ、リシニ、傍ヨリ頸足ヲ打タル、愚兄ヲ見レハ面部ヨリ出血シ畳ノ二三枚ヲ染メタリ、因テ迚モ茲ニテ理非分ルヘキ儀ニ無之ト存シ、捕縛可被下ト申候得者即後手ニ縛シ、隈之城分屯ニ引行キ、夫レヨリ竹輿ニテ旧城下ニ送ラル、其日二月四日ノ夕方ニテ、庁下廣小路第一屯所ニ着スルハ同五日ノ暁六時頃ニ御座候、

一二月五日午後糺弾所ニ引出サル、其時私学校ノ人員脇ヨリ群出テ、傍聴ス、而シテ拷問ノ節打台スルモノト見ヘ、三四人尻ノ方ヘ廻リ、三尺計リ棒ヲ杖イテ立ツ、姓名能ク不存候得共、中山甚五兵衛トカ申者私ニ問フテ曰ク、汝等帰県スル何ノ趣意ナルカ、巨細白状スヘシト、因テ答テ曰ク、我等ノ帰ルヤ他ニアラス、私学校徒日ニ増シ月ニ加リ、此頃ニ至リ我郷ノ者共往〻入校セントスル模様アルヲ聞キ、一往相帰候上ニテ我親戚朋友ノ者ヘハ入校ノ志相尋候上、我等之見込ヲモ伸ヘ、互ニ今日身ヲ処スルノ方向ヲ研究致度故罷帰申候ト答候得者、私学校ハ誰カ立タルモノト思フ乎ト云ヒ候ニ付、察スルニ西郷ノ意ニ出シナラヌ（ン）ト云ヘハ、西郷ノ立テタル私学校ニ入校スルモノヲ何故ニ悪敷ト思フ乎ト云ヒ宛（つつ）、打テト命シ、右ノ尻脇キニアル者共棒ヲ以テ打ツコト数知レス、因テ姑ク待給ヘト云ヒ、我々ノ意ハ善トモ悪トモ云フニ非ラス、聞ク所ニテハ該校ニ入レハ死生ヲ約シ旅行ヲ禁スルト、而シテ今日ニ至リ何欤不穏ノ挙動故、若我親戚朋友ニシテ趣意ヲ弁セス、（無）悪暗ニ此校ニ入レ万〻一方向ヲ誤候儀有之候テハ、兼テノ交誼ニ対シ朋友間ノ情義不相済ノミナラス、国家ノ危安ニ関スル鮮カラサルニ因リ、ドウガナ平穏ニシテ今日戦ヲ開カサル様ニトノ熱心ナリ、勿論今日戦

ヲ開クアラハ何レニカ我輩モ方向ヲ決セサルヲ得ス、何レニ決スルモ日本同抱(胞)兄弟上ノ戦、互ニ涙ヲ揮フテ戦ハサルヲ得ス、況ヤ我親戚朋友ニシテ敵味方ト相成様ノ儀有之候テハ、実ニ不慊次第故、一ハ方向取究ノ為ニモ帰県致シ、朋友間ニテ方向研究致度、可成ハ私学校ヘ入校セサルトモ国家危急ノ時ハ軍ニ従事シ、護国ノ義務相尽度ナリト相答候ニ、其方ハ何カ外ニ謀ル所アリ、鹿児島ニテ事ヲ挙ルトキハ必ス横矢ヲ入ル、ノ積ナルベシ、其時ハ誰ヲ目的トシテ殺スノ積カ夫レヲ云ヘ、西郷大将ヲ殺スノ存念ナルヘシト頻ニ拷問シ、両三人ニテ打擲スル一方ナラスト雖トモ、素ヨリ如此ノコトハ夢ニタモ看サル事故、答テ曰ク、西郷ハ天下ニ有功ノ人ナリ、カヽル有功ノ人ヲ殺ス抔トハ夢ニモ見サルコトナリ、我々共ニハ横矢ハサテ置キ戦ノ無ヒ様ニ熱望シタル事ニテ、カヽル疑ハ決シテ御無用ナリ、御疑トテ大抵程ノアル者ナリ、天下ニ西郷ヲ殺スノ人アルヘキノ理ナシ、是レハ御無理ノ御糺問ナリト頻ニ弁駁ス、然ルニ此時甚打擲シ切リ声ヲ懸ケテ打チタレトモ、初メヨリ申通ニテ決シテカヽルコトハ無之ト云ヘハ、傍ヨリ人アリ、私ヲ糺問スルモノニ耳話シテ、ソレハ止メヨト云ヒタルモノヽ如シ、其時其拷問ヲ止メテ「下カレー」ト云ヘリ、

一二月五日暮方又〻呼出シテ曰ク、何カ謀ル所アリ、夫レヲ云ヘトテ或ハ打チ転バシ、所〻打答シ無理ニ訊問セラル、然レトモ初メヨリ答ヘタル通リ、私共帰県之趣意ハ既ニ云ヒ尽セリ、何ニモ外ニ申上ルコトハ無之、只〻戦端ヲ開クアレハ涙ノ戦ニテ、実ニ情義上難黙止ニヨリ帰県シタリ、此上ハ何様訊問アリトモ白状スルノコト(ナント)云ヒ、只打擲ノ苦キヲ覚ユルノミニテ居リシニ、追〻取調フルニヨリ「下レー」ト云ハレタリ、此レ第二席ナリ、

一右ノ次第ニテ口供等ヲ綴リ読ミ聞カセタル儀モ無之、直ニ新地ト云フ処ノ囚獄所ニ入レラレ、両三日ヲ経タル時私共十七八名ヲ呼出ス（疵ニテ進退ノ出来サル者モアリ）、銘〻順〻一名宛県庁内第四課ノ調所ニ引行ケリ（此時私学校徒県庁内ニ群集シ居リ、呼出ス所ノ傍ニハ数拾名ツヽ帯刀ニテ長棒ヲ携ヘ居タリ）、私ニハ半頃ニ呼出サル、私共ヨリ前ニ呼出サレタルモノ頻ニ抗争スルト見ヘ、大音ニテ叱リ付ケ、或ハ多人数取懸リドヲカスル様ニ覚ユ、何欤甚敷口書ヲ綴リタルカト考

居シニ、直ニ私ノ呼出順番廻リ来リ調所ニ廻リ候得者、其万其等ノ申立テタル口書ヲ読聞カスニ依リ承レー、尤多人数ノコト故相違ノ所モ可有之ニ拠リ左様相心得ト云ツテ一読セラル(即チ彼偽口供也)、甚タ早読ニテ精敷ハ不相分候得共、海陸軍ヲ引キ人レトカ西郷暗殺トカ聞ヘ候ニ付、実ニ驚人計ニテ、素ヨリ心ニモ不浮事ナレハ、直ニ申シテタリトテ無理ニ拇印ヲ命セラルヽカト云フモ果サス、私ノ手ヲ取ツテ後ヨリ拇印シタリ、私ニハ縛セラレタル身ニテ屈伸不自由ナリ、然ルニ右様申立タリト雖モ不聞入ニヨリ、私ヨリ拇印シタルニハ無之、彼致シタルト申シテ可ナリ、而シテ直ニ引キ下ケラレ、故ニ他日処断スル時モアラハ上告スルカ或ハ冤罪タルヲ訴ント思ヒ、牢中ニアツテモ此事ニ思及セサルナシ、然ルニ三月十日ヲ以テ勅使柳原公鹿児島御下行ニ付、官軍ヘ御受取ニ相成、再タヒ天日ヲ拝スルノ忝ケナキヲ得タリ、大略右之始末ニテ御座候、以上、

鹿児島県士族

明治十年四月　　田中直哉拇印

（後掲参考文献参照）

「参考」〔「遭難者始末」によると「素ヨリ心ニモ不浮事ナレバ」以下「無理ニ拇印ヲ命セラルヽカト云フモ果サス」迄の間に左の如き文あり〕

如此ノ口供ハ誰ガ申上タルヤ、私ノ口ヨリ申上タル義トハ大ニ反対セリ、斯ル口供ニ拇印難致ト申候処、成程汝ガ口ヨリ出ズトモ、既ニ連類ヨリ申立タリ、到底汝ガ云ミスルモ益ナシ、最先刻違フタル廉アリト申聞ケ置ケリ、検坐拇印為致ト云ヘリ、時ニ脇ニ立タル両三人縛シタル手ヲ取リ、又壱人ハ墨壺ヲ持来ル、因テ暫時待チ給ヘト云ツテ頻リニ懇請抗争シテ曰ク、如此ノ口供ニ拇印難致、尤斯ル心底ハ毛頭吾ノ斯ル企ハ思モ寄ラヌ事ナリト云ヘトモ、両三人ニテ手ヲ取リ動カサス、墨ヲ付ケテ拇印セシメントス、又曰ク、私ヨリ申上タル義ニテ無之ヲ、連類ヨリ申立タリトテ、

一〇ノ七（小石）「第六号」

始末書

鹿児島県下第廿九大区小一区十三番地平佐郷士族当分（小石）礫川水道町五十二番地有島武方寓居